ウィリー・ズーヒャー
イシス・ソフィア I
アストロソフィー入門

WILLI SUCHER
ISIS SOPHIA I

〔目次〕

前書き - ヘイゼル・ストレイカー
編集者からの注記 6
第一書簡 - 1944年4月：太陽宇宙の構造
第二書簡 - 1944年5月：季節との関連性
第三書簡 - 1944年6月：恒星黄道帯（恒星ゾディアック）の霊的本質
第四書簡 - 1944年7月：恒星黄道帯の霊的本質（続き）
第五書簡 - 1944年8月：恒星黄道帯の霊的本質（続き）
第六書簡 - 1944年9月：恒星黄道帯の霊的本質（続き）
第七書簡 - 1944年10月：人間と宇宙の結びつき
第八書簡 - 1944年11月：惑星世界の本質
第九書簡 - 1944年12月：惑星世界の本質 - 土星
第十書簡 - 1945年1月：惑星世界の本質 - 木星
第十一書簡 - 1945年2月：惑星世界の本質 - 木星／火星
第十二書簡 - 1945年3月：惑星世界の本質 - 火星
天空の出来事
第十三書簡 - 1945年4月：惑星世界の本質 - 太陽 I
天空の出来事
第十四書簡 - 1945年5月：惑星世界の本質 - 太陽 II
天空の出来事
第十五書簡 - 1945年6月：惑星世界の本質 - 太陽 III
天空の出来事
第十六書簡 - 1945年7月：惑星世界の本質 - 月 8
第十七書簡 - 1945年8月：惑星世界の本質 - 月（続き）
天空の出来事
第十八書簡 - 1945年9月：惑星世界の本質 - 金星
第十九書簡 - 1945年10月：惑星世界の本質 - 水星
天空の出来事
第二十書簡 - 1945年11月：私たちと星々との結びつき - ティコ・ブラーエ
（付：シュタイナー「ティコ・ブラーエ」について）
第二十一書簡 - 1945年12月：私たちと星々との結びつき - ティコ・ブラーエ
第二十二書簡 - 1946年1月：私たちと星々との結びつき - ティコ・ブラーエ
第二十三書簡 - 1946年2月：私たちと星々との結びつき - ティコ・ブラーエ
第二十四書簡 - 1946年3月：私たちと星々との結びつき - ティコ・ブラーエ
天文学書簡の読者の皆様へ ～キリストの時代における星の出来事

神秘学遊戯団

■ウィリー・ズーヒャー
『イシス・ソフィアⅠ〜 アストロソフィー入門』

目次・編集者注記
第一書簡 - 1944年4月：太陽宇宙の構造

天文学と人智学については、エリーザベト・フレーデの『天文学と人智学』をとりあげているが、
その後継者ともいえるウィリー・ズーヒャーについても、
mediopos4240（2026.5.9）においてその直弟子ジョナサン・ヒルトンによる伝記を紹介した。

今回は、人智学的天文学である「アストロソフィー」について、
1944-1946年に書かれた月刊天文レター（I〜III巻）を基にまとめられた
ウィリー・ズーヒャーの代表的な著作『イシス・ソフィアⅠ〜 アストロソフィー入門』をとりあげる。

□目次

前書き - ヘイゼル・ストレイカー
編集者からの注記 6
第1書簡 - 1944年4月：太陽宇宙の構造
第2書簡 - 1944年5月：季節との関連性
第3書簡 - 1944年6月：恒星黄道帯（恒星ゾディアック）の霊的本質
第4書簡 - 1944年7月：恒星黄道帯の霊的本質（続き）
第5書簡 - 1944年8月：恒星黄道帯の霊的本質（続き）
第6書簡 - 1944年9月：恒星黄道帯の霊的本質（続き）
第7書簡 - 1944年10月：人間と宇宙の結びつき
第8書簡 - 1944年11月：惑星世界の本質
第9書簡 - 1944年12月：惑星世界の本質 - 土星
第10書簡 - 1945年1月：惑星世界の本質 - 木星
第11書簡 - 1945年2月：惑星世界の本質 - 木星／火星
第12書簡 - 1945年3月：惑星世界の本質 - 火星
天空の出来事
第13書簡 - 1945年4月：惑星世界の本質 - 太陽 I
天空の出来事
第14書簡 - 1945年5月：惑星世界の本質 - 太陽 II
天空の出来事
第15書簡 - 1945年6月：惑星世界の本質 - 太陽 III
天空の出来事
第16書簡 - 1945年7月：惑星世界の本質 - 月 8
第17書簡 - 1945年8月：惑星世界の本質 - 月（続き）
天空の出来事
第18書簡 - 1945年9月：惑星世界の本質 - 金星
第19書簡 - 1945年10月：惑星世界の本質 - 水星
天空の出来事
第20書簡 - 1945年11月：私たちと星々との結びつき - ティコ・ブラーエ
第21書簡 - 1945年12月：私たちと星々との結びつき - ティコ・ブラーエ

第22書簡 - 1946年1月：私たちと星々との結びつき - ティコ・ブラーエ
第23書簡 - 1946年2月：私たちと星々との結びつき - ティコ・ブラーエ
第24書簡 - 1946年3月：私たちと星々との結びつき - ティコ・ブラーエ
天文学書簡の読者の皆様へ
キリストの時代における星の出来事

●基本的な視点（第1書簡）

現代の天文学（数学的・力学的側面）でも
占星術（ホロスコープ）でもない、
星々と地球・人間の霊的関係を探求する
「アストロソフィー（星の叡智）」が提案され、
星の動きの背後にある「魂の生命」と「霊的背景」を明らかにし、
人類の進化、運命、自由、地球の未来を理解するための基礎とする。

●要点（第1書簡）

○アストロソフィーとは何か

・運動こそ星の世界の本質：
　昼夜のリズム、月の満ち欠け、惑星の周期、黄道通過、
　さらには数千年単位の恒星の動きなど、
　すべてがリズムと運動で成り立っている。

・宇宙を単なる「機械仕掛け」と見るだけでは不十分である。
　力学的に説明できる運動の背後には、星々の内的な魂の生命が存在する。

・個々の星は独自の魂の世界を持ちつつ、
　太陽を中心とした星々の共同体の中で互いに結びつき、
　共通の理想・目的に向かって活動している。

・アストロソフィーは、星の魂的世界（動きの理由）と
　霊的生命（歴史・葛藤・未来の運命）の両方を探求する学問である。

○なぜ人間が星の知識を求めるのか

地球は星々の共同体の一部であり、月が潮汐に影響を与えるように、
すべての星が地球と人間に影響を及ぼしている。

人間は狭い個人・国家・人種・宗教の視野に囚われやすいが、
星の世界に目を向けることで視野が広がり、
真の平和と自由に至ることができる。
星はすべての人を等しく照らし、分断を超えた宇宙的な理想を示してくれる。

○太陽宇宙の物理的構造

1　中心：太陽

2　惑星：太陽の周りをほぼ同一平面上を回る（巨大な円盤状）

・内惑星（水星・金星）：地球軌道の内側
・地球＋月
・外惑星（火星・木星・土星・天王星・海王星・冥王星）：周期が長い

3　外周：恒星黄道帯（ゾディアック）
— 12の星座がリング状に並び、太陽系全体がその前を通過する。

12星座（黄道帯）：
牡羊座、牡牛座、双子座、蟹座、獅子座、乙女座、
天秤座、蠍座、射手座、山羊座、水瓶座、魚座

恒星は自ら光り、ほとんど動かないように見える
（実際は極めてゆっくり動く）。
惑星は太陽の光を反射して動き、月もその一つ。

この第1書簡は、アストロソフィーの基礎地図が描かれる。

●本文

・前書き

1938年、ウィリー・ズーヒャーとその妻ヘレンは、スーツケースを一つ抱え、「短期間の留学」のためにドイツを離れてイギリスへと向かいました。彼らは、ドイツの情勢が根本的に変わるまでは二度と戻ることはないだろうと分かっていました。ウィリーはすでにナチス政権から目を付けられており、自身が選んだ仕事を続けることが不可能になりつつあったからです。

ウィリーは若い頃から、新しい星の叡智の必要性を感じていました。そして1919年にルドルフ・シュタイナーの思想に出会ったことで、この探求が彼の生涯の使命となったのです。1927年に結婚した妻のヘレンは、彼のこの活動を大いに支えました。また、同じ年に出会ったエリーザベト・フレーデ博士も同様に彼を支えました。フレーデ博士はシュタイナー博士から、現代の人類の意識段階に適合する「新しい星の叡智」を研究し、構築するという任務を託されていた人物です。そのために彼女は、スイスのドルナハにあるゲーテアヌムに「数学・天文学部門」を設立していました。彼女はウィリーの指導者となり、また励まし手となって、11年間にわたり実りある共同研究を続けましたが、ドイツにおけるナチス政権の台頭と、それに続く第二次世界大戦によって、その歩みは突然断ち切られることとなってしまったのです。

ウィリーとヘレンは、マイケル・ウィルソンと共に「サンフィールド・チルドレンズ・ホーム」（特別なケアを必要とする子供たちのための施設）を共同設立したフレッド・ゴイターによって、同施設へと招かれました。しかし戦争が勃発すると間もなく、近年ドイツから渡ってきたすべての男性が抑留され、ウィリーはマン島へ送られることになりました。ウィリーはこれを予見して、すでに天文図表（データ表）を荷物に

まとめており、幸運にもそれらを持参することができたため、抑留先でも研究を続けることができました。彼はその後もずっと、この時期を「孤独の中で、また共に抑留された志を同じくする同僚たちと共に、集中的に働くことができた、人生の中で特に実り豊かな時間であった」と振り返っていました。

本書に収録されている書簡は、彼が解放された直後から計画的に執筆され、多くの購読者に向けて送られたものです。その豊かな内容は、長年にわたる緻密な研究の成果であり、抑留生活の間に統合され、洗練されたものでした。星々と人類との結びつきに関する数多くの領域へのウィリーの洞察は、1985年に彼が亡くなるまで続きました。彼の様々な著作は、その膨大な研究のほんの一部を示しているに過ぎませんが、その基礎となる土台はこの書簡集に収められています。

ウィリーとヘレン・ズーハーの長年の協力者として、アストロソフィーへと向かう「新しい星の叡智」の探求を受け継ぐより多くの人々に、これらの書簡が届けられるようになったことを、私は心から喜び、深く感謝しております。

ヘイゼル・ストレイカー1999年6月

・編集者からの注記

ウィリー・ズーヒャーの著書『イシス・ソフィア II』や『宇宙的キリスト教（Cosmic Christianity）』に収録されている彼の伝記を読むと、彼がどのようにして1937年から1938年にかけてイギリスに移住し、第二次世界大戦中の1940年から1942年頃まで強制収容所（抑留キャンプ）に拘留されていたかを知ることができます。解放された後、彼はまずスコットランドへ向かい、1944年頃にロンドンのサンフィールドへと戻りました。これらの書簡は世界大戦の末期に執筆されたものであり、書簡の中でしばしば表現されている深い感情には、当時の厳しい現実の重みがどこか反映されています。

ウィリーは、自身の膨大な研究背景をもとに、人類の身体的進化の過程における歴史的出来事と星の出来事（天体現象）との結びつきについて執筆しています。そして歴史的な実例を用いながら、私たちの過去と未来の課題に対する理解を呼び起こそうとしています。読者の皆様に彼と同じ研究を行うことまでは求められていませんが、この研究を理解し応用するためには、自分自身や人類の運命の謎を解き明かしたいという、彼と同じような献身と情熱が必要とされます。この活動の理解と応用を支援するため、アストロソフィー研究センター（Astrosophy Research Center）は、電話、郵送、FAX、Eメール、または直接の訪問によるあらゆる質問に（無料で）門戸を開いています。ただし、センターに滞在して研究や学習のために部屋を予約される場合は、少額の費用をいただいております。

これらの書簡は、句読点、大文字表記、および性別表現（ジェンダー表現）をより現代的なスタイルに合わせるため、軽微な編集が行われています。また、書簡の内容の一部として不可欠であると判断された場合を除き、各書簡の末尾に添付されていた月ごとの「星の出来事カレンダー」は省略されています。本文中の角括弧［ ］で囲まれた注記や追加文は、編集者によるものです。

本書の出版を可能にするためにご尽力いただいたすべての方々に感謝いたします。特に、長年にわたり継続的な支援を寄せてくださったシャーリー・ラテッサ氏に深く感謝いたします。また、本書の出版をサポートしてくださったロバート・ジャロス氏とアイリーン・ジャロス氏にも感謝の意を表します。

第1書簡 - 1944年4月：太陽宇宙の構造

これらの一連の「天文学書簡」は、星々からなる宇宙と地球との関係を深く掘り下げることを目的としています。地球の主な代表者である「人間」が主に考察の対象となりますが、自然界の他の諸領域（鉱物・植物・動物など）についても取り上げていきます。もちろん、これは非常に広大な領域であり、現代の私たちの知識には限界があります。しかしながら、ルドルフ・シュタイナーによってもたらされた鍵となる知識のおかげで、20年以上にわたる静かで根気強い活動の中で、それらの関係性に関する多くの事実を集めることが可能となりました。これらの事実は全体として、まだ初期の幼年期にあるとはいえ、来るべき数世紀、数千年の間にさらに詳しく進められるであろう研究の種となる一つの有機体をすでに形成しつつあります。

まず私たちは、これらの書簡を通じて、私たちの太陽宇宙の構造と、その太陽宇宙を超えた先にある星々の世界との関係について、明確な洞察を確立しなければなりません。その次に、私たちが天空に観察する星座について語る必要があります。主に黄道帯（ゾディアック）の星座について考察し、それが地球と人類の進化にどのように結びついているのか、その「霊的本質」を見出していかなければなりません。その後、移動する星々である「惑星の世界」が考察の対象となります。これは主に、人間の「死後および誕生前の生命（魂の旅路）」との結びつきにおいて扱われます。また、科学がこれまでに立証してきた範囲において、惑星と自然界の生命との関係についても考慮に入れる必要があります。人類との関連においては、そこで「宿命や運命」という問題、そして「人間の自由の領域」という問題が浮かび上がってくることになるでしょう。最終的には、星々と人類全体との関係について、さらには私たちが暮らすこの惑星（地球）の未来の進化についても、知識を深めていかなければなりません。

ここで、私たちがこれらの書簡で探求しようとしているこの知識のあり方を、一体どのような名称で呼ぶべきかという疑問が生じます。これを「天文学（アストロノミー）」と呼ぶのは正確ではありません。なぜなら、星の世界の数学的な事実については、必要最低限しか扱わないからです。かといって、これを「占星術（アストロロジー）」と呼ぶこともできません。なぜなら、今日行われているような意味でのホロスコープ作成の実践の土台にするわけではないからです。私たちが学ぶべきなのは、星々と地球、そしてその住民との関係の背後にある「霊的な背景」です。私たちはこれを「アストロソフィー」と呼ぶことができるでしょう。

では、アストロソフィーとは一体何なのでしょうか？

運動こそが、星々の世界の本質です。 地球を取り囲む天球の中では、あらゆるものが動いています。私たちが星空の多様性に目を向けるとき、私たちはリズムに満ちた巨大な世界へと足を踏み入れることになるのです。

まず、昼と夜のリズムがあります。全天（天穹）は、24時間かけて天の軸を中心に回転しているように見えます。これは、昼と夜の移り変わりを生み出す宇宙の根本的な運動の一つです。現代の天文学は、この天球の回転が、地球の地軸を中心とした日周運動（自転）によってもたらされていると教えています。地球上の観測者だけが、まるで全天が回転しているかのように、それを逆の現象として知覚しているに過ぎません。

次に、私たちは月のリズムを観察することができます。新月から満月、そして再び新月へと戻る満ち欠け（位相）の変化です。私たちは観察によって、このリズムがおおむね1ヶ月の間に起こることを知っています。

さらに宇宙の遠方へと進むと、金星や水星のような、より長い周期のリズムを見つけることができます。また、太陽のリズムと、太陽が黄道帯を通過するのにかかる時間もあります。私たちはこのリズムを「1年」と呼んでいます。ここでも現代の天文学は、この1年間にわたる太陽の運動は錯覚であると私たちに告げます。1年の間に太陽の周りを動いているのは地球の方であり、地球上にいる私たちは、この地球の円運動（公転）によって、太陽が空の異なる場所に位置しているように知覚しているのです。さらにその先には、いわゆる外惑星である火星、木星、土星、そして近年発見された天王星、海王星、冥王星のリズムが存在します。ここでは、数十、あるいは数百年に及ぶリズムを目にすることになります。

これらに加えて、私たちの宇宙の構造には、長い周期の間隔で進行する変化も見出すことができます。それらは人類や地球の進化における「時代」を包括するものであり、数千、さらには数万年にも及びます。私たちは、恒星もまた動いていることを知っています。ただし、それらの運動の大半は、人間の通常の時間概念では捉えきれないほど長い時間の間隔を経て初めて、肉眼で確認できるようになる性質のものです。

したがって、運動こそが星々の世界の基礎です。私たちは、この運動の世界をさまざまな異なる視点で見ることができます。

私たちは、この世界を「巨大な機械仕掛け」とみなすことができます。宇宙の運動の中に見出される数々の事実は、確かにそのような考えを抱かせます。私たちはその運動を計算できますし、星々のリズムをあらかじめ予測することさえ可能です。冥王星や海王星の発見は、純粋な力学の法則を私たちの宇宙に適用することによって達成されました。

しかしそれでも、宇宙を一つの機械仕掛けとみなす考え方は、ある時点で破綻してしまいます。私たちはそれを「回転するモーター」に例えることができます。モーターの運動、つまりその挙動は計算可能です。あらゆる細部を力学の法則によって説明できます。しかし、もし人間の精神がそれを発明していなかったなら、モーターは1インチたりとも動かなかったでしょうし、ネジ1本すら存在しなかったはずです。力学の領域における発明家たちの気の遠くなるような仕事が、モーターの細部の一つひとつを創り出したのです。人間の精神こそがモーターの真の起源であり、それがなければモーターは存在し得ません。

私たちの宇宙はどうでしょうか。無数の運動からなるこの機械仕掛けは実在していますが、一体誰がそれを創り出し、回転させたのでしょうか。機械仕掛けが自らを創り出すことはできません。もし自ら創り出せるのであれば、それはもはや機械仕掛けではないからです。いかなる宇宙が創造されるよりも前に、巨大な計画を立てる精神、あるいはそのような精神たちの集いのようなものが存在していたに違いありません。

このことから、私たちはもう一つの見方に導かれます。モーターが人間の精神の能力（あるいは弱ささえも）の表現であるのと同様に、私たちの宇宙もまた、いわば「魂の生命」とまでは言わずとも、「内的な生命」の世界の表現であるとみなすことができるのです。

私たちは、人間が動いているのを目にします。手足のあらゆる運動は、物理学的および力学的な法則によって説明できます。それでも、人間が手足を動かす背景には、常に何らかの理由があります。何かをしよう、あるいはどこかへ行こうという意志（意図）があるのです。目に見える肉体の運動の背後には、内的な生命、すなわち「魂の生命」が存在しています。その生命こそが、これらの運動に理由と正当性を与えているのです。

ですから、私たちは個々の星に目を向け、その運動やリズム、そして一般的な状態や他の星々との関係に結びつく多くの事柄を計算することはできます。しかしそこから、私たちはさらに一歩踏み込んで、その特

異な挙動の「内的な原因」を見出さなければなりません。いわゆる力学的法則の中に自らを表現し、それを創り出した「星の魂の生命」を見出さなければならないのです。

私たちは、おそらく個々の星の独自の内的生命の領域だけからは、その星が運動する理由を見出すことはできないでしょう。私たちは、あるいは「星々の共同体」という領域の中で探求しなければならないのかもしれません。人間の共同体においては、個々の人間が独自の魂の資質の世界を持っており、それが運動や活動を引き起こしています。それでも、個人の行動は他の人間の行動と交差するものです。さらに、それらの行動は共同体全体の生活と結びついて初めて意味をなします。実際に、共同体の共通の理想こそが、個人の活動を測る尺度となるのです。

同様に、それぞれの星も独自の「魂の運動の世界」を持っており、それが目に見える運動を引き起こし、その星を宇宙の有用で創造的な一員にしています。さらに、それは仲間の星々とも結びついています。私たちの宇宙の中心である太陽から見ても、あるいは地球から見ても、惑星たちは時にある特定の方法で出会い（合）、あるいは互いに離れて反対の場所に位置（衝）したりします。これらの活動はすべて、太陽系全体、特にその中心としての太陽に関連しています。したがって、個々の惑星は、太陽宇宙全体の共通の目的に参加していなければならないのです。

――個々の星の魂の世界、それらの共同体の社会的生命、そして彼らの共通の理想と目標を（もちろん単純な事実から出発して）知ることを学ぶこと、これこそが「アストロソフィー」です。

私たちは、限られた時間内における星々の存在や活動の顕現である「魂の世界」を捜し求めるだけでなく、彼らの「霊的な生命」についての知識も獲得しなければなりません。そうして初めて、私たちは彼らの完全な存在を理解することができるのです。彼らの霊的な生命とは、すなわち「彼らの歴史（いわば彼らの伝記）」であり、「彼らの葛藤と達成」、そして「未来に関する彼らの運命」のことなのです。

なぜアストロソフィーなのか？

次のような疑問が生じるかもしれません。「地球上の人間である私たちが、なぜ先述したような星々の知識をわざわざ追い求めなければならないのか？ 星の世界は興味深い研究対象かもしれないが、星々はあまりにも遠くにありすぎて、地球上の私たちの生活に影響を与えることなどできないのではないか？」

私たちの惑星（地球）は、星々の共同体全体の一部です。月の活動が潮の満ち引きのリズムに影響を与えるのと同じように、地球という有機体もまた、天上の共同体であるすべての星々から影響を受けていることが分かります。これは、さまざまな種類の観察を通じて見出される事実です。私たち人間は、このように星々の影響を受けた地球上で生きています。それゆえ、好むと好まざるとにかかわらず、私たちは宇宙全体の生命に参加しているのです。

地球に生きる人間として、私たちはどうしても自分自身の人間的な視野の世界へと沈み込んでしまう自然な傾向があります。大抵の場合、この視野の中に広大な宇宙はほとんど含まれていません。それは、私たちの小さな個人的な願いや欲求、あるいは野心だけの世界かもしれません。あるいは、私たちを特定の人類のグループと結びつける一方で、残りの人類から切り離してしまうような、ある特定の哲学や宗教かもしれません。あるいはまた、自分が生まれ落ちた国家や人種の生活の中で果たす役割に過ぎないかもしれません。私たちは、こうした「違い」が、非常にしばしば――常にと言ってもいいほど――争いや戦争へとつながることを知っています。もし私たちが自分たちの人間世界の小さな視野の中だけで生きるなら、人生に対する

見方が狭くなってしまうという危険が生じます。この魂の生命の狭さは、宇宙全体の枠組みにおける自分自身の事柄への誤った判断を容易に引き起こしてしまうのです。

しかし、もし私たちが少なくとも時々は、星々の世界、彼らの魂の生命、彼らの霊的な生命と真摯に向き合うことができるなら、私たちは自分自身の問題や、比較的小さく重要ではない事柄の世界を超えて、自らの存在を成長させることができます。そうして初めて、私たちは自覚的に、そしてより適切に、宇宙全体の進化の潮流の中に身を置くことができるようになるのです。私たちが時折これを行うだけで、人類を宗教的・哲学的な信仰、人種、理論などのグループに分断することのない、壮大な宇宙の理想と精神的目標の世界へと入ることができます。星々は私たちに教えてくれるでしょう。人間を家族、国家、人種、あるいは特定の宗教といった「生命の領域」に縛り付ける絆は、それらの領域の境界線が踏み越えられず、人間の生活の他の領域を支配しない限りにおいてのみ、正当化されるのだということを。

そうなれば、私たちの人間世界における「観念論（イデアリズム）」の哲学の適切な居場所も、「現実主義（リアリズム）」や「唯物論（マテリアリズム）」の居場所と同様に見出されることになるでしょう。宇宙においては、これらすべての人生観や生きる姿勢が、星の世界の魂の生命の中で、正しく平和な秩序を保って維持されています。自身の魂の世界の中で正しい秩序を見出せず、狭量さや近視眼的な見方に非常にしばしば苦しんでいるのは、私たち人間の側だけなのです。そして、この魂の無秩序が、人類の間の争いや戦争に反映されているのです。

私たちが星々を深く見つめ、その謎を解き明かすなら、星々は人類を一つに結びつけることができます。星々はすべての人を等しく照らします。星々からなる宇宙におけるあらゆる現象は、何の違いもなく、すべての人類に等しく関わっています。そこには、特定の社会的・地理的条件のもとで生きる必要性から地球上で生み出されるような区別は一切ありません。時間の経過とともに、地球の全表面、そしてそれとともに人類は、すべての星々の光と教えを受け取るのです。

こうして、真の平和と「自由（あるいは自由な境地）」の世界への門戸が開かれます。それが「真の平和の世界」であるのは、私たちが神々（高次の霊的存在たち）の意図や進化の目標をそこで知ることができるからです。この知識を私たちの日常生活に一歩一歩応用していくことが、私たちに真の平和をもたらします。そして「真の自由な境地の世界」であるのは、それが私たちを、小さく狭い地球上の事柄や問題という足枷から解放してくれるからです。それゆえ、新しい星の叡智としてのアストロソフィーは、未来の人類の精神文化の領域において、なくてはならない必然のものとなるでしょう。

〔太陽系の構造〕

宇宙に顕現している魂と霊の世界の細部を見出していく前に、私たちはまず、私たちの太陽宇宙の物理的な構造と、天空の深淵にある世界との結びつきについて、ある程度の知識を構築しなければなりません。星々のリズムや、宇宙空間におけるそれらの配置・秩序について、明確な概念を形成する必要があるのです。これは、ある程度の天文学的知識を詳しく学ぶことを意味します。もちろん、それは極めて広大で複雑な数学的事実や諸々の詳細を含んでいるため、あまり深く広げすぎることはできません。私たちが後々扱っていくことになる「宇宙の事実」について、共通の理解や共通の言語を作り出すために必要な範囲にとどめて進めていきます。

私たちが星々の広がる天穹（天空）を見上げるとき、2つの種類の天体を区別することができます。

第一に、いわゆる「恒星」が現れます。これらが恒星と呼ばれるのは、互いの位置や距離を常に同じに保っているように見えるからです。例えば、よく知られている「おおぐま座（北斗七星）」という星座があります。4つの恒星が熊の胴体を形成し、他の3つの恒星が尾（柄）を形成しています。私たちはこの星座を、何年もの間、夜な夜な見つめることができます。ある夜突然、熊の胴体を形成する4つの星のうちの1つが、その相対的な位置からどこかへ移動してしまっているのを発見する、などということは起こりません。このように、多くの恒星の集まりが星座を形成しており、個々の星がその相対的な位置から離れていくことはありません。例えば、カシオペヤ座やオリオン座、その他多くの星座も、常に同じ星々がその形を形成しています。しかし実際には、恒星もまた動いています。数千年の歳月が流れれば、私たちが親しんでいるおおぐま座の姿を形成する星々はもはや同じ位置にはおらず、遠い未来には、今日私たちが目にしているようなおおぐま座の輪郭を知覚することはできなくなるでしょう。とはいえ、これらの運動は非常に緩やかです。人間の肉眼で捉えられる範囲を超えており、人間の時間概念をも超えています。それゆえ、私たちはこれらを正当に「不動の星（恒星）」と呼んでいるのです。

また、私たちは動く星々、すなわち私たちの太陽系に属する「惑星（プラネッツ）」をも知覚します。観察するための非常に良い例は「月」です。ある晴れた夜、私たちは月がおうし座（Bull）を形成する恒星たちの領域にあるのを知覚するかもしれません。その2、3日後に月を見ると、今度はふたご座（Twins）の星座の中にそれを見出すかもしれません。つまり、月はその間に、おうし座からふたご座へと移動したに違いないのです。動く星は、私たちの月だけではありません。他にもいくつか存在します。全体として、私たちの太陽系には、月のほかに主要な9つの惑星を数えることができます。それらは以下の通りです。

水星（マーキュリー）
金星（ヴィーナス）
地球（アース）
火星（マーズ）
木星（ジュピター）
土星（サターン）
天王星（ウラヌス） - 1781年発見
海王星（ネプチューン） - 1846年発見
冥王星（プルート） - 1930年発見

現代天文学によると、恒星と惑星のもう一つの違いは、恒星が「自ら光を放っている」という点にあります。恒星はいわば私たちの太陽のような「太陽たち」であり、独自の光を作り出しています。これに対して、私たちの太陽系に属する惑星は自前の光を持っていません。それらは中心にある太陽から受け取った光を反射しているだけなのです。

これら大半が夜間にしか見えない恒星や惑星に加えて、私たちが昼間に目にする「太陽」が存在します。太陽の光は圧倒的に強いため、太陽が輝いている間は他の星々を見ることができません。それゆえ、太陽が恒星の星座に対してどの位置にあるのか、その相対的な位置を見出すことは困難です。それでも、ある種の天文学的な手段を用いることで、太陽もまた惑星と同じように動いており、1年をかけて円を1周していることを知ることができます。

しかし、現代天文学は「動いているのは太陽ではない」と私たちに告げます。地球の公転軌道の中心に位置する太陽の周りを、地球が回っているのです。1年で完了するこの地球の運動によって、私たちは太陽の円盤が常に異なる宇宙の方向にあるように見ることになります。これが、太陽が黄道（または黄道帯）の円に沿って動いているという「錯覚」を私たちに生じさせているのです。

これで、私たちの太陽系の構造における3つの主要な特徴を区別できるようになりました。

1　中心に太陽がある。
2　この太陽の周りを惑星が円を描いて回っている。
3　惑星の軌道はほぼ同一の平面上にあり、それらの中心はおおむね太陽にある。

したがって、私たちの太陽系は、惑星の軌道が同心円状のリングとなった「レンズ」あるいは「巨大な円盤」のような形状をしていると想像しなければなりません。

この巨大な円盤の円周は、最も外側にある惑星の軌道に位置します。この円周は、特定の恒星たちと相対的な結びつきを持っています。いわば円盤の中心から遠近法的に見ると、その円周はある特定の数の恒星たちの前を通過しているのです。それらの恒星は、私たちの太陽宇宙の周囲に一種のリボン、あるいはリング（輪）を形成しています。私たちが暮らす惑星系の円周のさらに先にある、この円形のリボンこそが、私たちが「恒星黄道帯（恒星ゾディアック）」と呼ぶものです。それは、私たちが星空に目にする星座のうちの12の星座によって形成されています。

これが、私たちの太陽宇宙を構成する3つの要素です。

1　円盤のほぼ中心としての太陽。
2　中心太陽からそれぞれ異なる距離にある惑星の軌道。
3　円盤の円周であり、そのさらに先に見える黄道帯の12の星座。

私たちは、この円盤の内部でさらにもう一つの区別をすることができます。私たちが暮らす地球は、中心から数えて3番目の軌道に沿って動いています。水星と金星の軌道は、地球の軌道の内側にあります。これらは「内惑星」と呼ばれます。彼らの軌道は地球の軌道よりも小さいため、地球よりもはるかに短い時間で太陽の周囲を回ります。水星は約88日で太陽の周りを完全に1周します。金星は、太陽からより遠くにあり軌道が大きいため、約225日をかけて1周します。そして地球は、約365日で太陽を巡る円を完了します。この地球の周囲に、比較的短い距離で「月」の軌道があると想像しなければなりません。月は約27日で地球の周囲を回っています。

地球の軌道が描く円の外側に軌道を持つ惑星たちは、「外惑星（スペリア・プラネッツ）」と呼ばれます。これらの軌道と太陽との距離は、地球の軌道と太陽の距離に比べて相対的に非常に大きくなります。そのため、これらの惑星が自身の軌道に沿って太陽を回るには、はるかに長い時間が必要となります。

・火星は、1周を完了するのに約687日を必要とします。
・木星は、約12年で1周を完了します。
・土星は、約30年を必要とします。
・天王星は、同じ運動に約84年かかります。
・海王星はさらに太陽から遠く離れているため、その軌道は極めて大きく、1周するのに約164年を必要とします。
・冥王星はさらに多くの時間、約250年を必要とします。

私たちの研究（アストロソフィー）にとって、この「内惑星」と「外惑星」を区別することは、非常に重要な意味を持つことになります。

私たちの太陽系の円盤の外周のさらに先で、黄道帯のリボンを形成している恒星の12の星座は以下の通りです。

英語名 ラテン語名（日本語名）

Ram Aries（牡羊座 / 白羊宮）
Bull Taurus（牡牛座 / 金牛宮）
Twins Gemini（双子座 / 双児宮）
Crab Cancer（蟹座 / 巨蟹宮）
Lion Leo（獅子座 / 獅子宮）
Virgin Virgo（乙女座 / 処女宮）
Scales Libra（天秤座 / 天秤宮）
Scorpion Scorpio（蠍座 / 天蝎宮）
Archer Sagittarius（射手座 / 人馬宮）
Goat (Ibex) Capricorn（山羊座 / 磨羯宮）
Waterman Aquarius（水瓶座 / 宝瓶宮）
Fishes Pisces（魚座 / 双魚宮）

第二書簡 - 1944年5月
「季節に関連して」

●基本的な視点

季節の変化を単なる物理現象ではなく、
黄道を通じて地球に働きかける
宇宙的・霊的な力の分化された営みとして理解し、
植物の成長サイクルを12の質的な段階に分け、
それぞれに黄道のサインが対応していることを、具体的に示す。

太陽は黄道の言語を、月・水星・金星という媒体を通じ、
地球の植物界に翻訳している。
季節のリズムと黄道十二宮の太陽の位置との深い結びつきを、
植物の成長・成熟・衰退・再生のプロセスを通じて解説し、
唯物論的な「光と熱だけ」という説明を超え、
太陽が黄道の各領域から質的に異なる宇宙的力を集めて
地球に送り届けていると論じる。

●要点

1）基本的な枠組み

地球は太陽の周りを公転しており、
北半球から見ると太陽が黄道上を移動しているように見える。
この移動（特に春分・夏至・秋分・冬至）が、
植物界に明確なリズムをもたらす。

太陽を「黄道のさまざまな営みを集めて
地球に送る巨大な光学レンズ」のような存在として捉え、
光・熱だけでなく、より深い創造・成熟・崩壊・再生の力を
放射しているととらえる。

2）四季と12のサインごとの力の性質（北半球視点）

〔時期〕
サイン
主な力の性質
植物界の現象
象徴的なイメージ

〔3月21日〜〕
白羊宮
形態を繰り返し形づくる（記憶の力）
発芽・形態の再現

〔4〜5月〕
金牛宮
増大・拡大・繁殖
成長・空間への拡大

〔6月〕
双児宮
極性（二面性）
根と花への二方向への伸長
天の双子と地の双子

〔7月〕
巨蟹宮
自己充足・放射・分与
開花の頂点・香りや色彩の放出
スカラベ（フンコロガシ）

〔8月〕
獅子宮
自己犠牲・結合
受粉・結実・収穫
太陽宇宙との結合

〔9月〕
処女宮
豊穣・成熟
果実・種子の成熟
聖母マリアと幼子

〔10月〕
天秤宮
分離・均衡
果実と母体植物の分離
過去と未来のバランス

〔11月〕
天蝎宮
破壊・崩壊
植物の枯死
サソリの毒針

〔12月〕
人馬宮
希望・待機

種子の土中での休息
遠い目標を狙う射手

〔1月〕
磨羯宮
再生・創造的光
光の再誕生・種子の生存
キリストの誕生

〔2月〕
宝瓶宮
更新・目覚め・生命力の流入
種子の活性化
天の水を注ぐ水瓶の男

〔3月〕
双魚宮
法則の肉体化・発芽
発芽・宇宙の水の中での目覚め
魚のように泳ぐ種子

3） 補足点

○太陽の役割：
単なる光と熱の供給源ではなく、
黄道の各領域の力を「集めて変容させて」地球に送る媒介。

○月の役割：
液体物質（樹液など）を介して働き、
太陽の力だけでは植物を生き生きとさせられない。
復活祭が春分の後の最初の満月の後に行われるのは、
この太陽と月の共同作業によるもの。

○内惑星（水星・金星）の役割：
太陽とは異なる領域（大気や熱圏）で黄道の力を媒介し、
嵐などの特定の気象現象にも関与する可能性がある。

○サインと星座の区別：
ここで使われている「白羊宮」「金牛宮」などは、
黄道の12分割（サイン）を指すものであり、
実際の恒星の星座とは区別される。

●本文

前回の書簡では、私たちの太陽宇宙を構成する3つの要素についてお話ししました。これからは、私たちの宇宙の構造、特に太陽と地球の軌道について、その詳細を詳しく説明していくことが私たちの課題となります。

すでに述べたように、地球は1年をかけて太陽の周りを公転しています。地球にいる私たちにとって、これは太陽が黄道（十二宮）の経路に沿って移動しているように見えます。この動きは単なる天文学的な事実であるだけでなく、地球上の明確なリズムを持つ出来事と時間的に結びついています。それが「季節のリズム」です。

ここからは、地球の北半球の視点から、この季節のリズムについて見ていくことにしましょう。

毎年3月21日、北半球に春が訪れます。これは時代が流れても変わりません。ある日突然、4月21日に春が始まるということはなく、常に3月21日です。私たちはこのとき、春分が起こる、あるいは太陽が春分点にあると言います。つまり、コペルニクスの宇宙体系（地動説）に従えば、地球が太陽の周りを回る軌道を一周し終え、新しい円（軌道）を描き始める時なのです。

春は6月21日まで続きます。この季節の間、私たちの周囲を囲む植物の世界では、発芽、成長、拡大、そして開花というプロセスが起こります。これは、自然界において主に創造（生み出し）が行われる季節です。

そして6月21日に夏が始まります。この時までに、地球は軌道の4分の1を移動したことになります。地球から見ると、太陽はそれまでの3ヶ月間で白羊宮（おひつじ座）、金牛宮（おうし座）、双児宮（ふたご座）のサイン（宮）を通過してきました。地球からの視点では、6月21日に太陽は巨蟹宮（かに座）のサインに入ります。私たちは、周囲の自然界で夏特有の現象に直面することになります。開花のプロセスは最高潮に達し、植物の世界は完成されます。受粉・結実が起こり、この季節の終わりに向けて果実が実ります。この期間中、太陽は黄道上の巨蟹宮（かに座）、獅子宮（しし座）、処女宮（おとめ座）のサインを通過します。コペルニクスに従えば、地球が軌道のさらに4分の1を完了したことになります。

9月23日、太陽は天秤宮（てんびん座）のサインに入ります。北半球の地球上では、秋の始まりを迎えます。自然は危機の時代へと入っていきます。果実と母なる植物との間で分離が起こるのです。（樹木の場合は異なりますが）母なる植物は枯れ果てていきます。果実、そしてそれとともに種子は土の中に埋められます。光と熱は衰え、消え去っていくのです。

太陽は天秤宮（てんびん座）、天蝎宮（さそり座）、人馬宮（いて座）のサインを通過してきました。そして12月21日に磨羯宮（やぎ座）のサインに入り、太陽が磨羯宮、宝瓶宮（みずがめ座）、双魚宮（うお座）を進む間、地球は冬の季節を迎えます。この季節の間、種子は土の中で眠りにつきます。おそらく氷や雪に覆われていることでしょう。しかしその後、大いなる目覚め、すなわち大いなる奇跡が起こるのです。種子から、前年の秋に枯れ果てた母なる植物と同じ種類の植物の形態が芽吹くからです。そして3月21日に太陽は再び白羊宮（おひつじ座）のサインに入り、1年と四季の全サイクルがもう一度始まります。

ここで私たちは問いを立てることができます。「植物を成長させ、また次の季節のサイクルのための種子を生み出した後に枯れさせる力は、一体どこから来るのだろうか？」と。唯物論的な視点からは、夏に向けて光と熱が増加することが植物を成長させ、秋にそれが減少することが植物界から生命を退かせるのだ、と

答えることができます。しかし、これはあまりにも安易な言い方です。なぜなら、光と熱が衰えてもなお成長する植物が存在するからです。植物は、太陽の唯一の影響として光と熱を受け取っているだけではあり得ません。太陽からは、単なる熱や光以上の力が放射されているに違いないのです。種子は、ただ光と熱にさらされるだけでは発芽しません。水分を含んだ土の暗闇の中にさえ置かれなければならないのです。地球は、単なる熱や光よりも深く地球へと浸透する宇宙空間の深淵からの影響を受け取っているに違いありません。

これらのより隠された力は、黄道帯のサインを通過する太陽の動きによって示されており、これはコペルニクス的な太陽系の概念とも矛盾しません。たとえ地球が動き、太陽が中心に固定されていると想像したとしても、地球という球体が太陽を通じて、黄道の様々な方向から特定の宇宙的影響を受け取っていると想像することは依然として可能です。太陽を、黄道の様々な部分の営みを集め、それを地球へと送り届ける巨大な光学レンズのようなものとして想像することもできるでしょう。また、内惑星（水星や金星）が、この太陽の収集と変容の営みに関わっていると想像することもできます。光、熱、そして特定の磁気的影響のほかに、太陽からは何も放射されていないと考えるのは、唯物論的な迷信によるものでしかありません。

もし私たちがこのことに同意できるなら、四季に応じた、1年の周期における太陽の分化された4重の営みを想像することができます。その場合、黄道帯の様々なサイン（宮）における太陽の相対的な位置が、これらの変化をもたらすことになります。春分から夏至までの太陽の位置は、地球へ「創造の力」を送り届けます。夏至から秋分までの間、太陽は黄道帯から「完成と成熟」として地球上に現れる力を集めます。秋分から冬至までの間、私たちは自然界に危機をもたらす力を太陽から受け取り、冬至から春分までの間に太陽がその黄道上の位置を通じて集めた力は、地球上の自然界に「新たな誕生という奇跡」をもたらします。

黄道帯の位置によって示される太陽の分化された営みについては、さらに詳しく説明していくことができます。そうすることで、12のサインに応じた「12重の太陽の営み」へと至ることになります。

4月、太陽は白羊宮（おひつじ座）の方向に位置します。そこから植物界は、同じ形態を何度も何度も形づくる（具現化する）力を受け取ります。たとえば、キンポウゲやヒナギクが、過去にずっと持っていたものとは異なる形に突然変化するというようなことは決して起こりません。いわば「記憶の力」が黄道帯のこの部分から放射され、過去を現在および未来へと結びつけているのです。

5月、太陽が金牛宮（おうし座）のサインにあるとき、私たちは植物の成長と空間への拡大を目にします。すべてのものが存在へと向かって突き進み、できるだけ大きくなろうとします。この発達の中に、金牛宮のサインからやってくる「増大と繁殖」の強さと勢いを見出すことができます。

そして6月、太陽は双児宮（ふたご座）のサインに入ります。植物は空間における拡大の限界に達し、宇宙から――太陽という媒介を通じて――2つの傾向を発達させる力を受け取ります。一方では、根によって土の暗闇の中へできるだけ深く伸びていき、もう一方では、光と熱の圏域へと高く伸びていきます。そこで植物は花を咲かせます。この2重の営みの中に、私たちは双児宮の「極性（二面性）」を見ることができます。花の中にある天の双子と、根の中にある地の双子です。あらゆる形態や変容における極性が、黄道上の双児宮の領域から放射されています。

7月、太陽は巨蟹宮（かに座）のサインにあります。今や植物はそれ自体で満ち足りています。もはや拡大しようとする傾向はなく、開花のプロセスは最高潮に達しています。植物はこれ以上何も望みません。植物は宇宙から、自らの特性を分け与えるという衝動を受け取ります。これは、花から世界へと放射される香りや多様な色彩によって行われます。それは、太陽と心の象徴として頭上に巨大な泥の球を掲げて運ぶ、ス

カラベ（フンコロガシ）の奉仕的な姿勢に似ています。スカラベは、古くから伝わる巨蟹宮の象徴です。これまでのどちらかといえば地球に縛られていた力を、太陽のような放射する力へと変容させることが、巨蟹宮の動的な力なのです。

そして8月、太陽は獅子宮（しし座）のサインに位置します。今や植物は、自らを犠牲にするという衝動を受け取っています。収穫の時期が到来し、受粉・結実のプロセスが行われます。自らを犠牲にして輝く太陽の光線のように、植物は自らの周囲の空間を満たします。「太陽宇宙全体との結合」が、獅子宮のサインの持つ傾向です。

9月、太陽が処女宮（おとめ座）のサインに位置するとき、果実と種子が成熟していきます。夏の光と熱は、今や、未来への希望を種子として宿す果実の甘みへと変容します。それはまるで、世界の希望を宿す幼子（イエス）を抱く聖処女（マリア）のようです。宇宙との結合の結果としての「豊穣さ（結実）」こそが、処女宮のサインから放射される力です。

10月、太陽が天秤宮（てんびん座）のサインに現れるとき、母なる植物と種子との間で分離が起こります。宇宙からは、植物の世界を2つに切り離す力がやってきます。「かつてあったもの（過去）」と、「これから未来にあるもの」への分離です。それは自然界における平和のときであり、釣り合いの取れた天秤のように、過去と未来のバランスが保たれるときです。処女の幼子へのいたわりと、母なるものの創造的な力が天の圏域へと退くことが、天秤宮のサインの影響なのです。

そして太陽は天蝎宮（さそり座）のサインに入ります。この時、宇宙の深淵から破壊と崩壊の力がやってきます。植物は枯れ果てていきます。致命的な毒針を持つサソリのイメージは、まさに1年のうちのこの時期に自然界で働いているそれらの力を真に表した絵図なのです。これは概ね11月に起こり、光もまた次第に衰え、夏の暖かさは冬の冷たさに圧倒されます。

12月、太陽は人馬宮（いて座）のサインに位置します。地球上の人間がアドベント（待降節）のキャンドルに火を灯し、世界の魂の光の誕生を待つ季節です。自然界では、種子たちが今や土の中で休んでいます。土の中にある無数の種子を想像すると、光と熱の新たな誕生を辛抱強く待つ、何百万もの小さな希望の炎のような印象を受けることでしょう。これらの希望の力は、人馬宮（射手）のイマジネーションによく表現されています。射手は、まだ遥か遠くにある目標に狙いを定めています。魂の光を待ち望み、探求することが、人馬宮のサインのメッセージなのです。

1月、太陽が磨羯宮（やぎ座）のサインに入ると、光は再び増加し始めます。光の新たな誕生が起こったのです。これはキリスト教世界が、全自然と全人類における更新（再生）の力として世に来られたキリストの誕生を祝う時期にあたります。種子は土の中に埋もれ、おそらく氷や雪に覆われているかもしれませんが、暗闇と冷たさを生き延び、破壊から救い出されました。霊的世界からの創造的な光が、磨羯宮のサインから放射されているのです。

この後、太陽は宝瓶宮（みずがめ座）のサインに入ります。この時、この領域から地球へと、更新と目覚めの力が流れ込みます。太陽の営みの持つ隠された力が、地球の圏域へと入るのがここです。それは単なる光と熱だけでなく、命を与える水のような、目に見えない生命力です。宇宙空間へと天の水を注ぎ出す宝瓶宮（水瓶座の男）のイメージは、まさに2月に起こるこれらの出来事を表した絵図です。宇宙の更新し、構築していく力の流入は、宝瓶宮のサインの領域からやってきます。

そして最後の3月、太陽は双魚宮（うお座）のサインに入ります。自然界では発芽のプロセスが起こります。土の中の種子たちは、命を与える宇宙の水という海の中で、まるで魚のように泳いでいます。それらは自らを開いてこの水を味わい、発芽するのです。そして水を味わうことによって、種子たちは双魚宮の方向からやってくる力の営みへと引き込まれます。その力は、自然界における出来事、すなわちこの場合は1年のリズムの新たな始まりという出来事を求めているのです。宇宙の法則と世界の霊的な目的を、個々の地球の存在へと織り込んでいくことが、双魚宮のサインの影響なのです。

このように、太陽の位置は地球上の有機的生命の圏域内で起こる出来事のリズムを示しています。これは植物王国において特に明白ですが、単なる指標（サイン）にとどまりません。地球が太陽から光と熱を受け取るのと同じように、太陽から地球へと放射される実際の「力」について、私たちは語ることができるのです。太陽は、黄道帯の異なる圏域に位置する営みを集める巨大な光学レンズのようなものです。たとえば、地球にいる私たちが太陽を白羊宮（おひつじ座）のサインの中に知覚するとき、太陽はその背後にある白羊宮の領域の営みを集め、それを地球へと送り届けているのだと想像することができます。

もし、太陽の周囲、かつ地球の軌道の内側にある黄道十二宮が動的な現実であるならば、他の惑星、特に地球の軌道の内側にある惑星も、太陽と同じような方法で黄道十二宮のサインの力を集め、放射することができるのではないかという可能性を考えなければなりません。これは主に、内惑星である水星と金星、そしてある程度は月にも関係してくることになります。

実際に私たちは、黄道帯の様々なサイン（宮）における位置に応じた、そのような内惑星の営みを目にしています。ただ、これらの営みが地球上で現れる領域が、上述した太陽の営みの領域とは異なっているだけなのです。太陽の営みは、1年の間に物質世界の中の植物生命として目に見えるものとなります。しかし、太陽だけで生きた植物を創造することは不可能です。月が手助けをしなければならず、月は液体物質を介して働きかけることでそれを助けます。たとえば、植物の汁（樹液や青汁）の中で働くのです。

同時に、月は必ず満ちていく月（上弦の月）でなければなりません。言い換えれば、太陽が白羊宮（おひつじ座）に入った3月21日の後、満ちていく月が、白羊宮（おひつじ座）、金牛宮（おうし座）、双児宮（ふたご座）、巨蟹宮（かに座）という「創造のサイン」を通過するときにのみ、自然界において「復活の祝祭」が起こり得るのです。これこそが、イースター（復活祭）が必ず春分の後の最初の満月の後にしか祝われない理由なのです。

太陽と月の結びついた営みだけでさえも、十分ではありません。私たちの宇宙にある他の惑星、特に植物の成長に関連する内惑星である水星と金星も、それぞれの役割を果たさなければならないのです。これらの惑星は、年ごとに異なる自然界の多様な出来事をもたらします。それらは、どちらかといえば光と熱の圏域により深く結びついています。

1年の間に分化された太陽の営みを通じて現れる黄道十二宮（サイン）の働きは、一種の根源的な言語ですが、それは月、金星、水星という媒体を通じて変容された形で表現されます。たとえば、金牛宮（おうし座）の位置にある金星が、金牛宮の持つ強い拡大の力を集めてそれを地球の大気中へと放射するということが起こり得ます。その結果、特定の条件下では、地球の一部地域で猛烈な嵐が発生することがあります。水星も、地球の熱圏において同様のことを行うかもしれません。しかし、これら2つの惑星がその営みを入れ替える、すなわち金星が熱圏を攻撃し、水星が地球の大気圏を攻撃するということも起こり得ます。したがって、金星と水星に関して言えば、これらの惑星の動的な影響とともに生き、それを読み解こうとするならば、黄道十二宮の言語を「光と熱の圏域における営みや出来事」という言葉へと翻訳しなければならないのです。

同じことが月にも当てはまります。月は地球の液体物質の中で働きます。私たちは潮汐のリズムに対する月の影響を知っていますし、月が力強く創造的な「白羊宮（おひつじ座）の太陽」の光を受け取るとき、あるいは月自体が白羊宮にあるとき、つまり春と秋の始まりにおいて潮汐がより強くなることも知っています。（これらの事実を詳しく説明することは、主に農業に関連した研究のテーマとなるでしょう。これらの書簡はそれとは異なる任務を持っているため、ここではいくつかの示唆を与えるにとどめます。）

私たちはこれまで、地球、太陽、月、そして諸惑星の間で織りなされる力について話してきました。これらの力の分化は、一部には諸惑星の性質の違いによるものであり、また12重の黄道（軌道）の違いによるものでもあります。地球が宇宙の中心にあり、太陽を含むすべての惑星が地球の周りを回るというプトレマイオス（天動説）の体系に従えば、太陽と諸惑星は自らの運動によってその性質を変えることになります。しかし、コペルニクス（地動説）の体系に従えば、自らの運動によって太陽の営みの特定の側面に身を晒すのは、地球自身ということになります。その場合、地球の軌道が、私たちの宇宙における「12のサインを持つ黄道」という現実を創り出すことになります。それは地球にのみ関係する相対的な現実となりますが、私たちの宇宙が実際にどのように構築されているか、プトレマイオスが正しいのかコペルニクスが正しいのか、あるいは私たちがまったく新しい見方を模索しなければならないのかということは、単なる天文学的な問題にすぎません。

この書簡でここまで記述してきた、地球の有機的生命に対する諸惑星、月、太陽の影響は、すべて黄道（のサイン）に結びついています。私たちの太陽系をプトレマイオスの視点から見ようと、コペルニクスの視点から見ようと、12のサインを持つ黄道は私たちの太陽宇宙における一つの現実です。それは太陽の運動、あるいは地球の運動のいずれかによってもたらされるものとして想像されなければなりません。しかし、これまでのところ、私たちはそれを太陽系の彼方にある「恒星ゾディアック（黄道帯）」の円とは結びつけていませんし、その根拠にもしていません。恒星ゾディアックの中には、前回の書簡で言及した「12の星座（constellations）」があります。これは、私たちの宇宙（太陽系）が終わりを迎える場所から始まる現実です。私たちは今後の書簡で、この現実について多くを語ることになるでしょう。私たちは、恒星の「星座（Zodiac）」のほかに、太陽系内のもう一つの現実として「黄道（ecliptic）」が存在するという事実を、絶対に明確にしておかなければなりません。それがどのように働くかは、太陽の1年との関連で上述した通りです。それが恒星ゾディアックの12の星座とどのように関連しているかは、今後の記述で詳しく説明されます。

混乱を招きやすい難点は、12の「恒星の星座（constellations）」と、12に分割された「黄道のサイン（divisions of the ecliptic）」に対して、全く同じ名前が使われていることです。これにはある程度の正当な理由もありますが、混乱を引き起こす原因にもなります。これらの書簡では、恒星ゾディアックの12のグループを「星座（constellations）」として区別します。たとえば、おひつじ座（Ram）やおうし座（Bull）の「星座（constellation）」という場合は、私たちの宇宙の最外周の彼方にある、この名前を持つ恒星の星座を意味します。そして、黄道の12の分割（太陽、または地球の軌道の12の部分）に対しては、「サイン（宮／sign）」という指定を用い、[ラテン名を使用します]。たとえば「アリエス（Aries／白羊宮）のサイン」とは、3月21日から4月21日の間に太陽が移動するように見える、黄道のその部分を指すことになります。

第三書簡 - 1944年6月
「恒星ゾディアックの霊的本質」

●基本的な視点

星座は宇宙の進化の物語を霊的に記録した書物である、
という視点から、
恒星ゾディアック（黄道十二星座）の霊的本質について。

太陽系は単独で存在するのではなく、
周囲を取り囲む12の恒星の星座（恒星ゾディアック）から
その本質と起源を受け取っている。

恒星ゾディアックは単なる星の配置ではなく、
私たちの太陽系が誕生する以前の
創造の記憶を保持する霊的な領域である。

特に古土星進化の前半を、
4つの星座（魚座・牡羊座・牡牛座・双子座）と
霊的存在の階層を結びつけることで、
宇宙の始まりにおける
「意志 → 智恵 → 言葉 → 個別化」という霊的プロセスを、
具体的なイメージとして描き出す。

●要点

1. 全体の枠組み

太陽系（プトレマイオス的にもコペルニクス的にも）は、
円形の平面として描かれ、
その外側を12の恒星の星座の帯が取り囲んでいる。

人間の身体が
地球上の固体・液体・気体などの物質からできているように、
太陽系の本質も恒星ゾディアックに由来する。

シュタイナーの『神秘学概論』に示された
宇宙進化の4段階（古土星 → 古太陽 → 古月 → 地球）を基に、
物質が魂的・霊的な状態から徐々に凝縮していくプロセスを説明。

古土星：熱（最初の実体）
古太陽：気体
古月：液体
地球：固体

この書簡では、特に古土星進化の前半部分に焦点を当て、
各段階を恒星ゾディアックの特定の星座と結びつけて解説している。

2. 古土星進化の各段階とゾディアックの対応

〔段階〕
主な霊的存在（シュタイナー）
ゾディアック星座
主なプロセス
人間・自然界への反映

〔最初期〕
意志の霊（トローネ）
魚座（Pisces）
「意志」という根源的魂的物質を注ぎ出す
創造の始まり・終わりを同時に表す。
魚座は水瓶座が注ぐ「創造的な霊的血流」の中で泳ぐ

〔次段階〕
智恵の霊（キュリオテテス）
牡羊座（Aries）
生命力を注ぐが、土星は反射 → 「智恵」として現れる
脳の原型の創造。反射・記憶・智恵（白い羊毛）。
休息する牡羊のイメージ

〔次の段階〕
運動の霊（デュナメイス）
牡牛座（Taurus）
魂の力・意識の力を注ぐ。智恵の圏域に浸透
「原型の概念・音声・言葉（ロゴス）」の創造。
喉頭と内耳のイメージ

〔次の段階〕
形態の霊（エクスシアイ）
双子座（Gemini）
統一されたものを分割・個別化
細胞分裂の原型。人間の左右対称性・二面性。
クワの実のような多様性の始まり

3. 重要ポイント

・魚座：
古土星進化の「始まり」であり、同時に前段階の「終わり」を象徴。
創造的な霊的流れの中で、意志の原型が初めて凝縮される場所。

・牡羊座：
　生命なき状態での「反射」と「智恵」の創造。
　人間の脳の原型（無血で外界を反射する器官）に対応。

・牡牛座：
　魂の力が智恵と融合し、
　創造的な宇宙言語（神の言葉）が生まれる段階。
　人間の喉頭・言語の原型。

・双子座：
　一つのものが二つに分かれる「個別化」のプロセス。
　細胞分裂や人間の左右対称性の基盤となる。

これらのプロセスはすべて、まだ物理的な物質ではなく、
魂的・霊的な状態で行われている。
古土星の中間点で、
この魂的物質がどのように「熱」という
物理的実体へと変容していくかが、次の展開として予告される。

●本文

　共通の中心の周りを諸惑星が公転している私たちの太陽系の宇宙は、かなり複雑な有機体です。プトレマイオスの見解によれば地球がこの有機体の中心にあり、コペルニクスによれば太陽が中心にあって諸惑星が軌道を外れないようしっかりとコントロールしています。（ルドルフ・シュタイナーは、未来の惑星宇宙の概念の基礎として「レムニスケート運動（無限大［∞］の形を描く運動）」を示しました。これからの記述の中で、特に諸惑星の本質を扱う際に、これらの問題に戻ってくる予定です。）プトレマイオスの宇宙もコペルニクスの宇宙も、円盤の同心円状のリングのように惑星の軌道がその内部に横たわる、円形の平面の形をしています。この円形の平面は、私たちが「恒星ゾディアック（黄道十二星座）」と呼ぶ12の恒星の星座の帯によって取り囲まれています。これら12の星座の名前は、最初の書簡に記した通りです。

　ここからは、これらゾディアックの12の星座の本質について語らなければなりません。これらは私たちの太陽系の「外部」世界を形成しており、私たちの外部世界が私たち自身に関連しているのと同じように、それらは私たちの太陽系に関連しています。

　私たちは外部世界とどのように関連しているでしょうか。私たちは地球上の環境の中に、固体物質、液体物質、気体物質、そして熱を見出します。私たちはこれらすべてを、人間の形態の内部においてのみ、変容された状態で見出します。これらの物質の起源は、私たちの周囲の環境にあります。それらは私たちの肉体的存在の基礎を形成しています。私たちは地球上で生き、息をし、食事をする中で、それらを体内に取り入れ、絶えず取り入れ続けています。これらの物質を観察し、それが私たちの身体の内部で変形された状態で再発見されるとき、私たちは人間の創造と組織化の物語を読み解くことができるのです。もちろん、私たちの身体の創造の物語を学ぶためには、単に唯物論的な思考の観点からこれらの物質を見るだけでなく、それらの「霊的な質」を見出すことも必要です。

恒星ゾディアックと太陽世界との関係も、同様の形で成り立っていると想像することができます。私たちの太陽系は、地球的な基準では推し量ることのできない時代に誕生したに違いありません。それは一体どこから来たのでしょうか。人間の身体の中に見出される物質が、かつては周囲の世界の一部であったに違いないのと同様に、私たちの宇宙の本質的な存在も、それを取り囲む恒星の世界に由来している可能性があるのです。そこでもやはり、私たちはこの恒星の世界を、単なる量的な観点からだけでなく、質的な側面からも考察しなければならないでしょう。

もし私たちがこれを受け入れるなら、恒星、そしてその中でも特にゾディアック（黄道帯）の恒星を、私たちの太陽宇宙の起源と創造について何かを学ぶことができる領域として見なすことができます。創造の痕跡を捜し求めることは、私たちにゾディアックの内なる本質を明らかにしてくれるかもしれません。

ルドルフ・シュタイナーは、その著書『神秘学概論』の中で、私たちの宇宙の進化を理解するための鍵を示しています。その中で彼は、私たちが今生き、感覚で知覚しているこの宇宙に至るまでの、創造の様々な段階を記述しています。彼は、現代的かつ神秘主義的な西欧の秘儀参入（イニシエーション）の道を歩んだ霊視者の霊的知覚に現れる、進化のプロセスを描写しているのです。私たちは彼の説明を理解し、たどることができます。なぜなら彼は、上記の著書の中で現代的な透視能力を獲得するための方法をも示しているからです。彼が世界の進化について語っていることは、証明不可能な単なる仮説ではありません。そこに記述されている現代の参入の道を歩もうとする意志のある人なら、誰でもその証明を見出すことができるのです。

その中でシュタイナー博士は、私たちの宇宙の進化における3つの巨きな段階を記述しており、それが世界創造の第4の段階である、私たちが生きるこの世界へとつながっていきます。神秘学の伝統に従えば、これら3つの巨大な進化の段階は、それぞれ「古土星進化」、「古太陽進化」、「古月進化」と名付けられています。そして第4の段階は「地球進化」と呼ばれており、これは事実上、私たちの現在の太陽宇宙の進化を意味しています。これら4つの進化の段階が表しているのは、その起源においては純粋に「魂的な性質」であった何ものかが、その中間にあるすべての凝縮状態を経ながら、固体の物質へと凝縮していくプロセスです。その痕跡は、今日でも自然界における気体、液体、固体の物質の中に見て取ることができます。（「思考」が物質化していくプロセスとしての進化というアイデアは、現代の自然科学によってさえも考慮に入れられているほどです。）

古土星と呼ばれる進化の段階は、純粋な魂的存在（現代の自然科学の感覚で言えば「思考」）が「熱」へと凝縮された状態です。これにより、物質的な実体を生み出す、まさに最初の創造のステップが達成されました。（現代科学においては、熱というものを容易に物理的な実体とは見なさず、物理的な物質がとる「状態」にすぎないとみなすかもしれませんが、これについては後ほど語る必要があります。）

古太陽の進化は、以前に創造された熱の実体が、さらに「気体（空気）」の状態へと凝縮される段階です。古月の進化のサイクルでは、かつて創造された気体の実体が「液体（水）」の状態へと凝縮され、そして第4の段階である地球進化の内部において、さらなる凝縮が起こり、液体の実体が「固体（地）」の物質へと変容されるのです。

もちろん、これはこれら4つの進化の状態の非常に簡潔な概要にすぎません。これからは、これらをより詳細に詳しく説明し、恒星ゾディアック（黄道十二星座）との結びつきを見出していくことが私たちの課題となります。

〔古土星進化〕

現代の秘儀参入（イニシエーション）の感覚において、高次の知識（霊視）という手段を用いて創造のまさに最初期へと遡ってみても、そこにはいかなる物理的物質も見出されません。あらゆるものは未だ魂的、そして霊的な状態にあります。たとえば、人間の個別の魂的存在と結びついていなければ思想（思考）を想像することができないのと同様に、私たちはこの宇宙の魂的な性質が、物理的な存在ではなく「霊的な存在たち」の内面生活の中に存在しているのを見出すことになります。そして、人間の思考生活の領域において、理念を創造する能力を持つ人間と、それを具現化して実行に移すことができる人間とを区別しなければならないように、私たちは、自分たちの真っ只中で創造された魂的な「原型の物質」を物質化させる異なる能力を持った、霊的存在たちの階層（ヒエラルキー）をも区別しなければならないのです。

したがって私たちは、その始まりにおいて、自らの時間を超越した内なる進化のある瞬間において、最初の魂的物質――「イデア（理念）」や「思考」、あるいはそれが何であったにせよ――を注ぎ出す能力を獲得した霊的存在たちを見出すことになります。この物質は、その後、他の存在たちによって引き受けられることが可能となります。

もし物理的な意味において何一つ存在していないのであれば、最初に現れるべきものは「（物理的）存在への意志」であり、実際にその通りになります。シュタイナー博士が「意志の霊（トローネ／座天使）」と呼ぶ高位の霊的存在たちが、魂的物質としての「意志」を注ぎ出す能力を獲得したのです。この意志が、進化の過程で物理的なものとなっていくあらゆるものの基礎となります。

これらの「意志の霊」たちは、長い内なる進化を経て初めて、自らの意志物質を流し出すことができるようになりました。私たちの宇宙の創造という観点から見れば一つの「始まり」であったものは、これらの霊たちにとっては、内なる発達の「終わり」を意味していたに違いありません。この最初の創造行為は、締めくくりであると同時に新たなスタートでもあるのです。

私たちの太陽宇宙の「母なる大地（母胎）」である恒星ゾディアックは、一種の宇宙的記憶として、この出来事について何かを私たちに語りかけてくれるでしょうか。それは、今日空に現れているような「魚座（Fishes）」の星座の中に書き込まれているのを見出すことができます。（ルドルフ・シュタイナーは『神秘学概論』の中で、私たちの宇宙の進化の様々な段階における出来事と、ここでなされているようなゾディアックの星座との間のいかなる結びつきも示していません。これらの書簡でそれがどのように行われているかは、完全に執筆者自身の責任に帰するものです。）

私たちの祖先の心像に従って今日私たちが目にする「魚座」は、互いに反対の方向に泳ぐ2匹の魚から構成されており、それでいて一種の星のリボンによって結びつけられています。魚座は水瓶座（Waterman）と牡羊座（Ram）の間にあります。それはゾディアックの「第12の星座」を形成しています。そこでゾディアックは終わりを迎え、牡羊座の星座とともに新しく始まります。このように、魚座は「意志の霊」たちの存在の内部で起こった進化の「終わり」のイメージであり、彼らが私たちの宇宙の根源的な物質を注ぎ出すことができるようになる前の状態を表すと同時に、私たちの宇宙の進化サイクルの「始まり」のイメージでもあるのです。

魚座の星座は、水瓶座が宇宙へと注ぎ出す水の中で泳いでいます。高次の知識の器官（霊視力）をもってすれば、この水の中に、霊的世界の「すべてを創造する物質」のイメージ、すなわち霊的世界の「創造的な霊的血流」を感知することができます。それは自らの内部に、あらゆる現象化の可能性を秘めています。物理的世界および魂的世界に存在するあらゆるものの元型（アーキタイプ）が、あたかもこの流れの中に溶かし込まれているかのようです。それらは未だ魂的な形態にさえなっていませんが、今やこの天の水の中に

「魚座」が現れます。個々の対象が魂的に凝固していく最初の痕跡が現れるのです。物理的存在の基礎である「意志の原型」が、創造の可能性という海の内部で凝縮されるのです。

こうして根源の物質（意志）が創造された後、古土星の進化が始まります。他の霊的存在たちがその営みを展開し、それを根源の意志物質へと差し向けます。シュタイナー博士は彼らを「智恵の霊（キュリオテテス／主天使）」と呼んでいます。彼らはその時までに、もう一つの能力を獲得していました。彼らは「生命の力」を注ぎ出すことができ、出現したこの「意志の惑星」へとこれらの力を差し向けるのです。しかし、私たちが現在「古土星」と呼んでいるこの惑星は、生命を受け取ることができません。まだ生命が宿るほどには発達していないのです。それは未だ、自らの環境で起こっていることを反射（反映）することしかできない生命なき実体のようなものであり、そのため、智恵の霊たちからやってくるそれらの生命力を反射します。

反射された生命とは「叡智」です。なぜなら、生命の内なる本質こそが叡智だからです。こうして、この惑星の環境にあるこれらの宇宙的な叡智の力が、一種の圏域（球体）を形成することになります。

私たちは、この進化の段階が、いわば「牡羊座（Ram）」の星座の中に記憶されているのを見出すことができます。牡羊（ラム）は白い羊毛（フリース）をまとっています。この動物のイメージの頭部は、2つの反転した螺旋のように巻かれた角で飾られています。

この宇宙的プロセスは、私たちの宇宙の巨大な胚（胎児）の発生のように体験することができます。それ自体が、進化の様々な段階において、またこの宇宙の個々の存在の内部において生じる、胚のプロセスのあらゆるものの「元型のイメージ」を宿しています。たとえば、人間の胚発生がそうです。私たちは発生学という科学から、胚の状態の初期段階においては頭部が圧倒的に優位であり、体幹や四肢は頭部への一種の付属物にすぎないことを知っています。最初の数週間、胚の脳が詳細に発達していない時期には、胚の有機体全体が、螺旋のように巻かれた「脳」に似ているとさえ言えるでしょう。そこから、有機体のすべての部分が段階的に成長していくのです。

古土星進化の最初の段階は、「脳の元型」の創造です。今日の人間の脳は、この宇宙的な脳の微かな写しにすぎませんが、それでもなお、その霊的な形態の刻印を留めています。脳は高度に生命なき状態でなければなりません。なぜなら、そうであって初めて機能することができるからです。脳は、人間の周囲にある生命がその内部に反射されるように機能します。この反射は、真の生命の影にすぎませんが、それによって「思考」、すなわち外部世界にある対象の知識を生み出すことができるのです。

これは、休息する牡羊のイメージの中に見出すことができます。そこには、叡智の霊たちが活動していた段階、未だ生命なき意志物質、反射（これは肩越しに後ろを振り返っている牡羊の頭部に表現されています）、そして叡智の白い羊毛の創造が示されています。牡羊の角の中にさえ、私たちは脳の曲線のイメージ、あるいは一種の原初の「脳」として反射し、記憶の行為であるかのように形態を再現する胚の螺旋を見ることができるのです。

古土星進化のそれに続くステップは、惑星への「魂の力」、あるいは「意識の力」の流入と結びついています。これらの力は、シュタイナー博士が「運動の霊（デュナメイス／力天使）」と呼ぶ霊たちからやってきます。彼らは内なる運動、すなわち魂の動きの力を注ぎ出すことができます。それによって惑星の実体は活気づけられるはずですが、智恵の霊たちから生命を受け取ることができなかったため、活気づけられるための準備はさらに整っていません。したがって、これらの力もまた惑星によって古土星の環境へと反射され

ます。そして、それらが反射されるにつれて、それらは以前に智恵の霊たちから放たれた反射された生命を表す「叡智の圏域」へと浸透します。

こうして、活気づける力（魂の意識の力）が、土星の周囲にある智恵の後光へと浸透するのです。これは、人間の魂の生活において、脳の機能による客観世界の反射（投影）へと意識の力が浸透するときに起こることと、どこか似ています。そのとき、私たちは周囲の世界の「概念」を創造します。たとえば、私たちの感覚によって知覚され、脳によって反射され、そして意識によって浸透された「陽の光が衰えゆく」という事実は、「夜」という概念を創り出すことができます。このプロセスは、人間の「言語」の基礎でさえあります。確かに今日、人間は異なる言語に応じて同じ事実を異なる音声や言葉で表現していますが、かつて遥か昔の時代には、人間は音声と言葉を形成することを通じて、対象の真の内なる本質を表現し、示すことができたのです。

私たちは、古土星のこの進化の期間において、それと類似したことを、ただし巨大で遥かに強力なスケールで経験することができます。運動の霊の活動に由来する魂の力と、叡智の力とが相互に浸透し合うことによって、「元型の概念」「元型の音声」、そして「言葉」が創造されます。ただし、それらは今日の人間の言語のような受動的で反射的な性質のものではありません。その本質において創造的であり、宇宙における魔法的な力であるような、一種の「宇宙の元型的な言語」が誕生するのです。それこそが、存在するすべてのものがそれによって造られた「神の言葉（ロゴス）」なのです。

私たちは、この進化のステップが「牡牛座（Bull）」の星座の中に書き込まれているのを見出すことができます。それは（上方の）ペルセウス座と（下方の）オリオン座の間に位置しています。牡牛の身体は前半分しか見えませんが、全体として非常に大きな力を持つ動物、すなわち「豊穣さ（多産）」の象徴に似ています。この原初の進化プロセスもまた、人間の有機体（からだ）の中にその刻印を残しています。一般的に描かれているような、牡牛の頭部と宇宙空間へと伸びる巨大な角だけを持つ星座の姿を見るならば、そこには人間の「喉頭」と「内耳」のイメージがあります。頭部が喉頭であり、角は中耳へとつながる連絡管（耳管など）にあたります。中耳では、微細な骨（耳小骨）が外側の部分と耳の最も奥深い部分とを結びつけています。

古土星進化のそれに続く期間、「形態の霊（エクスシアイ／能天使）」と呼ばれる他の霊的存在たちが活動を始めます。彼らは宇宙に向けて、未だ一つの巨大な惑星の身体として統合されているものを、分割し、個別化しようとする力を放射します。しかし、惑星は未だこれらの力を取り入れることがさらにできません。この活動の「反射」だけが実体（物質）に残ります。この反射は惑星に影響を与え、その実体は多くの個別の身体へと分割され、それまで一つの単一の身体であった惑星は、まるで巨大な「クワの実」のように見えるようになります。

形態の霊から放たれる個別化の影響によって生じたこれらの小さな実（粒）は、この進化の期間中に内的な個別化を達成することはできませんが、一種の外的なイメージ、すなわち「個別の身体への分割」を生み出します。これらの個別の身体が、後に私たちの宇宙におけるあらゆる存在の多様性（すべての異なる存在の圏域における多様性）の形成となっていくのです。私たちは、この出来事が「双子座（Twins）」の星座の中に記念されているのを見出すことができます。双子座は、空の中で牡牛座の東側、オリオン座の子犬（小犬座）の上方に見つけることができます。それは、互いに密接に関連し合いながらも、それぞれが独立した個体である、人間に似た2つの存在を示しています。

古土星進化におけるこの「分割のプロセス」は、今日でも自然界の中に一種の記憶として見出すことができます。それが「細胞分裂」のプロセスです。私たちは、それが成長の物理的な基礎であることを知ってい

ます。最初に、私たちは一つの根源的な細胞を見出します。それが成長の力によって引き受けられるやいなや、それは2つに分裂します。一なるものは破壊されますが、代わりに二なるものが創造され、私たちは「双子」のイメージを得るのです。その後、もちろん成長のプロセスが進むにつれて2つは4つに分裂し、それが繰り返されていきます。こうして多様性が創造され、しばらくするとクワの実のような姿を現すこともあるのです。

この出来事は、人間の形態の内部にも、しかし非常に独特な方法で記憶されています。それは人間の形態の「対称性（左右対称）」の中に存在しています。私たちの身体が2つの側面、2つの耳、2つの目、2つの手、2つの足などを持っているのは、この影響によるものです。この「二面性（二つであること）」が、私たちを世界の他の部分から切り離します。それは、個人の基礎となる身体の内部に私たちが存在することを可能にするのです。対称性は、長い進化の最後の痕跡を示しています。それによって人間の形態は近隣の形態から切り離され、そこに個が宿ることができるようになったのです。また、もう一つの双子――「頭と足」――も、間の人間の形態を、上方にあるものと下方にあるものから切り離しています。これもまた、個の自由な発達のために必要なことなのです。

私たちは今、古土星進化の中間点に到達しました。ここでは重要な変化と変容（変態）が起こります。これまでのところ、土星の上のあらゆるものは、多かれ少なかれ未だ魂的な状態にあります。私たちは「実体（物質）」について語ってきましたが、この実体とは、意志の霊たちから引き出された「意志」のことです。意志として、それは未だ魂的な状態にあります。次の書簡では、古土星進化の中期において、この魂的物質がどのようにして「物理的物質（熱）」へと変容していくのかを見ていくことにしましょう。

第四書簡 - 1944年7月
「恒星ゾディアックの霊的本質（続き）」

●基本的な視点

古土星進化（古代土星）の後半部分の続き。
前回の書簡で扱った「意志の霊」から「形態の霊」までの段階に続き、
さらに進んだサイクルを解説し、全体として、
恒星ゾディアックが宇宙進化の「霊的記憶」として、
今日もなお力を放射していることを明らかにする。

古土星進化を通じ、徐々に「外と内」「知覚」「代謝」といった
基本的な生命機能の原型が形成されていく。

各段階で高位の霊的存在の「反射」としてプロセスが進行し、
それが後に物理的な器官や機能として現れる。

特に二面性（内と外）の成立が、
人間進化の根本的な基盤として重要視されている。

恒星ゾディアックは宇宙進化の各段階を霊的に記憶しており、
それが人間の身体や意識の形成にまで深く刻印されている。

●要点

1）導入部

これらの書簡は、ルドルフ・シュタイナーの
『神秘学概論』を深く学ぶことを前提としている。

占星術の伝統的な記述だけでは「
なぜその影響が働くのか」が説明されないため、
真の理解を得るために、進化のプロセスを丁寧にたどる必要がある。

2）古土星進化の後半の主な段階

前回までのまとめ（参考）：

意志の霊 → 魚座
智恵の霊 → 牡羊座（脳の原型）
運動の霊 → 牡牛座（言語器官の原型）
形態の霊 → 双子座（個別化・二面性）

新たに扱われる段階

〔サイクル〕
主な霊的存在
対応する星座
主なプロセス
人間の形態への反映

〔第4サイクル〕
人格の霊（アルヒャイ／権天使）
射手座（人馬宮）

意志物質を「熱（暖かさ）」として内的に体験させる。
外なる世界と内なる世界の分裂を生む
腕（特に上腕）。
頭部・言語から外なる世界へと向かう方向性。
ケンタウロス（人間と動物の二面性）のイメージ

〔第5サイクル〕
光の霊（アルヒアンゲロイ／大天使）
愛の霊（セラフィム／熾天使）
蟹座（かに座）
山羊座（やぎ座）

原型的な感覚器官の創造。
外部との接触への欲求が生まれる

蟹座：
胸（胸郭）。
内臓を守りつつ外部とつながりたい欲求
山羊座：
肘・膝などの関節。
能動的な感覚器官の原型

〔第6サイクル〕
生の霊（アンゲロイ／天使）
調和の霊（ケルビム／智天使）
獅子座（しし座）
水瓶座（みずがめ座）

原初的な代謝（栄養摂取・排泄）の確立。
「天球の調和（音楽）」が生まれる
獅子座：
心臓（熱代謝の中心）
水瓶座：
前腕・ふくらはぎ（熱の流れと代謝を測る部位）

3）各段階の詳細ポイント

・射手座（人格の霊）

外なる「意志」と、それを内側で「熱」として体験す
る「内なる世界」が生まれる。
これにより、物理的世界と魂的世界の二元性が根本的に成立する。
人間では「腕」が外の世界へと働きかける器官として現れる。

・蟹座と山羊座（第5サイクル）

大天使たちが熱の身体の中に「殻」のように住み、
外部とつながりたい欲求を持つ。
一方、セラフィム（愛の霊）の創造的な知覚が働き、
原型的な感覚器官が形成される。
人間では胸（守りと欲求）と関節（特に肘・膝）がこれに対応。
関節は「方向の転換」を行う能動的な感覚器官の原型とされる。

・獅子座と水瓶座（第6サイクル）

天使（植物のような意識）と
ケルビム（宇宙の熱の流れを調和的に方向づける）が協力し、
原初の代謝を創り出す。
ケルビムの活動は「天球の音楽（調和）」として現れる
人間では心臓と四肢の熱代謝（血流）にその記憶が残っている。

●本文

この取り組みは、特にシュタイナーの先述の著書（『神秘学概論』）にあまり深く親しまれていない読者にとっては、極めて困難なものに思えるかもしれません。しかし、恒星や諸惑星の内なる本質についての真の、かつ根本的な知識を獲得するためには、ほかに道はないということを理解しなければなりません。もちろん、ゾディアック（黄道帯）の分化された影響を記述した占星術の著作は数多く存在します。しかし、それらの記述のほとんどは伝統（伝承）に由来するものであり、なぜ黄道十二宮がそこに示されているような方法で働くのかについては、いかなる説明も与えていません。その結果、学者たちは、その影響（の存在）は考慮に入れなければならないものの、理解しがたい必然性という乗り越えられない壁で人間を取り囲んでいるような宇宙に直面することになるのです。

これらの書簡の意図は、宇宙の本質に対する「真の理解」を創り出すことにあります。なぜなら、この宇宙の影響に直面したとき、人間が自由になり、自己意識（主体性）を持つことができるのは、ただ理解と明晰な思考を通じてのみだからです。したがって、私たちは特に初期において、いくつかの困難な作業を行わなければなりません。そして、ゾディアックと進化との結びつきに関するこれらの記述を、それらが真の「内なる心像」、すなわち真の「イマジネーション」となるまで、何度も何度も繰り返し学習することが必要であると強く強調されなければなりません。

これは、『神秘学概論』の学習とともに行われるべきです。そうして初めて、それは一人の人間には到底一度には把握しきれないような、天の世界と地の世界との間の多様な結びつきを学び手が見出すことを可能にする「知識の源泉」となるのです。学び手は、このテーマを自らの手に取り、イマジネーションの力によって宇宙の影響の多くの可能性を感知する、まるで一人の芸術家であるかのように感じる境地へと達しなければなりません。

私たちは、あの唯一の偉大なる根本的なイマジネーション――すなわち「創造（創世）」から始めることができるのです。

W. ズーヒャー（ウィリー・ズーヒャー）

〔恒星ゾディアックの霊的本質（続き）〕

前回の書簡では、私たちが「古土星」と呼んだあの原初の宇宙における、最初の3つの巨大な進化のサイクルについて記述しました。そこにあったのは、意志の霊（座天使）の犠牲によってもたらされた「意志物質」だけであり、それは多かれ少なかれ魂的な性質を持つ、いくぶん混沌とした宇宙を形成していました。最初のサイクルの間、この意志物質の内部に「生命の反射」が創り出されました。第2のサイクルの過程では、他の霊的存在たちによって「活気（魂）の反射」が創り出され、第3のサイクルの間には「個別化の外的な反射」がもたらされ、その結果として「惑星」の一つの単一の身体が、多くの分離された身体へと分割されるに至りました。

さらに私たちは、これらの原初の出来事の刻印を、牡羊座、牡牛座、双子座の星座の中に見出しました。このようにして私たちはこれらの星座の内なる本質を発見したのです。なぜなら、これらの出来事によって満たされた（受胎した）がゆえに、それらの星座は今日でも一種の宇宙的記憶として、その力を放射し続けているからです。

ここからは、進化の描写をさらに進めていきましょう。ここまでは、すべてのものが多かれ少なかれ未だ魂的な性質にとどまっています。単一の、分離された身体（粒）が創り出されましたが、今やこれらの身体の内部で、最初の「内なる生活」、あるいは「内なる体験」の痕跡が始まりを告げます。こうして初めて、一種の宇宙的な二面性――すなわち「外なる世界」と「内なる世界」――が誕生するのです。

内なる世界は、わずかな程度ではありますが、外なる世界から切り離されました。外なる世界は、内なる世界によって「知覚可能」な客観的なものとなります。たとえそれが、極めて鈍い「意識」のレベルにおいてであったとしてもです。外なる世界それ自体は「意志」なのですが、それが対象として体験されるとき、それは「熱」あるいは「暖かさ」となります。私たちはみな、人間の意志と熱との間の微妙な結びつきを知っています。私たちが自らの意志の圏域に没入している限り、私たちは自らの魂の衝動の領域とみなせる世界から働き、操作しています。しかし、たとえば私たちがわずかに疲れたり、あるいはその衝動――それを未だ私たちの義務と呼ぶこともできるでしょう――から切り離されたりして、「外なる意志」によって引き起こされる努力を体験するようになると、私たちはたちまち自分の身体の中で熱が生み出されるのを体験します。もちろん、今日私たちの肉体的存在は、古土星進化の内部における事実を説明するための優れた例を提供するには複雑すぎますが。

この「意志物質から熱または暖かさへの変容」は、ルドルフ・シュタイナーがその著書の中で「人格の霊（アルヒャイ／権天使）」と呼んでいる霊的存在たちによってもたらされます。彼らは地球上の人間と類似

した体験を経ていきます。なぜなら、彼らは「自我（エゴ）の意識」を獲得するからです。ただし、彼らはまったく異なる条件下でそれを行います。彼らがそれを行うとき、彼らは前のサイクルの間に創り出された身体の内部へと働きかけます。意志物質はそれ以前の影響を取り入れることができなかったため、人格の霊の影響を保持することはさらに不可能です。ここでもまた、一種の「反射」だけが残ります。

これらの土星の身体の内部に、今や「人格の反射」が存在するようになり、それがこれらの身体の内部に、内なる世界の極めてかすかな痕跡を創り出します。こうして、内なる世界と外なる世界との間の「分裂」への傾向が誕生し、それが今度は、内なる存在が外なる世界における意志を「熱」として「体験」することを可能にするのです。

これらの事実についての記述は、すでに「双子」――外なる世界と内なる世界――というアイデアを呼び起こすかもしれません。そして実際に、それは双子座の星座の中に書き込まれているのを見出すことができます。そこには、前回の書簡で記述した「形態の霊（能天使）」の個別化の影響という出来事がすでに存在していました。ここで私たちは、双子座の星座が世界に「双子の傾向」をもたらすだけでなく、遥か昔の時代には本当に「2つの星座」であった、あるいはそうであったに違いないと想像しなければなりません。一つは「形態の霊」の活動を記録し、もう一つは「人格の霊（権天使）」の活動を記録していたのです。

しかし、今日そこに一つの星座しか存在しないという事実もまた、深い謎を明らかにしています。宇宙的記憶の言語において、それは「何かが消失したこと」を明らかにしているのです。実際にその通りでした。人格の霊たちは、自らの進化の過程において、霊的ヒエラルキーの円環における自らの霊的な「場所」から離れ、反対の「方向」、すなわち今日「射手座（Archer／人馬宮）」の星座によって象徴されている圏域へと移動した、と想像せねばならないでしょう。

私たちは、真夏の夜に、南の地平線のちょうど上、わし座とへびつかい座の下に射手座を見出すことができます。私たちの緯度（北半球）では、それはあまり高く昇らず、地平線に沿って這うように進みます。古い星図では、ケンタウロス――半分が馬で半分が人間の存在――として描かれています。彼は弓と矢を持ち、ある目標に狙いを定めているように見えます。非常に多くの場合、それは弓と矢だけで描かれます。

この射手のイメージ、特に「矢」のイメージは、対極にある双子座からインスピレーションを与えられた出来事や発達について、多くのことを明らかにしています。双子座からやってくる2重の影響を通じて、土星の単一の身体に外的な形態と、内なる世界の鈍い体験が与えられました。こうして、その後のすべての進化、特に人間の進化にとって極めて重要な原理が世界に到来したのです。この二面性こそが、「物理的世界」と、人間の「魂の世界」が創造される理由なのです。そこには、人間の進化という長い物語の萌芽がすでに含まれています。すなわち、人間が形成されていく中での永劫の闘いであり、外なる物理的世界と、魂および霊的世界との間の調和です。それは本当に、この進化の時代に始まり、遥か遠くの目標へと狙いを定める矢のようです。

それはまた、下位の、人間以下の存在の段階から、高位の、神のような形態へと上昇していく存在としての間の物語をも含んでいます。なぜなら、この進化は、外なる世界に関連する下位の性質（動物性）と、神性の火花を宿す人間の内なる上位の性質との間の、絶え間ない闘いを通じてのみ可能だからです。こうして、半分が人間で半分が動物のようなケンタウロスのイメージが得られるのです。

これまでの記述において、私たちは牡羊座には「脳の原型的なイメージ」、牡牛座には「言語有機体の原型」、双子座には右と左の対称性や頭部と四肢の二面性といった「二面性の原型」が含まれていることを見出しました。それから、私たちは双子座から射手座へと飛び移りました。私たちは、この出来事が人間の形

態の中にも刻印されているのを見出すことができます。それは、頭部と言語（喉頭）から「腕」への進行です。上腕は、射手座の肉体的なイメージです。人間の身体は、頭部の内なる世界とは対照的に、腕によって「外なる世界」へと差し向けられています。この傾向の中に、私たちは射手座の矢を持っています。私たちの腕は筋肉と腱によって動かされ、それらは射手の弓の弦を示しています。私たちは腕を使って世界の中で働き、その働きによって、人類と世界の進化を前進させるのです。

外なる世界と内なる世界というこの二面性を確立した今、私たちはその後のさらなる進化を容易に想像することができます。古土星のそれに続く「第5のサイクル」の間に、2つの世界の間の一種の「結びつき」が創り出されます。これらの熱の身体の内部に、まさに最初の「感覚器官の始まり」が創り出されるのです。これらの原型的な感覚器官は、もちろん、地球上の人間の感覚器官とは決して似ていません。周囲の世界は「熱（暖かさ）」としてしか知覚されないため、感覚やその他の器官は、極めて原初的な状態でしか存在していないと想像することができます。皮膚のような器官でありながら、単に熱だけで構成されているもの、すなわち個々の身体の内部の熱と外部の熱との間の、境界の鞘のようなものを想像せねばならないでしょう。私たちは、自分の最も低い感覚と呼ぶ「触覚」が皮膚の切り離す能力と結びついていることを知っていますが、他の感覚器官もまた、胚のプロセスにおいて、ある程度は皮膚の発達と結びついているのです。

この発達は、霊的存在の2つの階層（ヒエラルキー）によってもたらされます。事実上、人間の肉体の起源である「熱（暖かさ）の身体」には、いわば、ルドルフ・シュタイナーが「光の霊（アルヒアンゲロイ／大天使）」または「火の息子たち」と呼ぶ霊的存在たちが居住していました。彼らは未だ今日の人間の意識には達していませんでした。彼らの意識は、今日の日中の動物の意識に例えることができますが、それはあくまで目覚めの度合いにおいてのみです。

これらの存在が熱の身体の内部で働き、居住するにつれて、外部と感覚的な接触を持ちたいという「欲求」が生じます。しかし、これだけでは、あの原型的な感覚器官でさえも創造するには十分ではありません。そこで、シュタイナー博士が「愛の霊（セラフィム／熾天使）」と呼ぶ、極めて高位の階層の霊的存在たちが活動に入ります。彼らは古土星の内部における出来事を「知覚」します。彼らの知覚は、たとえば今日の人間の知覚のように受動的に反射するものではなく、「創造的」なものです。彼らは大天使たちと協力して、原型的な感覚器官の微細でエーテル的な輪郭を丹念に形づくる（精巧に仕上げる）ことができるのです。

このように、この第5のサイクルには2つの影響が存在します。では、私たちはこれらの出来事がゾディアック（黄道帯）のどこに記憶されているのを見出せるでしょうか。

第4のサイクルの出来事は、双子座（Twins）から射手座（Archer）への移行として、双子座と射手座に結びついて現れました。今回は、単にゾディアックの順序に従って進めば、その答えを見出すことができます。それは、今日「蟹座（Crab）」と「山羊座（Goat）」の星座の中に記憶されている力の一つの相互作用なのです。

私たちは1月の真夜中に、ちょうど南の空に蟹座を見出すことができます。その上方、北側には大熊座（北斗七星）の頭部があります。蟹座は極めてかすかな星だけで構成されています。古い星図では、前方に巨大なハサミを持ち、硬い殻に囲まれた「カニ」として描かれています。このイメージは、大天使たちが古土星の熱の身体の中にどのように居住していたかという、一種の絵図を私たちに与えてくれます。カニが殻に囲まれ、その動物の生命にとって重要な柔らかい器官が殻の内側にあるように、大天使たちは熱の身体の内部に生きています。それでもなお、彼らはハサミのような器官を使って、外部世界を把握したい（掴みたい）という欲求を把握し、あるいは発達させるのです。

ゾディアックの反対側には、山羊座の星座があります。7月の終わりの真夜中、ちょうど南の、地平線の非常に近いところにそれを見出すことができます。そのとき、雄大な白鳥座がちょうどその真上に位置しています。古い星図ではアイベックス（野生のヤギ）として描かれていますが、後ろ足がありません。その代わりに、螺旋のように湾曲した一種の「魚の尾」が見られます。このイマジネーション（心像）は、あの高位の存在である「愛の霊（セラフィム）」の活動のアイデアを私たちに与えてくれます。世界の最高峰の最も高い険しい峰々を登り、その角で光の圏域へと手を伸ばすアイベックスのように、私たちは愛の霊たちを想像しなければなりません。彼らは霊的宇宙の最高位の圏域に居住しています。彼らは高い見晴らしの良い場所から宇宙の内部の出来事を知覚しますが、彼らの知覚は受動的なものではなく、創造的なものです。知覚するという行為そのものにおいて、彼らは創造するのです。彼らは自らの創造的な知覚を内に留めておくことはせず、大天使たちへと分け与えます。これは純粋な愛の行為です。

この絶対的な知覚が、大天使たちの内部にある知覚への欲求と結合します。こうして感覚器官が創造されるのです。それらは機械的な器官として創造されるのではありません。愛の霊たちが知覚する光の心像の内部にある神聖な愛が、これら神聖な存在たちの超感覚的な体験の「反射（反映）」を、その被造物が知覚することを可能にするような器官を創造するのです。高次の体験が下位の圏域へとこのように創造的に織り込まれていくこと（対退化／インボリューション）が、山羊の「魚の尾」に現れています。それは、それが「水」の圏域へと届いていることを示しています。これはもちろん、土星の上には熱しか存在しないため未だ本物の水ではありませんが、熱がまさにもそうであるところの「反射（投影）の圏域」を示しているのです。

私たちはまた、これらの出来事のイメージを人間の形態の中に見出すことができます。人間の「胸（胸郭）」は、まさに蟹座（カニ）の真の絵図です。胸は内臓、特に心臓と肺を囲み、守っています。そして、胸が内臓を外部から切り離している（隔てている）のと同じ度合いにおいて、胸の内部には外部世界と接触を持ちたいという欲求が生きています。この欲求は「利己主義（エゴイズム）」、すなわち、その存在の手の届くところに来るすべてのものを所有したいという欲求にまで至ることさえあります。

ここで私たちは、人間の胸のこの絵図は、上述した出来事の中では未だ微かに示されているにすぎないと想像しなければなりません。なぜなら、古土星の蟹座の出来事に結びついている存在たちは、未だ愛の霊たちの援助に非常に依存しているからです。彼らは人間に類する自我意識（エゴ意識）にさえ到達していません。そのため、どういうわけか私たちは、これらの出来事の重みが「山羊座」の星座の中にあることを見出さねばならないのです。これは今度は、人間の形態における「関節」、特に「肘（ひじ）」と「膝（ひざ）」として現れます。

こうして私たちは、土星の第4のサイクルにおける出来事との結びつきを再び見出すことになります。私たちは、双子座ー射手座の出来事が、人間の形態の中では「上腕」として現れ、それに「肘」が続くと述べました。しかし、人は「肘が感覚器官と何の関係があるのか？」と問うかもしれません。もし、感覚器官というものを今日人間が持っているような姿（目や耳など）としてしか想像しないという過ちを犯さなければ、その解決策を見出すことができます。

もし、愛の霊たちの超感覚的な知覚が熱の身体へと浸透し、その浸透の行為そのものにおいて、いわばそれらの身体の「皮膚」の表面に知覚の器官を創造していくのだと想像するなら、私たちは次のことを体験することができます。大天使たちの居住地である熱の身体の「外部」においては、愛の霊たちの影響は「直線」のようなものですが、それらの身体の皮膚を「浸透する」際にそれは屈折し、こうして外部の「方向」を内

部の「方向」へと変容させる、一種の器官――「関節」のようなもの――が創造されるのです。両方の「方向」が、一種の関節のような感覚器官を通じて正確に結びついて初めて、正しい知覚が起こり得るのです。

これこそが、たとえば人間の「目」が一種の原型的な、関節のような感覚器官として機能している仕組みなのです。古土星の山羊座期のイメージとしての「肘」の場合、それは私たちの（手腕の）活動のために使用されるため、「活動的な感覚器官」ということになります。これは、愛の霊たちによってインスピレーションを与えられた感覚器官を、能動的で創造的な器官として想像せねばならないのと全く同様なのです。

古土星の次のステップである「第6の巨大なサイクル」は、この方向性をさらに進めたものとなります。これまでは、熱の被造物の内部に知覚の能力が創り出されてきましたが、このサイクルの間に、今度は一種の「消化」が確立されます。土星の内部における出来事が知覚されるだけでなく、周囲にある熱物質が、熱の存在の内部へと取り込まれるようになるのです。そこでそれらは一種の原初的な「代謝」を経ていき、こうして栄養摂取と排泄のプロセスが起こります。

進化もまた、2種類の霊的存在によってもたらされます。「生の霊（アンゲロイ／天使）」または「薄明の息子たち」と、「調和の霊（ケルビム／智天使）」です。天使たちは、古土星内部における大天使たちよりもさらに低い意識を持っています。彼らの意識は、今日植物が持っている意識の度合いに例えることができ、彼らは熱の身体に対しても、植物の内部における液体の循環（樹液の巡り）にどこか似た方法で働きかけます。彼らがこの原初的な代謝をもたらすのですが、彼らだけでそれを行うことはできません。「調和の霊」と呼ばれる高位の存在たちが彼らを助けます。

調和の霊たちは、宇宙的な熱の流れを方向づける力を獲得しています。もし私たちが自らの血流を自分の意志で方向づけることができるなら、これらの存在ができることについて、微かなアイデアを得ることができるでしょう。この宇宙的な血流は「熱」で構成されているため、外部からは「音」のように現れます。これこそが「天球の調和」であり、それゆえにこれらの霊は調和の霊と呼ばれているのです。彼らが宇宙の流れ（一方からの熱と、もう一方からの意志）を方向づける秩序は、あまりにも美しく調和に満ちているため、それは天上の音楽のように現れます。

これら両方のヒエラルキーが一体となって、原初的な代謝を創り出します。私たちは、この進化の段階が「獅子座（Lion）」と「水瓶座（Waterman）」の星座の中に記憶されているのを見出すことができます。

2月の真夜中、獅子座は南の地平線のはるか高くに見出すことができます。これは非常に際立った星座です。その下方には海蛇座（うみへび座）があり、上方（北の空）には大熊座の身体があります。この星座には、天使たちの行為が書き込まれています。それはまた、「心臓」とも密接に結びついています。地球上のライオンは、心拍と呼吸との間に非常に独特な結びつきを持っています。この動物の身体は、主に心臓へと差し向けられている（心臓を中心に構成されている）とさえ言えるでしょう。それは全体として一つの大きな「心臓」であり、それゆえに「百獣の王」なのです。

私たちは今や、何の困難もなく、この領域に「熱の代謝」を見出すことができます。それは土星上の熱の身体の内部に創り出されたものですが、心臓は今日でもなお、血液の熱と結びついた熱代謝の「中心器官」だからです。

水瓶座の星座は、8月の終わりの真夜中の時間帯に、魚座と山羊座の間に見ることができます。古い星図では、水瓶から天上の空間へと水を注ぐ人間の姿として描かれています。この領域には、調和の霊（ケルビム）の行為が書き込まれています。宇宙へと注ぎ出されるこの水は、もちろん、地球上の水ではありませ

ん。それは、調和の霊たちが古土星の宇宙全体に方向づけて流している「熱の流れ」なのです。人間において、血液循環の流れは未だこれら神聖な存在たちの活動のイメージを留めています。私たちは時折、血流の「ゴーという音（せせらぎの音）」について語ることさえ知っています。また、人間の「前腕（ひじから下）」と「ふくらはぎ（下腿）」も水瓶座に結びついています。看護の経験がある人なら誰でも知っているように、前腕とふくらはぎは、心拍数を確認するだけでなく、熱代謝を測定し調節するための非常に優れた手段（部位）なのです。

次の書簡において、私たちは古土星進化の描写を締めくくり、ゾディアックに関する私たちの経験を要約する予定です。それによって、私たちはこの絵図をより完全なものにすることができるでしょう。宇宙進化のこの壮大な一巡をいくぶん急速に旅してきた後には、これ（要約）が非常に必要となります。もしこれらの描写が極めて難解に思えたとしても、読者のみなさまが焦ってしまわぬよう願っています。私たちは、星の世界に関する真の、かつ根本的な知識を確立するために、この困難な作業を行わなければならないのです。その知識は、多くの方法で有用であることが証明されるはずです。

第五書簡 - 1944年8月
「恒星ゾディアックの霊的本質（続き）」

●基本的な視点

古土星進化の最終段階（第7のサイクル）を完成させ、
恒星ゾディアック全体の霊的本質が一つの絵図としてまとめられる。
また、惑星が恒星ゾディアックの各星座を通過するときに
どのような意味を持つのかが、具体的に示される。

恒星ゾディアックは「創造の年代記」であり、
宇宙進化の霊的記憶を保持している。

惑星は黄道帯と地球の間の仲介者として働き、
星座の影響を特定の性質に変容させる。

人間は、星々の運動を単なる機械的な現象として見るのではなく、
「世界の意志（父なる神の意志）」の表現として読み取ることで、
運命の力の支配下から脱し、自由へと向かう道を歩み始めることができる。

特に「手」と魚座の結びつきは、
人間が自らの労働と運命を通じて、
世界の意志に参与する可能性を示している。

●要点

これまでの6つのサイクルで、
熱でできた存在に「生命の反射」「活気の反射」「個別化」
「感覚器官の原型」「代謝の原型」などが創り出された。

第7のサイクルでは、再び意志の霊（トローネ／座天使）が働きかける。
彼らは古土星の最初に「意志物質」を犠牲にした存在で、
最後の段階でこれらの熱の存在の内部に、
「霊人」の萌芽を霊的な種子として植え込んだ。

これは、遥か未来において人間が完全に意識的に
「父なる神の意志」と一体になる能力の始まりである。

・対応する星座：魚座（Fishes）
　人間の形態への反映：手

手は、魚座のイメージ
（反対方向に泳ぐ2匹の魚がリボンでつながっている）そのもの。
人間は手を使って世界に働きかけ、運命と直接出会う。
今日、私たちが「運命の力」と感じるものの根源は、

この意志の霊の活動にある。
将来的に、この力を完全に意識的に使いこなせるようになることが、
人間の進化の目標の一つとされている。

○古土星進化 7サイクルの全体像

〔サイクル〕主なプロセス
対応する星座
人間の形態への反映
補足

〔I〕生命の反射
牡羊座
頭部・脳

〔II〕活気の反射
牡牛座
言語・音声有機体

〔III〕個別化
双子座
腕の対称性

〔IV〕熱への変容・人格の反射
射手座
上腕

〔V〕原初的な感覚器官
山羊座（蟹座が背景）
肘・関節
蟹座は背景

〔VI〕原初的な代謝
水瓶座（獅子座が背景）
前腕・ふくらがぎ
獅子座は

〔VII〕意志の種子（霊人の萌芽）
魚座
手
運命との出会い

（蟹座と獅子座は、この段階ではまだ「背景」に退いており、
生命が本格的に発達する次の進化段階で前面に出てくる。）

○「欠けている」5つの星座について

蟹座、獅子座、乙女座、天秤座、蠍座の5つは、
古土星の段階ではまだ生命の「影」しかなかったため、
背景に退いていた。

これらは後の進化段階（古太陽・古月以降）で
重要な役割を果たすことになる。

○恒星ゾディアックを読む方法（惑星が星座を通過するとき）

書簡の後半では、
惑星（特に土星の例）が各星座の前を通過するときに、
人類や地球にどのような霊的な課題や衝動が呼びかけられるかが
具体的に示される。

・牡羊座：
　新しい衝動・新しい時代・新しい問いが到来することを促す。
・牡牛座：
　伝統や惰性の壁を打ち破り、新たなものを活気づける
　（応じないと大惨事になる可能性）。
・双子座：
　自我（自我の衝動）の発達と「世界の我（I AM）」の認識
　（1944年当時、土星が双子座に入っていた）。
・蟹座：
　感覚を通じて物質世界と深く関わる。死と再生の神秘を知覚する。
・獅子座：心（ハート）を開き、宇宙の調和を自らの内側で響かせる
　（ノヴァーリス、ブラヴァツキー、シュタイナーらが獅子座と結びついていた例）。
・乙女座：
　物質とマターの神秘への最高次の献身と愛。
　物質変容（トランスブスタンシエーション）の神秘に関わる
　（最後の晩餐のとき、月が乙女座にあった）。

●本文

過去2回の書簡では、古土星進化の出来事に従って、ゾディアックの12の星座のうちのいくつかを詳しく説明してきました。ここでは、私たちの宇宙のこの惑星的存在における「第7の巨大なサイクル」を記述することによって、この絵図を完成させなければなりません。

それまでの6つのサイクルの間に、熱で構成され、生命、活気、個別化の気配を宿し、内なる生活の最初の痕跡を示す一つの存在が創り出されてきました。そして今、この最後の第7のサイクルにおいて、この存在はこの壮大な進化の一巡の内部で、ある種の「完成」に達したように見えます。その行為は自動的であり、自らの環境において起こっている出来事や営みと一致しています。

ここで、異なる霊的存在たちが、もう一度その力をもってこれらの熱の存在たちへと浸透する可能性を得ます。彼らとは、古土星進化の始まりに関連してすでに言及した「意志の霊（トローネ／座天使）」のことです。始まりにおいて、彼らは自らの意志物質を犠牲にし、この物質が他の霊的存在たちの営みの土台となりました。この物質はまた、古土星の内部に創り出された熱または暖かさという物理的物質の基礎ともなりました。事実、それはのちの創造の段階で創り出されることになる、あらゆる物理的物質の「起源」なのです。

この意志物質が熱へと変容された後、意志の霊たちは、今日の人間の肉体の起源であるこれらの熱の存在たちの内部へと、再び働きかけることができるようになります。このように、宇宙創造のこの壮大な一巡の「始まり」は「終わり」と結びついており、それによって、これらの出来事は、私たちが今日その真っ只中にいる世界存在全体の「内なる意味」を明らかにしているのです。

古土星におけるこの最後のサイクルの間、意志の霊たちは、これらの熱の身体の内部に、今日の人類には未だ意識的に発達させることのできない、しかし今なお休眠しており、宇宙進化の遥か遠い未来を待たねばならないような「能力」を創り出しました。これを記述するためには、私たちは別の視点から始めなければなりません。

私たちは、書簡の第3と第4において、この進化の局面を、背景にある蟹座と獅子座とともに、牡羊座、牡牛座、双子座、射手座、山羊座、水瓶座の星座の中に読み取れるものとして記述しました。また、その痕跡を人間の形態――頭部または脳、喉頭または言語・音声の組織、そして上腕、肘、前腕を持つ腕の内部――に見出しました。土星進化のこの最後のサイクルは、「魚座（Fishes）」の星座の中に書き込まれているのを見出すことができます。魚座の星座は、ミカエル祭（9月29日）の頃の真夜中の時間帯に、南の地平線のちょうど真上に見ることができます。その上方にはアンドロメダ座とペガスス座があります。

こうして私たちは、再び古土星の始まりへと戻ってきます。そして、意志の霊たちの犠牲が魚座に書き込まれているのを見出したように、私たちは今、最後のサイクルの間の彼らの活動が魚座に示されているのを発見するのです。

人間の形態の内部において、それは「手」の中に描写されています。2つの手は、空の中で互いに反対の方向に泳ぎながらも、かすかな星のリボンによって結ばれている2匹の魚（魚座）のイメージなのです。

私たちは手を使って世界の中で働きます。芸術、科学、建築のすべての業績、そして地球上の人間の生活を可能にしている何百万、何千万という小さな行為も、究極的には人間の手によってもたらされてきました。それらは人間の「頭（思考）」から「手」へと絶えず流れ下り、これまでもそうであり、今もそうなのです。

過去に行われ、そして未来に行われるであろう、あらゆる種類の膨大な量の人間の労働を一度想像してみるなら、私たちは感嘆と畏敬の念をもって人間の手を見つめることができるでしょう。しかし、私たちは、自分の思考がどのようにして手によって具現化されるのか、あるいは、どのようにしてフライパンやシャベルを扱うことができるのかを知りません。これは未だ、私たちの昼の意識からは隠されています。しかし、私たちが腕や四肢を動かし、手を使って働くときに何が起こっているのかを意識できるようになる、人間の「未来の状態」を想像することは可能です。私たちは、いつの日か人間が、今日では手の形態によって示されているにすぎない力を放射するために、手の中にある「隠された能力」を使用できるようになることさえ想像できるのです。

事実、私たちは自らの「手」によって自らの運命に出会うのです。手は、私たちが絶えず世界と直面している、私たちの有機体の部分にほかなりません。働く手という現実をもって世界に出会うとき、私たちは自らの運命に出会っているのです。

ほとんどの人間にとって、運命とは自らの頭上に漂う何かであり、自分にとっては異質なものであって、不意に自分をどちらか一方の方向へと連れ去っていくもののように思われます。それは、人間を超えた一つの「意志の力」のように体験されるのです。

私たちは今、手と魚座（Fishes）との結びつきを発見し、魚座の背後にある「意志の霊（座天使）」の行為を読み解きました。ですから、魚座の背後で働いているもの、そして私たちの手の中でも働いているものは、私たちが「運命の力」と呼んでいる宇宙的な意志の力であることを見て取ることができるのです。今日、私たちがそれらの意志の力を体験する方法の中に、上述したような、私たちの古土星の祖先たちの「鏡のような（反射する）意志の力」の最後の痕跡が隠されています。

また、私たちは次のように想像することもできます。いつの日か、非常に遠い未来において、私たちは未だ自分にとって異質で理解しがたいそれらの意志の力と「一体」になることができるだろう、と。そのとき私たちは、完全な意識をもって、宇宙の意志が私たちを通じて行おうと望んでいることを成し遂げることができるでしょう。そのとき、私たちは「神の如きもの」となるのです。私たちは「父なる神の意志」と結合することになります。

将来、私たちの内部で成熟することしかできないこの能力は、意志の霊たちの活動によって、それらの土星の熱の存在たちの内部へと「霊的な種子」として投入されました。ルドルフ・シュタイナーはこれを、「霊人」の萌芽と呼んでいます。

私たちは、これが魚座の星座の中に書き込まれているのを見出すことができます。すなわち、世界進化の始まりにおける意志の霊たちの「意志物質」、私たちが自らの手によって最も直接的に体験する「地球」と「運命」へのその結晶化、そして、完全に意識的かつ完全に能動的な方法による「父の意志との結合」の萌芽です。

こうして私たちは今、神々によって創造された「人類のエーテル的な心像」と、それと星々の宇宙との結びつきを発見したことになります。それは「上部人間」のイメージです。脳を持つ頭部、言語と音声の組織、そして腕――まさに手へと至るまでの姿です。それはまた、世界と人間の運命（世界が創造されたときの諸ヒエラルキーの意志として）のイメージであり、私たちを取り囲むすべてのものの中にある神々の思考を思考し、目撃することのイメージであり、そして、父の意志が人間の意志の中で目覚め、活動するようになるまで、それらを地球の存在の中で現実化していくことのイメージなのです。

上部人間のこのエーテル像は、人間の「高次の存在」のイメージです。それは現実には肉体的な存在の内部へと参入することはなく、肉体の内部に一つの「影」を創り出すにすぎません。中世においては、人間が霊的世界における「天使的な存在たち」をこのように微かに体験していたことが、未だに見出されれていました。頭部だけで身体を持たず、腕の代わりに翼を持つ存在たちです。たとえば、ラファエロ・サンティは『システィーナのマドンナ』の中で、彼らをこのように描きました。これは、人間が将来、より微細でエーテル的な存在形態を獲得したときに、どのようになっていくかを表すイメージなのです。

以下は、人間、星の宇宙、そして世界進化の間の結びつきの図表です。

〔サイクル〕〔特徴〕　〔古土星〕　　〔照応する人体の部位〕

I	生命の反射	牡羊座（Ram）	頭部 — 脳
II	活気の反射	牡牛座（Bull）	言語・音声有機体
III	個別化と人格の反射	双子座（Twins）	腕 — 対称性
IV	人間の祖先（熱への変容）	射手座（Archer）	上腕
V	原初的な感覚器官	山羊座（Goat）	肘（関節）
VI	原初的な代謝	水瓶座（Waterman）	前腕・ふくらはぎ
VII	意志（運命・霊人の萌芽）	魚座（Fishes）	手

（※文中の背景要素として、Vの背後に蟹座、VIの背後に獅子座が位置します）

ここでひとつの疑問が生じるかもしれません。「残りの5つの星座――蟹座、獅子座、乙女座、天秤座、蠍座――には一体何が起こったのだろうか？」という疑問です。

大天使や天使たちに助けられた「原初的な感覚器官」や「原初的な代謝」の創造との関連で、私たちがすでに見てきたように、これらの星座は「内なる生命」の心像です。しかし、古土星のそれらの熱の身体の内部には、未だ生命の「影」しか存在していないため、蟹座から蠍座までの5つの星座は、いわば未だ「背景」に退いています。それらは、古土星に続く次なる進化のサイクルの雲のなかに覆い隠されているのです。それらが自らを現すのは、人間が生命と活気を獲得できるようになる、もっとのちの時代のことです。私たちは、これら5つの星座が古土星の出来事の「背後」に控え、神々の最高次の動機と最も内奥の体験を明らかにしているのだと想像しなければなりません。

それにもかかわらず、私たちは、のちの古土星進化に準じた黄道十二星座の特性の記述において、多かれ少なかれ完全な図を手に入れるために、これら5つの「欠けている」星座についても詳しく説明していくつもりです。その解説は、のちの書簡で続けられます。

ゾディアック（黄道帯）の星座とは、いわば「創造の年代記」なのです。宇宙のこれらの圏域へと刻み込まれた刻印は、今なお、目に見える星座を通じて働き続けています。惑星がそれらの星座の前を通過していくとき、そこに世界の運命が現れます。

人間は、世界の意志の外的な表現であるその姿の「目撃者」となり、それによって世界の意志を理解し、把握しようと試みることができます。あるいは、もし目撃者になることを望まないのなら、その意志の臣下、すなわち「運命の力の支配下」に置かれることになります。世界の意志を理解し、把握しようと試みることは、自由へと至る道を歩み始めることを意味しているのです。

したがって、星々の運動の中にその可視的な表現を持っている「世界の意志――父なる神の意志――」を聴き取るために、私たちはますます星々の言語に耳を傾ける必要があるでしょう。そうして私たちが聴くのは、自分自身の「運命」や変えることのできない宿命などではなく、地球上における私たちの「霊的な課題」なのです。私たちは、それを能動的な思考の圏域、あるいは霊的な活動の圏域の中で知覚することができま

す。それこそが、私たちの現在の文明の時代において、私たちが「自由」を達成することのできる圏域にほかならないのです。

私たちは、惑星がゾディアックの星座を通過していくにつれて、すでに星々の書かれた文字（天の書板）を読もうと試みることができます。もちろん、現在の段階では一般的な示唆しか見出すことはできません。なぜなら、様々な惑星が星座の前を通過する際、それらは常に同じ「文字」を形成するわけではないからです。それぞれの惑星は、特定の星座の前にあるその惑星自身のキャラクターや、特別な営みに応じて、自らの性質を変容させるのです。

〔牡羊座（Ramの星座）〕

もし牡羊座の中で何かが起こるなら――すなわち、ひとつ、あるいは複数の惑星がこの星座に位置するなら――それは「新しい衝動が世界へと到来することを切望していること」を意味します。そのとき私たちは、新しいもの、人類の新しい時代、生命の新しい側面、あるいは私たちの地球上の生活に変化をもたらすような新しい発明に対して、自らの目を開くよう促されているのです。それは未だ隠されており、私たちはそれを捜し求めなければならないかもしれませんが、それは変化した状況に耳を傾け、新しい問いを立て、新しい課題を行うよう、地球上の存在たちへと送られた霊的世界からのメッセージのようなものなのです。

たとえば、ヘブライの預言者たちがキリストの到来を語った、キリスト誕生に先立つ時代にこれが起こりました。預言者エリヤがキリストの出来事の偉大なる先駆者として生きた紀元前8〜9世紀、春分点はちょうど牡羊座の中心あたりに位置していたのです。

〔牡牛座（Bullの星座）〕

牡牛座における出来事は、いわば宇宙的な「活気づけ」を呼びかけます。それらはほとんどの場合、過去の時代によって積み上げられてきたであろう「伝統や惰性の壁」を私たちが打ち破らねばならない、という警鐘なのです。静寂と人間の孤独のなかで誕生したかもしれない衝動や新しい側面が、自らを現実の形へと形づくることを求めています。それはまるで、これまでは知られていなかった新しい言語の母音や子音を、人生のなかで学び、実践していかなければならないかのようです。

もし人類、あるいは個々の人間がこの牡牛座の呼びかけに応答しない場合、宇宙の力は「カタストロフ」という手段を用いて進化を強制的に動かすことになります。たとえば、三十年戦争は土星が牡牛座に位置していたときに始まり、土星が再びその場所に戻ってきたときに終結しました。当時、そして今日においてもなお、人類には理解すべき、あるいは理解したくない、ある特定の課題が存在しており、その結果として三十年戦争が引き起こされたのです。この特別な課題については、のちに語らねばなりません。

〔双子座（Twinsの星座）〕

双子座における星の出来事は、人類が「自我の力」の発達に関連した課題や探求に目覚めるべきであることを示しています。イエスが誕生したとき（紀元前1年12月24日の真夜中）、土星は双子座に入っていました。そしてその30年後、ヨルダン川での洗礼のとき、すなわち「我は（I AM）」がイエスの身体へと参入したとき、土星は再び双子座に位置していました。当時、地球上におけるキリストの生涯を目撃すること（証人となること）こそが、人類に課せられた課題だったのです。それを成し遂げたのはほんの少数の人々だけでしたが、人間の進化の流れをさらに先へと運ぶには、彼らだけで十分でした。

ちょうど今現在（1944年8月）、土星は再び双子座の星座に入っています。人類は再び、より高いレベルにおいて「世界の我れは（世界の自我）」を認識するという課題に直面することになるでしょう。十分な数の人間が、霊的世界のこの呼びかけに耳を傾けてくれることを願うばかりです。

〔蟹座（Crabの星座）〕

これまでの記述において、私たちは蟹座が古土星進化における「感覚器官の創造」に結びついていることを見てきました。それは「愛の霊（セラフィム）」と「大天使」との相互作用、すなわち星々の言語で言えば、山羊座と蟹座の相互作用でした。したがって、蟹座における出来事は「感覚における生命」を呼びかけています。そのとき私たちは、物質の世界において自分の感覚で知覚できるものへと、自らの注意を向けるよう求められているのです。

もし私たちが、いかなる偏見も持たずにこれを行うことができるなら、宇宙の最も深い謎を知覚することができるようになるでしょう。私たちはそのとき、生命のあらゆる圏域における「死と再誕生の神秘」を知覚することができるのです。

これは、地球上におけるキリストの生涯の時代に起こりました。当時、まさに「ゴルゴダの神秘」の瞬間においても、土星は蟹座の星座に位置していました。そこでは、天の王国が人間の感覚の世界に対してさえも開かれていました。なぜなら、神が目で見ることを通じて捉えられる肉体のうちに存在し、神の言葉を耳で聴くことができたからです。すなわち、神性に対して、霊的世界においてだけでなく近づくことが可能だったのです。それによって、ゴルゴダにおける「死と復活の神秘」のなかに、全宇宙の再生を、目覚めていた一握りの人々が知覚することができました。

一方で、自らの感覚において目覚めていなかった他の人々は、ただ死と破壊しか見ることができませんでした。蟹座の呼びかけが聴き入れられないときには、このようなことが起こります。それは、火星が蟹座に位置していたときに起こった「エルサレムの破壊（紀元70年）」という出来事において、まさにそのように現実となったのです。

〔獅子座（Lionの星座）〕

獅子座における出来事は、宇宙の言語にむけて人間の「心（心臓）」を開くことを求めています。私たちは、獅子座が古土星進化における「原初的な代謝」と結びついていることを見出しました。そこでは「調和の霊（ケルビム）」が天使たちとともに、それらの熱の存在たちの内部に「熱の代謝」を確立しました。これらは、神々が世界の調和を知覚することのできる「宇宙の心臓」のようなものだったのです。

したがって、獅子座は今日でもなお、このように働きかけています。それは人間に、自らをひとつの巨大な心臓、すなわち宇宙の存在の流れがそこを通り抜けて流れ、新しい「天球の調和」を創り出すことができるような、一種の「宇宙の楽器」へと変容させるよう求めているのです。これこそが獅子座の言語です。すなわち、存在するすべての被造物は、人間の「ハートの知覚」のなかで目覚め、再誕生することを切望している、ということです。

人類の霊的な歴史における多くの偉大なる個性たちが、自らの誕生において獅子座と結びついていたことで、それぞれ独自のやり方でこの呼びかけに応答してきました。その中には、有名な詩人であるノヴァーリス、H.P.ブラヴァツキー、そしてルドルフ・シュタイナーがいます。彼らはみな、自らの誕生の時に土星が獅子座に位置していたのです。

〔乙女座（Virginの星座）〕

乙女座は、魚座（Fishes）の星座の真向かいに位置しています。あらゆる物理的物質の基礎となった「意志の霊（座天使）」による意志物質の犠牲は、魚座に結びついています。したがって、私たちが魚座の星座を見るとき、そしてそれ以上にこの乙女座を見るとき、私たちは「実体（物質）と物質性の神秘」へと至る門に立っていることになります。

これらの神秘は、今日においてもなお人間が容易に到達できるものではないため、乙女座における出来事は人間に非常に多くのことを求めます。それは、霊的世界および物理的存在の世界に対する「最高次の献身と愛」を求めるのです。そこでは、ひとつの内なる態度が発達させられねばなりません。たとえば、ゲーテが感覚の提示する世界を見つめたときに抱き、それによって彼が「原植物」を体験することを可能にしたような態度です。そこ（乙女座）において、瞑想や宗教的なサクラメント（秘跡）を発達させるための正しい態度が見出されなければなりません。こうして、物質の神秘、そして「物質変容（パンとワインがキリストの肉と血に変わる聖変化」の神秘を見出すことができるのです。運命（カルマ）の力の働きの中で起こるような物質変容の神秘は、人間が魂の隠された能力を耕し育むならば、自らを明らかにしてくれることでしょう。

「最後の晩餐」は、月が乙女座に位置していたときに執り行われました。これは、キリストの行為が星座や星々に依存していたという意味ではなく、キリストを通じて世界にもたらされた「星々に対する新しい態度」を明らかにしているのです。今日、私たちは未だこの態度からは程遠いところにいますが、それを一歩ずつ学んでいくことは可能です。

私たちの星の宇宙は、機械と化してしまいました。その運動は、機械の構造や動きと同じように、私たちが計算によって弾き出すことができるものです。しかし、キリストは地球上にいる間、この機械的な宇宙の出来事のなかに自らの行為と言葉を書き込み、それによって宇宙を若返らせました。それによりキリストは、人類の未来のために自らによって創設された「物質変容の新しい神秘」を、この乙女座における月の位置へと刻印したのです。

それ以来、月は乙女座の星座を何千回と通過してきたかもしれませんが、人類の家族の内部では何ら重要なことは行われなかったかもしれません。しかし、それが「かつて一度起こった」という事実こそが、将来の人類に対して、計算されるものではなく、人間の「道徳的想像力」による行為の結果であるような、新しい霊的参入でこの星座を満たす可能性を与えるのです。

これまでの黄道十二星座の記述において、いくつかの惑星――土星、火星、月――が言及されてきました。これらはあくまで「例」として見なされるべきものです。諸惑星の重要性やその営みについては、今後の書簡においてさらに詳しく解明していかなければなりません。現時点では、それらは私たちの宇宙という巨大な時計の上の「針」のような、単なる指標として受け止めるべきです。それらは、ゾディアックと地球との間の「仲介者」のように活動しています。黄道帯の影響の性質は、これらの星座に位置する異なる惑星に応じて変容します。土星は確かに、たとえば火星や月とはまったく異なる変容の力を持っています。しかし、これらの変容は、未だ詳細に解明されていかねばならない課題なのです。

第六書簡 - 1944年9月
「恒星ゾディアックの霊的本質（続き）」

●基本的な視点

前回まで（第三〜第五書簡）では、
古土星進化と各星座の基本的な対応がとりげられたが、
第６書簡では反対側同士の星座をペアにし、
それぞれが三位一体（父・子・聖霊）の力や霊的ヒエラルキーと
どのように結びついているかが明らかにされる。

ゾディアック全体は、
一つの巨大な宇宙的人間として体験されるが、
これは地球上の人間の形態の元型であり、人体の12部位とも対応する。

人類は長きにわたりこの宇宙的原型の「影」として存在し、
現在は物質化により失脚した状態にあるが、
将来的には、天使的形態としてのこの原型を、
再び霊的に認識していく必要がある。

●要点

○主要な星座の霊的意味

・乙女座（Virgo）

魚座の対向。
父なる力（存在を与える力）の顕現圏域。
魚座から7星座を数えると到達し、
宇宙の父の意志が物質世界へ下降・実体化する領域。

・天秤座（Libra）

牡羊座の対向。
子なる力（キリストの力）の顕現。生命を吹き込む力。

事例：ゴルゴダの神秘（キリストの犠牲）のとき月が天秤座に位置。
ゲーテ（土星 in 天秤座）、ラファエロ（土星＋月 in 天秤座）
に見られるエーテル生命力と宇宙的愛。

・蠍座（Scorpio）＝鷲座

牡牛座の対向。
聖霊の力の顕現。
創造的な言葉（ロゴス）、多様な言語・霊的呼びかけ。

事例：
1603-1604年の大合（土星・木星・火星 in 蠍座）＋新星出現。
火星の衰退に対するガウタマ・ブッダの魂の派遣
（クリスチャン・ローゼンクロイツによる）と、
愛・慈悲の衝動による人類救済のインスピレーション。

・射手座（Sagittarius）

双子座の対向。
個々の人間と霊的世界の結びつき、高次の自我（ゲニウス）の発現。
道徳的態度が鍵。

事例：
ワーグナー（土星 in 射手座）。
『パルチファル』に象徴される、
深淵を通り抜ける人間の努力と霊的頂点への探求。

・山羊座（Capricorn）

蟹座の対向。
超感覚的・霊的世界への認識の門。神性の知覚をめぐる闘い。

事例：
聖フランチェスコ・ラファエロの死（土星 in 山羊座）、
カント（火星 in 山羊座）、ニーチェ（破綻）と
モーツァルト（音楽に超感覚的輝き）。
イエスの誕生とヨルダン川洗礼（太陽 in 山羊座）。

・水瓶座（Aquarius）

獅子座の対向。
天球の調和（球体のハーモニー）、
古い星の智恵の終わりと新しいキリスト教化された星の知識の始まり。

事例：
ケプラー、ピコ・デラ・ミランドラ、ルドルフ2世、ヴァレンシュタイン。
古い占星術の呪縛から脱し、
水瓶座の時代に向けた「新しい星の智恵」への道。

・魚座（Pisces）

乙女座の対向。
父なる意志のベール、カルマの力の場。

事例：
紀元前3101年「カリ・ユガ（暗黒時代）」開始（土星 in 魚座）、
1910年シュタイナーの「キリストのエーテル的再臨」啓示（土星 in 魚座）。
1899年にカリ・ユガ終了後も続く霊的闇を、
人間の心の努力で克服する必要性。

●本文

前回の書簡では、乙女座（Virgin）の星座の記述のところで筆を止めねばなりませんでした。私たちは、乙女座が真向かいにある魚座（Fishes）の星座との関係性にあり、また「物質の神秘」とも結びついていることを見出しました。それは、かつても、そして今も「存在」を与え続けている宇宙の「父なる力」の現れなのです。

実際に、もし私たちが、その犠牲を通じてあらゆる物理的存在の土台を与えたそれらの力のベール（覆い）として魚座を見つめ、そこから出発するならば、真向かいの乙女座の位に達するまでに「7つの星座」を数えることができます。これら7つの星座は、ある霊的な存在の「天上の顔」のようなものです。魚座において最高次の顕現を見せるその霊的存在を、私たちは「父の意志」と呼ぶことができ、それは乙女座へ向かって、実体化された存在の多様な形態の中に自らを現すことのできる圏域へと下降――あるいは上昇――していくのです。

したがって、私たちは乙女座の中に、物理的存在における「父なる力」の顕現の圏域を見出すことができるのです。

〔天秤座（Scalesの星座）〕

天秤座の真向かいには、牡羊座（Ram）の星座があります。古土星進化の記述の過程において、私たちは「智恵の霊（主天使）」の活動が、いわば牡羊座に位置していることを見出しました。あるいは、彼らの活動はこの領域から始まると言うべきでしょう。これらの存在から「生命の力」が放たれましたが、当時は未だその生命によって（土星の）存在に浸透することはできませんでした。

魚座と乙女座の場合と全く同様に、私たちは今度は牡羊座から出発して7つの星座を進むことができます。そうすると天秤座へと至り、これら7つの星座の中に、私たちが「生命の与え手」と呼ぶことのできる、ある天上の存在――あるいは複数の存在――の像を知覚することができます。彼らは、のちの書簡で語ることになる、もっとあとの進化のサイクルにおいて実際に生命を与えた存在たちです。

私たちが宇宙における生命の根源的な源泉、あるいは衝動を牡羊座の背後に見出すことができるように、ここ天秤座を通じて私たちは「物質の内部における生命力の顕現」がそこから放たれる圏域を体験することができます。私たちが乙女座の中に「父なる力」の顕現を見出したように、私たちは天秤座の中に「子なる力」の顕現の領域を見出すことができるのです。父なる力は存在を与えましたが、子はそれに生命を吹き込みます。

私たちは、これが「ゴルゴダの神秘」の中に極めて明瞭に描き出されているのを見出すことができます。キリストにおいて、子は肉体のうちに存在していました。ゴルゴダの丘におけるキリストの犠牲を通じて、当時宇宙的な死の淵にあった地球に、永遠の生命が授けられたのです。宇宙的な生命力の顕現が地球上で起こったその同じ瞬間、月は天秤座の星座に位置していました（聖金曜日、紀元33年4月3日）。

私たちは、天秤座における多くの星の出来事の中に、さらなる実例を見出すことができます。ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテが誕生したとき（1749年8月28日）、土星は天秤座にありました。そして私たちは、彼が生命の力、すなわち私たちが「エーテル力」と呼ぶものの現代的な秘儀参入者であったことを知っています。だからこそ、彼はこう言うことができたのです。

「自然は、多くの生命を持つために死を発明した」

これは、彼が多くの人々が想像している以上に、優れたキリスト者であったことを明らかにしています。

有名な画家であるラファエロ・サンティは、土星と月が天秤座でコンジャンクション（合）にあったときに生まれました（1483年3月26日）。生命を授け、癒やしをもたらす力が、彼の絵画の中に顕にされています。子の持つ宇宙的な生命力が、まるで永遠の太陽のように彼の存在全体を通じて輝きを放っており、これらの生命力は、その同じ瞬間に「宇宙的な愛」へと変わるのです。

〔蠍座（Scorpionの星座）〕

蠍座は、ゾディアックの円環において牡牛座（Bull）の星座の真向かいに位置しています。私たちは、この星座がかつては「鷲（Eagle）」の姿として知覚されていたことを思い出さねばなりません。ここでも以前と同じ方法で進めることができます。牡牛座の背後には、「運動の霊（力天使）」の活動の座があります。彼らから「魂の力」が放たれました。それらは宇宙的な「概念と言葉を授ける」力だったのです。ここでもまた、ゾディアックの7つの星座を進むと、私たちは鷲座ー蠍座の星座に至り、そこで、鷲座ー蠍座において物質の世界の顕現へと下降していったヒエラルキーの存在たちの容貌を知覚することになります。

そのとき私たちは、この星座の中に「聖霊」の顕現を見出すことになります。聖霊は最初のペンテコステ（聖霊降臨）の出来事において使徒たちの上に降臨し、彼らに「世界のすべての言語を話し、理解する力」を授けました。それは、宇宙における多様な異なる存在形態へと流れ出していった、世界の「創造的な言葉（ロゴス）」の力にほかならないのです。

蠍座における星の出来事は、常に、個々の人間に届こうと努めている「霊的な呼びかけ」に結びついており、私たち自身のカルマを通じて能力を与えられている「ある特定の課題」を遂行することを私たちに要求します。そのような多様な「霊的な呼びかけ」、あるいは「創造的な言葉」の数々から、人類の進化と霊的発達の壮大な絵図が構成されているのです。これこそが、聖霊の黙示なのです。

私たちは、そのような出来事を17世紀の始まりに見出すことができます。当時を生きていた多くの魂たちは、人類の内部における霊的な性質の根本的な変化を予期していました。そして、星の世界から読み取った出来事に自らの期待や希望を置いていた人々も多く存在していました。なぜなら1603〜1604年にかけて、蠍座において「グレート・コンジャンクション（大合）」が起こったからです。土星と木星がこの星座で重なり合い、1604年の後半には火星もそこに位置していました。この出来事と同時に、新しい星——新星（ノヴァ）——が空に現れ、数ヶ月にわたって目に見える形で輝き続けたのです。

（霊的な背景を）知る人々は、人類にとっての偉大なる聖霊降臨のようなものを期待していましたが、目に見える形では何も起こりませんでした。しかし、人類の霊的生命の内部では巨大な出来事が起こっており、ルドルフ・シュタイナーはこれらについて語っていました。

1603年よりしばらく前の時代から、惑星である火星において急速な衰退が始まっていました。15世紀以降、この衰退は、人間の魂が火星の圏域での出生前の体験から地球の肉体へのインカーネーション（転生）へと携えて降下してきた衝動を通じて、人間の「知識の発達」に反映され始めていました。それによって、人間の知識への探求や生き方が唯物論（マテリアリズム）へと深く没入しすぎてしまう危険性が生じており、地球上の霊的文化の担い手たちは、この惑星においてますます「異邦人（ストレンジャー）」のようになっていきました。

しかし、この鷲座ー蠍座の星座においてグレート・コンジャンクションが起こった16世紀末から17世紀の始まりにかけて、聖霊は人類の家族の様々なメンバーに、最終的には一体となって流れ込み、この危険が回避される原因となるような、そして新しい霊的な展望の可能性を与えるようなインスピレーションを授けました。

人類の最も偉大な霊的指導者のひとりであるクリスチャン・ローゼンクロイツは、この危険を感知していました。彼にはひとつの偉大な友がいました。霊的世界に存在し、もはや肉体には転生していなかったゴータマ・ブッダの魂です。なぜなら、ブッダの境地に達した魂は、もはや肉体へと降下することはないからです。クリスチャン・ローゼンクロイツは、あの火星における衰退を回復するために、自らの友であるゴータマ・ブッダを「火星」へと送り出しました。

私たちは、ゴータマ・ブッダが「愛と慈悲の教師」であったことを知っています。衰退しつつあった火星の性質は、攻撃的で冷酷なものでした。したがって、その墜落を癒やすために、愛と慈悲の衝動が火星へと移植されたのです。このようにして、人類の家族の最高次のメンバーを通じて働く聖霊は、未来における肯定的な発達への道を切り開きました。このことが、1603〜1604年の鷲座ー蠍座における出来事に示されており、私たちは、この星座における出来事との関連において、常に同様の出来事を見出すことができるのです。

〔射手座（Archerの星座）〕

鷲座ー蠍座の力が、世界の霊（精神）の衝動を達成するために、様々な方向から人間のグループを用いるのに対して、私たちは射手座における出来事の中に、「個々の人間と霊的世界との結びつき」が明かされているのを発見します。単に天才的なキャラクターによるものと思われるような人間の業績は、そのほとんどが射手座に関連しているのです。

射手座の真向かいには、双子座（Twins）の星座があります。そこから私たちは、「形態の霊（能天使）」と「人格の霊（権天使）」が人類の祖先に対して永劫にわたり働きかけた結果として、個別化の衝動がやってくるのを見ました。私たちは、人格の霊たちが古土星の熱の存在たちを通じて、自らの人間としての段階を体験するのを見ました。同様に、私たちは今日、射手座における出来事の中に、個々の人間の「ゲニウス（守護霊）」が自らを体験し、発達させようとする方法が示されているのを見出すことができます。そのゲニウス——すなわち「高次の自我」——が、自らを表現することに失敗するのか、あるいは肯定的な発達への道を見出すのかは、ひとえに人間の「道徳的な態度」にかかっているのです。今日、天使たちを助けることも、あるいは彼らを墜落させることも、人間の「自由」の圏域の中にあるのです。

リヒャルト・ワーグナーが誕生したとき（1813年5月22日）、土星は射手座に位置していました。彼の出生図を研究すると、射手座における土星の位置を通じて、彼が人生の多くの段階を経て、自らの内奥の衝動を適切に表現するために生涯にわたって繰り広げた闘いが表現されているのを見出せます。彼にとって、古い神話や音楽の世界は、高次の自我を地球の存在へと適切に参入させるための媒介だったのです。

彼の最後の詩であり作曲となった『パルチファル』において、彼は人間が暗闇と疑念を通り抜け、聖杯の杯の中にある生命の源泉へと向かって努力していくというイマジネーションを創り出しました。したがって、射手座の星座は、人生の谷や深淵を通り抜けて、霊の高みへと向かっていく「人間の努力」の宇宙的なイメージとなるのです。

〔山羊座（Goatの星座）〕

山羊座における出来事は、霊的世界および神性の「認識」へとさらに導くような、人間の生命における課題や探求を示しています。それらは、人類のなか、そして自然のなかにいる神の「知覚」を要求するのです。

真向かいには蟹座（Crab）の星座があります。これまでの記述から、私たちは山羊座と蟹座の双方が、感覚器官の原初の創造に結びついていることを知っています。蟹座は、どちらかと言えば被造物の生命の内部における感覚器官の発達の歴史で満たされています。それは感覚の使用を発達させるよう呼びかけますが、一方で山羊座の中には、物理的な感覚を超えたもの、すなわち、かつて古土星において「愛の霊（セラフィム）」が持っていた気高き知覚に由来するものが刻み込まれています。彼らは自らの体験を犠牲にし、それによって人類の土星の祖先の内部にそのイメージが創り出されるようにしたのです。それこそが物理的感覚の起源でした。

したがって、私たちは山羊座の中に「超感覚的なもの（霊的なもの）」への門を持っています。この星座との結びつきが生じるとき、私たちはこの門を通り抜けることもできれば、あるいは後ろに留まることもできます。私たちの時代において、それを通り抜けることは、私たちの自由を勝ち取ることを意味します。ゆえに、私たちは山羊座の中に、霊的世界の認識に賛成するか、あるいは反対するかの「闘い」を見出すことができるのです。

この理由から、私たちは山羊座の中に、特に死のホロスコープ（臨終の星位）との関連において、最も強い人間の矛盾（対比）を目にすることになります。アッシジの聖フランチェスコとラファエロ・サンティが亡くなったとき（1226年10月4日と1520年4月6日）、土星は山羊座の星座にありました。確かにこの二人は、その伝記が証明しているように、神性のより高次の「知覚」を持っていた個性です。しかし、哲学者カントが亡くなったとき（1804年2月12日）、そこには火星が位置していました。地球上の生涯において、彼は超感覚的な知覚の可能性を否定したのです。もっとも、死後には異なる体験をしたかもしれませんが。

ニーチェとモーツァルトは、ともに自らの誕生の時に土星が山羊座にありました。不幸にも、ニーチェはより高い世界への知識への道を見出すことができず、そのため破綻して精神の病を患ってしまいました。
モーツァルトにおいては、その美しい音楽の世界の中に、超感覚的なものが存在していました。

お分かりのように、私たちはこの星座との関連において、霊的存在たちが活動し、そこから物理的世界へと浸透してくるような「高次の世界の認識」に賛成するか、あるいは反対するかという、人類における闘いを常に見出すことができます。根本的に、2つの出来事がこれを明らかにしています。

第1の出来事は、太陽が山羊座にあった時の「イエスの誕生」です。そのとき羊飼いたちは、自らに生まれつき備わっていた素朴な霊視力を通じて、この誕生の霊的な意味を知覚することができました。

第2の出来事は、その30年後、太陽が山羊座にあり、ヨルダン川での洗礼が行われ、キリストがイエスの身体へと参入したときです。そのとき、もう一人の個性である洗礼者ヨハネが、感覚の世界へと参入したその存在を霊視によって見つめることができました。だからこそ、彼はこう言うことができたのです。

「見よ、神の小羊を」

（「神の小羊」とは、霊的世界のヒエラルキーの秩序におけるキリストのことです。）

〔水瓶座（Watermanの星座）〕

これまでの書簡で述べてきた、あの原初的な「熱の代謝」の土台は、水瓶座と、その真向かいにある獅子座（Lion）の星座に深く結びついています。水瓶座は、特に「調和の霊（ケルビム）」の活動がそこから放たれた圏域です。彼らは、霊的ヒエラルキー、そしてのちには天体の永遠の秩序のマスターたちです。この秩序の内なる本質こそが「天球の調和（ハーモニー）」なのです。それは古の時代において、巨大な宇宙的・音楽的コンポジションとして知覚されていました。

有名な天文学者であるケプラーは、その著書『世界の調和（Harmonices mundi）』の中でこれについて語っています。そして、彼が胚発生の期間（1571年12月27日誕生）において、また臨終の瞬間（1630年11月15日）においても、木星が水瓶座の星座に位置していたのを見るのは驚くべきことです。それにより私たちは、水瓶座における出来事が、常に古い「普遍的な星の智恵」の最後の痕跡を明らかにすると同時に、星の世界と地球および人類との結びつきに関する、新しく「キリスト教化された知識」の最初の始まりをも明らかにしていることを見出すことができるのです。

私たちは、近世の人々の生涯の中に、この事実の多くの実例を見出すことができます。たとえば、中世における傑出した個性のひとり、ピコ・デラ・ミランドラ（1463年2月24日誕生）は、その出生図においても、また臨終の瞬間（1494年11月17日）においても、土星を含むいくつかの惑星が水瓶座にありました。彼は非常に若くして亡くなりましたが、当時の科学の熱心な学者でした。長い旅の中で、彼はイタリアやフランスのすべての重要な大学を訪れました。彼はキリスト教哲学を深く研究しましたが、ある一つの思想が彼の内奥の努力を明らかにしています。彼は、占星術に対して非常に強い反対者であったにもかかわらず、「天体の秘密の知識ほど、キリストの神性をこれほど確実に確信させてくれる科学はない」と書いたのです。彼は、私たちの宇宙の霊的本質の最高次の秘密が星々の内部に隠されていることを知っていましたが、まさにその理由から、当時非常に広く普及していた「星の智恵が利己的な目的のために使用されること」に反対したのです。これらの思考の背後には、古い星の智恵が終わりを告げ、いわゆる占星術の実践（悪習）の中で死に絶えてしまったため、今や私たちは星の書板の「再誕生」へと向かって努力し、前を向かなければならないという事実があります。

この事実は、ハプスブルク家の皇帝ルドルフ2世と、ヴァレンシュタインの運命の中にも別の形で表現されています。二人とも水瓶座に強く結びついていました。ルドルフ2世（1552年7月18日誕生、1612年1月20日崩御）は、出生図においても臨終の瞬間においても、土星が水瓶座にありました。ヴァレンシュタイン（1583年9月14日誕生、1634年2月25日死去）は、出生前の発達期間中に土星と木星が水瓶座にありました。そして臨終の瞬間には、太陽とすべての内惑星が水瓶座に参入していました。

この二人の個性は、古い、退廃した占星術の呪縛の下にありました。彼らは、古い星の智恵はすでに死んでおり、人間と星々との間の「新しい結びつき」が見出されなければならないという事実を無視したのです。この事実が、彼らの最終的な悲劇的失脚に強く影響しました。ルドルフ2世は皇帝としての権力を完全

に剥奪され、極度のメランコリーの中で亡くなりました。ヴァレンシュタインは、私たちが知っているように、暗殺されたのです。

私たちは多くの歴史的実例を見出すことができますが、それらはすべて、現代の人類にとって「新しい星の智恵」へと至る道を見出すことがいかに困難であるかを示しているでしょう。なぜなら、この真に霊的な「水瓶座の知識」は、どちらかと言えば、春分点が水瓶座に位置するようになる時代（水瓶座の時代）に属するものだからです。私たちは今日、未だ「魚座の時代」の中にいます。すなわち、春分点は今なお魚座の星座の内部にあるのです。しかしこのことは、人間の文化の隠された背景において、これらの未来の能力が私たちの時代にすでに準備されつつある、という事実を排除するものではありません。

〔魚座（Fishesの星座）〕

魚座の星座に至ることで、私たちはすでに記述した宇宙の圏域へと再び入ることになります。魚座とは、古土星進化の内部、およびそれ以降における「意志の霊（座天使）」の活動を覆い隠しているベール（覆い）にほかなりません。この星座を通じて、「父の意志」が自らを表すのです。

時としてあまりにも理解しがたく、精神科学（人智学）においては私たちが「カルマの力」と呼ぶことに慣れている運命の織りなす働きは、この星座の背後にその霊的な「場所」を持っています。ほとんどの場合、私たちは一人の人間のたった一つの生涯における出来事のなかや、あるいは人類史の限られた時代の中だけで、これらの力がどのように働き、織りなされているかを判断することはできません。それらが自らの神聖な計画を明らかにするのは、私たちが一人の人間の「輪廻転生」や、人類の発達の「長い時代」を見渡すことができるようになったときだけなのです。魚座からは、霊的世界による人類の、あの長きにわたる、ほとんど時間を超越したような「導き」が活動しているのです。

たとえば、私たちは、いわゆる「暗黒時代」が始まった瞬間（紀元前3101年）、土星が魚座の星座に位置していたことを見出します。東洋の智恵（インド哲学）において、この時代は「カリ・ユガ」と呼ばれています。その始まりは人類史における一つの転換点であり、霊的世界の古い生まれつきの体験が終わりを告げ、人類が物理的な感覚をより完全に使い始めた時期にあたります。これによって人類は、霊的世界の存在の認識からゆっくりと切り離されていきました。

ある視点から見れば、これは多くの古い神話や伝説のなかで表現されているような非常に悲しい出来事でしたが、それでもなお、人類の霊的発達にとっては一つの「不可欠なこと」だったのです。リアルな霊的世界の、自然で生まれつきの体験から切り離されることによってのみ、人類は「独立」し、「自由」になることができたからです。それは、人類を新しい能力の開花へと、そして自由で自己意識的な活動の圏域のなかに生まれる「霊的世界の新しい体験」へと導く、運命の過酷で険しい石の道なのです。暗黒時代（カリ・ユガ）の前には、霊的世界の体験は神々からの「贈り物」でしたが、今やそれは、人間の努力の苦しみのなかで産み落とされねばならないのです。

魚座には、もう一つの出来事も結びついています。1910年の始まり、土星は魚座にありました。この瞬間、シュタイナー博士は、私たちの時代における「キリストの再臨」の秘密を明らかにしました。（彼はこの出来事に関する最初の講義を、1910年1月12日にストックホルムで行いました。）彼は、このキリストの新しい黙示が、再び肉体（物理的な身体）のうちに起こることはあり得ず、超感覚的な形態――すなわち「エーテル体」のうちに起こることを示しました。そして、1935年以降、多くの人々が自らのガイドであり慰め主として、この形態のなかにキリストを知覚できるようになるだろう、と明かしたのです。

暗黒時代（カリ・ユガ）は、5000年間続いたのち、西暦1899年に終わりを迎えていました。その始まりは、魚座に位置する土星によって告げられていました。新しい時代が始まっていたにもかかわらず、闇の勢力は未だ退く気配を見せないように思われましたが、それでもなお、闇から抜け出して霊的な光へと至る門は、土星が魚座にあった1909〜1910年の日々のなかに示されていたのです。現代に蔓延する暗闇は、外的な手段によって克服することはできません。ただ、この新しい黙示のなかにキリストを認識しようとする「人間の心的な努力」によってのみ克服され得るのです。

私たちは今、ゾディアックの12の星座の記述を完了しました。そして、宇宙進化の背景として、それらが地球と人類の存在の中にどのように織り込まれているかを見ることができます。私たちは、星の宇宙、特にゾディアックと、その内部における諸惑星の運動を、宇宙におけるすべての存在に先立つ「ひとつの巨大な存在（生命体）」として体験することができます。それは、宇宙における人類の「代表者（原型）」のようなものであり、人類をその運命の道の上へと導き、助言を与えているのです。

地球上の人間の形態は、まさにこの宇宙の形態の「写し」にすぎません。古の時代から知られているように、人体の12の部位はゾディアックの12の星座に関連しており、それはこれまでの記述の中でも部分的に示されてきました。たとえば、以下の通りです。

・頭部　……　牡羊座（Ram）に由来する
・喉頭　……　牡牛座（Bull）に由来する
・腕　　……　双子座（Twins）に由来する
・胸（胸郭）　……　蟹座（Crab）に由来する
・胸の内部（心臓など）　……　獅子座（Lion）に由来する
・横隔膜の上方の内部（内臓）　……　乙女座（Virgin）に由来する
・横隔膜の下方の内部（内臓）　……　天秤座（Scales）に由来する
・臀部（腰のまわり）　……　蠍座（Scorpion）に由来する
・生殖器官　……　射手座（Archer）に由来する
・ふくらはぎと足　……　魚座（Fishes）に由来する

しかし、地球上の人間の形態は、その宇宙的な起源から失脚してしまいました。長きにわたる時代の過程において、地球の力の影響を受けすぎてしまったのです。

したがって、人類に先立ち、その発達を助け導いているあの天上の「存在（宇宙的人類）」について語るなら、私たちはそれを現在の人間とは異なる形態として想像しなければなりません。それは、前回の書簡の「古土星進化」の記述の結びにおいて描写した、あの「天使のような存在」の形態として、より強く想像されるべきなのです。

それは、腕の代わりに力強い翼を持ち、肉体を持たないながらも、自らの周囲において生命を授ける活動として有機的な機能を果たすことができる存在です。そのとき、宇宙における諸惑星の持つリズムや運動は、この存在の能動的な「顕現」のようになるのです。

私たちは、この天上の言語が発する「別の響き」を聴き取ることができるようになるために、この人類の宇宙的代表者（原型）について、今後さらに多くを語っていかなければなりません。

第七書簡 - 1944年10月
「人間と宇宙の結びつき」

●基本的な視点

私たちは星々を「支配する力」としてではなく、
人類を導き教育する宇宙的知性（霊的存在）の現れとして理解する必要がある。

火星と木星のような惑星の動きは、
人類が自らの課題（特に社会的な調和や自由）に対して
どう応答しているかを映し出している。

古い宿命論的な占星術を超え、星の出来事を「ともに生きる」ことで、
人類はより意識的に進化の道を歩むことができる。

第一次・第二次世界大戦は、
人類が宇宙的指導者の呼びかけに十分に応答しなかった結果として起きた
「教育的な試練」として位置づけられる。

この書簡は、理論から実践へと移行する重要な転換点であり、
星の宇宙を生き生きとした霊的存在として体験するための橋渡となっている。

●要点

1）この書簡の目的

これまでの書簡はゾディアックの根本的な知識を築くものだったが、
この第七書簡では「星の出来事をどう理解し、どうともに生きるか」
という実践的な手引きが与えられる。
古い占星術が陥りがちな宿命論を超え、
星々の背後にある霊的存在との新しい関係性を築くことが目指される。

2）人類の宇宙的原型のイメージ

地球上の人間は物質の身体に制限され「堕落」した状態にあるが、
その前を行く宇宙的原型は、星の宇宙そのものを身体とする天使のような存在。
この存在の各部分を、恒星ゾディアックの星座に対応させて想像的に描く。

〔星座〕
宇宙的原型の対応する部分
内容・働き

〔牡羊座〕
頭部（開かれた器）
宇宙の智恵を受け入れる。

頭蓋骨で閉ざされた人間の頭とは対照的に開かれ、智恵の霊の力が流れ込む

〔牡牛座〕
喉頭
創造的な宇宙の言葉（ロゴス）。
人間の言語の起源となる普遍的な創造の言語

〔双子座〕
翼（保護の外套）
個々の人間を全人類と霊的に結びつける。保護と高揚をもたらす

〔射手座〕
翼の羽毛が届く領域
個々の人間に触れ、課題を思い出させ、慰めを与える
（「私はぶどうの木、あなたがたはその枝である」のイメージ）

〔山羊座〕
無数の敏感な「目」
各人間の思考・感情・意志を通じて世界を多角的に知覚する器官

〔水瓶座〕
前腕・熱の流れ
癒やし・慈悲・愛の力を注ぐ。
同時に厳格な「裁判官」として憎しみや破壊に対抗する

〔魚座〕
手
運命と意志を導く。
教育者として人類を正しい道へ導き、
必要に応じて大惨事を通じて呼び戻す

蟹座・獅子座・乙女座・天秤座・蠍座については、
次回以降で「内なる生活」として扱うと予告されている。）

こうした宇宙的原型は、
人類の「年長の指導者・教師」のような存在として描かれ、
困窮する人間に助けと導きを与えるものとされる。

3）実際の星の出来事とのつながり（火星と木星のリズム）

書簡の後半では、約2年ごとに繰り返され
火星と木星のコンジャンクション（合）・オポジション（衝）が
具体例として挙げられ、星の出来事が上記の宇宙的イメージを
どのように現実の歴史に刻んでいるかが示される。

木星＝宇宙の智恵の代表
火星＝宇宙の力の代表

特に1914年～1940年頃の一連の出来事
（第一次・第二次世界大戦期）を詳細に分析し、
以下のことが明らかにされている。

・山羊座・水瓶座・魚座における火星・木星の動き
　→ 人類の感情世界への働きかけ（憎しみ vs 癒やし・愛）。
　結果として「宇宙の裁判（審判）」としての大戦が起こった。

・牡羊座・牡牛座・双子座における動き（1916～1918年）
　→ シュタイナーが「社会有機体三分節」の理念を
　示唆した時期と完全に一致している。
　この時期に宇宙的智恵（頭部）、創造的な言葉（喉頭）、
　個々へのインスピレーション（翼）が地球に流れ込んだ。

これにより、星の出来事は単なる機械的な現象ではなく、
宇宙的原型が人類の状況を「知覚」し、
「行動」している表現であることが示される。

●本文

　この書簡の読者のみなさまは、カレンダーに示されている様々な星位のデータをどのように理解し、役立てればよいのだろうかと、時折疑問に思われることがあるかもしれません。［ここでは1944年のカレンダーの出来事は含まれていませんが、これらの言葉は本書簡が執筆された理由に深く関わっています。］それぞれの月の間に起こる主要な出来事のいくつかが選ばれていますが、それらのすべてを網羅できるほどテーマを突き詰めて記述することは不可能です。そのため、「この出来事や、2つ以上の惑星の間に生じているあのアスペクトは、一体何を意味し、何を示しているのだろうか？」という質問がよく寄せられます。

　読者のみなさまがカレンダーとそのメッセージに対して、より親密に寄り添って生きることができるよう、いくつかの手引きを提供することこそが、この書簡における私の意図です。

　もちろん、これまでの書簡の目的は、ゾディアック（黄道帯）の星座に関する根本的な知識を提供することにありました。しかし、私たちは星の宇宙について何かを「知る」だけでなく、それと「ともに生きる方法」をも学ばなければなりません。そして、私たちが地球上で人間同士のなかで生きているのと同じように、宇宙における出来事とともに生きる可能性は、確かに存在しているのです。

〔人間と宇宙の結びつき〕

　古の時代においては、人類はいまだ本当に星々とともに生きることができていました。私たちは星々の背後に、地球上の生命を導く霊的な存在たちを体験していたのです。しかし、この美しい智恵のすべては、現代においては一種の「宿命論」へと行き着き、終わりを迎えてしまいました。私たちはそれらの霊的存在に対する知覚を失ってしまい、今日「占星術」として残されているもののすべては、地球上の人間の運命を支

配する宇宙の未知なる力に身を晒されている、という体験にすぎません。これらの力の性質を真の知識によって見通すことがもはやできないため、占星術の研究は宿命論にしか至り得ないのです。

私たちが星の宇宙との関係性について、新しい概念を創り出さなければならないということは、これまでもしばしば語られてきました。しかし、私たちがこれを行うことができるのは、星々と結びついている霊的存在たちへの「新しい知覚」に至る道を見出したときだけなのです。

これまでの書簡においては、ゾディアック（黄道帯）の12の星座の中に、人間という形態の原型の巨大な輪郭を本当に見出すことができるのだ、ということを示そうと試みてきました。しかし、この原型の形態は単なるイメージ以上のものです。このイメージと長きにわたってともに生きる人は、それが目に見える形態、あるいは私たちの極めて近くにいる「ある霊的な存在の身体」であるとさえ言えることに気づくでしょう。なぜなら、それは人間の形態の特徴を宿しているからです。それは私たちの前を行き、私たちの傍らを歩む霊的な存在であり、それを真に求めるすべての人々にとって、慰めとなる助けを与えることができる存在です。それは、年長の指導者や教師の、導きと癒やしをもたらす手のように感じられるものです。それこそが、私たちが自らの心を高めて向けることのできる「人類の偉大なる代表者」であり、私たちが困窮しているときには、決して私たちへの助けを欠かすことがない存在なのです。

地球上の人間は、肉体の内部で生きなければなりません。肉体は、感覚の世界の中における存在の表現であり手段ですが、同時にそれは「制限」でもあり、時としてそれは「障害」として体験されることさえあります。この制限と障害こそが、「堕落」の物語を明らかに示しています。私たちの肉体は、物質の束縛のなかに堕ちてしまいました。

しかし、私たちの前を行くあの天上の存在の「身体」は、まったく異なっています。その身体は、永遠の深淵をたたえた星の宇宙そのものなのです。地球上の人間の身体が制限されているのに対して、その存在の身体は、決して終わることのない拡大の能力と、数えきれないほどの変容の可能性を秘めています。

私たちは、この存在の形態を「スケッチ」しようと試みてきました。それは、力強い翼を持った「天使のような存在」です。しかしそうだとしても、私たちはこの形態の内なる動的な力が、人類の物理的な形態におけるそれとは異なる強度を持っているのだ、と想像しなければなりません。

私たちは人間の「頭部」を見つめます。それは、私たちの物理的な外見に個別の容貌を与えています。それは、感覚の世界の中における私たちの日常における意識的な存在の根源です。しかし、それは頭蓋骨という力強い兜によって閉ざされています。これこそが頭部の制限であり、非常に多くの場合、この閉鎖性は私たちが地球上で直面する事実を普遍的に理解し、見通すための強力な障壁ともなります。

もし私たちが、あの天上の存在の「頭部」である「牡羊座（Ram）」の星座を見つめ、その真の像を得たいと望むなら、私たちは異なる概念を形成しなければなりません。地球上の頭部が頭蓋骨によって閉じられているのとは全く対照的に、この天上の存在の「頭部」は、まるで頭蓋骨が上下逆さまにされ、一種の「器（聖杯）」を形成しているかのように開かれているのです。そして、この器のなかへと、宇宙の智恵、すなわち私たちが牡羊座の星座の中にその可視的な表現を見出した「智恵の霊（主天使）」の宇宙的な智恵が流れ込みます。それこそが、それ以来、地球の既存の形態や対象の中へと流れ込んできた智恵にほかならないのです。骨格の構造や、植物の有機体が持つ比類なき精巧さを見つめるときに私たちが体験する、あの宇宙の独創的な智恵がそれです。

牡羊の角（つの）は宇宙空間へと伸びており、この宇宙の智恵を螺旋の形態を通じて地上へと引き下ろします。そして、牡羊の輝く白い羊毛は、あらゆるものに浸透し生命を与えるこの智恵の、広大な海のイメージなのです。このようにして、私たちは人類の宇宙的な先駆者の「頭部」を想像することを学ばなければなりません。（のちの記述において、私たちが牡羊座における星の出来事との関連の中で、どのようにしてこのイメージを見出すことができるのかが示されるでしょう。）

人間の身体において、私たちは次に「喉頭」を見出します。それは私たちが音声と言語を生み出すための道具ですが、この器官もまた、特に私たちの時代においては非常に制限されています。私たちは対象について語ることはできますが、言葉を形成するにあたっては、私たちの周囲にある対象の性質を「反射」することしかできません。人間の言語は多くの言語へと分割されており、この分割と疎遠化のプロセスは絶えず増加してきました。私たちの時代においては、同じ言語を話す者同士でさえ、お互いの言葉の意味を理解することが困難なほどです。

もし私たちが、あの天上の存在の「喉頭」である「牡牛座（Bull）」の星座を見つめるなら、その言葉は創造的であり、普遍的であることを体験します。牡牛座は、宇宙の唯一の原型的な創造の言語を創設した「運動の霊（力天使）」の外的な表現です。その言語は、星々の運動の母音と子音の中に自らの表現を持っており、人間の諸言語はそこから自らの起源を引き出しました。アルファベット（文字）とは、ゾディアックと諸惑星の地球における代表なのです。星の出来事の言語という組成における宇宙の「アルファベット」だけが、自然界の諸王国における出来事の内部において、今なお創造的であり、一様なのです。私たちが牡牛座の星座を見るとき、あの宇宙的存在の「喉頭」をこのように想像すべきです。それは未だに「魔法の器官」なのです。

次に、私たちは人間の形態の中に「腕」を見出します。これは、私たちの天上の指導者の「双子座（Twins）」の星座に関連しています。人間の腕は、確かに私たちが世界の中で能動的に関わっていくための力強い器官ですが、それと同時に、私たちの腕を通じて世界へと流れ込む活動は、いかに頻繁に私たちを互いに分割し、疎遠にさせていることでしょう。人間は腕を使って戦い、互いを殺害し合うことさえあります。私たちの腕という、途方もない能力を内包したこの器官は、非常に多くの場合、破壊の道具となってしまうのです。

私たちが近づこうと望んでいるあの天上の存在の腕（双子座）は、それとは異なります。それらは力強い「翼」のようなものであり、天上の先駆者の助けと導きを本当に求める人々の周囲にある、保護をもたらす銀色の衣服として、人間の内なる感覚によって体験されるものなのです。これらの翼の「羽毛」は、いわば個々の人間へ、したがって個々の自我へと流れ下っています。それにより、地球上で他者から切り離されているように感じるときであっても、私たちは天上の指導者の存在の内部において、全人類との霊的な結合を体験することができるのです。そして、これらの翼は、保護をもたらす力としてだけでなく、まるで翼に乗って飛び立つかのように、魂を高く引き上げ、解放することのできる「内なる現実」としても感じられるのです。

以前の書簡において、私たちは上腕がどのように「射手座（Archer）」の星座に関連しているかを説明しました。地球上の私たちの人間の形態において、上腕は、先述した個々の人間と人類の双方を貫く「分裂」を継続させ、いわばそれを体験しています。

あの宇宙的存在の「射手（人馬宮）」は、やはり異なります。翼の銀色の「羽毛」は地球上の個々の人間へと届いており、地上の暗闇にいる個人がこれらの羽毛に触れられるとき――もしこれを詩的に表現したい

のであれば――彼らは自分自身の「天使」の体験を見出し、地球上における自らの課題を思い出させられる、あるいは、魂が温められ、慰められるのだと言うことができます。

そこ（射手座）において、人類の多様性は「一なるもの」となります。個々の人間へと流れ込む翼のこの心像は、別のイマジネーションで表現することもできます。それは、キリストが次の言葉で創り出したものです。

「私はぶどうの木、あなたがたはその枝である」

個々の甘く、みずみずしい葡萄は、その葡萄に命を与えたぶどうの木のなかに、自分が結合しているのを感じることができます。このようにして、私たちは人類の宇宙的教師の「双子座ー射手座の器官」を想像することを学ばなければならないのです。

腕の構造をさらにたどっていくと、人間の形態は私たちに「肘（ひじ）」を示し、下肢においては「膝（ひざ）」を示します。それらの宇宙的な対応物が「山羊座（Goat）」の星座です。しかしながら、人間の有機体のこの部分は物質の束縛のなかに深く堕ちすぎてしまい、その宇宙的な起源をほとんど見出すことができないほどです。第四の書簡において、これについてはより詳細に記述されました。特に山羊座がどのように感覚器官の原型の創造に結びついているかについてです。

そして実際に、もし私たちがゾディアックのなかに私たちの宇宙的先駆者の特徴を見出そうと試みるなら、翼の個々の「羽毛」が、最終的には地球上のあらゆる人間の内部に埋め込まれた、極めて「鋭敏な（感受性の強い）」器官になっていることを検知するでしょう。私たちが語ってきたあの翼は、いわば、何百万、何千万もの感覚器官――「目」のようなもの――で覆われているのです。

これらの目が個々の地上の存在の中に埋め込まれているため、私たちの宇宙的指導者は、数えきれないほどの個別の視点から世界を知覚したいと望んでいます。それぞれの人間は、善人であれ悪人であれ、その人生への態度、哲学、そして人生観をもって、天上の存在のひとつの「目」となるのです。

私たちは、自分自身の思考、感情、そして意志が、単に自分自身のためだけでなく、「神のため」にも存在しているという事実に、あまり気づいていません。もし私たちがこのことに気づいているならば、私たちの魂の生活は、必然的に少なからず変化しなければならないはずです。それこそが、もし私たちがこの星座における星の出来事の言語を真に読み解くならば、私たちの天上の教師が自らの「山羊座の器官」をもって、私たちの前を行く場所なのです。

前腕は「水瓶座（Waterman）」の星座に結びついています。山羊座（Goat）が、人類の分化された思考世界が世界情勢の一つの巨大なパノラマへと流れ込む領域であるのに対して、私たちの頭上にある天使の世界の「前腕」、すなわち水瓶座は、癒やしと慰めをもたらす「熱の力」を注ぎ出します。第四の書簡で記述したように、水瓶座が熱と結びついていることを私たちは知っています。そこ（水瓶座）において、天上の翼は特に「感情の世界」の中で人間へと触れるのです。それらの翼は私たちの一人ひとりに対して、癒やし、慈悲、そして愛へと自らの努力を向け、同時に湧き起こることが多い憎しみや破壊の闇の力に対抗するよう求めます。そこにおいて私たちは、天上の存在が、人類あるいはその個々のメンバーに対する極めて厳格で厳しい「審判者」となり得るということを見出すのです。

私たちは、手が「魚座（Fishes）」の星座に結びついていることを詳細に示してきました。そこにおいて私たちは、人類の運命と意志の領域を発見したのです。この世界は、私たちの完全な意識によって未だ見通

すことはできません。神の如き存在の、魚座の「手」の中にはそれに関する完全な宇宙意識が生きているのですが、私たちはこの領域においては未だ深く眠っています。目に見えない手のように、それらは人間の意志の深みへと手を伸ばしています。それらは私たちの一人ひとりを、個々の運命を通じて導きます。それらは、地球上における私たちの個々の人生と労働の道に沿って私たちを先導するのです。

これらの道は、私たちにとって奇妙で不可解なものに思えるかもしれませんが、それらの「翼の手」によって、人生の歩みは宇宙的指導者のすべてを見渡す智恵に従って秩序づけられています。私たちが語ったあの裁判官の手が、時として自然界や人類の真っ只中における大惨事によって、地球上の迷える羊たちを呼び戻さなければならないのは、まさにここ（魚座）においてなのです。この誤まることのない意志は、それから人類を、誰も逃れることのできない「決断」へと導きます。なぜなら、各人が世界の進化に対して賛成か、あるいは反対かの個別の答えを出さなければならないからです。このように、この存在は地球の人類の指導者であるだけでなく、壮大なスケールにおける「教育者」でもあるのです。

私たちはここまで、牡羊座、牡牛座、双子座、射手座、山羊座、水瓶座、そして魚座の星座の霊的背景との関係性において、人類の宇宙的指導者のイメージへと、さらに一歩近づこうと試みてきました。私たちが発見したのは、その存在の「顔」だけであり、未だその「内なる生活」ではないということを意識しておかねばなりません。内なる生活は、ゾディアックのもう一方の星座である蟹座、獅子座、乙女座、天秤座、そして蠍座によって明らかにされます。これらに近づくことができるようになる前に、私たちはさらに骨の折れる認識の作業を行わねばなりません。したがって、今後の記述においてこの知識を達成するまで、私たちは待たねばなりません。

多くの読者は今、こう言うかもしれません。「これは、詩的な描写としては多かれ少なかれ美しいものとして受け入れられる見方だ」（もっとも、執筆者の力量不足というハンデのために、それさえも疑わしいですが）。「しかし」、彼らは続けるでしょう。「目に見える星の世界の領域において、この見方が現実のものとなっているのを、私たちはどのようにして見出せるのだろうか？」と。

この疑念はもっともなことであり、本信の執筆者はこの問いへの答えを見出すために多くの時間を捧げてきました。告白せねばなりませんが、この宇宙的なイメージは何年もの間、いかなる証明もないまま現れており、ただ非常にのちになって初めて、私たちが正しい方法でそれらを見る方法さえ知っているならば、星の出来事がこのイメージを明らかにしているのを発見したのです。

ここからは、短い間隔でそれ自体を繰り返す、星の世界における「ある特定の出来事」に目を向けることにしましょう。それは、およそ2年ごとに起こる「木星と火星のコンジャンクション（合）」です。地球上の私たちはそのとき、これら2つの惑星が互いに非常に接近しているのを目にします。火星が木星を覆い隠すことさえ起こり得ます。この出来事はおよそ2年の間隔で、ただし異なる星座において起こります。

このリズムの合間には、やはり大体2年ごとに起こる「火星と木星のオポジション（衝／真向かいの位置）」というもう一つのリズムが存在します。私たちがそのとき空に木星を見るならば、火星はちょうど真真向かい、すなわち木星から地球の中心を通り、天球のもう一方の目に見えない半分へと向かう架空の線の、もう一端に位置していると想像しなければなりません。このようにして、大雑把に言えば、私たちは毎年、火星と木星のコンジャンクションかオポジションの「いずれか」を迎えることになるのです。

私たちはいまだ、火星や木星のそれぞれの性質について詳細には語っていませんが、現時点においては、木星を「宇宙の叡智」の代表者、火星を「宇宙の力」の代表者として想像していただければ十分でしょう。

西暦1819年2月、山羊座の星座において火星と木星のコンジャンクション（合）が起こりました。もし私たちが、その後の数年間におけるこれらのコンジャンクションの連続性をたどっていくなら、他にも数多くある中から、1848年に双子座で起こったもう一つのコンジャンクションを見出すことができます。これらについては今は置いておき、1914年6月のオポジション（衝）へと進みましょう。そこでは木星が山羊座から水瓶座にかけての位置にあります。さらに、1919年9月には蟹座でコンジャンクションが起こり、1938年9月には木星が再び水瓶座に位置するオポジションが、そして1940年1月には魚座でのコンジャンクションが起こっています。

このようにして私たちは、山羊座（1819年）、山羊座ー水瓶座（1914年）、水瓶座（1938年）、そして魚座（1940年）という、ゾディアックの星座におけるこれらの一連の出来事を手にすることになります。現在、私たちはゾディアックのまさにあの圏域、すなわち、あの天上の存在の翼が人間の魂の「思考、感情、そして意志」に触れる場所として、私たちがその翼を描き出した圏域にいるのです。それは、その天上の存在が人類の魂の器官を通じてこの惑星（地球）の状況を「知覚」し、それらの知覚に従って「行動」する領域にほかならないのです。

これらの宇宙的な「知覚」や「概念」が、第一次および第二次世界大戦と結びついていることは明白です。では、なぜ私たちは西暦1819年から出発するのでしょうか？ 私たちはもっと前から出発して、最も驚くべき事柄を発見することもできるでしょう。しかしながら、1819年には「カールスバートの決議」〔訳註：ウィーン体制期にオーストリアの宰相メッテルニヒの主導によって出された、自由主義やナショナリズム（国民主義）運動を徹底的に弾圧するための言論・思想統制令〕が行われました。当時はいまだ「ドイツ帝国」として統一されていなかったすべてのドイツ諸邦の代表者や君主たちが、自国内における革命活動を抑圧するための措置を導入するために集まったのです。その結果、大学の活動に対する信じがたいほど厳格な制限と抑圧、そして報道に対する厳しい検閲がもたらされました。

これこそが、中央ヨーロッパのすべての国々で勃発した1848年の革命へとつながった理由の一つだったのです。私たちは、あの天上の存在が人類の魂を通じていかに地球を見下ろし、霊的な自由のための闘いを見つめていたかを、ほとんど知覚することができます。この衝動は、1819年の後、多くの歴史的事件のなかに何度も何度も現れました。そのすべてが、火星と木星のリズムと結びついていたのです。それは1914年の大惨事（第一次世界大戦）において再び明白となり、1938年には完全に水瓶座の圏域へと入りました。

この衝動は人間の感情の世界へと浸透し、絶えず増大していく憎しみと破壊の壁に対抗して、癒やし、慈悲、そして愛の力を目覚めさせるよう呼びかけます。すべてが徒労に終わったかのように思われたとき、1940年1月6日に魚座の星座で起こった火星と木星のコンジャンクションは、誤まることのない「宇宙の裁判官」を顕にしました。その裁判官は、地球上で自らが体験した事柄からして、この惑星がかつて見たこともないような最大級の大惨事（第二次世界大戦）を通じて人類を教育し、肯定的な進化のまっすぐな道へと呼び戻すよりほかに選択肢がなかったのです。このようにして、宇宙の意志は、人間の意志が成し遂げることのできなかった事柄を成就させました。

ここで私たちが「神々の世界は人類に何を要求しているのだろうか？」と問うならば、火星と木星のリズムのもう一つのシーケンス（連続）をたどることで、その答えを見出すことができます。1916年9月、木星が牡羊座に位置していたときに、両惑星のオポジションが起こりました。翌年の1917年6月には牡牛座でコンジャンクションが現れ、1918年の11月〜12月には木星が双子座にあるときにオポジションが起こりました。

これらの出来事は、第一次世界大戦の最後の数年間のうちに、牡羊座、牡牛座、そして双子座の星座の中で起こったのです。もし私たちが、私たちの前を行くあの霊的な存在の特徴をこれらの星座の中に想像しようと試みるなら、私たちはそのなかに、宇宙のすべてを内包する智恵に向かって開かれた「頭部」を、宇宙における創造的な言葉（ロゴス）のための器官である「喉頭」を、そして個々の人間へと届き、彼らをインスパイアして、真のキリスト教的同胞）の創造へと向かう理想へと高く引き上げようと努めている「翼」を見出すことになります。

そして、霊的世界の活動の表現として、地球上では一体何が起こったのでしょうか。

1916年9月、ルドルフ・シュタイナーは人間の歴史の霊的背景について語りました。そこにおいて私たちは、のちに彼がその著書『魂の謎（Von Seelenrätseln）』の中でより詳細に説明した、「三分節に体制化された人間有機体」の心像の根本的なアイデアをすでに見出すことができます。この背後には、「社会有機体三分節化）」のアイデアがすでに黎明を迎えていました。

これと全く同時に、木星が牡羊座にある状態での「木星ー火星の出来事」が起こっていたのです。それはまるで、この瞬間に神性の「頭部」から、すなわち霊的宇宙のすべてを浸透し、すべてを見渡す智恵の世界からの門が開かれたかのようでした。この宇宙の智恵の癒やしの宝石、すなわち「三分節化された社会秩序」の理念が地球へと降り立ち、ルドルフ・シュタイナーという個性によって受胎され、何百万、何千万という人間の深奥における努力と闘いに対する「答え」であったところの、あの社会的理念として誕生したのです。

次いで1917年の6月から7月にかけて、燃え上がるような社会問題の解決策たらんと努めていたこの理念が、ルドルフ・シュタイナーと友人たちとの対話のなかで、さらには印刷された覚書（メモランダム）という形で、いかにますます明確な形を獲得していったかを見ることができます。このとき火星と木星は「牡牛座（Bull）」でコンジャンクション（合）のなかにあり、霊的な存在たちが力強く創造的な言葉（ロゴス）をもって人類へと語りかけていたのです。

1918年（11月）は第一次世界大戦の終結をもたらし、それと同時に、それまで人為的に覆い隠されていた潜在的な社会問題の顕在化と、中央ヨーロッパにおける革命をもたらしました。その直後、私たちはシュタイナー博士が巨大な活動の真っ只中に身を投じ、数多くの講義や集会において、何千、何万という人々に向けて、多様な社会問題と「三分節化された社会秩序」のアイデアを通じたその解決策について語る姿を目にすることになります。

ここで私たちは、宇宙の知性の翼——双子座（Twins）にある木星——が、真のキリスト教の担い手となり得る社会有機体へ向かう道の上へと人類をさらに前進させるために、いかに個々の人間に触れているかを見ることができるのです。

私たちは、私たちの宇宙的先駆者の黙示の刻印をより強く宿しているこれらの出来事が、山羊座、水瓶座、そして魚座における、火星と木星の結びつきの「もう一つのシーケンス（大戦期の一連の出来事）」のなかに、どのように織り込まれているかを目にしています。人類は、自らの社会有機体の真の形態に関するこの黙示に耳を傾けませんでした。中央ヨーロッパにおける人間の感情が、過激なナショナリズムの深淵へと失脚したのち、残された道はただ一つ——1939〜1940年に始まる「宇宙の審判」しかなかったのです。

第八書簡 - 1944年11月
　「惑星世界の本質」

●基本的な視点

「7は時間のリズム、12は空間の形態」という対比を明確にし、
惑星を「時間の中で進化する力の担い手」として位置づける。

惑星は単なる物理的天体ではなく、
時間の法則を通じて働く宇宙の諸力（霊的存在の働き）である。

すべての生成・進化は
「土星→木星→火星→太陽→水星→金星→月」という
7段階のリズムに従う。

人間の生涯もこの法則に支配されており、
過去の依存から現在の自立、そして未来の自己実現・救済へと進む。

この時間の秘密を理解することで、私たちは焦りや混沌から解放され、
より健全で意識的な人生を歩むことができる。

●要点

1）12と7の根本的な違い

○12（黄道十二宮）：空間の象徴。
　宇宙の形態・原型（人間の形態の巨大なアーキタイプ）を表す。

○7（惑星世界）：時間の象徴。
　進化・発達・周期の法則を表す。

古代人は肉眼で見える7つの天体
（土星・木星・火星・太陽・金星・水星・月）を認識していた。
これらは人間の生身の感覚で直接アプローチ可能な範囲にあり、
望遠鏡で発見された天王星以降の惑星は
「人間の領域を超えた」ものとして一旦区別される。

2）時間の根本法則としての「7面性」

すべての進化・発達は
過去3段階 + 現在1段階 + 未来3段階の7つのステップで展開する。

・過去3段階は常に「依存・受容」の性質を持つ。
・現在（第4段階）は「解放・自立・個体化」の瞬間。
・未来3段階は「自己顕現・活動・救済」の性質を持つ。

・対称性：第1段階⇔第7段階、第2⇔第6、第3⇔第5。

この法則は、旧約聖書の7枝の燭台（メノーラ）にも象徴されている。
時間は「一気に」ではなく、段階的に成就するものであり、
焦りは「早産」を招く――
この認識が魂と肉体の健全な発展に不可欠である。

3）7つの惑星と時間の7段階の対応

新生児の生成過程や蒸気機関の発明を例に挙げ、
各惑星の働きが説明されている。

〔段階〕惑星
・主な働き・性質
・例（新生児の場合）

〔1〕土星
・強力な意志の力。物質的存在の「芽・原型」を創り出す。
・受精の瞬間。カルマの意志が肉体存在の門を開く

〔2〕木星
・生命の力・英知。芽に生命を吹き込み、形態を整える。
・胚が生命力で育ち、人間の形に発達

〔3〕火星
・魂の力。感覚・感情・好悪を生む。同時に崩壊・破壊の種も植え付ける。
・痛みや快楽を感じ、泣く能力

〔4〕太陽
・現在・自立・個体化。存在を「今ここ」に顕在化させ、独立させる。
・誕生。母親から切り離され、個として認められる

〔5〕水星
・救済・運命の導き。魂の性質を活動を通じて教育・救済する。
・成長し、経験を通じて生まれつきの性質を昇華

〔6〕金星
・生命創出の力。芸術・無意識的な創造力の萌芽。将来的に意識的な生命創造へ。
・無意識の生命維持活動（現代ではまだ未発達）

〔7〕月
・再生産・完成。個が純粋に魂的な存在として物質的身体を新たに授ける力。
・生殖能力（現代では薄暗い影のみ）

●本文

私たちはこれまで、黄道十二宮（ゾディアック）についての知識を構築しようと試みてきました。今回と次号にわたる私たちの課題は、惑星世界を理解するための基礎を築くことです。

私たちの太陽系を取り囲む恒星の世界は、黄道十二宮の円の中に凝縮されています。黄道十二宮の外部にも多くの星座が存在しますが、これらの星々はいずれも、黄道十二宮の12の星座とどこか深い結びつきを持っています。

例えば、牡羊座や魚座の上方には、ペルセウス座、アンドロメダ座、ケフェウス座、カシオペア座など、多くの星座が存在します。これらの星座にまつわる神話の霊的な背景をより深く探ると、それらが牡羊座や魚座などの星座に現れるのと同じ事実を表現していることが分かります。

私たちが黄道十二宮を横切り、見慣れた牡牛座、双子座、蟹座の上下にある星座に目を向けるとき、それらのなかに、12の黄道十二宮に対する一種の宇宙的な「解説」を見出すことができるのです

このように、恒星の世界は黄道十二宮の12の星座によって表されています。この「12」という数（12面性）は、空間の顕現です。そこには、空間の中に存在する私たちの宇宙の創造をもたらした事実があり、また、地球上で空間の中に顕現する人間形態の原型（アーキタイプ）が存在しています。

これまでの書簡で、私たちはこの空間における宇宙の創造を「古土星紀」の進化として記述してきました。空間に広がるこの宇宙が、生命と意識の力によって貫かれていった進化の段階については、まだ記述していません。これは今後の号で行う予定です。私たちは空間の観点から宇宙の創造への見通しを立て、それを12の黄道十二宮と結びつけました。

しかし、惑星宇宙に目を向けると、私たちはまったく異なる世界へと入ることになります。そこでは「7」という数（7面性）の関係に直面します。古代の人々は、太陽と月のほかに5つの惑星を数えていました。これが、肉眼で知覚することのできる惑星世界でした。今日では、近代的な望遠鏡の助けを借りて天王星、海王星、冥王星といういくつかの惑星がさらに発見されたため、もはや7面性（7つの世界）のようには見えません。将来的には、さらに強力で優れた望遠鏡によって、私たちの宇宙に属する惑星がもっと多く発見されるかもしれません。

それでも私たちは、望遠鏡の助けを借りて発見されたこれらすべての惑星が、人間の宇宙の領域を「超えた」ところにあるということを念頭に置かなければなりません。なぜなら、それらは人間の生身の器官だけでは見ることができないからです。それらは器具、つまり機械である望遠鏡を通してのみ見ることができますが、機械としての望遠鏡は人間の本性を「超えた」ものであり、別の世界に属しています。私たちがここで人間と星々との関係について語る以上、私たちの視野は、生身の人間の組織が持つ限界の中に厳格に限定されなければなりません。これは、新しく発見されたそれらの惑星の本質を知ることを妨げるものではありませんが、そのような知識を得るためには、人間を超えた世界へと入っていかなければならないでしょう。のちの号でその機会があるかもしれませんが、現時点では人間の領域の境界内にとどまりたいと思います。

私たちは、人間との結びつきにおいて「7」という数（7面性）からなる惑星世界を見出します。人工的な手段を用いず、正常に発達した人間の感覚にとって、私たちの太陽宇宙の中でアプローチ可能な天体は7つあります。それは、土星、木星、火星、金星、水星という惑星と、それらに加えて太陽と月という天体です。

宇宙において「7」という数に関連して現れるすべてのものは、時間の象徴です。時間の中における動きとは「進化」であり、すなわち段階や周期を経てなされる創造のことです。私たちが「古土星紀」の進化を記述しなければならなかったとき、それを7面性という側面（古土星紀の7つの周期）から提示せざるを得ませんでした。なぜなら、創造されたものは「時間の中で」しか行われ得なかったからです。しかし、この進化の本質である人間形態の原型（アーキタイプ）は、「空間の中で」12の黄道十二宮として現れます。

時間の象徴としての7面性は、1週間の7つの曜日にも現れています。それらは、古土星紀だけでなく、過去および未来のあらゆる段階を含む、私たちの全世界進化のイマジネーションなのです。

なぜ7面性が時間の象徴なのでしょうか。黄道十二宮によって表される12面性が「空間」と結びついているという事実は、幾何学的な観点から理解することができます。なぜなら、円とは静止した形態であり、その内部に二次元空間の他の幾何学的形態を潜在的に含んでいるからです。

私たちは、7面性の根本法則を見出さなければなりません。それを一度見出せば、7つのステップの内的順序を理解するための基礎が得られます。例えば、私たちの身の回りにある存在に目を向けると、それには「過去」があり、また「未来」もあることが分かります。過去と未来の狭間で、それは「現在」という瞬間に存在しています。テーブルの上の花を見るとき、私たちはそれが過去に成長し、未来には枯れて朽ちていくことを知っていますが、これら2つの段階の間にあって、それは現在ここに存在しているのです。このように、それらは空間の中に存在するだけでなく、時間の中にも存在しています。

時間の中に存在する自然界の対象に関する限り、私たちは「過去・現在・未来」という3つのステップを観察することができます。この3つのステップは、7面性を単純化したものにほかなりません。最初の3つのステップは、私たちが「過去」と呼ぶものへと常に引きまとめられていることが分かります。現実において、過去に属するすべてのものは、常に「3つの発達段階」の刻印を帯びているのです。観察を徹底すれば、私たちはこれがどこにでも存在する根本法則であることを見出すでしょう。また、私たちが「未来」と呼ぶものも、同様に3面性（3つの段階）として自らを現します。そして、過去と未来というこれら2つの間に、時間の一瞬の契機として「現在」が位置しています。このようにして、時間における進化や発達は、7面性として自らを現すのです。

さらに、私たちの観察をより正確かつ注意深く行うなら、過去と未来という天秤の両側にあるそれぞれ3つのステップが、互いに内的な関係を持っていることが分かります。すなわち、過去の第1ステップは、未来側にある3つのステップの最後（第7ステップ）と結びついているように見えるのです。あらゆる進化における7つの段階の配列において、第1段階は第7段階と、第2段階は第6段階と、第3段階は第5段階と関連しており、その間に第4段階が位置して、現在として過去と未来を繋いでいます。

これを一つのイマジネーションとして捉えようとするとき、私たちは旧約聖書にある「7つの枝を持つ燭台（メノーラ）」に似たイメージを形成し始めます。そして、幕屋の祭壇の上に置かれていたあの7つの枝を持つ燭台が、ヘブライの人々が時間の中で展開していかなければならなかったものの象徴であったことに気づくのです。ヘブライ民族の創始者であるモーセは、この課題を知っていました。ヘブライ人は、下降してくるキリスト存在の真の器として機能する、優れた肉体を創り出さなければなりませんでした。これは、時

間の経過の中でしか成し遂げられないことでした。それゆえモーセは、自らの民の長く険しい旅路を照らす慰めの光として、7つの枝を持つ燭台という時間の象徴を創り出したのです。

今日、もし私たちがこの時間の根本法則を理解することができれば、私たちの文化的・個人的な生活は、これほど混沌とし、乱されることはないでしょう。多くの状況において、私たちは「時間がない」という言い訳をして精神的な探求から逃避したり、あるいは何か衝動を感じたときには、非常にしばしば気が急いてしまい、それをすぐに実現したいと考えたりします。私たちは、それが着想された時から実現に至るまで、成就へと進化するまで一歩一歩発展していかなければならないということを認識できません。さもなければ、この種は早産によって台無しになってしまうかもしれないのです。私たちは、自分の衝動や考えが実現されるまでに、7年、あるいは3倍の7年（21年）、あるいはそれ以上の期間を待たなければならないかもしれないということを、時に忘れてしまいます。

私たちの魂の生活、さらには肉体の生活をより健全なものにするために、私たちは時間の秘密の法則を再び学ばなければなりません。7面性は時間の根本法則ですが、時間には、今は語ることのできない他の神秘も存在しています。

この法則は私たちの宇宙のどこにでも見出すことができますが、それが持つ内的な力学的（ダイナミックな）リズムの本質を最もよく現すのは、人間の生涯においてです。

成人の人生に目を向けると、私たちはそこでもその人の過去、現在、そして未来を区別することができます。私たち一人ひとりの過去とは「青年期（若き時代）」であり、それには児童期、乳幼児期、さらには出生前の胚（胎児）としての生命まで含まれます。過去へ遡れば遡るほど、私たちは自分を取り囲む保護的な諸力への依存度が高まることを見出します。私たちはまだ自分自身の主人（あるじ）ではなく、他の存在が私たちの面倒を見なければなりません。

しかし、人生を進めるにつれて、私たちは次第に自立していきます。現在どのような年齢に達していようとも、私たちはある程度、いくつかの保護的な諸力から自分自身を解放してきたことが分かります。新生児は母親の身体から切り離されました。その後、十分に成長した人間として、私たちは他の多くの結びつきから自分を切り離します。人間の人生の「現在」がどのようなものであれ、それは常に、前の存在状態から自らを解放した単一の存在（個）の顕現なのです。前の状態から独立したこの単一の存在は、進化の第3のステップである「未来」において、自らを決定する力となります。その単一の存在が自らの「現在」において独立した分だけ、それは未来において、自らがそこから脱した（解放された）諸条件を背景にしながら、単一の個体存在として自らを顕現し、活動することができるようになるのです。このようにして、人間の人生は時間における進化の3つのステップを明らかにします。

過去：他の多くの条件や存在への依存。
現在：解放と自立。
未来：単一の個の存在としての顕現と活動。

こうして私たちは、過去・現在・未来という3つのステップが人生を通じてどのように現れるか、その根本的な特徴を見出しました。時間は7面性（7つの段階）を持っていますから、次は過去の3つのステップと未来の3つのステップ、そしてその間にある現在の1つのステップが持つ、それぞれの根本的な特徴を見出さなければなりません。

もし私たちがこの7面性の特徴を見出すことに成功すれば、時間の法則という謎の一つを解き明かすだけでなく、5つの惑星と太陽・月が持つ内的な性質や能力をも読み解くことができるようになるでしょう。ここでようやく、私たちが時間の7面性の法則を発見するという、一見すると退屈で根気のいる作業に取り組んできた理由にたどり着くのです。

進化の本質とは「解放」にあります。それまで一般的な普遍の存在という海に没頭していたある存在が、個としての存在へと向かって動き出すのです。私たちの観察を始めるために、現在の段階にある新生児を例にとり、その過去を振り返ってみましょう。

第1に、受精の瞬間に、その子は父と母を通じて存在し始めました。私たちが「運命（カルマ）」と呼ぶ強力な意志の諸力が、父と母の人生に入り込んだのです。これらの意志の諸力を通じて、その赤ん坊の魂のために、物質的（肉体的）存在へと至る門が開かれました。これが最初のステップですが、これだけでは十分ではありません。

第2に、生命の諸力（エーテル力）が物質的肉体の胚（芽）へと浸透し、それが誕生するまで、ますます人間の形態へと形づくっていきました。

さらに、ある時期以降、その有機体が自らの身体的な欲求を通じて、感覚を持ち、痛みや充足感を感じることができるようにするためには、第3のステップが必要でした。

私たちは今、人間のコントロールを超えた宇宙の諸力が、一つの存在を生み出すのを助ける「創造の3つの段階」を記述したことになります。

第1段階：強力な意志の諸力が物質的存在をもたらす。単一の個体としての身体の胚（芽）が創り出される。

第2段階：この個体の身体の胚に生命の諸力が浸透し、胚をその両親の似姿へと形づくる。

第3段階：胚がますます両親の似姿へと形づくられるにつれて、そこに魂の諸力と意識の諸力も浸透する。

これら3つの段階を記述することで、私たちは同時に、3つの高次の惑星（外惑星）である土星、木星、そして火星の性質と能力についても記述したことになります。

土星は、あらゆる種類の存在が地球上に現れるために、鉱物、植物、動物、あるいは人間の身体を必要とするかどうかにかかわらず、その単一の物質的存在の胚（芽）を創り出す宇宙の諸力の顕現として常に現れます。これらの土星の霊存在たちからは、途方もない意志の諸力が放たれているのです。

木星からは、単一の物質的存在の胚に生命の活力を授ける生命の諸力が流れ出ています。しかし、ここで私たちは一つの困難に直面します。私たちは植物が今なお生命の諸力に貫かれているのを感知できますが、鉱物の中にこれらを見ることはできません。木星の諸力は反射されはするものの、鉱物はその力によって生命化され得ないということを、私たちは認識しなければなりません。7面性を持つ進化の第2段階は、鉱物界においては異なる働き方をします。鉱物の結晶形態は、過去の進化サイクルにおける木星の諸力の反射から生じたものであり、宇宙の壮大な英知を明らかにしています。これらの宇宙的な英知の諸力が木星とどのように結びついているかも、のちに見ていくことになるでしょう。

火星は、魂の諸力をもたらす存在です。ここで言う魂の諸力とは、外の世界で起きた出来事、あるいは自分自身の身体の内部における活動のいずれかによって引き起こされる、感覚や感情を生き物が持つことを可能にする力のことです。これらの知覚は、共感または反感のいずれかを目覚めさせます。

例えば、新生児は周囲の世界から与えられるあらゆる印象を、苦痛、あるいは快いものとして経験することができます。針が皮膚を突き刺すことは、単なる力学的な出来事として説明できますが、それでは赤ん坊が泣き始めるという事実を説明したことにはなりません。引き起こされた傷は、単なる生理学的な出来事とは異なる、質的に別の領域で経験されているのです。

魂を経験する能力は、新生児のなかにすでに備わっています。では、生命のない物質や植物についてはどうでしょうか。これらの対象に魂の能力が生まれつき備わっていると言うことはできませんが、それでも火星の諸力は、生成してくるあらゆるものに対して働きかけています。鉱物のような生命のない物質や、植物のようなより単純な生物は、火星の諸力の「反射」しか持っていません。魂の諸力は、これらの対象の化学的性質の中に自らを反射させているのです。

私が手に持っているペンを見るとき、それに感覚のようなものがあるとは到底言えません。しかし、それがまだ作られている最中、私の手に渡る前の段階で、すでに崩壊の種がその中に植え付けられていました。不可避の崩壊をもたらすこの運命は、一見すると生を否定しているように思われますが、私たちはこれに対処しなければなりません。ここに、創り出されたものを最終的に破壊する、火星の攻撃的な本性が現れています。また、火星が魂の能力を創り出すところでは、同時に崩壊の種も蒔かれていることが分かります。なぜなら、魂の諸力や快・不快の感情は、最終的には人間の身体を破壊するものだからです。これらの諸力は、すべての創り出された存在が「現在の存在状態」の局面に入る前に、その中へと流れ込みます。

太陽の諸力は、すべての創造された対象における「現在の存在状態」を創り出し、あるいは引き起こします。現在の時代において、太陽の諸力はまた、解放と自立への努力をも引き起こします。もう一度、新生児のことを考えてみましょう。その子は生まれたばかりであり、それは誕生前に生理学的にその一部であった母親の身体から切り離されたことを意味します。今や生理学的に切り離され、成長するにつれて自立へと向かって努力します。このことは、子供の周囲の人々が最初に行うことの一つが、その子自身の名前をつけることであるという事実にも示されています。その子は、単一の個の存在として認められるのです。私たちは感覚を通じて、その子が自身の身体を持っていることを認識できますし、この身体が、乳幼児期や児童期の初期に縛られている生活の必然性から、ますます独立して成長していくことを期待しさえします。

自然界のより低次の領域（鉱物・植物・動物界）においては、人類におけるのと同じような意味で「個体化の衝動」を語ることはできません。しかし、そこでも太陽の衝動は働いています。太陽の光は、自然界に存在する対象を、私たちの感覚経験の領域へと導き入れます。太陽の光はそれらを私たちに可視的にし、私たちはその輪郭や色彩を知覚するのです。

最初の蒸気機関の製造を例に考えてみましょう。

土星の段階：まず、発明家にアイデアが訪れました。

木星の段階：次に、発明家はそのアイデアを熟考し、力学や物理学の法則、あるいはその時代の技術的成果との関連において検討しなければなりませんでした。彼は、人類に明かされている限りにおける普遍的な英知の世界へと入らなければなりませんでした。

火星の段階：さらに発明家が計画の実現へと進むにつれて、金属の安定性を決定づける化学反応がすでに植え付けられている鉄や鋼鉄といった地球の物質を使用し、蒸気の反応などを考慮しなければなりませんでした。これらの事実は、のちに彼の機械の失敗や不人気を招いた原因となったかもしれません。

太陽の段階：そしてある日、蒸気機関が完成しました。それは一つの実体として見ることができ、誰もがそれがどのように動き、働くかを知覚することができました。今やそれは機械として、自らの「現在の存在状態」の局面へと入ったのです。それはまた、経験的な知覚へと入り込みました。これが太陽の諸力の働きです。太陽の諸力は、個体化された対象の上に太陽の光のように降り注ぐ「経験主義」の領域を創り出すのです。

私たちは今、土星、木星、火星の諸力の働きを「時間の中のプロセス」として記述しました。存在へと入るすべての存在が通過しなければならないこれらの諸力は、宇宙における対象の「生成」と結びついています。これらは「過去」を表しているのです。ただし、過去のこれら3つの段階は、対象の本質に応じて、時間的に大きく異なる場合があります。それらは「天文学的」な長さの時代にわたって続くこともあれば、わずか数秒のなかに縮まることもありますが、常にそれらを見出すことができるのです。

それでは、7面性からなる進化サイクルの、最後の3つのステップについて考えてみましょう。第4のステップは、被造物がその起源から「解放」される段階でした。それに続くステップにおいて、個体化された存在は、自らの能力に応じて自由な存在として自己を顕現しようと努力します。そして、未来へと足を踏み出すことによってのみ可能となる自己顕現のなかで、その存在は、過去の最初の諸段階において自らのなかに誕生したすべてのものを明らかにし、解放していくことができるのです。

例えば、赤ん坊は成長するにつれて、人生においてますます活動的になります。しかし、人間が活動的になるにつれ、その活動の背景として、出生前にすでにそのなかに植え付けられていたすべての魂の諸力が現れてきます。すなわち、その人の好き嫌い、苦痛や喜びに対する生まれつきの反応能力であり、それらはその人の行動を促進することもあれば、妨げることもあります。そして人生が進むにつれて、その人の活動は、それらの生まれつきの魂の性質にとっての一種の「教師」であり「救済者」となっていくのです。私たちの活動の領域におけるこの教師は、非常にしばしば私たち自身よりも賢く、運命（カルマ）の権威を授けられた、私たちの「霊的指導者」となります。

これらの諸力は、天文学で水星と呼ばれる惑星からやってきます。したがって、水星は、私たちが先ほど記述した火星の諸力の「救済者」なのです。水星の霊が人間の救済のために導く運命の道筋は、しばしば奇妙で理解しがたいものです。私たちが自分自身の運命を霊的に理解しようと努めて初めて、時間の7面性の法則における第5のステップを表す水星の霊との結びつきを、意識的に見出すことができるのです。

天文学で金星と呼ばれる惑星は、第6のステップを表します。第6のステップは、第2のステップである木星と関連しています。木星が「生命と英知」の諸力をもたらす存在であるように、金星は、人間によるこれらの「生命を創り出す諸力」の発達と結びついています。とはいえ、現代の人間は、地球上の自らの領域において生命を創り出す能力からはほど遠い状態にあります。もっとも、深い無意識のなかで、私たちは実際にこれを行ってはいます。私たちの有機体の無意識の深層には、生命を破壊するだけでなく、生命を創り出しもする活動が存在しているのです。しかし、私たちはこれらをまだ何一つコントロールできていません。

はるかな未来の時代において、人類は同様の活動を意識的に展開できるようになり、そのとき私たちは、生命のない機械のような対象だけでなく、生命を宿す植物のような存在をも創り出すことができるようにな

るでしょう。このように、金星は人間の有機体の深層において働いています。人間の「芸術」は、いつの日か人類のなかで完全に目覚めることになる、それらの諸力の微かな黎明なのです。

第7のステップは、月によってもたらされます。月は地球の近くにありますが、その領域に結びついている能力は、人類の意識からははるか遠くにあります。第7のステップである月は、第1のステップである土星と関連しています。土星は、一つの衝動や魂の存在が、強力な超自然の意志の諸力に貫かれて物質的な領域へと入り、自らのために身体という器を創り出す、あらゆる進化のあの段階と結びついて現れました。今や、創造と個体化のすべての段階を経たのち、第7の段階において、その存在は一つの個体として、純粋な魂の存在に物質的存在を授けることができるほどの完成度に達したのです。

現代の人間において、この能力はわずかに薄暗い反射として生きているにすぎません。それは、はるか遠い未来の時代に、完全に発達し意識的にコントロールされた活動となるものの「予言」でしかないのです。それは、私たちの有機体に深く根ざし、霊的な諸存在によって導かれている「生殖（再生産）」の能力です。今日におけるこの力は、その真の霊的な対応物（本来の霊的な姿）の、きわめて薄暗い影にすぎないのです。

第九書簡 - 1944年12月
「惑星の世界の本質 — 土星」

●基本的な視点

土星は「境域の守護霊」である。

魂が物理的世界に入る門を守り、 死後に霊界へ呼び戻し、
過去・現在・未来の全生涯を通じ、人間を「父なる意志」のもとへ導く。

土星の活動は常に二面性を持つ。
魂の世界では「完成への意志」として高貴に働き、
物理的世界では「硬く峻厳な物質化」として現れる。

この書簡は、土星を単なる「制限・試練の星」ではなく、
宇宙の記憶・意志の源・人類の霊的歴史家として描き、
出生図や人生の課題を読むための基礎としている。

●要点

１）土星の三つの根本的な側面

○古土星進化の記憶（宇宙的記憶）

古土星紀に高次諸霊階（特に意志の霊＝座天使／トローネ）が
共同で生み出した「熱（火）の物質」の記憶が、
今日の土星に受け継がれている。
土星の環（リング）は、古土星を包んでいた霊的大気の残像。
土星圏（軌道を含む巨大な球領域）は、
かつての古土星と同じ大きさとされ、意志の霊の領域である。

○精神世界（霊界）の第三領域

死後の人間の魂が通過する領域。
地上でなされた「共同体への無私の奉仕」
「自己犠牲」「人類への貢献」の果実が実を結ぶ場所。
人類の偉大な恩人たちの活動の源泉。

○意志の霊（座天使）の領域・父なる意志の顕現

すべての魂の原型（アーキタイプ）の背後に、
意志の霊が捧げた「意志の物質」が隠されている。
これが「父なる意志」として、人間の最も深い意志の領域に働きかける。

２）人間の魂・運命・過去世との結びつき

土星は人間の意志の深層（まだ意識が届かない領域）を司る。

思考（目覚め）→ 感情（夢）→ 意志（深く眠っている）
という魂の層で、最も深い部分を映す鏡。

出生時の土星の配置（ホロスコープ）は、
その人の高次の霊的課題・召命と過去世の背景を映し出す。

死の瞬間にも土星は立ち会い、
地上生活の「収穫（成果と失敗）」を集める。

転生から転生への「糸」を紡ぐ存在 → 「宇宙の偉大な歴史家」。

３）物質世界における土星の顕現

鉱物界：
不毛な岩場や高山の岩石に感じられる「絶対に動かない峻厳な意志」。
物理的物質の最も内なる本質。

人間・動物の骨格：
身体の輪郭を形づくる力。

・頭蓋骨は宇宙の球形の写し。
・人間の直立姿勢は、霊的宇宙と地球を結ぶ
　「意志の力」の生理学的表現（逆さまの植物としての人間）。

●本文

　第八書簡において、私たちは太陽系における天体の活動を理解するための方法を展開し、七枝の燭台（メノーラー）のイマジネーションがどのように惑星の影響を表す図像になっているかを示しました。今回および今後の書簡では、これらの活動についてさらに詳しく掘り下げていくことが私たちの課題となります。

〔惑星の世界の本質 — 土星〕

　私たちは前回の書簡において、空間内における時間の本質について考察し、単なる魂としての存在が肉体的な存在（物質世界）へと入るあらゆる場所で、土星が働いているに違いないという結論に達しました。土星の本質に関する探求をさらに一歩進めるために、私たちはルドルフ・シュタイナーが著書『神秘学概論』および『神智学』の中で示している2つの示唆を考慮する必要があります。私たちはこれらを、いわば知識の領域への扉を開くための鍵として用いることができます。

『神秘学概論』、特に第四章「宇宙の進化と人間」において、シュタイナー博士は私たちが生きる宇宙の創造に先立つ諸条件の概略を述べています。博士は、神秘学の伝統に従って「古土星」「古太陽」「古月」と呼ばれる、地球誕生以前の進化の様々な段階について語っています。これまでの書簡でも私たちはすでに「古土星」の進化について言及してきましたが、まだそれ以上深くは立ち入っていません。それにもかかわ

らず、物質的な出来事の舞台裏で活動している精神的（霊的）存在たちの力強い働きによって、私たちの宇宙がどのようにして誕生したのか、私たちはそのイメージを掴んでいます。

古土星の進化の間、一連の経過の中で初めて物質的な実体（物質）が姿を現しました。ただし、それは熱または火の領域（状態）を超えて進化することはありませんでした。これは、ただ一つのカテゴリーやグループの霊的存在によってもたらされたのではなく、階層秩序（高次諸霊階）のすべての存在たちの共同活動によってもたらされたのです。読者が本書簡および今後の書簡を理解するのを助けるために、ここでこの活動に関わっている階層的な存在たちの名前を思い起こすことにしましょう。名前は様々な神秘学の教えによって異なるため、ここではそれぞれの対応を示す形で異なるグループを挙げておきます。［以下のチャートにおいて、「神秘学」の列は、ルドルフ・シュタイナー著『神秘学概論』で使用されている用語を指しています。］

※図1

	Occult Science	Bible	Dionysius the Areopagite	Greek
First Hierarchy	Spirits of Love	Seraphim	Seraphim	
	Spirits of Harmony	Cherubim	Cherubim	
	Spirits of Will	Thrones	Thrones	
Second Hierarchy	Spirits of Wisdom	Dominions	Lordships	Kyriotetes
	Spirits of Motion	Powers	Powers	Dynameis
	Spirits of Form	Mights	Authorities	Exusiai
Third Hierarchy	Spirits of Personality	Principalities	Principalities	Archai
	Spirits of Fire	Archangels	Archangels	Archangeloi
	Spirits of Twilight	Angels	Angels	Angeloi

〔高次諸霊階（階層秩序）の対応表〕

〔階層（ヒエラルキー）〕
⑴神秘学
⑵聖書Bible
⑶ディオニシウス・アレオパギタDionysius the Areopagite
⑷ギリシャ語Greek

〔第一階層〕

⑴愛の霊 (Spirits of Love)・調和の霊 (Spirits of Harmony)・意志の霊 (Spirits of Will)
⑵熾天使 (Seraphim)・智天使 (Cherubim)・座天使 (Thrones)
⑶熾天使 (Seraphim)・智天使 (Cherubim)・座天使 (Thrones)
⑷＊＊＊＊＊

〔第二階層〕

⑴叡智の霊 (Spirits of Wisdom)・運動の霊 (Spirits of Motion)・形態の霊 (Spirits of Form)

⑵主天使 (Dominions)・力天使 (Powers)・能天使 (Mights)
⑶主権（領主） (Lordships)・力（徳） (Powers)・権威（権能） (Authorities)・
⑷キュリオテテス (Kyriotetes)・デュナメイス (Dynameis)・エクスシアイ (Exusiai)

〔第三階層〕
⑴人格の霊 (Spirits of Personality)・火の霊 (Spirits of Fire)・薄明の霊 (Spirits of Twilight)・
⑵権天使 (Principalities)・大天使 (Archangels)・天使 (Angels)
⑶権天使 (Principalities)・大天使 (Archangels)・天使 (Angels)・
⑷アルヒャイ (Archai)・アルヒアンゲロイ (Archangeloi)・アンゲロイ (Angeloi)

すべての高次霊階（ヒエラルキー）が一体となって働き、古土星の不可欠な諸段階をもたらしました。それぞれの階層には、いわば特定の任務がありました。その任務が達成されると、別の階層が進化をさらに次の完成度へと推し進めました。私たちが古土星と呼ぶこの壮大な進化の全周期は、そこで創造されたすべてのものと共に、私たちが現在、太陽系宇宙の中で天文学的に観察している「土星」という天体の中に受け継がれています。世界の進化において失われるものは何もありません。かつて存在したものが消え去ることはないのです。それは、感覚世界の外面的な姿の裏に隠されているかもしれませんが、今もすべて存在しています。したがって、古土星は単に過去の遺物なのではなく、あらゆる場所で見出すことができます。例えば、天体としての土星の活動の中にも、そして今後お話ししていくことになる他の多くの関連性の中にも、それは存在しているのです。

私たちの太陽系宇宙における土星は、7つの「古い」惑星（つまり、人間が肉眼で知覚できる惑星）の中で最も外側にあるものです。そのため、その軌道はすべての「古い」惑星の中で最も大きく、土星がその軌道を1周するのに約30年かかることが分かっています。また、土星が独特の形状をしていることも私たちは知っています。私たちは土星を、巨大で光り輝く円の中に吊り下げられている、あるいは静止している球体として知覚します。望遠鏡で土星を見ると、この光り輝く円と、その中で照らし出されている惑星の球体が見えます。

この現象に対する本当に満足のいく科学的な説明はいまだ見出されていませんが、もし私たちが今日の土星を、古土星の知覚可能な「記憶」として見るならば、次のような示唆を受け入れることができるでしょう。『神秘学概論』における古土星進化の記述の中で、シュタイナー博士はこの「惑星」が霊的な性質を持つ「大気」に囲まれていたという事実に言及しています。この周囲を取り囲む霊的大気から、高次霊階（諸階層）はその活動を惑星の本体へと注ぎ込みました。この事実が、現代の土星の「環」の中に記憶として残されているのです。

ここで、古土星という惑星の実際の「本体」は、意志の霊（座天使／トローネ）によって捧げられた「意志の物質（実体）」から創造された、ということを念頭に置かなければなりません。したがって、意志の霊（トローネ）が古土星の指導的な霊であったと言うことができます。なぜなら、のちの段階で熱となった古土星の物質の中には、彼らの物質が存在しており、これは元の物質が経てきたその後のすべての変容の中にも、遺産として受け継がれていなければならないからです。それゆえに、それは私たちの太陽系宇宙における土星の本質的な性質と活動の中にも、遺産として存在しているに違いありません。

言い換えるなら、土星は、意志の霊が自らの活動を一種の宇宙的記憶の中に刻み込んだ特別な領域でなければならず、この活動はどうにかして今もこの惑星から放射されているはずなのです。ルドルフ・シュタイナーの示唆もこれを裏付けており、博士は今日の土星の圏が、かつて古土星という惑星が占めていたのと同じ大きさであることを指摘しました。もし私たちが土星の巨大な軌道を球形の大きな円とみなすなら、これ

を「土星圏」と呼ぶことができます。今日のこの圏は、かつての古土星という惑星と同じ大きさであり、さらにシュタイナー博士は、ここが意志の霊の領域であると指摘しています。

これで、今日の土星の活動に関して、2つの参照基準に到達しました。すなわち、土星は「意志の霊の領域」であり、かつ「古土星という惑星の記憶」であるということです。（のちほど、これらの記述を利用することになります。）

〔精神世界（霊界）との結びつき〕

ルドルフ・シュタイナーの著書『神智学』における記述は、もう一つのアプローチの道を開いてくれます。そこでは、魂の世界と精神世界（霊界）の本質、そして死後の生活において人間の魂がこれらの領域で体験することが説明されています（第三章）。現在の私たちの課題との関連で最も興味深いのは、精神世界の「第三の領域」に関する記述です。そこでシュタイナー博士は次のように述べています。

「精神世界の第三の領域には、魂の世界の原型が含まれている。この世界に生きるすべてのものは、生きた思考存在として存在している。そこには、欲望、願い、感情などの原型が見出される。……人が地球上での人生において、共同体のために、あるいは同胞への無私無欲な献身において成し遂げたすべてのことは、ここで実を結ぶ。なぜなら、この奉仕、この自己献身を通じて、その人は精神世界の第三の領域の反映の中で生きてきたからである。人類の偉大な恩人たち、自己犠牲的な性質を持つ人々、共同体に多大な奉仕をする人々は、それ以前の地上での生涯の間にこの領域との特別な関係への準備を自ら整えたのち、この領域においてその奉仕を行う能力を獲得したのである。」

こうして、私たちは土星のもう一つの側面に到達しました。この精神世界の第三の領域こそが、人間の魂が死後の生活において通過しなければならない「土星圏」なのです。このことは、ルドルフ・シュタイナーの講義録『死から再誕生への生活（死者と共にある生）』（ベルリン、1912-13年）〔※訳註：GA 141『Das Leben zwischen dem Tode und der neuen Geburt im Verhältnis zu den kosmischen Tatsachen』未邦訳〕の中で示されており、博士は『神智学』で与えた内容の宇宙的な側面について語っています。

この土星の第三の側面は、先の2つの側面に「人類との結びつき」を付け加えるものです。それは、始まりにおいて意志の霊から放射され、「人類の偉大な恩人たち」の奉仕の源泉として生きている「意志」にほかなりません。それは人類という家族のメンバーを通じて、新たな始まりへの衝動として働き、かくして「存在と進化への意志」に仕えているのです。

〔意志の力がいかにして物理的存在を創造したか〕

問題は、土星圏の本質であるこの「意志の力」が、始まりにおいていかにして物理的な存在（物質世界）を創造することができたのか、ということです。前回の書簡において、私たちは時間活動の7段階のプロセスを詳しく説明し、土星の領域から力強い意志の力が放射され、それが物理的な存在をもたらしたと述べました。

ここで、意志の霊（座天使／トローネ）が自らの「意志」を供犠として捧げた様子を想像してみましょう。その意志は、当時の彼らの7段階からなる存在全体の中で、最も低次の構成要素でした。この意志がその源泉（意志の霊）から切り離されたとき、それはまだ純粋に魂的な状態であったにもかかわらず、すでにそれ自体で一つの世界となりました。それはカオス的な形態の意志を受け継いではいたものの、「魂の形成物」だったのです。

この意志は進化へと向かって突き進みました。この進化的な意志の力の本質こそが「自我」です。なぜなら、その意志はまだ意志の霊と結びついていた間に、すでに「自我」の性質を獲得していたからです。それゆえに、『神秘学概論』の中では、実際にこの意志の力から、形態の霊（エクスシアイ）と呼ばれる他の霊的存在たちの助けを借りて、人間の「自我」の基礎、すなわち個としての身体が創造された、と読み解くことができます。

その後まもなく、元の魂的な意志の物質は「熱」へと変容しました。ここから、私たちは進化における最も偉大な法則の一つを掴むことができます。すなわち、一方は「個体化」への一歩が踏み出され、もう一方はその結果として、魂的な物質が物理的（物質的）物質というより低いレベルへと下降した、ということです。

〔芸術家の創作にたとえる表現〕

おそらく、私たちはこれを一つの例で説明することができます。精神的に活動しているある人間（例えばアーティスト、詩人、科学者など）を想像してみてください。その人は、創造的な衝動や道徳的なイマジネーションに満ちた魂の世界に生きています。この魂の世界は、肉体と同じようにその人自身のものでありながら、その道徳的イマジネーションを同胞である人間たちに伝えて役立ててもらい、彼らの内的な進化を促したいという衝動を宿しています。

かつてその芸術家自身の内なる世界であったものは、ある意味で切り離され、コミュニケーションへと向かって動き出します。それがコミュニケーションへと向かうとき、読者の輪、聴衆、芸術の称賛者たちと出会うことになりますが、まさにその瞬間、それは文学や知覚可能な芸術作品といった「作者の作品」になります。それは外面的な姿において、自らの魂の源泉から離れ去り、その「物理的な存在」へと参入したのです。

したがって、私たちはすべての根源的な創造とそのさらなる進化を、以下のような「三角形のイメージ」として捉えることができます。

※図2



The Being of the Creator

創造者の存在

	An individual's inner (soul)	The "works" of
The circle	world of moral imagination	creative origin
of	and spiritual activity	創造的根源から
Individuals	個人の道徳的イマジネーションと	生み出された「作品群」
個人の環	精神的活動に満ちた	
	内なる（魂の）世界	
	↓	
	Movement toward "communication"	
	「コミュニケーション（伝達）」への動き	

〔土星の活動の二面性と人間の意志への影響〕

私たちは今や、土星を次のように見ることができます。私たちの太陽系の土星という巨大な圏は、すべての魂の形成物の原型が住まう領域です。これらの原型の背後には、意志の霊（座天使／トローネ）から発した「意志」が隠されています。私たちはこれを「父なる意志」と呼ぶこともできます。この意志は、すべての魂の生命の霊的な核心です。それは、完成に向かって努力する人間の魂の生命の本質でもあります。

この意志が意志の霊の存在という自らの源泉から切り離され、個々の人間の中に植え付けられたとき、それは先に述べた偉大な宇宙の法則の下に置かれました。そして、個々の人間が完成に向かう進歩の様々な段階を経ていくにつれて、元の魂的な意志の物質は脱落し、あるいは殻のように剥ぎ取られて、物理的な物質となりました。したがって、私たちがこの意志、あるいは土星の活動を見る際には、人類の魂の世界のような「魂の世界との結びつき」と、「物理的な物質への影響」とを区別しなければなりません。

〔人間の意志の深層と土星の言語〕

まず、魂の世界の原型、すなわち土星が、人間の魂の世界においてどのように「意志」として働くかを考えてみましょう。それは特に人間の「意志」の領域において働きますが、この領域において私たちはまだ深く眠っています。

私たちは「思考」においては完全に目覚めています。「感情」においては、昼の意識の明るい光からすでに遠ざかっており、そこでは夢を見ています。そして「意志すること」にいたっては、昼の意識ではまったく捉えることができません。なぜなら、それは未知の衝動、情緒、欲望、願いがうごめく深い海だからです。人間の魂の生命のこうした深淵を突き抜けることができないという人間の精神の無能力さが、人間の本質に対する多くの誤った判断を生んできました。

もし私たちが、人間の「意志すること」の領域に対応する宇宙的な片割れを探すなら、土星へと行き着きます。人間の魂が地上生活へと下降してくる瞬間における土星の特定の配置は、常にそれらの意志のより深い領域を映し出す鏡となっています。それが獅子座にあろうと魚座にあろうと、あるいは他の惑星とコンジャンクション（合）やオポジション（衝）にあろうと、それがどこにあろうとも、その配置はその人自身の意志することの秘密を明らかにしているのです。

私たちは、土星が黄道十二宮を通過する際の「土星の言語」を読めなければなりません。そして、これらの書簡はまさにこの言語を理解するために書かれたものです。例えば、土星が獅子座にあるときに地上生活

へと下降した人がいるとすれば、私たちはこの星座について述べられてきたことを受け止めると同時に、いわばその人のより深い意志の衝動に耳を傾けることができます。もし私たちがエゴイズムなしにこれを行うことができれば、人生における多くの運命を修正することができるでしょう。そうすれば、私たちは地上での人生における、より高次な課題や個人の霊的な目的を知覚できるようになるはずです。

そのような人物にとって、宇宙の中心にあるすべての存在するものの隠された宇宙的調和を体験し、それに耳を傾け、この「心臓による知覚」と「頭脳の力」とのバランスをもたらすことこそが、より高次な課題であり、より深い人生の衝動であるかもしれません。これには人生における巨大な闘争が伴うかもしれませんが、他の惑星の言語に応じて、それぞれの個人のケースで確実に異なっているはずです。様々な黄道十二宮における土星の配置の多くは、第五信および第六信に示されています。

〔過去世・死後・そして新たな誕生を織りなす土星の糸〕

しかしながら、個人の出生図における土星は、それ以上の多くのことを明らかにすることができます。先ほど、土星のイメージの中に現れる「人間の人生における高次な課題」について言及しましたが、この課題の成就が、たった一度の短い地上生活の中で達成されることはほとんどありません。人間の「自我」が自らに求められていることを成し遂げるためには、多くの地上での生涯、すなわち転生が必要であり、この転生から転生へと糸を紡いでいるのが土星なのです。したがって、魂が転生へと下降する時点における土星のイメージの中には、魂の最も内なる課題や召命だけでなく、過去世の背景をも現れてきます。

土星は、いわば誕生の門の上で輝く「魂の星」であるだけではありません。死の瞬間にも再びそこに立ち会い、私たちの個々の地上生活の果実を回収するのです。誕生の門において、土星はこれから前方に横たわる人生の高次な課題を分配し、死の境域において、それが善であれ悪であれ、人生の課題の成就であれ失敗であれ、過ぎ去った人生の果実を集め、収穫します。

そして、人間の魂が精神世界（霊界）へと入るとき、土星は、過去の地上生活の間にその人が多かれ少なかれ作り上げてしまった自分自身の「歪んだ姿」に対する、絶えざる審判のように、その魂の原型を前方に掲げて進みます。その後、ある程度の時間が経つと、魂は地上での新しい人生へと下降することを決意します。今度は誕生の門を通過する際に、土星が再びそこに立ち、前回の死から今回の新しい誕生までの「死者と共にある生」の間に付け加えられた、新しい視点や決意が含まれた魂の原型を掲げるのです。

確かに、地上で生きている間のほとんどの人は、誕生の瞬間の前にこのような土星の存在があったことなど意識していません。しかしそれは、魂の深層にある未知の意志の力として、人間の心身の組織の中で活動しているのです。

〔フランシス・ベーコンのホロスコープを例とした過去世解釈〕

一つの例を挙げれば、この土星の側面がより明確になるでしょう。フランシス・ベーコンは1561年1月22日に生まれました。そのとき、土星は「牡牛座」の位置にありました。この配置は、彼の過去世の背景を明らかにしています。

これまでの書簡で牡牛座について述べたことを思い出してみましょう。牡牛座は、力強い創造的な「言葉」、すなわち宇宙の言葉（ロゴス）と結びついています。私たちはその背後に、内なる魂の運動から外面的な運動（物理世界における現れの多様性）を創造することを任務とする「運動の霊（キリオテテス／デュ

ナメイス）」の領域を見出すことができます。したがって、牡牛座はそこから強い運動の力とパワーが放射される宇宙の球層なのです。

これが土星において凝縮されています。このことは、フランシス・ベーコンが過去世において、自らの内なる運動によって周囲の世界を貫くパワーを持った強力なパーソナリティであったこと、とりわけ「言葉」、すなわち文学や科学などに深く関わったパーソナリティであったことを示しています。

この土星に対して、「蠍座」に位置していた火星がオポジション（衝／180度の反対位置）を形成していました。これが土星にまた別の顔を与えています。これまでの書簡でも言及したように、かつては「鷲」であった蠍座は、宇宙における惑星・火星の進化の衰退と結びついています。したがって、この土星と火星のオポジションは、ある国の力強く、輝かしい指導者であったことを示していますが、同時にその輝かしさの中には、退廃した火星の力と結びついた「ある種の闇」があったことも示しているのです。

〔宇宙の歴史家としての土星と、身体の骨格に潜む意志の力〕

土星は、その魂が（前世を終えてから今回の誕生までに）精神世界（霊界）にどれほどの期間いたのかという「時間的間隔」を見つけ出すためのガイドにさえなり得ます。フランシス・ベーコンのケースでは、彼の前回の地上生活の時期として、私たちを西暦9世紀へと連れ戻してくれます。このことはルドルフ・シュタイナーの示唆によっても裏付けられています。シュタイナーは霊視に基づき、この魂が西暦9世紀の初めに、アラビア文化の全盛期と結びついた強力な君主として転生していたことを明らかにしました。

これらの書簡において、私たちはまだ、過去の地上生活へと遡るこの土星の側面について、その「性質的な観点」からも「時間的な観点」からも完全に詳しく説明できる段階には達していませんが、土星の本質について語る以上、このことには言及しておかなければなりません。

シュタイナー博士が呼んでいるように、土星は「宇宙の偉大な歴史家」なのです。それは宇宙の偉大な記憶であり、それゆえに、歴史の領域に属するすべてのものは土星の活動によって貫かれています。人間の霊的なバイオグラフィー、世代間の結びつき、諸民族の歴史、さらには宇宙の歴史そのものが、土星の記憶の中で生きています。この惑星から放射されているものこそ、まさに「神の意志」にほかなりません。土星は、宇宙と人類における過去の進化の諸段階を記憶にとどめることによって、たとえそれが悲劇や大惨事を経るものであったとしても、迷走する現代を、大いなる進化計画という「神が意図された道」へと引き戻すのです。

〔物質世界における土星の顕現と鉱物界〕

このように、土星の活動、すなわち魂の世界の原型の領域は、人間の魂の「意志すること」の中に現れます。この活動は、意志が自らの源泉（意志の霊）から離れ去り、すべての魂の形成物の原型の領域となったことで誕生した「物理的な世界（物質世界）」の中にも見出すことができます。私たちはこの発展について上で説明しようと試み、そこにおいて、個（個別的なもの）の創造には「作品（形となったもの）」を生み出すことが不可欠であることを見出しました。

今や私たちは、物理世界のいたるところで土星の存在を見出すことができます。土星はその世界の「最も内なる本質」であるに違いありません。なぜなら、意志の霊（トローネ）の根源的な意志が物理的な「熱」へと凝縮し、それがのちにすべての物理的な実体（物質）の基礎となったことを見てきたからです。しかし、意志は物理的な物質の中にいわば隠されており、私たちはそれを感覚で知覚することはできません。

おそらく読者の多くは、例えば高山や海岸などで、植物が一切生きることができない「完全に不毛な岩場」を目にした経験があるでしょう。そのような存在の言語に非常に深く耳を傾けるとき、私たちは、生きている存在の中に意志の力として現れるいかなるものよりもはるかに強い、「絶対に動かない、峻厳な意志」を体験します。私たちがそのような風景の中に立っている間は、この融通の利かない頑固な意志を直接的には体験しないかもしれませんが、そのような体験を記憶の中で思い起こすとき、それは特にその「威力」と「卓越性」を明らかにします。これは、人間の魂における単なる主観的な反映（思い込み）ではなく、したがって無意味で非現実的なものではありません。それは一つの「霊的な事実」であり、意志の霊（トローネ）に由来する意志の中に、物理的存在の起源があることを明らかにしているのです。このことは、不毛な岩だらけの風景における鉱物界に特に顕著に現れており、事実、物理的・肉体的な存在を持つあらゆるものの中に存在しています。この魂的な現象において、私たちが直面しているのは、まさに土星の活動の領域なのです。

〔人間と動物の骨格に働く土星の力〕

私たちは、物理的な物質の中に受け継がれたこの意志の力を、自らの魂の能力によって知覚することができます。なぜなら、私たちの肉体において、私たちはその力と親縁関係にあるからです。自然界において、私たちはそれを特に「鉱物界」との関連で知覚します。鉱物界は、地球という有機体全体の硬い「骨格」のようなものです。土星の力はこの領域に最も純粋な顕現を持っているため、それらは人間や動物の骨格の力学的な基礎の中で活動しています。

骨格は、根本的に肉体の輪郭を描き出すものです。骨格のない人間の身体がどのようなものになるか、私たちは想像することもできません。身体の主要な輪郭（頭部、体幹、四肢）は骨格によって示され、軟らかい物質（肉など）で満たされています。地上における人間の存在の「原型の理念」を内包しているこの「輪郭を描く力（形態をつくる力）」は、土星という惑星とその圏からやってきます。それは頭部、特に「頭蓋骨」を形成し、頭蓋骨が私たちの頭上にある球形の宇宙の像に見えるようにします。それは、宇宙から滴り落ち、今なおその起源の姿をとどめている「種（種子）」のようなものです。

この頭部から、有機体は地球に向かって下方に成長します。頭部においては、軟らかい物質が頭蓋骨の中に閉じ込められていますが、下に行くにつれて、下方の骨は軟らかい物質に囲まれるようになります。頭蓋骨の「球形の傾向」は、地球の中心を指し示す「放射状の傾向」へと変容します。動物においては、骨格の方向は地球の表面に対して多かれ少なかれ水平です。しかし人間において、このラインは垂直であり、直立した姿勢をとります。

全体宇宙の写しに見えるものから自らの存在を方向づけ、人間にあってそれを「直立した姿勢」へと転換させるという、この生理学的な傾向の中には、巨大な「意志の力」が隠されています。それは人間の存在を霊的な宇宙へと結びつけているのです。それは「父なる意志」の生理学的な表現であり、人間を宇宙の種のように解放し、人間がいわば「逆さまの植物」のように地球の存在へと成長し、神の意図された課題を果たすことができるようにしています。

これにより、私たちは魂の生活において出会ったのと同じように、自然界における土星の活動に出会うことになります。土星は「境域の守護者」であり、私たちの魂の存在を物理的な存在へと導き入れます。それは、私たちの霊的な起源、すなわち私たちの原型と私たちを結びつけている「糸」を守り、また死の瞬間には、私たちを地上界から精神世界へと再び召還するのです。

第十書簡 - 1945年1月
「惑星世界の「本質」— 木星」

●基本的な視点

惑星世界の本質のうち木星に焦点を当てた書簡。
前信の土星に続き、
ルドルフ・シュタイナーの『神秘学概論』と『神智学』を基に、
木星の霊的・宇宙的な意味を明らかにする。

木星を単なる「幸運の星」ではなく、
宇宙的生命力の源泉と人類の救済の担い手として
深く理解するための基礎を提供する。

木星は生命・知恵・癒やし・統合の星。

古太陽周期で生命を人類に授けた叡智の霊の領域。
死後には「生きた統合」の世界、
地上ではエーテル体として肉体を維持・向上させる。
人類の課題は、神々から離れて生じた不完全さを、
エーテル力によって癒やし、再び神聖な原型へと近づくこと。

土星が「意志・記憶・個体化の番人」であるのに対し、
木星は「生命・知恵・癒やしの仲介者」として位置づけられる。
次信以降では火星、太陽など他の惑星が同様に扱われる予定。

●要点

1）木星の根本的な位置づけ

木星の領域（軌道を含む空間）は、
古太陽周期（古代の太陽進化）の記憶・反復として存在する。

古太陽周期の決定的な出来事：
叡智の霊（キュリオテテス／主天使）が
人類の祖先に生命力（エーテル体）を注ぎ込み、
物質を「熱」から「空気・光」へと変容させた。
木星は「生命の源泉」「叡智の霊の居住地」であり、
宇宙における生きた統合の象徴。

2）霊界（死後の世界）との結びつき

シュタイナーの『神智学』によれば、
魂は死後、以下の領域を通過する：

・土星領域：魂の世界の原型（第3領域）

・木星領域：生命の原型（第2領域）
→ ここでは個々の生命が解き放たれ、
「生きた統合・全体性」として宇宙を流れ巡る。
地上ではこの反映として「畏敬の念・宗教生活・調和への崇敬」が現れる。

3）エーテル体（生命体）の本質と役割

木星の最も重要な地上への顕現がエーテル体である。

・肉体の建築家：
胚発生から死まで、肉体を構築・維持・修復する。
・時間の体：
時間の中でしか働けない。
毎晩睡眠中に宇宙の原型を肉体に刻印し、リフレッシュさせる。
・仲介者：
神聖な宇宙的原型（神々の像）と、
物質に深く堕ちた人間の肉体の間を取り持つ。
病気・死・不完全さに対抗する癒やしの力。
・思考の源：エーテル体に宿る宇宙の知恵が、人間の「思考能力」の根源。
・将来の展望：
エーテル体が物質の体から解放され、
創造的な力（新しい宇宙の構築）となる時代（木星紀）。
エーテル体は人類の「永遠の健康と生命」の担い手であり、
人間が神々から離れて生じた「大きな病気」を癒やすための道具である。

4）歴史的人物に見る木星の働き（出生時の配置によるエーテル体の特徴）

〔人物〕
木星の位置
主な特徴・人生への反映

〔トマス・モア〕
牡羊座（胎児期に魚座-牡羊座）
宇宙的知恵への献身、不屈の信念、人文主義。冷静さと自己統制

〔ダンテ〕
牡牛座（土星と合）
創造的な「言葉（ロゴス）」、『神曲』に見る普遍的な命名力

〔レッシング〕
牡牛座-双子座
個人の自由・論理的思考、輪廻思想への到達

〔ワーグナー〕
蟹座（火星とオポジション）
強い形態化の力、北欧神話の楽劇、民族霊と個の意識のドラマ

〔ルドルフ・シュタイナー〕
蟹座→獅子座
規律ある思考と包括的な霊的メッセージ、思考の器に神聖な内容を注ぐ

〔ラファエロ〕
獅子座→乙女座
愛の能力、聖母子像に現れる「永遠の生命の誕生」のイマジネーション

これらの例は、木星が個人のエーテル・オーラ（生命力の質）を決定し、
人類全体の文化的・霊的進歩に寄与する働きを示している。

●本文

木星という惑星の働きを理解するために、私たちは今回も、ルドルフ・シュタイナーの2冊の著書『神秘学概論』と『神智学』における示唆を土台にして研究を進める必要があります。

私たちは、現在の太陽系における土星が、かつての「古土星紀」の反復、あるいはいわば記憶の像であるという結論に達しました。

そこで次に生じるのは、他の惑星の領域も同様に、それに続く世界進化の周期の記憶をその内に宿しているのではないか、という問いです。

たとえば、木星の領域（すなわち、この惑星の公転軌道に囲まれた空間）は、土星の次に位置しています。そのため、この領域は、神秘学の用語で「古太陽紀」と呼ばれる、進化における第2の大きな周期と結びついているのではないか、と考えることができるのです。

これまでの一連の書簡において、私たちは「古土星紀」に続く進化の周期について、まだ詳細には語ってきませんでした。そのため、ここでは『神秘学概論』に詳しく記述されている「古太陽紀」について、ごく短い特徴づけを試みることにします。

人間の肉体的な雛形は、古土星において創られました。当時はまだ、生命も意識もありませんでした。それはまるで、周囲のより高次の存在たちの活動を映し出す、自動人形や鏡のようなものでした。この最初の人類の祖先が創られ、ある種の完成に至った後、惑星は再び純粋な霊的形態の存在へと溶解しました。すべての高次の諸霊は、霊世界のより高い領域へと退いたのです。これにより、霊視的な知覚によっても肉体的な性質のものが一切認識できなくなる、一種の「宇宙の夜」が到来します。

この「宇宙の睡眠」の期間が終わりを迎えた後、のちに「古太陽」と呼ばれる新しい進化の周期が始まりました。その初期の段階では古土星紀の反復が行われ、かつて古土星に存在していたのと同じ形態の、人間の肉体的な雛形が再び現れました。

その後、まったく新しい衝動が進化の針路を変えました。人類の祖先の肉体的形態に、生命の力が浸透したのです。叡智の霊（キュリオテテス）によってもたらされたこの生命力の流入によって、惑星自体の物質にいたるまで、あらゆるものが変化しました。それまでは「熱」だけで構成されていた物質が、この生命力の浸透の時期に、熱の一部が変化、あるいは凝縮して「空気」や「光」となったのです。（この惑星進化のその後の周期において、叡智の霊以外の他のヒエラルキーの霊たちも、肉体とエーテル体から構成されるようになった人間の祖先に働きかけました。）

私たちが今ここで心に留めておかねばならないのは、この周期における決定的な衝動が、自らの存在の一部を犠牲にして人類の「エーテル体」を創り出した、叡智の霊（キュリオテテス）からもたらされたという事実です。

ここで、シュタイナー博士が『神智学』の中で記述している、死後の生活における人間の魂の体験へと話を戻しましょう。

前回の書簡では、土星の領域と結びついている、いわゆる「霊界」の「第3の領域」についてお話ししました。そこでは、魂は「魂の世界の原型」を体験します。それに先立つ「第2の領域」で、魂が体験するのは「生命の原型」です。ルドルフ・シュタイナーは、この領域について『神智学』で次のように述べています。

「次の領域は、地球世界の『共通の生命』が、思考存在として流れている領域である。いわば、霊の国の流動的な要素として流れている。私たちが肉体に宿って世界を観察している間は、生命は個々の生きた存在の中に閉じ込められているように見える。しかし霊の国では、生命はそれらから解き放たれ、さながら生命の血液のように国全体を流れ巡っている。そこでは、生命はあらゆるものの中に存在する『生きた統合』なのである。」

シュタイナー博士は、連続講義『死から再誕生にいたる人生（ベルリン、1912〜13年）』の中で、この領域こそが「木星」という惑星の領域であると述べています。

こうして、私たちは2つの視点を得ることができました。1つは、魂が死後に「生命の原型」を体験する領域が「木星の領域」であるということ。もう1つは、生命が肉体的形態の中に参入し、それを浸透した宇宙的な瞬間が「古太陽紀」であったということです。

さらにシュタイナー博士は、現在の私たちの太陽系における木星の領域は、物質的存在に生命力を授けた「叡智の霊（キュリオテテス）」の居住地である、とも指摘しています。

これで、私たちがなぜ惑星木星とその領域を、人間および宇宙における「生命力の源泉」と見なすことができるのかが、非常に明確になったかと思います。この事実について、私たちは続くページで詳しく展開していくことにいたします。

私たちは今日、物質という肉体的な世界について、精緻な知識を手に入れた時代に生きています。それは鉱物界の世界であり、現代科学が徹底的に探究してきた「命なき物質」の世界です。しかし、生命の世界はいまだ大きな謎に包まれています。自然界のあらゆる場所にその痕跡や現れを経験することはできても、それがどこから来るのかを私たちは知りません。すべての生命組織において、物質を単なる鉱物的な反応や化学活動から引き上げるそれらの力を、私たちはまだ捉えることができていないのです。生命力は肉体の感官（五感）から隠されているため、それらで知覚することはできません。現代科学がこれまでに用いてきた方

法では、これらの力の領域へと浸透するには不十分ですが、精神科学（人智学）は、それを霊視能力によって知覚できる「超感覚的現実」として語ります。さらには、生きている組織の生命の活動主体として、「エーテル体」あるいは「生命体」についてさえ言及しているのです。したがって、私たちは「生命力はここにある」とか「あそこにある」と断言することは到底できません。精神科学の指示に従って自らの存在を整え、生命力を知覚できる器官へと高めていくことしかできないのです。しかし、私たちは自らの思考能力によって、これら生命力の活動を理解しようと試みることはできます。これこそが、高次の知識へと至る道における、準備の第一歩なのです。

問いはこうです。「生命とは何か？ エーテル体、あるいは生命体とは何か？」ルドルフ・シュタイナーはそれを、肉体の「建築家」と呼んでいます。あらかじめ想定された計画に従って、肉体を構築していくもののことです。ここで私たちは次のように問うことができます。「なぜ肉体は、その形態の計画を担う、もう一つの高次の構成要素の活動を必要とするのだろうか？」古土星において肉体が創造されたことについて読めば、この肉体は神々の活動と意図の「完全な像」であり、あるいはそれを映し出す「鏡」であった、という印象を抱くことができます。そうであれば、肉体はその存在自体のなかに、すでに自らの形態の計画を刻印されているのではないか、とも想像できるでしょう。この形態を創り出すために、なぜ別の「体」が活動しなければならないのかを理解するのは、一見難しく思えるかもしれません。それでも、古土星、古太陽、古月、地球といった、すでに述べた段階を経ていく私たちの宇宙の「進化全体の意味」と「霊的な目標」を理解しなければ、この謎を解き明かすことはできません。

遥かな始まりである古土星において、人間の肉体的な雛形が神々によって創られました。この雛形は、神々自身の存在の写し絵でした。このように、すべての創造のより深い意味は、宇宙における「霊的ヒエラルキー、あるいは神の模像」であるような存在を創り出すこととして明らかになります。しかし神々は、霊界の存在たちをただ「機械的」に映し出すだけの、自動人形や鏡のようなものを創りたかったわけではありません。神々が望んだのは、ある瞬間に「自己意識」を獲得できる存在を創ることでした。その存在は、映し出されるだけの被造物の状態から、創造者の状態へと上昇することができるでしょう。なぜなら、霊世界の像であるという状態が、自己意識という状態と結びつくことになるからです。そのとき、霊的宇宙、すなわちすべての階層の霊的存在たちは、自らの像であるだけでなく、それについての自己意識的な知識を持つことができる「人類」という存在を通じて、自分たちの存在を完成させ、高めることになります。こうして、創造は「自己認識」のなかで完成へと至ります。霊界の存在たちの合唱は、自分たち自身の存在と活動を体験することになるのです。

人類の土星における祖先として創られた存在は、自己意識へと向かうための媒体となる運命にありました。しかし、自己意識とは、最初は宇宙の意識、すなわち神々の意識に対する「矛盾」です。したがって、そのときに誕生したこの土星の存在は、自らの「自己」へと向かう長い旅に出なければなりませんでした。それは、神々から一歩一歩「離れていく」ことを意味していました。そしてそれらのステップは、古土星の小さな周期のなかに、すでに示されています。たとえば、土星という惑星が多くの個別の「熱存在」へと分割され、それが今日の人間の肉体の起源となったことは、すでに「自己の孤独」へと通じる、長い道への第一歩だったのです。

ここで、私たちは「肉体（シュタイナーのいう霊的な肉体の雛形）」について、非常に明確な区別をしなければなりません。それは、諸階層の霊の存在と活動の「像」であるということです。像である以上、それは神々の存在の一部ですから、神々から切り離されて消え去ることは決してありません。しかし、この体は地球上の感官（五感）には見えません。いわば神々の領域に住まう、人類の「最高次の原型のイデア」だからです。

これに対して、自己意識、すなわち自我意識への道を歩むための乗り物となった体は、地球の固体、液体、気体、そして熱の物質から構成されている「物質の体」です。この物質の体は、人類の原型である霊的な肉体の刻印を帯びてはいるものの、一つの「自己」となるために、その起源から、つまり原型的な起源である神々から遠く離れてしまいました。これは必要なことだったのです。

神々から遠ざかるということは、物質の体へと深く沈み込むにつれて、私たちがますます不完全になっていくことを意味します。それは病気や死を経験することを余儀なくさせます。これこそが、人類の物質の体が背負った運命なのです。しかし、もし私たちの内側のどこかに「永遠の健康と生命」という現実が息づいていなければ、私たちは病気や死を経験することさえできなかったでしょう。人類が神の意志による起源から離れれば離れるほど、通常認識されているよりもはるかに広い規模で、病気と死が人類を襲うことになりました。地上に存在するあらゆる悲惨さ、あらゆる不完全さ、地上の課題をやり遂げる能力の欠如は、神々から自己へと至る道すがら、人類を捉えた「病気」の一部にすぎないのです。

もし私たちが、自己（「自我」）を獲得したのちに、将来、自らの存在の神聖な像を、そしてそれとともに諸階層の霊的宇宙全体と物質世界の像を一歩一歩取り戻すことができるなら、私たちはこの大きな病気を「癒やす」ことができます。そのとき、病気とは無縁の神々が私たちの内に、そして私たちを通して生きることになります。神々は私たちに「永遠の若さと生命」を与え、私たちは神々に「神々自身の存在の自己意識」を返すことになるのです。

不完全さの深淵に落ちてしまったものと、宇宙的な原型との間をとりもつ「仲介者」が、一つだけ存在します。それが「エーテル体」です。エーテル体は、地上での生涯を通じて、人類の宇宙的形態という神聖な像を受け取り、絶えずそれを受け取り続けながら、地上の体へと織り込んでいきます。こうして、エーテル体は衰退と病気の力に抗して働くのです。

生命が胎児に宿ったその瞬間から、エーテル体は宇宙の記憶という途方もない源泉から体を構築していきます。個々の胚の発達において、全人類の系統発生が繰り返されるのはこのためです。エーテル体にこれができるのは、人間発達の最も古い段階の歴史をその内に含んでいるからです。こうしてエーテル体は、人間の内に宿り、人間をさらに霊的起源から遠ざけようとする「神を否定する力」に立ち向かいます。

エーテル体は、堕ちていく人間の形態をすぐに霊的原型へと戻せるわけではありません。一歩一歩、そして幾度も幾度も繰り返すことによってのみ、それは可能となり、病気と死の力を克服していくのです。毎晩、エーテル体は宇宙の原型的な形態と衝動を新しく受け取り、それを物質の体へと何度も繰り返し刻印します。私たちはそれを、睡眠のあとに健康をもたらす、心身をリフレッシュさせる力として実感します。このように、エーテル体はその仲介という課題を「時間の中」でしか成し遂げられません。それゆえ、私たちはエーテル体を「時間の体」と呼ぶこともできます。なぜなら、時間の中で初めて、堕ちた物質の救済を成し遂げ、それを原型的な像へと復元することができるからです。

エーテル体の持つ忍耐強さと記憶の力は、その中に「普遍的な宇宙の叡智」の巨大な世界が存在していることを示しています。エーテル体が「叡智の霊（キュリオテテス）」によって創られたということを想えば、これも理解できるでしょう。宇宙の遙かな始まりから神々の思考を、そしてこの宇宙の最終目標についての思考をその内に抱いているもの、それこそが「叡智」なのです。神々の思考は、一種の反映としてエーテル力の中に生きているため、それらは人間の「思考」の中にも生きていると考えることができます。人間の内に「思考の衝動、思考の能力」として生きているものは、エーテル体が持つ身体構築や再生の活動の、いわば「もう一つの側面」にすぎないのです。

地球進化の大きな周期の間、エーテル体は主に、物質の体が衰退していくことや、宇宙の起源からあまりに強く疎遠になってしまうことから保護する役割を担ってきました。しかし、人類においてそれほど古い歴史を持たない「思考の発達」は、エーテル体（あるいは、木星領域に由来する力と言い換えてもよいでしょう）が、単に過去を保存するだけでなく、宇宙の「未来」にも属していることを示しています。

現在、エーテル体は物質の体のなかに完全に組み込まれています。古い時代にはこれとは異なり、エーテル体の一部は物質の体の外に飛び出していました。そのため、人間は宇宙の高次の霊的領域を知覚することができたのです。しかし、当時は自己意識がまだ完全に達成されていなかったため、それは夢のような方法でしかできませんでした。

将来、エーテル力が物質の体から解放され、もはや体の構築のためだけに縛られるのではなく、宇宙の記憶と予見の輝かしい光を展開する時が再びやってきます。そのとき、エーテル力は「自我」の力によって浸透され、単なる反映の能力だけでなく、神々の大いなる「イマジネーション」に従って新しい宇宙を構築することのできる「創造的な能力」を開花させるでしょう。これこそが、人類の真の、霊的な姿となります。ヨハネの黙示録の言葉では、これは「新しいエルサレム」と呼ばれているものです。

これで私たちは、ルドルフ・シュタイナーが『神秘学概論』の中で述べている次の言葉を理解することができます。すなわち、現在の木星は、地球という惑星の進化に参加するには進化しすぎており、精神科学が未来の偉大な進化周期として「木星紀」と呼ぶ時代になって初めてその活動を展開できるような、高次の存在たちの居住地であるということです。これらの存在は、現在、地球の存在にただ「触れている」か、あるいはその上に「漂っている」にすぎません。その一方で、エーテル力は生涯を通じて、生きている組織が自然に腐敗していくのを防ぐ、治癒とリフレッシュの力として働き続けているのです。

ここからは、いくつかの歴史的な出生天宮図を通して木星の働きを確認し、それがこれらの人物のエーテル的な本質の現れ、いわば彼らの「エーテル・オーラ」の指標としてどのように現れているかを見ていくことにしましょう。また、木星が、人間の生活における単なる個人的な運命の範疇にとどまらず、人類全体の努力や進歩に結びついているあらゆる事象の中にどのように現れるかも見ていきます。それは、たとえそのような癒やしの精神の業を創り出した人物がとっくに死の境域を越えて去ってしまっていたとしても、人類の霊的生活にとって有益であり、尊いものであり続ける類のものです。

木星は常に、シュタイナー博士が著書『神智学』の中で、死後の生活に関連して次のように述べている領域として自らを現します。

「……そこでは、生命はあらゆるものの中に存在する『生きた統合』なのである。地球に生きている間、人間にはこれの『反映』だけが現れる。この反映は、人間が宇宙の全体、統合、そして調和に対して捧げる、あらゆる形の『畏敬の念』の中に表現される。人類の宗教生活は、この反映から生じる。人間は、存在のすべてを包み込む意味が、移り変わりゆく個別のものの中にはないということに気づく。彼らは移り行くものを、永遠にして調和に満ちた統合の『象徴』、あるいは写し絵として見なす。彼らは畏敬と崇拝の念をもってこの統合を見上げる。そしてその前に、宗教的な儀式や典礼を捧げるのである。……宗教生活の果実と、それに結びつくすべてのものが、この領域に姿を現す。……自分が全体の一員であると知る能力は、ここで発達する。」

トマス・モア（1478年2月7日生まれ）：

トマス・モアの出生時、木星はちょうど「牡羊座（白羊宮）」に入ったところでした。彼の胎児期の全期間を通じて、木星は黄道帯の中で「魚座」の像が「牡羊座」と手を結ぶその領域でループ（留の運動）を描いていました。総じて、それは非常に際立った位置にありました。

この木星の位置は、トマス・モアのエーテル組織の根源的な条件を示しています。この瞬間、木星は「叡智の霊（キュリオテテス）」自体の活動と存在が背後に息づく「牡羊座」の衝動を集めています。こうして、木星の持つ宇宙の叡智と創造的な生命力は、すべてを包み込む「宇宙的思考」の領域へと、さらに高く引き上げられるのです。私たちはこのことを、モアの人生への態度や、知識への探求の中に見出すことができます。

この木星が示すような生命力を持っていた彼は、普遍的な叡智に従って自らの人生を捧げ、秩序づけるほかありませんでした。したがって、彼がまだわずか19歳、ロッテルダムのエラスムスがイングランドにやって来た時代に、すでに「ヒューマニズム（人文主義）」の徒となったことも驚くには当たりません。その後の人生においても、彼が自らのあらゆる行動を、この普遍的な叡智の観点から決断していった様子を見て取ることができます。

彼は狂信者ではなく、実際にはその真逆であり、周囲で何が起ころうとも、絶対的な冷静さと自己統制の態度を保ち続けました。彼は、その力強い角を持つ牡羊のように、自らの概念と信念において不屈であり、揺るぎませんでした。死の脅しでさえ、彼を変えることはできませんでした。彼は狂信的になることも恐れることもなく、自らのアイディア（理想）のために死ぬことができたのです。トマス・モアの人生態度は、「牡羊座の木星」の理想的な描写そのものです。

ダンテ（1265年5月生まれ）：

ダンテが生まれたとき、木星は「牡牛座（金牛宮）」にあり、そこで土星と合（コンジャンクション：重なる位置）にありました。そのため、波乱に満ちた運命（土星）の重みが押しつぶすように働いているとはいえ、非常に際立った位置を占めています。

「牡牛座」は、「運動の霊（デュナメイス）」の存在と活動の表現です。この指標から、ダンテの根源的な人生の傾向が、神々の創造的な「言葉（ロゴス）」、そしてこの星座やその背後にある霊的領域に起源を持つ人間の「言葉」へと、強く方向づけられていたことを読み取ることができます。この普遍的な「言葉」が、生命の力としてダンテの中にどのように存在していたかを示すのに、多くの説明は必要ないでしょう。『神曲』の詩人として、彼は本当に「あらゆる事物と存在の永遠の名前」を知っていました。なぜなら、それらは彼のエーテル体の中に書き込まれていたからです。

当時（中世）の政治的混迷と結びついたダンテの悲劇的な運命は、牡牛座の土星によって表現されています。そこでは、創造的な「言葉（ロゴス）」が意志の領域へと下降し、超個人的な（大きな歴史の）観点から全人類にとって必要とされる、多様な地上条件の形態を、力強い一打一打によって鍛え上げているのです。

ゴットホルト・レッシング（1729年1月22日生まれ）：

レッシングが生まれたとき、木星は「牡牛座」と「双子座」の星座の間に位置していました。彼の胎児期の大半を通じて、木星は双子座の始まりの星々の間でループを描いていました。「双子座」は、宇宙における個体化の力の宇宙的な表現です。その霊的な背景には、人間の形態が「自我」の器となるにふさわしくな

るまでそれを準備した「形態の霊（エクスシアイ）」がいます。レッシングの木星にはこれらの衝動が浸透しており、これもまた彼の人生の態度の中に明確に見出すことができます。

彼は（ドイツの）「最初のジャーナリスト」であったと言えますが、同時に当時の霊的・文化的生活についての非常に広く包括的な知識を持っていました。しかし、彼の最も強い人生の衝動は、「個人の自由」のための闘いでした。彼は、論理的思考と教育への真摯な情熱を通じて、輪廻転生の思想に到達した、近代における数少ない人物の一人です。その最後の戯曲『賢者ナータン』の中で、彼はすべての宗教、宗派、人種が、一つの世界的なキリスト教精神の中に統合されるという確信を表現しました。地上の生活という惑わされやすい外見にもかかわらず、人間存在の永遠の核心を認識する才能を、彼はみずからのエーテル体の中に、生命の原型の世界から受け継いでいたのです。

リヒャルト・ワーグナー（1813年5月22日生まれ）：

ワーグナーが生まれたとき、木星は「蟹座」にありましたが、当時「山羊座」にあった火星とオポジション（真向かいに位置するアスペクト）を形成していました。蟹座の木星は、強い「形態化への傾向」を示しています。火星のオポジションがこの人物の中に矛盾を生み出しているため、このケースは非常に興味深いものです。

火星が示す彼の魂の力は、少なくとも彼の若い頃はまだ完全に形づくられておらず、ほとんど爆発的で多血質的なものでした。しかし、彼のエーテル体の原型的な力は、厳格な形態を追い求めており、彼はそれを実際に自らの楽劇（楽劇王としての作品群）の中で達成したのです。それでも、宇宙的な領域に強く生きすぎていて地上の形態へと容易に変容させられなかった自らの魂の力を克服するまで、彼はほぼ生涯にわたって闘い続けなければなりませんでした。

また、蟹座の木星は、「大天使（民族霊）」の領域との特別な結びつきをも示しています。これもまた、北欧神話の壮大なイマジネーションの糸を紡ぎ出したリチャード・ワーグナーの楽劇の中に表現されています。実際に彼は、その生涯の作品を通じて、民族霊の胎内から「個の意識」が誕生するドラマを形づくったのです。

ルドルフ・シュタイナー（1861年2月27日生まれ）：

ルドルフ・シュタイナーの胎児期の前半、木星は「蟹座」にありました。その後、木星は「獅子座」のなかでループを描き、彼の出生時には獅子座に位置していました。

ここで私たちは、再び蟹座の木星に出会います。これがエーテル体の強い「形態化の力」を示すことはすでに述べました。この傾向は、シュタイナー博士の生涯に非常によく見ることができます。人生の前半において、彼はみずからの特別な運命によって、「思考能力の非常に強い自己規律」へと導かれました。それこそが、高次の世界を認識するための新しく近代的な方法を人類にもたらすことができる唯一の道だったからです。このことは、彼の根本的な著書『自由の哲学』に反映されています。

人生の後半になると、この規律ある思考は、彼が人智学として現代の人類にもたらした、高次世界からの巨大で包括的なメッセージの担い手となりました。その中には、大宇宙の最も内なる魂の小宇宙的な実現である、真の「人間の反映」が現れていたのです。これは獅子座の木星によって示されており、シュタイナー博士の地上の生涯において、私たちは、規律ある思考という器の中にこの神聖な内容が流れ込んだ、原型的なエーテル力の理想的な表現を目にすることができるのです。

ラファエロ・サンティ（1483年3月26日生まれ）：

ラファエロの出生前の期間（胎児期）、木星は獅子座の最後の星々を通過していましたが、まもなく「乙女座」に入り、彼の出生時にも乙女座に位置していました。

獅子座の木星に関しては、ルドルフ・シュタイナーのケースで説明したのと同様の記述をあてはめる必要があります。ラファエロもまた、宇宙の鼓動に耳を傾けた数少ない人物の一人でした。これが、大いなる「愛の能力」として彼のエーテル体に刻印されていたのです。

彼の子供時代が過ぎると、そのエーテル力の性質は「乙女座」の調和へと変化していきました。この変化は、ラファエロの生涯において、彼が数多く描いた「聖母子像」の世界の中に、これ以上ないほど純粋な形で表現されました。

乙女座という星座が、彼を通じてこれほど強力な地上の顕現を見出すことができたのは、彼が画家として、木星を源泉とする「生命の原型」の世界に深く関連した、画像の意識とイマジネーションの領域に特に生きていたからです。

ラファエロの聖母子像は、単にイエスという子供の誕生を描いたものではありません。そこにはもっと深い意味があります。それらの絵画は、神の御子であり「永遠の生命の主」である存在が、魂の世界へ、さらにはすべての創造世界へと誕生する体験を明かしているのです。これこそが、乙女座という星座の真の意味にほかなりません。

第十一書簡 - 1945年2月
「惑星の世界の本質 — 木星と火星」

●基本的な視点

惑星は単なる天体ではなく、
人類の意識進化の歴史と未来を映す霊的領域である。

『イシス・ソフィア I』第1年目の最終号。
木星の解説を歴史的人物例で補完した後、
火星（マーズ）の本質へと移行。

木星＝生命・知恵・統合・癒やしの力（エーテル体の源）。
火星＝意識・アストラル体・闘争と救済の力。

神々からの分離（反逆）と、
再び神々へと還る可能性（愛による変容）の両方を担う。

この2惑星は、人類が「神々から離れて自我を獲得した」過程と、
「再び神聖な起源へと還る」未来の鍵を握っている。

次号（第12信）で第1年が終了し、
第2年目からは実際の星の出来事やキリスト時代の星象、
詳細な出生天宮図の解説へと移行すると予告。

●要点

1）木星の追加解説（エーテル体の傾向）

木星の出生配置（特に胎児期の位置）は、
その人のエーテル体（生命体）の質を強く示す。

トルストイ（木星・天秤宮）：
　平和と調和を求める強い傾向。
　攻撃的な魂の力との闘いを通じて、正義と善意を顕現しようとした。

ロベスピエール（木星・天秤宮→蠍宮）：
　初期の正義への熱望が、
　蠍宮の激しい魂の力（アストラル力）の奔流にさらされ、
　革命の嵐の中で粉砕された例。

シラー（木星・射手宮）：
　人類の歴史や過去の力の痕跡を理解する能力。
　歴史劇や歴史学への傾倒。

ノヴァーリス（木星・射手宮→山羊宮→水瓶宮）：
　形態の克服と宇宙への拡張。
　宇宙的・神秘的な直観、『夜の賛歌』に顕著。

ケプラー・ゲーテ・ヴァレンシュタイン（木星・水瓶宮）：
　星の宇宙との強い調和。
　ケプラーの「天球の音楽」、ゲーテの包括的洞察。

ウェルギリウス（死の瞬間・双魚宮）：
　死後に宇宙の父なる力（双魚宮の木星）へと成果を持ち帰る。

木星は常に生命の原型・宇宙的統合・癒やしの力として働き、
人類の文化的・霊的進歩を支えている。

2）火星の本質

火星の圏（軌道を含む空間）は、古月期の記憶・反復である。

運動の霊（デュナメイス／力天使）の領域：
　人類の祖先にアストラル体（魂の体・意識の体）を授けた。

古月期の反逆：
　一部の霊的存在が反逆を起こし、
　アストラル体を「自己中心的な内面世界の創造」に利用。
　→ これにより人類は神々から分離し、
　　利己主義・攻撃性・感覚世界を「唯一の現実」とする
　　幻影（マーヤ）を生み出した。

現代の唯物論・物質的世界観は、
この火星の影響による人類の「自己創造型の幻想」の結果である。

〔火星の二面性〕

否定的側面：
　攻撃性・利己主義・破壊の種。
　感覚を通じて「神なき物質世界」を創り出す力。

肯定的側面：
　ブッダが火星に赴き、愛と慈悲の力を注入
　（1603-1604年の蠍宮の大合と関連）。
　これによりアストラル体は浄化され、
　感覚世界を「精神世界の反映」として正しく知覚する可能性が生まれた。

〔死後と出生前の火星〕

死後：
　精神界の第1領域（火星圏）で、物理的物体の精神的な原型を体験。
　地上での利己主義から解放された魂が、事物の本質を知る。

出生前：
　火星の配置は、魂が地上で携える
　アストラル体の質（利己主義か、愛による克服か）を示す。
　選択は人間の自由に委ねられる。

〔天文学的イメージ〕

火星本体は地球より小さいが、その軌道内には多数の小惑星が存在。
これは、古月期の宇宙的闘争（反逆と秩序の対立）の記憶を象徴している。

●本文

　次の（第12信の）書簡をもちまして、『月刊宇宙のアストロソフィー書簡』の第1年目が終了いたします。この困難な時代にあっても、私どもの見通す限りでは、もう1年この活動を継続することは可能であると考えております。

　しかしながら、2年目はその内容を変更する予定です。アストロソフィーへの導入はまだ完了してはいないものの、これまでに得られた知識を、現実の生活へと一歩近づける試みに踏み出せる段階に達しました。

　そのため、今後は星の世界で現在起きている出来事について、いくつかの主導的なアイデアを提示していきたいと考えております。また、この導入部分や現在の出来事に加えて、キリストが地上に在世していた時代における星の世界の出来事についても、一連の解説を始める予定です。将来的には、歴史的な出生天宮図のいくつかについて、さらに詳細に踏み込んでいければと思っております。

　W. ズーヒャー（W. Sucher）

〔惑星の世界の本質 — 木星と火星〕

　木星の本質について、歴史的な出生天宮図からいくつかの例を挙げながら、さらに説明を続けていきましょう。

　レオ・トルストイ伯爵：

　1828年9月9日のトルストイの誕生時、木星は天秤宮（てんびん座）にあり、出生前の胎児の発育期間中にもこの星座で留（ループ運動）を形成していました。これは非常に際立った配置でした。また受胎の時期には、火星が天秤宮で木星とコンジャンクション（合）を形成していました。そして彼が亡くなった瞬間、木星はまさに天秤宮に入ろうとしており、火星は再び木星とコンジャンクションの配置にありました。

　この配置が示しているのは、放っておけば攻撃的な感情やその他の魂の力によって圧倒され、揺さぶられていたかもしれない肉体のなかに、エーテル体が「平和と調和」を確立しようとする強い傾向を持っていた

ということです。実際に、トルストイの生涯そのものがこの傾向の象徴と言えます。彼のすべての著作や活動、とりわけ彼の日記は、地球上の平和や、正義と善意の顕現に対して常に敵対する力との、劇的な闘いについて語っています。これこそが、木星を通じて語られる天秤宮の言葉なのです。

マクシミリアン・ロベスピエール（1758年5月6日生まれ）：

ロベスピエールの胚発育の期間中、木星は天秤宮を通過して蠍宮（さそり座）へと移動し、誕生時には蠍宮（おそらく天頂［MC］付近）に位置していました。

この配置によると、ロベスピエールのエーテル・オーラは、初期の段階では天秤宮からやってくる衝動によって、より強く方向づけられていました。それは、地球上に正義と善意を顕現させようとする強い熱望を表しています。彼をフランス革命の指導的な立場へと押し上げたのは、まさにこの力でした。神々は、後にトルストイに対して行ったのと同じように、人類の進化の目標に対する姿勢を彼の中に呼び覚まそうとしたのです。

その後、木星が蠍宮に入るのが見られます。これは、最初の衝動に対する一種の「試練」のようなものです。なぜなら、それらの衝動が、蠍宮の領域からやってくる魂の力（アストラル力）の強烈な奔流にさらされることになるからです。その時、人間の中にある構築的で肯定的な力が、この嵐に耐えられるかという問いが常に生じます。もし耐えることができれば、人類のための比類なき偉業を成し遂げるための、極めて肯定的な力と強さが発達することになります。その時、危険な「蠍」は、聖霊の眼をもって宇宙の進化の未来の段階を見通すことができる、目ざとい「鷲」へと変容を遂げるのです。

しかし、このような人物は、自身の生命の許容量を超える課題や衝動によって、粉々に引き裂かれてしまう危険が常に付きまといます。ロベスピエールにも同様のことが起こりました。彼の本質は、初期の衝動においては善良で高潔であったものの、フランス革命の嵐によって粉々に引き裂かれてしまいました。彼は、当時の出来事の背景で働いていたアストラル力を制御することができず、それらの力を「自由・平等・友愛」に基づく社会有機体へと結びつけることができなかったのです。

フリードリヒ・シラー：

シラーは1759年11月10日、木星が射手宮（いて座）にあるときに生まれました。出生前の胎児の発育期間全体を通じても、木星はこの位置にありました。この配置が示しているのは、彼のエーテル体が「人類または宇宙の進化の過去の段階を体験し、知覚する能力」をもたらす原型的な衝動で満たされていたということです。このタイプのエーテル体は、人類の歴史におけるより深い衝動や法則を理解するための器官となることができます。シラーがこの能力を持っていたことは、彼の戯曲や、歴史との強い結びつきに表れています。彼は一時期、イェーナ大学で歴史学の講師も務めていました。これらの力によってエーテル体に植え付けられるのは、人類の歴史との結びつきだけではありません。それは、自然界の様々な領域や宇宙の姿の中に過去の活動の痕跡を残してきた「太古の力」を理解するための器官にもなり得るのです。

シラーの歴史的な能力は土星とも結びついていますが、この出生天宮図における土星と木星の関係について、いま詳細に踏み込むのは難しすぎます。おそらく、また別の機会にその可能性が得られるでしょう。

ノヴァーリス（1772年5月2日生まれ）：

発育の期間中、木星は射手宮から山羊宮（やぎ座）を通過し、水瓶宮（みずがめ座）へと移動しました。ここにあるのは、このようなエーテル体が「宇宙全体へと外側に向かって拡張していくことができる」ということを示す一例です。反対側の星座である巨蟹宮（かに座）では、厳格な形態への傾向が見られました。しかしここでは、それとはほぼ正反対の「形態の克服」と、宇宙空間を飛翔するために「エーテル力を解き放とうとする傾向」が見られます。私たちはこのことをノヴァーリスの著作、とりわけ『断章』の中で体験することができます。人生、芸術、科学、あるいは宗教において、彼がわずか数語で、最もインスピレーションに満ちた、それでいて神秘的な示唆を与えていない領域は一つもありません。宇宙全体の高みと深みに向かって開かれていたエーテル組織からそれらがもたらされた、と考えなければ、私たちは彼の言葉を理解することはできません。さらに、彼は生涯の最後の数年間、文字通り死者の領域へと消え入るように薄れていったことが知られています。彼は、自分より先に死の境域を越えていった友人たちに対して、深い結びつきと、身を焦がすような憧れを抱いていました。彼の『夜の賛歌』や当時の日記には、このような心情がよく表れています。これこそが、人生と人間の知識のあらゆる分野に関する、彼の直感的な洞察の源泉でした。これは、山羊宮の配置から受ける木星の影響の素晴らしい例です。

ヨハン・ケプラー：

ケプラーについては、以前の書簡でもすでに言及しました。出生前の状態（1571年12月27日）と、亡くなった瞬間（1630年11月15日）の双方において、木星は水瓶宮にありました。これは、星々が織りなす宇宙との強い結びつきを築くことを可能にするエーテル体の状態を示しています。ケプラーの場合、彼が職業的な数学者であり天文学者であったため、このことは明白です。しかしこの例が明かしているのは、その結びつきが必ずしも抽象的なものだけではないということです。ケプラーは、星の宇宙における「調和」という思想に霊感を与えられていました。彼は「天球の音楽」に耳を傾け、彼の知覚に従って、惑星たちが奏でる音楽の楽譜（『宇宙の調和（Harmonices mundi）』）を書き下ろすことさえしました。したがって、このようなエーテル組織の形成は、必ずしも職業的な天文学へと向かう必要はありません。それは、意識的な気づきを伴わない場合であっても、地上の生活を宇宙のリズムと調和するように整える能力として、単に現れることもあるのです。もう一つの例はゲーテであり、彼の木星は出生前の大半の期間、水瓶宮にありました。また、三十年戦争の有名な将軍であるヴァレンシュタインも、星の運行に従って自身の活動を整えようとしました。彼の出生前ホロスコープでも、木星は水瓶宮にありました。

ウェルギリウス：

叙事詩『アエネーイス』の高名な詩人であるウェルギリウスは、双魚宮（うお座）にある木星を通じて強い結びつきを持っていました。なぜなら、彼が亡くなったとき（紀元前19年9月22日）、木星がそこに位置していたからです。死の瞬間におけるこのような配置は、受肉のプロセスを通じて人間に与えられる「天賦の資質」を示すものではありませんが、それ以上のものを指し示しています。地上での生活の中で、人間のあらゆる行為はそのエーテル体へと刻み込まれます。死後、エーテル体は宇宙のエーテル空間へと溶解していきます。その時の木星の配置は、人間の魂から湧き出し、宇宙の領域へと持ち去られる「根本的に重要な成果」を示しており、このようにして将来のさらなる進歩のために保存されるのです。

双魚宮におけるこの木星の配置の中に、私たちは、宇宙の「父なる力」への理解と把握として、宇宙のエーテル領域へと流れ込んでいく人間の成果を見出すことができます。『アエネーイス』の中でウェルギリウスは、神話的なローマの父であるアエネアスの冒険を描きました。そして、ある一節で、彼は宇宙の父なる力との深い結びつきを明かしています。彼は木星を「全能の父なるエーテル（Omnipotent Father Ether）」と呼んでいます。このようにして彼は、探求する自己の魂の深層で「双魚宮の木星」として体験したことを

表現したのであり、それが彼の死の瞬間に、実際に夜空に現れていたのです。彼は木星という惑星を「生命の原型の源泉」として、そして双魚宮を「宇宙の父なる力の領域」として描写しました。

火星

火星の軌道は地球の軌道を包み込んでいます。したがって、地球の内側を回る「内惑星」に対して、火星は地球の軌道の外側にある「外惑星」の第1番目の惑星ということになります。コペルニクスの地動説的な宇宙観を通して、私たちは地球が太陽の周囲を円軌道で動いていると見なすことに慣れています。惑星としての地球が動いていることは確かですが、太陽の運動をも考慮に入れなければならない時代、そして太陽と地球の双方が円ではなく、一方が他方の後を追うようにして、一つの「レムニスケート（8の字形）」の形を描いて動いているという事実に目を向けねばならない時代は、そう遠くないうちに訪れるでしょう。

この展望を詳しく解説する時期はまだ来ていませんし、ここはその詳細を語る場所でもありません。現時点では、太陽と地球がレムニスケートの形を描いて動いており、このレムニスケートが、いわば火星という惑星の軌道の中に包み込まれている、と想像していただければ、本書簡における私たちの探求に必要なイメージとしては十分です。

さらに天文学は、火星が地球という天体よりも小さいことを教えてくれます。私たちは火星の方が大きいことを期待してしまいますが、その直径は地球の半分よりわずかに小さい程度です。また、今世紀（20世紀）および前世紀（19世紀）にかけて、肉眼では見えないほど非常に小さく、火星の軌道の内側を動いている無数の微小な惑星天体が発見されてきました。それらのいくつかは、火星の軌道を越えて木星の軌道にまで達しています。このように、火星自体は地球よりも小さな惑星ですが、その軌道の内側には「小惑星」と呼ばれる膨大な数の微小な惑星が存在しているのです。したがって私たちは、ある視点から見れば、火星を「一つの主要な惑星と、太陽系全体の中に存在する惑星の性質を帯びた無数の微小な天体の集まり」として捉えることができます。

では、私たちは精神科学的な観点から、この火星とその領域にどのようにアプローチすればよいのでしょうか。前回の書簡において、私たちは土星を「古土星紀」の進化の宇宙的な記憶の象徴として、木星を「古太陽紀」の遺産として語りました。このことは、火星を、地球の進化に先立つ（すなわち、私たちの現在の太陽系の進化に先立つ）「古月紀」の一種の反復として捉えることを示唆しています。

本書簡では、古月紀の進化についてまだ詳しく描写していません。いずれ将来的にそうしなければなりませんが、現時点ではいくつかの主導的なコメントに留めざるを得ません。もちろん、その詳細はルドルフ・シュタイナーの著書『神秘学概論』の中に見出すことができます。

古太陽紀の進化は、その発展のある時点で終わりを迎えました。その時、それまでに創造されていたすべての物質や肉体を持った存在は消滅したのです。「宇宙の夜（プララヤ）」が始まり、その間、すべての高次のヒエラルキア）その創造物は、純粋な精神的存在のより高い次元へと上昇していきました。この「宇宙の夜」が終わった後、新しい「惑星」が誕生しました。まず最初に、古土星紀と古太陽紀にすでに存在していたすべてのものが再創造されなければなりませんでした。こうして、これら過去の進化は、新しく創造された「惑星」（オカルトの言語では「古月紀」と呼ばれる）の、より短い進化サイクルの中で繰り返されたのです。そこでは、物質はさらに凝縮され、一部は「水」となりました。これに加えて、前のサイクルである古土星紀と古太陽紀の残滓として、熱や「空気（あるいは光）」が依然として存在していました。

古月紀の進化に関する以下の事実は、私たちの探求にとって極めて重要です。すなわち、物理的物質の凝縮が起こり（それは現実には神聖なる起源からさらに一歩遠ざかることでした）、それと同時に、人類の祖先には「意識の力」が授けられたということです。

私たちは、それに先立つ古太陽紀の進化において、人類の祖先が「エーテル体」の担い手となったことを思い出さねばなりません。当時の人類は、自らの周囲や内側で起きている出来事を、喜びや苦しみ、内面的な感動として感じられるような「独立した個としての存在」に関連付けて体験する能力を、まだ獲得していませんでした。春や夏に太陽が昇るとともに現れ、夏の暖かさと光の衰えとともに枯れていく植物のように、古太陽紀の人類の祖先は、独自の独立した内面的な存在を持つものとして出来事を自分自身に結びつけることなく、周囲の出来事の中に完全に没頭していたのです。

この能力（意識の力）は、古月紀の進化のある時点で、自らの本質の一部を犠牲にされた「運動の霊（デュナメイス）」の働きによって、人類の祖先に植え付けられました。

この意識の体、すなわち「アストラル体」の植え付けと結びついて、進化の全行程を変えてしまうような出来事が起こりました。ある特定の霊的存在たちが、古月紀において、通常の発展の経過に対する「反逆」を引き起こしたのです。神々の世界において反逆が起きるなどというのは、奇妙に聞こえるかもしれません。霊的なヒエラルキアの体験のある特定の段階やレベルから見れば、それは通常の経過に対する対立行為に見えるかもしれません。しかし、宇宙進化のさらに高次の「計画」から見れば、それは階層秩序の最高次の存在たちが、自らの神聖なる「計画」を必要な形で実行するために開始した、一つの必然性として捉えることができるのです。

人類の祖先が、周囲の出来事や内側の出来事を自分自身の痛みや喜びなどとして体験する能力を授けられると、反逆を起こした勢力がやってきて、この能力を利用しました。そして彼らを、「アストラル体の感覚によって創り出される内面世界こそが、宇宙の他の存在から切り離された、それ自体で独立した『現実』である」と信じ込ませる誘惑へと導いたのです。こうして、古月紀の宇宙全体に分裂が生じました。

一方の側には、存在するすべてが自らの本質の一部であるような「客観的な事実」と「霊的宇宙」があり、もう一方の側には、それらの強大でありながらも反逆を起こした霊たちによって、その「起源」から徐々に引き離されていった、私たちの祖先の内面的な体験世界がありました。これらの反逆の霊たちは、外面世界とは別の「もう一つの現実」として、人類の内部に住まい始めたのです。この発展は、物理的物質の凝縮を伴うものでした。

私たちは、これが人間にとって独立への、そして「自我」の力を獲得するための、おそらくもう一つの最も決定的な一歩であったと理解することができます。しかしそれは、霊的な起源、すなわち神々から遠ざかることでもありました。古月紀の人間は、まだ自己意識の段階に達していなかったため、これを自分自身で行うことができず、強大でありながらも反逆を起こした霊たちが、人間を通じてそれを行ったのです。

この出来事は、「人類の内面的体験の世界の中にもう一つの現実が創り出された」という表現を、「この内面的な現実が、宇宙における『唯一の現実』とますます見なされるようになり、もう一方（霊的宇宙）が忘れ去られてしまった」と言い換えることで、よりよく理解できるようになります。このことは、古月紀のその出来事の時から、気の遠くなるような長い進化の時代を通じて起こり続けてきました。そして「歴史時代」の人間である私たちは、事実、この神聖なる起源からの分離という下降プロセスの、最も深い地点にまで達しているのです。

これこそが、古月紀進化の主要な出来事です。この出来事は多くのこと、例えば霊的世界と物理的世界との関係、人類の領域の性質、そして当時その下位に存在していた諸自然界の性質などを変えてしまいました。シュタイナーの『神秘学概論』を学ぶことは、上記の描写でこれほど簡潔に示された内容を理解する上で、計り知れない貢献となるでしょう。

この古月紀の全惑星的進化は、火星領域において「記憶」されています。火星の軌道に包み込まれている空間は、かつて古月紀という惑星が占めていた空間と等しいものです。さらに、火星の領域、すなわち惑星の軌道に包まれた空間は、「運動の霊」の領界です。この階層霊こそが、人類の祖先にアストラル体を授けた存在でした。そのアストラル体は、本来は起源から脱落することを意図されてはいませんでしたが、後に古月紀における反逆の乗り物となったのです。

したがって、私たちはここで次のような結論に達することになります。

1）火星とその領域は古月紀の記憶の象徴であり、「運動の霊」の根本的な活動は、人間にアストラル体を授けることと結びついていなければならない。

2）これらのアストラル力が反逆の霊たちによって彼らの世界の意図のために利用された以上、私たちの火星にはこの事実とその結果の「記憶」も存在していなければならない。これこそが、私たちが地球での生活に入る前に、火星とその霊的な住人たちによって、人間のアストラル体の中に創り出された「利己主義」や「攻撃性」、そして「自己活動」の衝動である。

3）感覚、感情、情動の、独立した内面世界を創り出そうとする衝動は、外面の出来事や存在によって引き起こされるものでありながらも、それらとは区別されるものであり、はるかに深い意味を持っている。なぜなら、先述のように、この内面的な「現実」が、現代の地上の人間の意識にとって「唯一の現実」となったからである。

したがって、私たちが現在の世界を「物質的なもので構成されている」と知覚しているのは、人間に対する、とりわけ受肉の時期におけるアストラル体に対する火星の働きによるものなのです。空想のように聞こえるかもしれませんが、私たちが世界を物質的なものとして体験しているという事実そのものが、人間のアストラル体の進化の歴史に起因しているというのは真実です。

私たち自身が、硬く強固な物質の世界を創り出してきました。私たち自身が唯物論を創り出したのです。なぜなら、宇宙の反逆の霊たちは、気の遠くなるような長い宇宙進化の時代を通じて、私たちの周囲の宇宙に対する独自の感覚や魂の体験こそがそれ自体における現実であり、最終的にはそれらこそが「唯一の現実」であると、私たちに教え、アストラル体へと語りかけてきたからです。彼らは人間に、自らの神聖なる起源を忘れ、自分自身の魂の体験だけを信じるように教え込みました。

アストラル体）は、本来、感覚器官による知覚を意識化し、感覚が宇宙を映し出す「澄み切った、穢れのない鏡」となることだけを意図されていました。人間の感覚器官は、今日でもなお、それ自体としては宇宙を映す澄み切った鏡です。しかし、その知覚を意識化する意識（すなわち魂の体）は、利己主義と自己保存の遺産を背負っているのです。そして、アストラル体の中に毒の注射のように生きている「巨大な利己主義」は、最終的には感覚の届く範囲にあるすべてのものを自分のものにしたいと望みました。そこには、精神世界からやってくるいかなる外部の働きの痕跡も残さないようにされたのです。

私たちは、実際にこれを成し遂げてしまいました。私たちの意識の中で、私たちは精神（霊）がもはや顕現していない世界を本当に創り出してしまったのです。私たちの感覚を通じて意識化される世界は、私たち自身の冷徹な利己主義の鏡像にほかなりません。アストラル体へと注入された「神々から決別して独立しようとする衝動」は、私たちをして、感覚の知覚を「神々に見捨てられた世界からやってくるもの」と解釈させるように導きます。その世界は単なる機械論であり、生命と精神を知覚できなくなった私たち自身の無能力の鏡像なのです。

アストラル体の力によって自分自身の世界を創り出すこの能力は、人間の出生天宮図（ネイティビティ）における火星の配置や、出生前の胚発育の期間中における火星の身振りや運動の中に表現されます。これについては、間もなくいくつかの例を挙げて説明します。

「感覚の世界」を創り出すためにアストラル体に受け継がれた能力は、神の意志による宇宙に対する反逆の衝動を通じてのみもたらされたものです。もし、この衝動が働かなかったか、あるいは克服されていたとしたら、私たちは自らの周囲に全く異なる世界を感知していたことでしょう。反逆の衝動は、私たちを「自分が自分自身であり、ただ一人で存在し、その霊的な冷たさと生命のなさによって私たちを自由にしてくれる宇宙に囲まれている」という世界へと導きました。

しかし、私たちが自己意識、すなわち「自我」を獲得した今、その反逆の衝動は宇宙的な正当性を失っています。現在、そして未来においてはなおさらに、アストラル体は「感覚の知覚を、精神世界という『起源』の世界からやってくるものとして解釈する意識」を創造するための乗り物（媒介）とならなければなりません。精神科学が目指すのは、感覚体験のカーテンの背後で働き、顕現している精神世界を知覚することです。したがって、精神科学は現代の科学的方法を受け入れはするものの、あの偉大なる「反逆の衝動」によって激しく苦しんでいる時代の諸理論（唯物論的な仮説）を受け入れることはできません。

火星がアストラル体と結びついている以上、火星が先述した偉大なる「反逆の衝動」と結びついていることは確かですが、同時にそこには、アストラル体（魂の体）の否定的で破壊的な活動を克服しようと努力する、人間の魂の中の諸力の表現も見出すことができます。アストラル体は利己主義と攻撃性の衝動に貫かれてきました。この衝動は、その正反対の力、すなわち「愛と慈悲の力」によってのみ克服することができます。

以前の書簡で蠍宮（さそり座）の土星について語った際、私たちはルドルフ・シュタイナーによって明かされた「愛と慈悲の教師である仏陀は、ある時点で火星の衰退を克服するために火星へと赴いた」という事実に言及しました。火星における衰退は、利己主義と攻撃性を創り出した、あの反逆の衝動によって引き起こされたものでした。

このようにして私たちは、古の人々が体験したような「戦士」としての、あるいは「戦争を引き起こすもの」としての火星を見ることができます。しかし、仏陀が火星に赴いて以来、客観的な世界に対する人間の知覚の中に、愛と慈悲を真っ直ぐに持ち込もうとする「もう一つの衝動」もまた働いているのです。それは、世界を「物質の存在という幻影」の呪縛から解放しようと努力する衝動です。この幻影は、感覚の知覚がアストラル体の活動と出会う場所で創り出されるため、まさにその場所において克服されなければなりません。

アストラル体は出生前にすでに創り出されているため、この救済（変容）の行為は、魂の体が「誕生しつつある状態（status nascendus）」において最も効果的となります。これは火星境域で行われることであり、まさにその場所で現在、仏陀が活動しているのです。仏陀の教えは、感覚の知覚を「浄化」するための

教えとして非常にうまく捉えることができます。あの「大いなる反逆」が刻み込まれている火星領域へとこの衝動が移行したと想像するなら、私たちは、来たるべき時代において、それがマーヤ（幻影）の世界を克服し、火星の本質を変容させるほどの力へと成長していくであろうことを、極めてよく理解できるのです。

人間の魂は、死後の生活において火星の世界をも通過します。死後の生命に関するルドルフ・シュタイナーの著作『神智学』における描写を見るなら、私たちはこれまでに述べてきたことの確証を見出すことができます。

火星領域は、『神智学』の中で描写されている「霊界」の第一領域に対応しています。この第一領域において、魂は物理的世界の、すなわち物理的な物体の原型と出会います。シュタイナー博士は次のように述べています。「霊界の第一領域において、私たちは地上の事物における霊的な原型に囲まれています。地上での生活の中で、私たちは思考によって捉えるこれらの原型の、いわば影だけを知るようになるのです……私たちは思考の間を動き回りますが、これらの思考は本物の『実在』なのです……私たちは、いわば地上の事物が形作られ、構築される『思考の作業場』の中にいるのです。」

人間は、この領域においてさえ、自分がどのようにして一つの統合体）として物理的・肉体的な現実に属しているか、また物理的な事物の存在の中にどのように織り込まれているかを体験します。博士は、古代インドのヴェーダーンタの知恵における根本思想の一つについて次のように語っています。「賢者は、地上の生活の間にさえ、他の人々が死後に体験すること、すなわち『自分自身がすべての事物と結びついている』という思考、つまり『汝はそれなり』という思考を把握する能力を身につけます。それは、人間が、すべての存在がその起源を持つ『原初なる存在（』と結びついているという事実なのです。」

もし人間が、そのすべてを創造する原初なる存在の力を自らの内に宿しているとするならば、私たちは自らの「火星の性質」を通じて、物理的世界の「見え方」に対して責任を負わなければなりません。なぜなら、その性質こそが、感覚の知覚とそれらに対する意識とを通じて、私たちを物理的世界へと結びつけてきたからです。死後の火星領域において、私たちはこれまでに詳しく述べてきたのと同じ事実に、ただ異なる角度から出会うことになります。

死後、人間の魂は火星領域において、世界にある物理的物体の霊的な原型を体験します。私たちがこの領域でそれらを体験できるのは、そこに参入する前に、利己主義や攻撃性といった諸力から、自らの魂が解放され、浄化されているからです。いまや私たちは、物質的物体という概念を「幻影」として体験することができます。私たちは、地上の感覚によってもたらされる欺瞞を克服した仏陀の追随者となるのです。

出生前、私たちは火星領域において、自分が参入していく地上の世界を肉体的な感覚で知覚する能力を獲得します。しかしながら、私たちは自らの感覚の知覚を通じて、「幻影の世界（物質の世界）」を創り出すこともできれば、あるいは「原型の世界（神々の思考の顕現である世界）」を創り出すこともできるのです。火星によって、私たちはそのどちらか一方、あるいはもう一方を行う能力を授けられていますが、どちらを選ぶかは私たちの「自由」に委ねられています。私たちが個人の魂としてどちらの道（新しい創造の道か、あるいは世界の衰退の道か）へ進むのかは、常に個人の魂の中での闘いとなるでしょう。

この個人の闘いは、出生前における火星の運動の中に現れます。それは、一人の人間が地上へ携えて降りてきた「可能性」を示してはいるものの、人間の「自由の領域」の内にある「決断」そのものを示しているわけではありません。

火星の本質に関するこの描写の始まりへと立ち返るなら、天文学において火星と呼ばれるあの主要な天体と、同時に無数の「小惑星」とによって火星が構成されている理由を、私たちは今やよりよく理解することができます。火星の圏とは、古い硬化した世界が、未来の宇宙進化の「胚」としてそこにのみ存在する、若く光に満ちた宇宙と闘うという「宇宙的な闘争の領域」なのです。したがって、かつて宇宙で起きた闘いによって、主要な惑星が多くの微小な惑星へと分裂してしまった、と想像することができます。こうして、火星は地球のそれよりも小さくなったのです。

次回の書簡では、多くの歴史的パーソナリティのホロスコープにおける火星の配置について詳しく説明します。それによって、本書簡で火星について述べられたことの多くを検証することができるでしょう。

第十二書簡 - 1945年3月
「惑星の世界の本質 — 火星」

●基本的な視点

第十二書簡は、『イシス・ソフィア I』第1年目の最終号。
火星の本質を、歴史的な出生天宮図の具体例を通じて詳しく解説。
特に、出生時だけでなく出生前の胚発育期間中の火星の運動も重視し、
アストラル体（魂の体）の質を読み解き、
理論から「具体的な人間の魂のドラマ」へと橋渡しとなっている。

火星は、人類が神々から分離して自我を獲得した過程の象徴であり、
同時にその分裂を癒やし、
再び精神世界と物質世界を調和させるための闘いの場である。

第2年目からは実際の星の出来事、キリスト時代の星象、
詳細な出生天宮図の分析へと移行すると予告されている。

●要点

1）火星の配置と魂の状態の対応（主な例）

〔星座〕
人物例
火星の特徴と人生への反映

〔処女宮〕
ジャンヌ・ダルク
宇宙的な無垢・太陽のような純粋な力。霊的使命への確信

〔処女宮〕
ニーチェ
無垢の力が破壊され、精神崩壊に至った悲劇

〔天秤宮〕
トマス・モア
暗闇の中で真理を守る調和と強さ

〔天蠍宮〕
フランシス・ベーコン
唯物論・経験主義の父。堕落の力に敗北

〔天蠍宮〕
オーストリア皇太子ルドルフ
唯物論的絶望と自殺

〔射手宮〕
ゲーテ、トルストイ
物質世界と精神世界の激しい葛藤を克服

〔山羊宮〕
リヒャルト・ワーグナー
長い闘いの末の和解と救済（『パルジファル』）

〔水瓶宮〕
メアリー・スチュアート
頭部（感覚）と心臓（愛）の闘い。最終的な霊的勝利

〔双魚宮〕
ノヴァーリス
堕落のプロセス全体を経た和解と癒やしの力

〔白羊宮〕
スウェデンボルグ
霊視能力の基盤

〔金牛宮〕
ラファエロ
美を通じて精神を顕現（聖母子像）

〔双子宮〕
ショーペンハウアー
世界を魂の投影として見る。仏教的解脱志向

〔巨蟹宮
ダンテ
宇宙的規模での和解（『神曲』）

〔獅子宮〕
シラー、ナポレオン
頭部と心臓の熱狂。実現か破壊か

2）火星の本質のまとめ

火星は古月期の記憶であり、
「運動の霊」が人類にアストラル体を授けた領域。

堕落の力（利己主義・攻撃性・感覚世界を「唯一の現実」とする幻影）を
強く反映する一方、愛と慈悲（ブッダの火星への介入）によって
これを克服・変容させる可能性も持つ。

出生前・出生時の火星の位置は、
魂が地上で引き受けるアストラル体の質（無垢か、葛藤か、和解か）を示す。

3）現在の天体運行（1945年3月時点）

土星が双子宮に滞在（1944年夏から留運動中）。
これは1914-1917年（第一次世界大戦時）と同一配置。
双子宮の土星は、人類の「自我の二元性」
（精神世界 vs 物質世界、
　個の神聖な火花 vs 感覚の硬化した世界）の問題を象徴。
人類は今、この分裂を克服しなければならない
「宇宙的な時間（時刻）」に立っている。
解決できなければ、より大きな破局が訪れる危険性がある。

●本文

　前回の書簡において、私たちは火星という惑星の本質とその領域について詳細に描写しました。今回は、歴史的な出生天宮図のいくつかの例を挙げながら、この知識を具体的に説明していきたいと思います。

　このような考察を行うにあたっては、実際の出生の瞬間だけでなく、出生前の胚発育（胎児の発育）の期間をも考慮に入れる必要があります。なぜなら、出生の瞬間における火星の配置は、その人間の火星の性質を決定づけるイメージを与えるものであるものの、胚発育の期間中におけるこの惑星の運動や身振りもまた重要だからです。それらは、火星の性質が最終的に顕現へと向かう、魂の力の内なる進化プロセスを示しています。黄道十二宮（12の星座）との関係において火星の根源的な性質を理解するために、私たちはまず「処女宮（おとめ座）」から始めなければなりません。

　処女宮（おとめ座）の火星：

　ジャンヌ・ダルクが生まれた1412年1月6日、火星は獅子宮（しし座）を離れ、まさに処女宮に入ろうとするところでした。この例は、そのような人間が世界をどのように知覚し、そしてこの世界が魂の中にどのように意識を呼び覚ますのか、という印象を私たちに与えてくれます。ジャンヌ・ダルクの場合、胚発育の期間中に双魚宮（うお座）から獅子宮までの星座を通過した後、出生時にはまだ処女宮に完全には入りきっていなかったため、火星は、前回の書簡で描写した古月紀の進化の間に起因する「堕落」の影響からまだ自由な状態にありました。その火星は依然として太陽のような輝かしい性質を保っており、宇宙の「反逆の」諸力による暗い流入によって妨げられてはいなかったのです。彼女のアストラル体は、まだ宇宙的な無垢の状態にありました。

　このことは、ジャンヌ・ダルクの内に生きていた、歴史の歩みにこれほど決定的な形で介入することを可能にした奇妙な力を理解する助けとなります。彼女にこれほどの強さと恐れを知らぬ心を与えたのは、単なる熱狂だけではありません。それは、自らの霊的な使命に対する揺るぎない確信でした。彼女の魂の体の諸力は、堕落による妨害という、意識を暗くし弱まらせる諸力を超越していたため、彼女の出現がもたらす太陽のような魔法は、当時の人々にとって奇妙で抗いがたい奇跡のように作用したのです。

高名な哲学者であるフリードリヒ・ニーチェが生まれたとき（1844年10月15日）、火星はすでに処女宮に入っていました。それは、先述した「反逆」が起きた偉大なる宇宙の時代を反映する、黄道（ゾディアック）の領域へと足を踏み入れていたのです。ニーチェのこの火星もまた、双魚宮から処女宮までの星座を通過していました。このことは、ニーチェの魂の体の中にも、ジャンヌ・ダルクに見出されたような宇宙的な無垢と呼べるものが生きていたことを示していますが、彼の場合、この宇宙的な無垢は、破壊的で超人間的な諸力の犠牲となってしまいました。

ニーチェの生涯は、最も偉大な悲劇の一つです。双魚宮から処女宮へと至る途上の火星は、ニーチェの胚発育の後半に起きた土星とのオポジション（衝・180度）を克服することができませんでした。ニーチェの内に秘められ、彼のいくつかの著作や、リヒャルト・ワーグナーとの関係性の中で内気に突き破ろうとしていた無垢で太陽のような魂の力は、その精神的な高みから地上の生活の現実へと本当に降り立つことができなかったのです。こうして彼の魂の本質は引き裂かれ、彼は44歳で精神に異常をきたすことになりました。

天秤宮（てんびん座）の火星：

1478年2月7日にトマス・モアが生まれたとき、火星は天秤宮に入っていました。ここでの火星は、古月期の進化における堕落を反映する宇宙の領域へと、すでにさらに一歩足を踏み入れていました。

彼の運命について私たちが知っていることから、もし私たちがトマス・モアの立場に身を置いてみるなら、彼が、精神的な真理の顕現に敵対して働く暗い衝動に満ちた世界に囲まれていたことが分かります。しかしながら、トマス・モアはこの暗闇のただ中に毅然と立ち続けました。彼は非常に偉大な人格の持ち主であり、彼の魂あるいは意識の体は輝かしい太陽の力で満たされていたため、彼は最終的に運命の試練に打ち勝つことができたのです。

私たちは、この魂の力が出生前における火星の運動に反映されているのを見出すことができます。彼の受胎の時期、火星は金牛宮（おうし座）にあり、その後、双子宮（ふたご座）、巨蟹宮（かに座）、獅子宮、処女宮の星座を通過して、最終的に天秤宮へと移行しました。したがって私たちはここでも、先に挙げた二つの例で見出されたような、火星の諸力における宇宙的な無垢を再び見出すことができるのです。これがトマス・モアに、その偉大な人格の強さを与えました。

天蠍宮（さそり座）の火星：

天蠍宮にある火星は、古月期の進化における「堕落（脱落）」の、宇宙的な正確な鏡像です。それは、私たちがこれまで描写してきたあの出来事――長い進化の時代の果てに、最終的に地球を純粋に物質的なものとして出現させるに至った出来事――の結末によって、何らかの形で呑み込まれてしまった魂の力の表現なのです。

私たちは、この天蠍宮の火星の影響を、ヴェラムのベーコン（フランシス・ベーコン、1561年1月22日生まれ）や、オーストリア皇太子ルドルフ（1858年8月21日生まれ）といった人物の出生天宮図（ネイティビティ）の中に見出すことができます。

ヴェラムのベーコンは、とりわけその生涯の終盤において、近代自然科学の概念へと繋がる衝動に敗北してしまいました。彼は、科学的方法において極めて重要となった「経験主義」の父とさえ呼ばれています。この経験主義とは、自然界におけるいかなる精神の存在も考慮に入れないものです。それは自然現象を、単に物質的物質の多かれ少なかれ機械的な反応の結果としてのみ見なします。このようにして、あの堕落に起

源を持つ諸力は、人類をその進化の全行程における最も深い地点へと引きずり下ろしました。なぜなら、人類が世界を純粋な物質として体験するようになったからです。

オーストリア皇太子ルドルフは、オーストリアおよびハンガリーの王位継承者として送らざるを得なかった、狭隘で極めて唯物論的な生活にひどく絶望し、自ら命を絶ちました。このことは、堕落による火星の衝動が正しく受け止められなかったとき、人間の生命そのものを破壊することさえあるということを示しています。

射手宮（いて座）の火星：

射手宮にある火星は、物質世界と自らの内にある精神の火花との「衝突」を人間に体験させるような、アストラル体の状態を反映しています。

ゲーテが生まれたとき（1749年8月28日）、火星は射手宮に入っていました。彼の受胎の時期、火星は処女宮（おとめ座）に位置していました。そこから火星は天秤宮（てんびん座）と天蠍宮を通過し、ゲーテの胚発育の最後の数ヶ月の間に、天蠍宮と射手宮において留（ループ運動）を形成しました。

ゲーテのアストラル体が持つ個体的な性質のゆえに、この人物においては堕落の影響が完全に現れており、彼は自分自身の内にある、この宇宙的出来事に起因する衝突を認識していました。彼は、自らの内に生きていた「二つの魂」について語っています。一方は、感覚が純粋な物質の世界を体験する領域へと、彼を常に引きずり下ろそうと努力し、もう一方は、人類自身の存在の気高い祖先である精神たちが住まう、天上の世界へと彼を呼び戻そうとするものでした。私たちはまた、ゲーテが自らの魂の体内におけるこれらの諸力の間の闘いを通じて、堕落の結末を克服したことを体験することができます。彼は、自らの感覚体験の意識を「浄化」したのです。彼は自然界で働いている精神を見ることができ、それを自身の著作の中で「原植物」として描写しました。彼はこれを、現存するすべての植物生命の超感覚的な原型として捉えました。そして、それらの植物生命は、植物界の目に見える具体的な種類の特異性の中に、様々に形を変えて現れているのだと見なしたのです。

これとほぼ同様の、出生時および出生前における火星の身振りを持っていたもう一人の人物は、レオ・トルストイ伯爵（1828年9月9日生まれ）です。彼の伝記や日記、そして彼の生涯の闘いを明かしている多くの著作を読むなら、私たちは彼の中に、人間のアストラル体の発達によって引き起こされた「堕落」に由来する、あの不協和音を検出することができます。彼は、感覚を通じて自分を捕らえる物質の世界と、人類および宇宙の精神的進化の顕現である世界との間で、常に自らが引き裂かれているのを感じていました。彼はこの不協和音によって激しく苦しんだものの、彼もまた、非常に大きな程度においてその堕落を克服したのです。このことは、彼の行為や著作の中にというよりも、むしろ今日、彼が一人の人間として人類の魂の生命に対してどのように現れているか、という点に表れています。彼の名前の単なる響きそのものが、今日の文化的生活においてある種の重みを持っており、これを容易に無視することはできません。

山羊宮（やぎ座）の火星：

山羊宮にある火星は、堕落の結末を克服することを可能にする、人間の魂の体の状態を反映しています。いまや人間は、偉大なる宇宙的な堕落の諸力による人類の誘惑によって創り出された「二元性（分裂）」を、最終的に救済（変容）することができるのです。

リヒャルト・ワーグナーが生まれた1813年5月22日、火星は山羊宮（やぎ座）に入っていました。彼の受胎の時期、火星は獅子宮（しし座）に位置していました。したがって、出生前の胚発育の期間中、火星は獅子宮、処女宮（おとめ座）、天秤宮（てんびん座）、天蠍宮（さそり座）、射手宮（いて座）を通過し、最終的に山羊宮へと入ったことになります。これは、いわばこれらの諸力が最終的な目標に達するまでの「長い旅路」を意味しています。

私たちは、このことをリヒャルト・ワーグナーの生涯の中に確認することができます。彼の魂の性質の中には、人類が精神世界からの分離という深淵へとまだこれほど深く突き落とされてはいなかった過去の段階に由来する、太陽のような無垢の名残りのようなものが存在していました。これが、獅子宮における火星の配置に反映されているのを見出すことができます。

その後、火星は堕落を反映する星座群へと入っていきます。これは、内なる闘いと困難に満ちた長い期間と結びついています。しかし、人生の後半において、彼は自らの探求の目標へと到達しました。彼は自分自身の魂の中に、彼が「幻影の諸力からの平和」と呼んだものを見出し、この魂の平和から、彼の最後の偉大な楽劇『パルジファル』の音楽を創り出すことができたのです。山羊宮にある火星は、古月期の進化における反逆以来の人間の魂の体の発達に起因する、精神の否定と物質世界における孤独という「深い谷」を彷徨った魂の諸力を、和解させ静めようと努力するのです。

水瓶宮（みずがめ座）の火星：

水瓶宮に火星がある場合、人間が単に火星の本質の浄化を目指すだけでなく、堕落の結果として魂に入り込んできた「二元性」をも救済できるか否か、という問題が生じます。

人間の魂の体内にある不協和音を救済しようとするこの努力は――表面的な視点から見れば――その大半が人間の生涯における「破局」と結びついています。より精神科学的な視点から見れば、それは大半が「頭部の力」と「心臓の力」との間の闘いです。頭部においては、感覚を通じて人間を物質世界へとあまりに強く結びつけがちなアストラル体の諸力が働いているのに対し、心臓を通じて働く諸力は、愛の力によって人間と宇宙との結びつきを確立しようと望んでいます。頭部と感覚は「アーリマンの誘惑」に対して開かれており、心臓は「ルシファーの誘惑」から守られなければなりません。

これは、特定の状況下では肉体的な奇形（発育不全）にさえ繋がることがあります。占星術師のアラン・レオは、「後頭部の発達や脳がなく、事実上、前面の顔面マスクだけ」で生まれた子供の事例を報告しています。この子供が生まれたとき、火星は水瓶宮にありました。もちろん、この出生天宮図において、この奇形の原因を示していた要素はこれだけではありません。

私たちは歴史的な例として、スコットランド女王メアリー（メアリー・スチュアート）の出生天宮図を持っています。彼女が生まれた1542年12月7日、火星はまさに水瓶宮に入ったところでした。彼女の受胎の時期、火星は天秤宮と天蠍宮の間に位置しており、そこで留（ループ運動・逆行運動）を形成し始めていました。

このように、彼女は自らのアストラル有機体を通じて「堕落」に深く巻き込まれていた人物の、極めて典型的な例と言えます。彼女の出生時における水瓶宮の火星の配置は、それが彼女の性質の片面にすぎなかったことを示しています。彼女の生涯の物語は、彼女が「頭部の意識」と「心臓の意識」との間の闘いに、絶えず没頭していたことを証明しています。このように捉えて初めて、彼女が時として通過せねばならなかっ

た混迷を理解することができるのです。彼女の生涯における最後の幕、すなわち「斬首」は、この人物の内部における巨大な闘いが物質化された象徴のようです。

外的な視点からは、彼女の首が心臓から切り離されたため、頭部と心臓の力を調和させることに失敗したように見えるかもしれません。しかし、長い幽閉生活の間に、彼女は自らの魂における対立する諸力の間に、徐々に平和を確立していきました。最終的に、彼女は自分自身の存在という戦場における「霊的な勝利者」として留まりました。彼女の死の詳細は、精神性に敵対する嫉妬の諸力によって描かれた、冷酷に歪められた風刺画にすぎないのです。

双魚宮（うお座）の火星：

双魚宮にある火星は、先述した相反する諸力、すなわち天の力と地の力との間の和解の結果として、「平和の実現」をもたらすことができます。この実現は、堕落の深い谷を通り抜ける生涯をかけた闘いの後に初めて訪れるかもしれません。ここでは、出生前における火星の運動を考慮することが極めて重要になります。

私たちは、双魚宮の火星の理想的な一例を知っています。ノヴァーリスが生まれた1772年5月2日、火星はこの星座（双魚宮）にありました。彼の受胎の時期、火星は処女宮（おとめ座）に入りました。このことは、ノヴァーリスのアストラル体の中に、私たちがこれまで述べてきた、そして処女宮から双魚宮までの星座における火星という視点から描写してきた「魂の体の7つの側面」の顕現が存在していたことを示しています。

ノヴァーリスにおいては、アストラル力の太陽のような宇宙的無垢が現れていたと同時に、偉大なる「堕落と上昇」のプロセスが現れていました。これほど壮大なアストラルの力が、最終的に双魚宮の火星の配置の中に蓄積されていたのです。それは、この素晴らしい存在の周囲に生きていたすべての人々に浸透する、平和と和解の「癒やしの力」となりました。この事実については、多くの記録が残されています。彼が最も苦痛に満ちた魂の体験を通過した後に、彼のアストラル力は調和へと導かれ、精神世界の現実へと目覚めました。その苦痛の体験とは、最も愛する婚約者のゾフィーを失うという「死」の姿を通して、彼に堕落の現実を痛感させるものだったのです。

白羊宮（おひつじ座）の火星：

白羊宮にある火星は、もし他のいくつかの天体配置の事実と結びつくならば、精神世界（霊界）の認識のためのふさわしい土台を提供するアストラル体を指し示しています。処女宮（おとめ座）から双魚宮（うお座）までの星座における火星は、堕落へと至った宇宙的発展、およびその救済と結びついていました。これに対して、白羊宮から獅子宮（しし座）までの星座は、先述した星座群の「真向かい」に位置しています。したがって、これらの星座は、あの偉大なる堕落が起きた際に、高次の精神的領域へと徐々に退いていった諸力を反映しているのです。

私たちは、スウェデンボルグ（スヴェーデンボリ）の出生天宮図の中にその一例を見出すことができます。彼が生まれた1688年1月29日、火星は白羊宮に位置していました。私たちは、彼がその生涯の後半において透視（霊視）能力を発達させたことを知っています。この事例におけるスウェデンボルグの霊視能力を理解するためには、さらにいくつかの事実を付け加える必要がありますが、いまそれを行うことはできません。おそらく後ほど、この出生天宮図の詳細を詳しく説明する機会があるでしょう。

金牛宮（おうし座）の火星：

ラファエロ・サンティが生まれた1483年3月26日（または4月6日）、火星は金牛宮に入っていました。彼の受胎の時期、火星は水瓶宮（みずがめ座）にあり、ラファエロの胚発育の初期段階においてそこで留（ループ運動）を形成していました。

この火星は、頭部と心臓のアストラル力の間を和解させ、同時に天と地との間に意識的な関係性を築こうとする衝動）、最初から携えている意識の体の状態を示しています。実際に、彼の肖像画を見たり伝記を読んだりするなら、この親しみ深く愛すべき人格の中には、天と地との間の不協和音の影など微塵もなく、宇宙のあらゆる存在に対する温かく放射するような愛が存在していたことが確認できます。

最終的に、彼の事例において火星は、天蠍宮（さそり座）の真向かいにある金牛宮に入っていました。火星が天蠍宮にあるとき、人間のアストラル体には堕落の顕現が刻み込まれることになります。この配置は、物質への宇宙的発展の衰退の始まりを特徴づけるものであると同時に、人間に対して「感覚世界の美」を開花させるものでもあります。感覚世界の美とは、その内部における精神の顕現の、最後の「名残り」なのです。それは火星を通じて金牛宮から放射され、真向かいの星座（天蠍宮）へと浸透することができます。

したがって、出生天宮図において火星が金牛宮にある場合、そのような人間のアストラル体の中には、物理的世界における精神を「美」として認識する力として現れます。それは詩への傾倒として現れることもありますが、ラファエロの場合、それは「色彩の美しい世界」において開花しました。私たちが彼の絵画、例えばバチカン宮殿の「署名の間（Stanza della Signatura）」のフレスコ画の前に立つとき、ラファエロに霊感を与えたに違いない魂の状態を体験することができます。そこでは、物質的な事物の世界が、色彩の言語を通じて精神の啓示となっているのです。

双子宮（ふたご座）の火星：

高名な哲学者であるショーペンハウアーは、火星が双子宮に位置していた1788年2月22日に生まれました。彼の受胎の時期、火星は双魚宮からその運行を開始していました。そして、この出生前の胚発育の最後の数ヶ月の間に、火星は双子宮において留（ループ運動）を形成しました。

双子宮は、射手宮（いて座）の真向かいにあります。射手宮の火星の視点においては、人間の存在を物質世界と精神世界との間の不協和音（葛藤）として出現させがちなアストラルの状態を見出しました。これに対して、火星が双子宮にある場合、この闘いは、いわば「精神世界に軍配が上がる」形で決着を見ます。

ショーペンハウアーの哲学は、ある程度まで彼のアストラル体の個体的な状態と結びついており、この傾向の表現となっています。ショーペンハウアーの世界観によれば、人間の世界体験とは、その人自身の魂の状態の結果にほかなりません。したがって、私たちが苦痛や悲しみを体験するのだとすれば、それは私たちが自らの魂と世界との結びつきを通じて、自分自身でこの世界を創り出してしまったという事実に起因するのです。

苦痛や悲しみからの救済のためには、私たちは自らの魂の生命をこの世界から遠ざけねばなりません。この見解の中には、誤解されたブッダの教えとの、ある種の漠然とした結びつきが現れています。それは、物理的世界の事物の背後から再び精神の光が輝き出せるように感覚の知覚を「浄化」しようとするのではなく、硬化して不快なその世界から逃避し、世界を救済されないまま残しておこうと切望する、一種のスピリチュアリズムなのです。

これこそが双子宮（ふたご座）にある火星の持つ危険性ですが、もちろん、この配置が要求している目標とは、私たちの内にあるその闘いの必然性を、世界全体の運命にとって重要な問題として認識することにあります。

巨蟹宮（かに座）の火星：

『神曲』の詩人であるダンテが生まれたとき（1265年5月）、火星は巨蟹宮にありました。出生前の胚発育の期間中、火星は金牛宮（おうし座）における留（ループ運動）からその運行を開始していました。したがって、金牛宮の火星について述べたことを思い起こすことができます。ダンテの場合、この詩人は、自身の個人的な人生において暗く悲劇的であった物質世界の出来事の上に、精神（スピリット）の光を注いだのです。

そして、巨蟹宮の火星という視点の中に、私たちはダンテの魂の体に刻み込まれた、もう一つの能力が指し示されているのを見出すことができます。真向かいの星座である山羊宮（やぎ座）においては、魂における対立する諸力を和解させようとする衝動が示されていました。これに対して、巨蟹宮の火星に影を落とされたダンテの詩の中には、この和解と浄化のプロセスが持つ「宇宙的な壮大さ」の顕現が見られます。『神曲』の「地獄篇」と「煉獄篇」におけるあの巨大な情景は、すべての人間が死後に通過しなければならない体験の、宇宙的な背景そのものなのです。

獅子宮（しし座）の火星：

獅子宮は水瓶宮（みずがめ座）の真向かいに位置しています。水瓶宮の火星は、心臓で働くアストラル力と頭部で働くアストラル力との「結合」を目指す熱望を示していました。火星が獅子宮にあるとき、私たちはこの結合の宇宙的な実現、すなわち霊的な達成への熱望を体験することができます。これは、頭部（あるいは思考の領域）における熱狂、そして心臓（あるいは意志の領域）における熱狂として現れます。

私たちは、このような実体化された熱狂を、詩人シラーの中に見出すことができます。彼が1759年11月10日に生まれたとき、火星は、受胎の時期に水瓶宮からその旅を開始した後、獅子宮に入っていました。頭部と心臓を結合させようとするこの熱狂と熱望は、文字通り彼の肉体を消耗し尽くしました。

ナポレオン1世の誕生時（1769年8月15日）にも、火星は獅子宮にありましたが、この時は海王星とコンジャンクション（合）を形成していました。それは、白羊宮（おひつじ座）において天王星とコンジャンクションを形成しながら、留（ループ運動）を伴って開始された運行でした。火星の身振りに示された魂の体のパワーは、例えばフランス革命の理想に対する、一つの実現された熱狂となることも可能でした。しかしながら、それは物理的世界から乖離してしまい、代わりに一種の機械的で霊的なものに偏ったダイナミズムとなってしまいました。それはむしろ、物理的世界と精神世界との結合を破壊するものでした。この悲劇は、火星が天王星および海王星とコンジャンクションを形成していることに現れており、これが火星の資質に対して、超人間的、あるいは非人間的なムードを押し付けたのです。

天上の出来事（天体運行）

土星という惑星は、双子宮（ふたご座）に位置しています。土星がこの星座に入ったのは昨年の真夏（1944年の夏）のことで、その時、土星は太陽とコンジャンクションの配置にありました。つまり、太陽の真後ろに位置していたのです。クリスマス時期の12月29日には、土星は太陽とオポジション（衝・180

度）の配置になりました。その時、太陽は黄道（ゾディアック）の反対側の部分へと移動しており、射手宮（いて座）に位置していました。

10月24日から3月6日まで、土星は留（ループ運動）を形成しました。この時、土星は後退、すなわち私たちの惑星系の天体が動く一般的な方向とは「逆」の方向へと動いていました。しかしながら、この逆行運動の間も、土星は双子宮の星座から離れることはありませんでした。

私たちは、このような天体の出来事を、時計の針の動きを見るのと同じように捉えるべきです。私たちの人生を決定づけるのは時計そのものではなく、私たちは時計が示す「時間」に従って自分の生活を整えているのです。したがって、天体の影響によって地上の出来事がいかなる形であれ決定される、と語ることはできません。例えばこの事例における「双子宮の土星」が地上を決定しているわけではありません。しかし私たちは、この天体の出来事の中に、人類が足を踏み入れた宇宙的な「時間」を読み解くことができるのです。この時間が求める必要性を満たすかどうかは、私たちの自由に委ねられています。

土星は、人類の魂の生命の深層に反映されます。土星は、人間の意志の未知の領域において命を吹き込まれる、より深い「歴史的衝動」の時間を告げるのです。前回、土星が双子宮に滞在していたとき、人類は第一次世界大戦の真っただ中にありました。それは1914年から1917年にかけての数年間のことでした。現在（1945年）、私たちは再び同様の配置に直面しており、あたかも過去のそれらの時代に答えが出されなかったすべての問題が沸き起こり、再び境域の前に立っているかのように見えます。そして非常に多くの場合、それらの問題は当時よりもさらに巨大化しているように見えるのです。

双子宮という星座は、人間が一人の個体として自分自身を体験するときの、古くからの「二元性」を反映しています。一方の側において、人間は自らの内に、個を精神世界あるいは宇宙世界へと結びつける「神聖なる火花」を多かれ少なかれ明確に体験します。しかしもう一方の側において、人間は自分が感覚を通じて体験する地上の世界に置かれていることを見出します。そしてその地上の世界は、彼らの内にある真に「人間的な」本質を、硬く幽閉してしまっているのです。

人間の個体の中で出会うこれら二つの世界の間には、いかなる和解も存在しないかのように見えます。これら二つの世界は敵対関係にあり、この憎しみは日ごとに大きくなっています。これこそが、今日（1945年当時）人類が立たされている立場なのです。双子宮（ふたご座）の土星は、「自我」の「時間」を告げています。これらの問題はこの時間の猶予の間に解決されねばならず、さもなければ人類は、後になってさらに強大な破局に襲われることになるでしょう。

双子宮の土星の配置に反映されて現れる大きな問いとは、すなわち「人間の魂は、精神（霊）と肉体（身体）の間で、どのように自らを導いていけばよいのか」ということです。精神の啓示は極めて強力であり、今後さらに強力になっていくでしょう。私たちの時代において、これらの啓示は非常に奇妙で、ほとんど粉砕されるような衝撃を伴うものとなり得ます。出来事の中心にいる人々や、様々な戦域で戦わねばならない人々は、このことをあまりにもよく知っています。

それでもなお、人間がこれらの体験を最早十分に深刻に受け止められなくなってしまったり、あるいは彼らの魂が圧倒されて生活が混乱に陥ったりする危険が存在します。人類と世界の精神は、人類の魂の体験にとって「混乱をもたらす幻影」と化してしまう危険にさらされているのです。

人間が肉体を通じて結びついている世界は、ますます硬化し、苦痛に満ちたものとなりつつあります。精神、あるいは魂に結びつくあらゆるものに対するむき出しの憎しみが、その世界には根づいているかのよう

に見えます。この冷徹な憎しみのゆえに、地球という惑星は人間の魂にとって完全に不適格な場所となり、人間の「機械化された幻影」にのみ適した場所となってしまう危険にさらされているのです。

土星の配置に反映されている、人間の魂の深層における問題とはこれです。すなわち「今日の人類は、どのようにしてこの二重の危険を克服できるのか」ということです。

私たちは、私たちの肉体が属する世界を、硬く、冷たく、憎むべきものとして出現させている「自分自身の内なる力」を克服しなければなりません。もし私たちが、旧世界的な、生まれつき備わっている利己主義から自らの感覚を浄化するならば、私たちは物理的世界を精神の顕現として知覚できるようになります。精神科学は、自然界を見つめ、そこを貫き通している精神の光を見る力を私たちに与えてくれます。

精神が人間の魂の領域において自らを明かすとき、私たちは、高次の世界に関する確かな知識へと到達できる「真実の道」が存在することを認識せねばなりません。この知識を実現すること、そしてそれを必要としている人々に伝える力を得ることこそが、精神科学が明かしてきた道をすでに歩んできた人々の課題なのです。この知識だけが、魂の準備ができていないために混乱をもたらす幻影として作用する、霊的体験から生じる諸々の危険を、人間に克服させることができるのです。

これこそが、双子宮の土星の配置に反映されている人類の現状です。それは、世界の運命として人間の魂の深層で働いている諸力の、大まかな輪郭を示しています。さらなる影響は他の惑星の配置や運動によって反映されていますが、これらについては次回の書簡（第13信以降）で語ることにいたしましょう。

第十三書簡 - 1945年4月
「惑星世界の本質：太陽 I」

●基本的な視点

第十三書簡は、太陽の本質を扱うシリーズの第1回。
これまで土星（意志の霊）、木星（叡智の霊）、
火星（運動の霊）と進んできたのに対し、
太陽は形態の霊（エクスシアイ／エロヒム）の領域として位置づけられる。

太陽は、人類のアストラル的原型を
個人の肉体と運命へと織り込む力の担い手。

出生時の太陽位置は、
個人が過去から引き継いだ肉体的・霊的資質と、
それを地上でどう活かす（または克服する）かという課題を示している。

●要点

1）太陽の運動と領域のイメージ

太陽と地球は、基本的に
レムニスケート（8の字形）の軌道を描いて動いていると想像できる。

この形態は人間の頭部と身体の相反する活動とも結びついており、
太陽の霊的本質に近づくための重要な鍵となる。

太陽の領域は、形態の霊（エクスシアイ）の外衣・領域である。
（旧土星期に個別化（自我の器としての身体の準備）の衝動を放射した霊たち。
　その衝動は、誕生の門を通じて個人が肉体に入る働きと今も結びついている。）

2）誕生時における太陽の位置の意味

出生時の太陽の位置（黄道の12サイン）は、
過去の転生の結果として形成された肉体の最終形態と、
身体のどの領域に特に造形力（エーテル力）が集中しているかを示す。

恒星星座と黄道12サインの区別が重要である。

・恒星星座：
　人類のアストラル的原型を表す。
・黄道12サイン：
　太陽と地球の関係から生じるエーテル的な造形力の12領域で、
　人体の12の主要部位に対応。

○黄道12サインにおける太陽の主な特徴と例

〔サイン〕
身体への主な影響
歴史的例（主な人物）

〔牡羊宮〕
頭部、特に個性的な造形力
ハーネマン、J.S.バッハ、ビスマルク

〔牡牛宮〕
喉頭・言語・音の力
チャイコフスキー、シェイクスピア、ロベスピエール、レーニン

〔双子宮〕
腕・表現力
ブルワー＝リットン、デューラー

〔蟹宮〕
胸部・「包み込む」傾向
アレクサンダー大王、カール12世、マクシミリアン

〔獅子宮〕
血液循環・呼吸・「王者の態度」
ブラヴァツキー、シェリー、ナポレオン

〔処女宮〕
横隔膜以下・「世界を消化する」
ゲーテ、エリザベス1世、リシュリュー、トルストイ

〔天秤宮〕
腰・平衡器官・調停力
サヴォナローラ、チェーザレ・ボルジア

〔蠍宮〕
進歩のための破壊・浄化
エラスムス、ルター、シラー

〔人馬宮〕
大腿部・外界への活発な関与
メアリー・スチュアート、チャールズ1世、ベートーヴェン
磨羯宮
膝・肘・内界と外界のバランス
ジャンヌ・ダルク、ノストラダムス、ニュートン

〔宝瓶宮〕
下腿部・自我を宇宙エーテルへ
ラスキン、バイロン、モーツァルト、スウェデンボリ

〔双魚宮〕
足・地球との深い関わり
ミケランジェロ、ユーゴー、ショーペンハウアー

（※これらは出生図全体の文脈で判断する必要があり、単独のルールではない）

3）太陽のより深い本質

太陽は恒星宇宙の深淵から純粋なアストラル物質を引き寄せ、
段階的に濃密化させて地球上の物理的・個人的な現れへと導く。

しかし太陽は実は三位一体の存在（三重の存在）であり、
この書簡ではその一面しか扱われていない（次の書簡で詳述予定）。

4）現在の天空の出来事（1945年4月）

金星のループ（逆行運動）が牡羊座と魚座の間で起こっている。

金星の内合・外合は8年間で正五角形（ペンタグラム）を描く。

現在、五角形の一つの頂点が魚座へ移行しつつある
（過去約100-120年でゆっくり移動）。

霊的意味：
　民族霊の領域における重大な決断。

　西欧と東欧の問題（スペイン vs ロシアの極性）。
　1937年（スペイン内戦）、1941年（独ソ戦勃発）と連動。
　17世紀末のピョートル大帝の西欧化改革とも類似。

この出来事は、人類が直面する「西と東」「精神と物質」の
大きな対立と変革の時代を象徴していると解釈される。

●本文

　第11書簡において、私たちは太陽系のレムニスケート（8の字形）の形態について指摘しました。このような世界観の捉え方は、遅かれ早かれコペルニクスの地動説を変容させ、宇宙に対するより霊的な理解を呼び覚ますことになるでしょう。

これから太陽について語るにあたり、太陽が1年をかけて宇宙空間をレムニスケートの軌道で移動し、地球がその後を追うように同じレムニスケートの軌道を描いている様子を想像してみることは、大きな助けとなります。したがって、この形態が太陽と地球の両方の進路を構成することになります。

このイメージは、太陽圏についての理解を深めるのに役立ちます。コペルニクス体系（地動説）だけでは太陽圏のイメージを得ることはできませんが、太陽と地球の歩みが描くレムニスケートは、ある空間的な形態のイメージを生み出します。そしてこの形態は、人間の頭部と身体の相反する活動とも結びついており、人間の形態の中にも刻み込まれているのを見出すことができます。私たちはこの形態を、他の多くのつながりの中にも見出すことができます。

レムニスケート運動は、あくまで基本原則にすぎません。現実における太陽と地球の運動ははるかに複雑であり、そのため地球にいる私たちには、太陽が1年をかけて黄道（天球上の太陽の通り道）の円を移動しているように見えます。しかし、太陽の霊的な本質にアプローチする今の段階において、これらの詳細に煩わされる必要はありません。

これまでの記述において、私たちは土星が「意志の霊（トローネ）」の領域または外衣であり、木星が「叡智の霊（キュリオテテス）」の領域、そして火星が「運動の霊（デュナメイス）」の領域であることを見てきました。太陽の領域――すなわち、太陽の運動によって示される空間的形態であり、基本的にはレムニスケート（8の字形）として想像できる領域――において、私たちは「形態の霊（エクスシアイ／エロヒム）」の領域を見出すことができます（第9書簡を参照）。

「形態の霊」の霊的な歩みを知ることで、太陽の領域を通じて働く諸力の印象を掴むことができるでしょう。私たちはすでに、古代の「古土星」進化の段階において、形態の霊の活動を見出すことができます。彼らは古土星の宇宙へと「個体化」の衝動を放射しましたが、当時の惑星はまだ、この衝動を受け入れて進化させる段階にはほど遠い状態でした。そのため、エクスシアイの衝動は反射として残るのみとなり、それはそれまで一体であった惑星体が、多くの単一の身体（今日の間の肉体の前身）へと分割される現象として現れました（第3書簡を参照）。

したがって「形態の霊」とは、個別性である「自我」が、最終的に世界へと参入するための道を準備した霊たちであると言えます。彼らは、自我の「器」である人間の肉体的形態を創造し、洗練させていく中で、その衝動が成就する時が来るまで、すべての進化サイクルを通じてこの働きを続けました。この「形態の霊」の根本的な衝動は、彼らの宇宙的な外衣である太陽の領域へと織り込まれています。それはそこに保存されており、誕生という門をくぐって人間の個別性が肉体的形態へと参入することと、今なお結びついているのです。

誕生の瞬間における太陽の位置は、地上生活への参入時に、人間の身体のどの部分が特に発達しているかを示しています。これは非常に複雑な問題です。なぜなら、多かれ少なかれ身体が「偏って」発達することは、過去の転生から引き継いだ特定の能力を発揮する上での「障害」にもなれば、それを「高めるもの」にもなり得るからです。この障害は、地上生活の中で能力をさらに発展させなければならないのと同様に、克服されなければならないものです。出生図の詳細を調査することで、これらの特徴を明らかにすることができます。

誕生の瞬間における黄道のサインの中での太陽の位置は、人間とその肉体的形態との特別な関係性について判断を下すための基盤となります。ここで私たちは、固定された恒星の星座（ゾディアック）と、12の

「サイン（黄道十二宮）」を持つ黄道とを、明確に区別しなければなりません（第2書簡において、私たちはすでにこの違いについて指摘しました）。

恒星からなる黄道の12星座は、私たちの太陽系全体の遥か彼方、恒星宇宙の深淵に存在しています。それらは、階層秩序（ヒエラルキア）を持つ根源的な創造の霊の、目に見える姿を表しています。また、そこには神々によって計画された、個としての存在の「永遠の原型となるアストラル像」も存在しています。

一方で、太陽の空間における年間の進路であり、太陽のレムニスケート運動によってもたらされる「黄道」において、私たちは、人間の形態のいわば「二重身」のようなものとして肉体へと下降し、肉体をアストラル的な原型の似姿にしようと奮闘する諸力を見出さなければなりません。これらは「エーテル的な形成力」です。

12の恒星星座に目に見える形で現れている人類のアストラル的原型が、12の要素からなる存在であるのと同様に、黄道の造形力もまた12の要素からなり、人間の身体の12の主要な領域と結びついています。それでも、私たちは黄道のこれら12の領域を、恒星の黄道星座とは切り離して想像しなければなりません。例えば、黄道は恒星星座とは異なる点から始まります。それは完全に太陽と地球との関係性から生じるものです。このことは、地球上における四季の移り変わりに表現されています。

四季の巡る1年は、春、あるいは太陽が「春分点」に位置する時から始まります。ここが黄道の開始点です。この点は人間の形態の「頭部」、すなわち「牡羊座」と結びついています。なぜなら、そこは太陽の領域において、頭部のアストラル的原型を人間の身体へと刻み込む、微細な造形力が集中している領域だからです。このようにして、太陽――そして地球も――は1年をかけて、人間の身体の12の領域に対応する黄道の12の領域を通過します。太陽は3月21日に牡羊宮に入り、4月21日には牡牛宮に入り、5月21日までそこにとどまった後、双子宮に入る、といった具合に進んでいきます。

誕生時における黄道の12サインのいずれかにある太陽の位置は、過去の転生の結果から、胚（胎児）の発生プロセスの間に創り出された最終的な「形態」を示しています。胚のプロセスの全期間を通じて、太陽は平均して黄道の9つのサインを通過しました。これは、特有の、かつ個人の最終的な形態へと向かう、身体の進化的な変容の姿であり、人間の形態の中にも刻み込まれているため、誕生後の人生における身体の発達の、様々な時期の縮図として現れます。

ここで、黄道の12サインにおける太陽について簡単に説明しますが、これらの説明はすべて、出生図における太陽の影響を判断するには不十分であることを忘れてはなりません。なぜなら、黄道における位置の他にも、考慮すべき非常に多くの個人的な事実が存在するからです。したがって、これらを明確な規則として固定することは不可能です。

〔牡羊宮（アリエス）の太陽〕

人間の頭部を形成する上で特に活発に働きます。頭部を構築する微細なエーテル力は、他のどの場合よりも強く、個人の個性的な特徴を表現するために使用されます。その場合、それらの力は偉大なイニシアチブ（主導権）とエネルギーを展開するための乗り物となることがあります。彼らは、人生のあらゆる分野において、新しいアイデア、新しい手法、新しい見解を導入することを可能にします。このような人物は、ある衝動の担い手となり、その実行は他者に委ねられることがあります。その衝動が建設的なものであるか、破壊的なものであるかはまた別の問題です。例としては、ホメオパシーの創始者であるハーネマン、作曲家の

ヨハン・セバスティアン・バッハ、そしてプロイセン化されたドイツの建国者であるオットー・フォン・ビスマルク公爵が挙げられます。

〔牡牛宮（タウラス）の太陽〕

喉頭の領域に強い形態を形作る傾向を与えます。ある人物は、身体のこの領域で表現される力から、その地上生活のほぼすべてを構築するかもしれません。これは、作曲家のチャイコフスキーや詩人のシェイクスピアのように、言葉や音の力を圧倒的に使用することとして現れることがあります。しかし、これらの力は権力のために悪用されることもあります（例：ロベスピエールやレーニン）。なぜなら、太陽の位置は、その力の表現に対する「道徳的判断」をその人物に授けるわけではないからです。

〔双子宮（ジェミニ）の太陽〕

特に腕と結びついている造形力を身体に刻み込みます。これらの力が活発に働いている人物は、この領域に自己の中心を感じ、人生における自己表現のためにこれらの微細なエーテル力を使用することがあります。例としては、表現の才能が話し言葉ではなく書き言葉に現れた小説家のブルワー＝リットン、そして画家のアルブレヒト・デューラーが挙げられます。

〔蟹宮（キャンサー）の太陽〕

人間の身体の胸部を形成する力に、その人物の能力を集中させます。そのため、それが大きくても小さくても、自分自身の個人的な世界を「包み込みたい」という傾向を与えます。この傾向から、運命によって自分のケアに委ねられたものへの愛が芽生えることもあれば、征服への渇望が生じることもあります。例としては、アレクサンダー大王、スウェーデン王カール12世、メキシコ皇帝マクシミリアンが挙げられます。

〔獅子宮（レオ）の太陽〕

血液循環と呼吸において働く造形力を強めます。この天賦の才を持つ人物は、人生のあらゆる領域において、ある種の「王者のような態度」を示すことができます。なぜなら、生命の奔流が最も内なる心臓から湧き出ているからです。しかしながら、これは極端な利己主義の源泉ともなり得ます。例としては、H・P・ブラヴァツキー、シェリー、ナポレオン1世、［そしてウィリー・ズーヒャー］が挙げられます。

〔処女宮（ヴァルゴ）の太陽〕

人間の能力を、横隔膜より下の領域で表現される力へと集中させます。このような個別性を持つ人は、それが心地よいものであれ過酷なものであれ、いわば「世界を消化する」ことができます。例としては、ゲーテ、イングランド女王エリザベス1世、リシュリュー枢機卿、レオ・トルストイが挙げられます。

〔天秤宮（リブラ）の太陽〕

人間の身体における、腰や様々な平衡器官に固有の能力を用いることを促します。これらの能力が発達している人は、人間の世界における相違を調停したり、困難を円滑に解決したりする達人になることができます。このような人物は、厳正中立な裁判官にもなれれば、運命を弄ぶ不誠実な手品師にもなり得ます。例としては、サヴォナローラやチェーザレ・ボルジアが挙げられます。

〔蠍宮（スコーピオ）の太陽〕

進歩をもたらす力を発揮する能力を与えます。そして多くの場合、この進歩は、時代遅れで反動的なものを「破壊すること」によって勝ち取られます。偏見や伝統を一掃することは、人類の進歩への道を切り開くことになりますが、それは単なる破壊的な力へと変わってしまうこともあります。例としては、人文主義者のエラスムス（ロッテルダムのエラスムス）、マルティン・ルター、詩人のフリードリヒ・シラーが挙げられます。

〔人馬宮（サジタリアス）の太陽〕

人生において、特に人間の身体の大腿部を形成する力を活用する機会を与えます。それは人間を、絶え間なく変化する外界の波へと連れ出します。このような人物は非常に活気に満ちあふれることがありますが、この能力が一方に偏りすぎると、その力そのものに押し流されてしまうこともあります。例としては、スコットランド女王メアリー、イングランド王チャールズ1世、ベートーヴェン、ハインリヒ・ハイネが挙げられます。

〔磨羯宮（カプリコーン）の太陽〕

膝と肘を形成する諸力を強めます。これらは、対象からなる「外界」と、意識からなる「内界」との間のつながりを確立する力です。感覚器官、特に「目」も同様の能力を受け継いでいます。太陽が磨羯宮にある時に生まれた人は、内界と外界の関係性のバランスをどのように取るかという問題に直面します。一方では、自らの内的な体験の客観的現実性に対して絶対的な確信を得る段階に達することもありますが、他方では、この確信を失い、人間の魂の体験という境界線の外側にある、客観的で確実な世界の姿を求めて虚しく葛藤することもあります。例としては、ジャンヌ・ダルク、予言で有名なノストラダムス、そしてアイザック・ニュートンが挙げられます。

〔宝瓶宮（アクエリアス）の太陽〕

下腿部（ふくらはぎ・すね）を構築する諸力の発達を促します。これらの力は、人間の意識を「自らの皮膚を越えた」領域、すなわち宇宙のエーテルの広大な海へと連れ出す傾向があります。この天賦の才を持つ人物にとって決定的な問題は、自我がこの海の上で自らを維持し、方向付けるのに十分なほど強いかどうか、ということです。例としては、ジョン・ラスキン、バイロン、モーツァルト、そしてスウェデンボリが挙げられます。

〔双魚宮（ピスケス）の太陽〕

最後に、双魚宮の太陽は「足（足首から下）」の造形力と結びついています。このサインに太陽がある時に生まれた人は、足が踏みしめる地球を体験し、いわばそれを「味わう」ことになります。個人の自我の強さに応じて、地球は「堕落した天体」として体験されることもあれば、人類の課題として変容させ、救済（贖罪）すべき「重く意気消沈させるような重荷」として体験されることもあります。例としては、ミケランジェロ、ヴィクトル・ユーゴー、ショーペンハウアー、そしてニューマン枢機卿が挙げられます。

このようにして、太陽は個としての存在の「アストラル的原型」を、地上における個人の個別的な人生へと引き下ろす力を持っています。この原型的存在の諸器官は、個々の人間の運命の渦の中に投げ込まれるのです。私たちの太陽系の太陽は、すべての物理的物質の起源であるこの「純潔なアストラル物質」を、恒星

宇宙の深淵から私たちの宇宙の中心へと引き寄せます。この原型的物質は、太陽に到達する前に様々な段階の濃密化を経ていきます。そして地球において、それは物質の状態、すなわち個人の領域における「現れ」の状態へと到達するのです。

しかし、これは太陽の活動の最終的な段階ではありません。これについては次の書簡で語らねばなりませんが、そこで私たちは、太陽が現実には「三位一体の存在（あるいは三重の存在）」であることを知るでしょう。その時、私たちは宇宙における最大の神秘に触れることになります。この書簡において、私たちはこの問題の片面にしか言及することができませんでした。

〔天空における出来事〕

現在、天空における最も重要な出来事は、「牡羊座」と「魚座」の星座（コンステレーション）における金星のループ（留・逆行運動）です。ここ数ヶ月の間、私たちは西の空に輝く宵の明星として金星を見てきましたが、まもなく完全に私たちの視界から姿を消すでしょう。金星は黄道を太陽に向かって逆行しており、4月25日には太陽の真上に位置することになります。現実には金星は太陽と地球の間に位置しているのですが、地球から見る角度のせいで、太陽の上に立っているかのように見えるのです。

金星が太陽の前方――すなわち太陽と地球の間の空間――に位置する時に起こるこのループ（逆行軌道）は、約19ヶ月という周期的な間隔で発生し、その都度、黄道の異なる星座で起こります。もし私たちが紙の上に黄道星座を円として描き、8年間にわたる金星の運動を観察した後に、それらのループの位置――金星が太陽の前方にある「内合」と、金星が太陽の背後にある「外合」――をマークしていくなら、驚くべき発見をすることになるでしょう。

すべての合（内合と外合）が、その円の内部に描かれた正五角形（ペンタグラム）の「5つの頂点」で起こっていることに気づくはずです。8年の周期の中で、私たちはこの五角形のそれぞれの頂点において、常に1つのループ（内合）と1つの外合を見出すことになるのです。

※図



現在の金星のループ（逆行）は、牡羊座と魚座の間で起こっています。私たちは今、巨大な正五角形（ペンタグラム）の5つの頂点のうちの1つが、黄道のこの地点で天空に架かっている様子を想像しなければなりません。したがって、牡羊座と魚座にあるこの頂点は、過去にも金星と太陽の他の合（コンジャンクション）の舞台となってきたはずであり、将来も同様の出来事がここで起こるはずなのです。

この頂点で起こった前回のループ、そしてその最高潮の出来事であった「内合」は、1937年の復活祭の頃に発生しました。その4年後である1941年の復活祭頃には、ほぼ同じ位置で「外合」が起こっています。

綿密に比較してみると、この五角形の頂点は1937年以来、わずかに逆行していることが分かります。1937年には、その位置はちょうど牡羊の頭部と、魚座の片方の魚の間にありました。しかし現在、1945年には完全に魚座へと進入しており、これからの100年から120年の間に、この頂点はゆっくりと魚座を通過していくことになります。動いているのはこの頂点だけではありません。五角形全体が、巨大な宇宙の車輪のスポークのように、黄道の中をゆっくりと回転しているのです。私たちは今、この車輪の1本のスポークが牡羊座から離れ、魚座へと進入していく時代に生きています。人類がこのサインの移行という出来事に再び立ち会うのは、約300年後のことです。

人間の顔つきがその内面の感情や体験を裏付けるのと同じように、この天界の出来事は霊的世界の内面的な営みを表現しています。金星の領域において、私たちは人間の共同体――例えば「民族」など――の指導者であり守護者である霊的生命体に出会うことができます。したがって、金星と太陽の合によって創り出される金星の「五本の光芒を持つ星（五角形）」が、魚座に進入して新たなサイクルを開始するならば、それは「民族霊」の領域における重大な決断の現れであると予測せねばなりません。天空の出来事に目を向けるとき、私たちは地上における人類の危機的な状況を前にした、民族霊たちの「大評議会」のようなものを感知していると言えるかもしれません。

これとよく似た出来事は、17世紀の終わりに、ピョートル大帝がロシアのツァーリ（皇帝）となり、絶大なエネルギーをもって自国を西欧化させた時にも起こりました。当時の歴史を今日の出来事と密接に結びつけて研究することは非常に興味深いことであり、そのような研究を通じて、私たちは今日ヨーロッパで明白になりつつある多くの潮流を、より深く理解できるようになるはずです。

今回の金星のループは、いわゆるスペイン内戦の時期であった1937年、そして特に1941年春の独ソ戦（ドイツとロシアの戦争）勃発へと至る前段階の時期とも結びついています。このこともまた、霊的な視点から明らかになる人類の課題を示しているのです。牡羊座から魚座への移行は、現代人類における「西欧と東欧（西と東）の問題」を暗示しており、それはヨーロッパにおいてはスペインとロシアという極性の中に、いわば縮図として表現されています。したがって、私たちが天空におけるこの金星の出来事を意識するならば、私たちはこれから50年、あるいは100年の間に訪れる「黙示録（アポカリプス）」に耳を傾けることを学ぶことになります。そしてそれは、私たちの身の回りの出来事に対する、霊的な裁きの必然的な結果なのです。

第十四書簡 - 1945年5月
「惑星世界の本質：太陽 II」

●基本的な視点

■ウィリー・ズーヒャー
『イシス・ソフィア Ⅰ 〜 アストロソフィー入門』

第十四書簡 - 1945年5月
「惑星世界の本質：太陽 II」

●基本的な視点

現代天文学が太陽を巨大な火の玉（物質的天体）とみなすのに対し、
ルドルフ・シュタイナーの概念に基づき、
太陽を「反空間」の現れ、
宇宙空間に開いた「穴」として捉える。

太陽は物質を反空間へ引き込む吸引力を持ち、
宇宙の「消化器官」として機能する。
物質の溶解・エーテル化を通じて宇宙の精神的進歩を促し、
死者の門としての役割を果たす。

月の交点（ノード）を太陽と月の領域をつなぐ門と位置づけ、
出生図や死のホロスコープを通じて、
人間と死者の世界、過去の個性との霊的結びつきを読み解く。

全体として、アストロソフィー的視点から太陽・月・地球の関係を、
消化・呼吸・死生・東西問題などの人間的・歴史的比喩で解明する。

●要点

・太陽は物質的天体ではなく、反空間の「穴」であり、
アストラル物質を引き寄せて溶解し、
未来のエーテル的胚芽を創る宇宙の消化活動を担う。

・地球は物質の「摂取・感覚実現」の場。
人間形態の創造は太陽活動の間接的結果で、最終目的は死による溶解と継承。

・太陽は「死者への門」。
出生・死時の太陽位置は霊界との結びつきを示す。

・月の軌道は太陽の軌道と約5度傾き、交点（ノード）で交差。
ノードは約18年7ヶ月で太陽軌道を一周し、太陽領域と月領域の「門」となる。

・この門を通じて死者との個人的結びつきが成立。
例：ゲーテ（パラケルスス）、スピノザ、ライプニッツ（ジョルダーノ・ブルーノ）など、
惑星位置で霊的継承を示す。

・1945年5月の火星は魚座。歴史的個性（特に教皇ニコラウス1世）との関連から、
東西教会分裂・東西文明対立を論じ、宇宙的キリストの認識が真の解決策であると示す。

●本文

現代の天文学は、太陽を大なり小なりの巨大な火の玉とみなしています。その活動の性質や源については多くの理論が存在しますが、それらのどれも、太陽のさまざまな現象に関連する多様な問題に対して、真に満足のいく答えを提供できてはいません。

これらのすべての理論に従えば、太陽はガス状、あるいは固体状の物質でできた天体であるということになります。ルドルフ・シュタイナーは、太陽や私たちの宇宙全体の性質に関する多くの謎を解き明かすことができる、異なる概念を提示しました。

彼は私たちに、負の空間、すなわち「反空間」という概念をもたらしました。この反空間の考え方によれば、私たちが空に見ている太陽が存在するのは、私たちの宇宙の空間が消失し、そこに反空間が創り出されているからだというのです。

したがって、太陽は宇宙空間に開いた「穴」のようなものであり、太陽の活動とは、空間にある物質を反空間の領域へと引き込む、一種の「吸引力」のようなものです。前回の書簡において、太陽が宇宙のアストラル物質を自らへと引き寄せているとお話しした際、言及していたのはまさにこのような活動のことでした。

しかし、このアストラル物質は太陽に到達する前に、濃密化への進化を遂げます。それは明らかに、地球上でその頂点に達するものです。これだけで太陽の活動が尽くされるわけではありません。太陽の活動は、人間の体内における消化のプロセスに例えることができます。消化するためには、人は食べなければなりません。しかし、消化の究極の目的が、人に食べさせることであるとは言えません。消化の最終的な目的は、食物の溶解と分解です。これを達成するために、人は食物を摂取しなければならず、それを感覚で体験するのです。同様に、太陽の衝動とは、私たちの宇宙の精神的進歩と更新のための「エーテル化された基礎」を創り出すために、宇宙の物質を溶解することにあります。太陽は、私たちが生きている宇宙という偉大なる宇宙的存在の「消化」器官なのです。地球はこの宇宙において、「食物」である物質が摂取され、感覚によって実現される領域です。

したがって、地球、そして第十三書簡で説明されたような個々の人間形態の創造も、いわば太陽の活動の間接的な結果にすぎません。最終的な目的は、未来の宇宙のエーテル的胚芽へと、受け継がれた力や物質を変化させるために、人間の形態を溶解することです。私たちは、この人間の形態が溶解するプロセスを「死」と呼びます。それゆえ、太陽は死者の門であり、あるいは「死者への門」と言うこともできます。

死の瞬間における太陽の位置は、死後の霊界における生活にとって非常に重要です。これについては、「死のホロスコープ」を研究する際、さらに詳しく語らなければなりません。出生の瞬間における太陽の位

置もまた非常に重要です。なぜならそれは、人間と死者の世界との結びつきを、極めて独特な方法で示しているからです。

私たちは、出生図の個々の詳細が、出生前の霊界での生活の間に起こった出来事の指標であるという事実に、身を馴染ませていかなければなりません。あるいはそれらは、出生後の人生への霊的な出来事や流入を理解するための鍵であるかもしれません。このようにして出生図の太陽の背後に隠されているものを理解するための鍵を見つけるために、私たちは太陽と月の軌道に関するいくつかの天文学的な特徴について議論しなければならないのです。

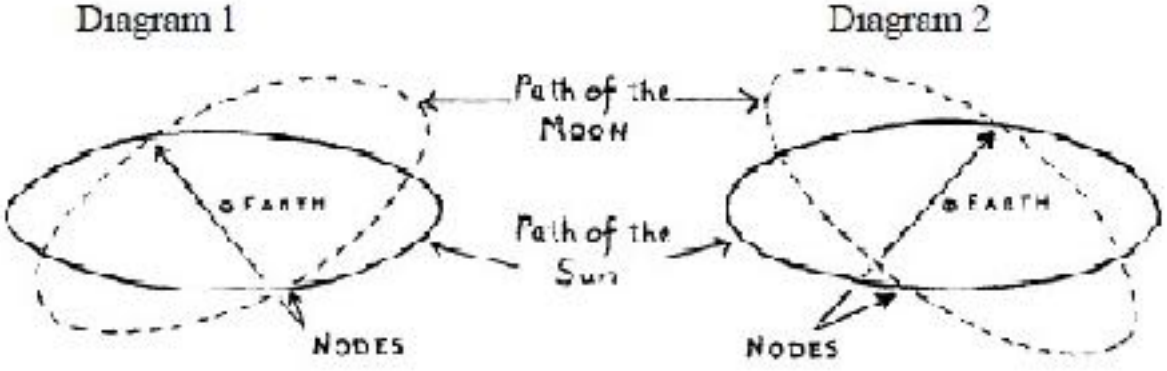
もし私たちが、青空の背景に太陽の動きを白い筋としてマークできるとしたら、その軌道は1年の間に完全な円として現れることに気づくでしょう。さらに、28日間の周期の間に同じ方法で月を観察し、その軌道を空に線として描くことができるなら、月もまた私たちの地球の周りを円を描いて動いているように見えることがわかるでしょう。しかし、極めて正確に観察するならば、月は、地球上の私たちの視点から見て太陽が公転しているように見える円と同じ円上を動いているのではない、ということを発見するはずです。それはもう一つの円の内側にある異なる円ですが、わずかに傾いているため、太陽の円と互いに反対側にある2つの点で交差しています。

これらの交点は「月の交点（月のノード／月の昇交点・降交点）」と呼ばれます。もちろん、私たちはこれらを空に直接見ることはできません。それらが見えるのは、太陽と月の運動が描く2つの円を空に描き出すことができる場合だけです。しかし、その位置を計算することは可能です。

ここで、私たちの地球を囲む巨大な円としての太陽の軌道と、その内側に5度の傾き（軌道傾斜角）を持って位置するもう一つの円、すなわち月の軌道を想像してみなければなりません。さらに、互いに反対側にある2つの交点（ノード）が動いている、と言い換えるなら、傾いた2つ目の円（月の軌道）が反時計回りにゆっくりと回転し、それによって交点、すなわちノードが1つ目の円（太陽の軌道）の上を移動している様子を思い描く必要があります。

月の軌道という内側の円が、交点の位置において完全に1周（反転公転）するのには、約18年7ヶ月かかります。その時、交点は太陽の軌道円上の元の位置に戻ってきたことになります。この18年7ヶ月の期間の中で、交点は太陽の軌道円全体を移動します。この太陽の軌道円とは、1年の経過の中で太陽が毎日位置する場所によって示されるものです。

※図



上の2つの図（ダイアグラム）において、実線の円は地球を中心とした太陽の見た目の軌道（見かけの通り道）を表し、点線の円は中心にある地球の周りを回る月の軌道を表しています。この図は、太陽と月の運動天球の外側かつ上方から見下ろしたような視点で、2つの円を描いています。したがって、もし私たちが地球のある中心に身を置くことができれば、正しいイメージを思い描くことができます。図1はある瞬間における月の軌道と交点（ノード）の位置を示しています。それからある程度の時間が経つと（図2）、この円と交点は後退（逆行）し、異なる位置に移動します。

これらの交点（ノード）は、霊的に非常に大きな意味を持っています。これらは、ある特定の瞬間に太陽の領域と月の領域がどのように織り合わされているかを示しているのです。交点とは、太陽の領域が月の領域と接触する点であり、それゆえ一方の領域からもう一方の領域へと至る、ある種の「門（ゲートウェイ）」を提供しています。先述のように、太陽は私たちの宇宙における一種の「消化」活動を表しています。死の瞬間に魂が肉体を離れるとき、魂は太陽へと引き寄せられます。一方で、月とその領域は、人間の身体の吸気と呼気に例えられるような活動をもたらしますが、それは肺で行われる呼吸に依存したプロセスではありません。それは、地球によって象徴される私たちの宇宙の「頭部」と、太陽によって象徴される「消化」との間に位置する活動です。それは、宇宙の物質を「摂取すること」と「溶解すること」の間を取り持つ、バランス調整の活動なのです。

このように、太陽から月への門である「月の交点」は、太陽の領域にいる死者と、地球との結びつきを提供します。それゆえ、出生図における太陽の位置を見ることで、私たちはそれを、死者の領域との個人的な結びつきとして認識することができるのです。しかし、この結びつきを人間の地球上での人生において有効なものにするためには、月を通じて、太陽から地球へと至る門が確立されなければなりません。これが、月の交点の移動によって可能になるのです。

例を挙げると、これが明確になります。ゲーテは1749年8月28日に生まれました。その時、太陽は乙女座の5度にありました。この太陽の位置が持つ第1のアスペクト（側面）は、私たちが第十三書簡で解説したものです。これに加えて、この太陽の位置の中に、私たちはゲーテと死者の領域との結びつきを認めることができます。しかし、この結びつきは、月の交点が太陽の領域から地球への門を開いた瞬間にのみ実現され得るものでした。ゲーテの出生の瞬間には、それは不可能でした。なぜなら、交点は太陽が位置していた場所にはなかったからです。しかしそれは、ゲーテの出生よりもある程度前、この魂がまだ霊界にいた時に起こりました。1747年、回転する2つの月の交点のうちの一方が、その2年後の1749年8月28日に太陽が位置することになる、太陽の軌道上の場所にやってきたのです。こうして、太陽と地球の間のつながりが確立されました。ゲーテの出生時の太陽が、ずっと後になって黄道上のこの地点に位置したということは問題ではありません。太陽、月、そして地球の間の門は、出生のずっと前、あるいは場合によっては出生の後にさえ開かれることがあるのです。この領域において、私たちは地球上で慣れ親しんでいるものとは異なる「時間の概念」に直面することになります。

この門が開いている時期の惑星の位置は、ゲーテがその後の人生において、死者たちと持っていた個別の結びつきがどのようなものであったかを明かしてくれます。例えば、1747年の3月初め、土星は乙女座の星座の中にありました。これは、1541年9月23日にパラケルススが亡くなった時に土星が位置していた場所と、まさに同じ位置です。

私たちはここで、乙女座におけるこの土星の位置へと、パラケルススのあらゆる探求、とりわけ、ゲーテが生まれる200年前の全人類の進歩に関わる彼の行為の「霊的本質」が流れ込んでいたのだと想像しなければなりません。ゲーテの、いわば「太陽の門のホロスコープ」において、土星は、過去におけるこれらの一連の行為の領域でパラケルススと結びついていたのと同じ位置へと戻ってきたのです。

パラケルススの行為の霊的本質とは何でしょうか。彼は16世紀の高名な医師であり、近代医学の発展への道を勇敢に切り開いた人物でした。彼は、医師たる者はもはや時代遅れの医学論文を読むのをやめ、病気の原因やその治療のための処方箋を見つけるために「自然という偉大なる書物」を読むべきだと要求し、自らそれを実践しました。しかし、彼が読んだ「自然という偉大なる書物」の方法は、現代の自然科学のそれとは異なっていました。彼の探求は、自然との出会いの中に、その存在の根源へと至る道を見出すことにあったのです。彼の本の言語を理解するのは非常に困難ですが、もし私たちが彼の本を読むか、あるいは少なくとも読もうと試みるならば、彼が自然の霊的な根源について真に深い知識を持っていたことに気づくでしょう。これこそが、人類のために彼が成し遂げた偉大な行為でした。彼は、古い知恵から新しい科学の時代への境域に立つ守護者のようであり、自然界の背後で働く精神を私たちに思い出させてくれる存在でした。

人類へのこの贈り物はゲーテへと受け継がれ、さらに発展させられました。ゲーテは自然の霊的根源を見出そうと探求し、それに成功したのです。現存するすべての植物の霊的な母なる存在として、ゲーテが極めて明確に語った「原植物（Urpflanze）」の超感覚的知覚は、彼がパラケルススの中に生きていた偉大な衝動と強力に結びついていたことの証明にほかなりません。それゆえ、シュタイナー博士はゲーテを「精神科学の父」と呼ぶことができたのです。

ここから、ある時代の一つの個性が、特定の思想や衝動をある時点までしか発展させることを許されない場合がある、ということが理解できます。そして、最初の個性が亡くなってからずっと後になって、別の個性がこの衝動を引き継ぎ、死者との真の結びつきを通じて、それをさらに先へと推し進めることがあるのです。そして実際に、ゲーテはパラケルススと真の結びつきを持っていました。ゲーテの伝記を読むと、彼が人生の深い内面的危機の時期に、パラケルススを精力的に研究していたことが分かります。

著名な哲学者スピノザは、1632年11月24日に生まれました。その時、太陽は射手座のサインにありました。この「太陽の門」は、スピノザが生まれる2年前の1630年に、月の交点によって開かれました。その時、土星は天秤座の星座にありました。これは、その30年前の1600年2月17日に亡くなったジョルダーノ・ブルーノへと私たちを連れ戻します。ブルーノが亡くなった時もまた、土星は天秤座にあったのです。

ジョルダーノ・ブルーノは、ローマの異端審問所によって火あぶりの刑に処されました。彼は生涯の前半において修道士でしたが、真理への熱意と、例えばコペルニクスの地動説に代表されるような新しい科学的見地への愛着のために、教会の聖職権力者たちと衝突することになりました。彼は修道院から逃亡し、ヨーロッパ中を長い旅をしながら、科学の新しい思想を説きました。その後、彼はローマ教会の使者たちに捕らえられ、自らの教えを撤回しなかったため、生きたまま焼き殺されたのです。

スピノザの中にも、この揺るぎない熱意の精神と、真理への献身、そして哲学的な概念の自由への精神が存在していました。本当に、ジョルダーノ・ブルーノと同じように、彼もまた精神的自由のためのこの戦いの殉教者であったと言うことができます。彼の生涯は、時代遅れとなった霊的伝統を守ろうと躍起になっていた、あらゆる種類の組織による迫害の連続でした。彼は、周囲の人々の生涯にわたる誤解に起因する悲惨さの中で、若くしてこの世を去りました。

もう一人の著名な哲学者であり数学者であるゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツは、1646年6月21日（ユリウス暦）に生まれました。その時、太陽は黄道の蟹座のサインにありました。この「太陽の門」は、彼の出生の1年後である1647年に、月の交点によって開かれました。その時の木星は獅子座の星座の中にあり、そこは先述のジョルダーノ・ブルーノが亡くなった時に木星が位置していた場所と同じでした。

このように、私たちはライプニッツとジョルダーノ・ブルーノとの間の結びつきをも見出すことができますが、ここでそのつながりを確立したのは木星でした。それゆえ、ライプニッツがいわば霊的に受け継いだ資質は、異なる性質のものでした。ライプニッツの中で再び蘇り、さらに発展させられたのは、ブルーノの「思想世界」だったのです。

ブルーノの教えの核心は、宇宙におけるすべての存在の根底としての「モナド」という彼の思想にあります。彼が「モナス・モナドゥム（Monas Monadum：単子のなかの単子）」と呼ぶ根源的な宇宙の統一は、それ自体を、生きている存在である個々の存在者、すなわちモナドの多様性へと分化させます。そして、それらのモナドの各々が、それ自体で一つの宇宙なのです。人間の魂とは、思考するモナドにほかなりません。

ライプニッツは、自らの哲学的な教えを「モナドロジー（単子論）」と「予定調和（praestabilierte Harmonie）」の思想の上に築きました。ジョルダーノ・ブルーノと同じように、彼もまた神を「モナス・モナドゥム」として思い描いています。「モナス・モナドゥム」から派生した個々のモナドは、さまざまな度合いの意識を持っています。それらはいわば、事物や存在の魂ですが、ライプニッツにとってもやはり、それぞれのモナドはそれ自体が、様々な度合いにおける宇宙の写し鏡なのです。

〔天空の出来事〕

すでに4月の時点で、火星は魚座の星座に入っていました。火星は5月の全体を通じて、この星座の中を移動します。異常なほど多くの歴史的個性が、出生あるいは死の瞬間に、この位置に火星を持っていました。

この集まりをより詳細に観察するなら、これらの人々の間に極めて大きな対比が存在することに気づくはずです。それはまるで、人類の霊的生活にのみ身を捧げた人々と、物質の世界や政治的行動の中へと深く降下していった人々との間の、巨大な闘争のようにも見えます。

彼らの中に、この霊的闘争について多くのことを教えてくれる一人の偉大な個性がいます。それがローマ教皇ニコラウス1世です。彼が867年11月13日に亡くなった時、火星は魚座にあり、それはまさに5月の初めに火星が位置することになる場所と同じでした。時に「大教皇」とも呼ばれるこの教皇は、当時持ち上がっていた西方教会と東方教会の分裂の原因に深く関わっていました。これらが、ローマ教会とギリシャ教会（東方正教会）の間の大分裂へとつながったのです。彼の偉大な対抗者は、コンスタンティノープル総主教のフォティオスでした。

この大分裂は、少数の高位聖職者たちの意見の相違をはるかに超えたものです。それは人類全体の問題であり、当時から今日に至るまで、その重要性は減少するどころか、むしろ増大しています。現代の人類は、正しい解決策を見出さなければなりません。さもなければ、私たちがこれまでに耐え忍ばねばならなかったものよりも、さらに巨大な大惨事に直面することになります。それゆえ、私たちが語っているこの個性は、これらの巨大な課題について多くのことを教えてくれるのです。

私たちは、彼が19世紀から20世紀にかけて再び肉体を持って転生し、ローマ教皇であった時に現れたものと類似した「人類の課題」に再び直面したことを知っています。しかし今回、彼は東西の分離と敵対関係から発展した、さらなる世界情勢に直面することとなりました。

教皇ニコラウス1世が直面せざるを得なかった状況とは、東方（ギリシャ、小アジア、エジプト）において、古代の神秘や、古い神殿文化の崩壊を生き延びた古い知恵と未だ深く結びついたキリスト教が信仰されているというものでした。ギリシャ教会は西方に対する一種の前哨基地にすぎず、今日まで生き残っているものは他にも多く存在します。その背後に霊的に控えていたのは、神々の神秘的な領域とみなされていた巨大なアジア大陸でした。チベットの高原は、今日でもまさに神々の座として体感されています。

一方、西方キリスト教は異なる道を歩み、極めて早い時期にローマへと到達しました。政治的ローマは、当初はキリスト教の信仰に強く反対していました。しかし迫害の時代を経て、ローマのキリスト教とローマ国家の生活はますます融合していきました。こうして、ローマ帝国の遺産を受け継いだ、実践的で植民地化を進めるキリスト教が発展したのです。それはアルプスを越えて北方の荒野へと進出し、農業と学問の中心地となる修道院を設立しました。

ニコラウス1世は、この西方の発展と強力に結びついていました。彼はほとんど霊視者のような認識をもって、西方キリスト教が西方の文化的発展への道を準備することの必要性を見抜いていたのです。そこでは、大発見や技術を伴う現代の自然科学の時代が発展することになっていました。西方は地球を見下ろし、それを自らの手の中に収めなければならなかったのです。これに対して東方は、自らの霊的な高さから降下することを望まず、物理的な地球の征服を放棄することを選びました。それゆえ教皇ニコラウス1世は、東西の大分裂が歴史的必然として到来するのを目にしました。彼はそれを避けることができませんでした。人類の進化のために、それは到来しなければならなかったのです。

しかし、この大分裂は9世紀以降、人類にとっての巨大な問題へと発展してきました。西側の人類は、死せる物質に対してほぼ完全な支配権を獲得しました。人間はその歴史的進化の過程において、一つの個体として自立した存在となったのです。個人はあまりにも解放されたため、霊的世界の存在を疑ったり、あるいは否定したりすることさえできるようになりました。そこでは機械が理想とされます。それゆえ、社会有機体の理想もまた、多かれ少なかれ機械のようなものとなってしまうのです。

これに対して、東側の人類はその進化の背後に留まりました。そこでの生活の中心は、今日でもなお神々を崇拝することであり、それには霊的世界の「意志」への服従が伴います。一人の人間としての存在は重要視されません。死は、多かれ少なかれ歓迎すべき過渡期なのです。社会有機体、すなわち国家の生活は、この霊的な概念に従って構築されています。それは宗教的な衝動によって導かれ、国家の代表者は天上の起源を持つとさえみなされます。しかし、社会有機体の個々の構成員は、自分自身を一つの個的な存在として体験することができません。個々の構成員は、多かれ少なかれ、全体の中の取るに足らない一部にすぎないのです。

人間の存在に関するこれらの一大対立概念は、私たちの存在の「真のイマジネーション（真の像）」が見出され、実践されない限り、遅かれ早かれ東西の人類の間で凄まじい衝突を引き起こすに違いありません。どちらの概念も、この真のイマジネーションからは程遠いものです。西側では、精神的な解放が、地上の存在を無意味で幽霊のようなものにしてしまう地点へと人間を導き、東側では、個々の人間が宗教的または人種的な狂信の制御不能な洪水に溺れてしまっています。どちらの概念においても、人類は最終的に自らを消滅させてしまうのです。

もし、私たちの存在の真の姿である「宇宙的キリスト」が認識されないままであれば、両方の概念が互いに自らの存在をかけて戦い、人類はその間で破滅することになるでしょう。ここで言うキリストとは、19世紀のキリスト教伝統にあるような単なる一人の人間である歴史的イエスのことではなく、肉体の存在へと参入し、地上の人類にその「宇宙的市民権」を思い出させるために来られた神のことです。キリストは「父なる

神の意志」を行い、肉体に縛られた地上の存在という完全な意識の中で宇宙全体を体現し、そして父なる神の意志の成就というこの体現に到達するための道を示されました。

初期のキリスト教徒たちは、彼らの秘密の象徴である「魚」を描いたときにキリストを体験しました。したがって私たちは、地球を囲むエーテル雲の海における人類の宇宙的象徴である「魚」として、人類の代表者としてのキリストを再び見出すべきなのです。そうすれば、私たちはもはや地上の現実だけに閉じ込められることもなく、グループ・ソウルの支配下に沈められることもなくなります。そうではなく、ノヴァーリスやルドルフ・シュタイナー、その他の先人たちが成し遂げたように、地球を「霊人」の姿へと変容させるために、自らが宇宙の至高の高さから降下してきた存在であることを体験するようになるでしょう。

これこそが、「魚座にある火星」が語る言語なのです。

第十五書簡 - 1945年6月
「惑星世界の本質：太陽 III」

●基本的な視点

過去2回の書簡で扱った「出生時の太陽」に続き、
今回は人間の出生前（胎児期・約9ヶ月）の宇宙的発達における太陽の役割を考察する。

胎児期に太陽が黄道帯の約4分の3（9星座）を通過し、
残る約3星座が「開かれた空間」として残る。

この空間は、太陽から見た地球の位置と深く結びつき、
魂の中間生（死と再生の間）の重要段階や、
地上人生の中期（特に30〜35歳）の予測を示す。

ゴルゴタの神秘以降、キリストが地球の指導霊となったため、
魂は太陽領域ではなく地球でこそ太陽霊（キリスト）を体験しようと切望する。

この切望が「開かれた空間」に反映され、
過去の経験を基に地球をキリストの衣へと変容させる衝動を表す。

ホロスコープを単なる運命の支配者ではなく、
キリスト教的人間性への道標として主体的に捉える視点を提示する。

●要点

・胎児期約9ヶ月で太陽は黄道の9星座を通過し、
　受胎時と出生時の間の約3星座が「開かれた空間」として残る。

・太陽から見ると、胎児期中期（4〜6ヶ月）に
　地球がまさにその開かれた星座に位置する。
　これらは地球経験の性質、中間生の反映、人生中期の予測を示す。

・ゴルゴタ以降、キリストは地球と結びつき、
　魂は太陽領域でキリストを見出せず、地球への降下を切望する。
　開かれた空間にその出生前の決意・衝動が記される。

・歴史的例：
　トマス・モア（社会秩序・宗教的国家の中で太陽霊を探求）、
　エマーソン（内なる自我・超越主義）、
　トルストイ（個人の変容・同胞愛と均衡）、
　ティコ・ブラーエ（星々と地上物質の中で太陽霊を体験）。

・開かれた空間はキリストの12通りの啓示の一部（タラント）を示し、
　主体的な霊的活動によって増やすことが課題。

・天空の出来事：
1933年以降の中央ヨーロッパの破壊を、
16世紀初頭のメキシコ征服（コルテス、土星山羊座）と結び、
古代血の神秘・黒魔術の残滓が20世紀に再燃したと警告。

●本文

過去2回の書簡において、私たちは太陽と、出生の瞬間に関連したその活動についてお話ししてきました。今回は、人間の出生前（胎児期）の宇宙的発達という側面から太陽を見ていくことにしましょう。

私たちは、人間の胚（胎児）としての発達が約9ヶ月間続くことを知っています。もちろん、この期間には個々のケースによって違いがあります。この9ヶ月という時間を平均として捉えるならば、太陽は黄道帯の4分の3、すなわち9つの星座を通過することになります。もし胚の（胎内の）状態が丸1年間続くのであれば、太陽は黄道帯を完全に1周することになるでしょう。これが、あらゆるホロスコープにおいて、出生前の進化の間に太陽が通過しなかった星座が「約3つ」存在する理由です。それらは、受胎の時点における太陽の位置から、出生の時点における太陽の位置との間にある星座です。これらは、その人の誕生日によって異なる星座となります。例えば、ある人が6月21日に生まれ、その時に太陽が双子座の星座に入っていたとすると、太陽は双子座、蟹座、獅子座の星座には滞在していなかったと推測できます。なぜなら、太陽はその9ヶ月前に乙女座の星座からその行程をスタートさせているからです。

もし私たちが自分自身を太陽の上に置いたと想像できるなら、地球上の私たちが地球から太陽を観察するのとは、ちょうど「真逆の方向」に地球を見ることになるでしょう。例えば、地球から見て太陽が双子座の星座に入っていくのが見えるとき、太陽から見れば、地球が射手座の星座に入っていくのが見えるはずです。

個人のひとつのホロスコープにおいて、黄道帯のすべての星座は、先述した3つの星座を除いて、太陽の活動によって貫かれています。しかし、胚の発達の中期において、太陽の視点から見れば、地球がまさにそれらの太陽が通らなかった星座の中に位置しているのを見ることができるのです。

Figure 1

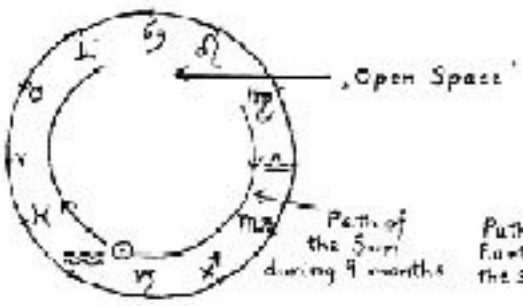


Figure 2

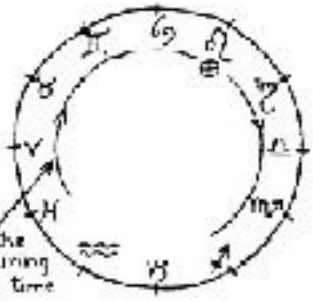


図1（Figure 1）は、胚が進化する9ヶ月間の太陽の軌道を示しています。それは乙女座の星座から始まり、想定される出生が起きるときには双子座に位置しています。したがって、双子座、蟹座、獅子座が空いたまま残される（太陽が通らない）ことになります。図2（Figure 2）は、同じ時期の地球の軌道を示しています。太陽自体が射手座、山羊座、水瓶座にあるとき、すなわち胚の発達の中期の期間において、太陽か

らは地球が双子座、蟹座、獅子座にあるのが見えます。それゆえ、この「開かれた空間（太陽が通らなかった場所）」にある3つの星座は、惑星地球、および宇宙における地球の特別な重要性と特に深く結びついているのです。

※図１（Figure1）：
Open Space（空いた空間）」
12か月のうち9か月分の移動しか描かれていないため、残りの3か月分が「まだ太陽が通っていない空間」として開いた状態になっている。
9か月間の太陽の通り道 (Path of the Sun)
地球から見たときの太陽の天球上の見かけの動き（黄道上の移動）

※図２（Figure2）：
同じ期間の地球の通り道 (Path of the Earth)
Figure 1 と同じ9か月間の、宇宙空間における実際の地球の公転軌道を表している。

私たち人間が降り立ってきた場所こそがこの地球であり、私たちはそこで自らの課題を追い求め、おそらくそれを見出し、そしてそこでは悲しみと喜びが私たちを待ち受けています。出生前ホロスコープの「開かれた空間（太陽が通らなかった場所）」にある3つの星座は、魂を待ち受けるそれらの地球経験の性質を示しているのです。

先述のように、これは胎児の発達の中期、すなわち第4、第5、第6ヶ月の間に、太陽から観察することのできる地球の位置にあたります。この期間、およびその間に起こる宇宙的出来事は、前回の死から新たな誕生に至るまでの人生（中間生）における重要な段階の反映なのです。それはまた、これから迎える地上人生の中期、特に30歳から35歳までの時期の、ある種の予報でもあります。

ここまでのところ、これは完全に地球だけの問題のように思われ、太陽との結びつきは間接的なものにすぎないように見えます。しかしここには、太陽と地球の間で霊的に織りなされているものに関する、深い神秘が隠されているのです。

ゴルゴタの死（キリストの十字架の死）以来、キリスト存在は地球と結びつき、いわばこの惑星の指導霊、すなわち宇宙的個性を担っています。キリストは宇宙の至高の高さから地球へと降下し、イエスの肉体に宿りました。この降下は、キリスト教以前の文化の秘儀参入者たちによって観察されていました。彼らは、キリストが「太陽霊」であり、地球の進化を保護し抱擁するために降下した、太陽存在たちの指導者であることを知っていたのです。それは遥か未来へと及ぶ根本的な行為でした。なぜなら、この出来事を通じて私たちの宇宙の現在の状態は完全に変化し、地球は新しい宇宙の「太陽」となるからです。このように、地球は太陽霊、すなわちキリスト存在によって支えられており、魂が死と新しい誕生の間の人生において太陽の領域を通過するとき、もはやその領域の中にキリスト存在を見出すことはできません。

いまや私たちは次のように想像することができます。魂が地上への新しい転生へと降下したいという望みに貫かれるやいなや、魂はこの地球を見下ろします。なぜなら地球こそが、ゴルゴタの神秘の時代以来、宇宙の中でキリスト存在を体験することのできる唯一の場所だからです。キリストを体験できるこの場所へと降下したいという魂のこの切望が、私たちが「開かれた空間」と呼んだホロスコープの部分に反映されているのです。

私たちはその中に、魂がまだ霊界の胎内にあったときに引き受けた衝動や決意を読み取ることができます。それは、過去の地上人生における経験や失敗から出発した魂が、地球をキリストの輝かしい衣へと変容させるために、愛の偉大な働きにおいていかに地球と結びつきたいと願っているかを示しているのです。その後、魂が地球に生まれ、肉体の中で生きるとき、無意識のベールがこれらすべての出生前の経験を覆い隠してしまいます。しかしそれらは、真理を求める魂の探求の中に、また、人が真理と魂の平安を見出すまで運命がその人を導く多様な道のりの中に、脈々と生きています。私たちは自分自身の出生前の意図や衝動に決して気づかないかもしれませんし、あるいはそれらを裏切ってしまうことさえあるかもしれません。しかしその場合でも、私たちは死後に自分がどこで失敗したかを悟ることになり、この知識が、自らの過去を贖うための新たな地上への転生の基礎を築くのを助けてくれるのです。いまや私たち一人ひとりが、自分自身の出生前の決意を意識的に認識するよう努めるべき時が来ているのかもしれません。そしてその目的のために、私たちは自分自身の出生図、この場合は特に「開かれた空間」とその背景にある霊的出来事を見つめることが許されているのかもしれないのです。

この太陽の「第3の側面」について語られたことを説明し、さらに精緻化するために、いくつかの歴史的個性の出生図を考察してみましょう。

以前の書簡において、私たちは1478年2月7日に生まれたトマス・モアについてお話ししました。その時、太陽は水瓶座の星座にありました。彼の受胎は、1477年の5月の初め頃に起きたに違いありません。その時、太陽は牡牛座の星座に入っていました。こうして、太陽は水瓶座（出生の瞬間にようやく入ったばかりでした）、魚座、牡羊座の星座には滞在しなかったことになります。これらが「開かれた空間」を構成しています。トマス・モアの胎児期の発達の間、この「開かれた空間」の中で、惑星・木星が魚座から牡羊座への移行期にループ（逆行運動による輪）を描いていました。もし私たちが太陽から、この魂が転生へと降下していくのを目撃することができたなら、ある特定の瞬間――彼の胚の状態の約5ヶ月目――に、魚座にある地球と、その背後にある木星のまばゆい光を見たはずです。魚座にある地球は、地上の人生における神性の認識を求めるトマス・モアの探求を照らし出す星座ですが、私たちは水瓶座と牡羊座の星座をも考慮に入れなければなりません。

トマス・モアは、おそらく彼自身の意図に反して、その時代の社会的・政治的生活における非常に強力な人物として現れます。彼は何度も政治の領域から完全に退き、学問と信仰の生活を送ろうとしましたが、運命は彼を何度も、そして再び政治の舞台へと連れ戻しました。彼が37歳の時、彼は自身を有名にした『ユートピア』を執筆しました。その中で彼は、いかにして理想的な国家を創り出すかについての見解を詳述し、彼の時代の腐敗した社会的・文化的制度に厳しい審判を下しています。しかし、彼は自らの完全な国家の理想を、宗教の絶対的な主権、ひいては教会の主権の上に完全に置いていたのです。

それゆえに、トマス・モアは社会生活の領域において地上存在の本質を体験したのです。彼は深く宗教的で、敬虔な人物でした。それでもなお運命は、魂の静寂の中だけでなく、社会有機体という人類のただ中において神なるものの体験を追い求めるよう、彼を幾度となく駆り立てました。そこは、ゴルゴタの神秘を通じて地球と結びついた「太陽霊」の現臨と実現を、彼が探し求めた領域だったのです。

魚座の星座にある地球は、人類の社会の中で太陽霊を体験しようとする探求を受け継いでいます。なぜならそれは、世界の進化の初めに創造され（第5書簡を参照）、魚座の彼方から働いている「霊人」のキリスト教的実現だからです。魚座の地球から受けるこの神なるものの体験は、トマス・モアの人生において、「開かれた空間」にある他の2つの星座、すなわち牡羊座と水瓶座によってさらに支えられていました。

牡羊座は、浄化された思考を通じて、人類の中に神なるものを実現する力を彼に与えました。私たちは、彼が人文主義者であり、ロッテルダムのエラスムスの熱心な門下生であったことを知っています。また、水瓶座の地球という側面は、宇宙のあらゆる創造物に対して親切さと愛をもって開かれていた彼の心の中に、地球の太陽霊を体験する力を与えました。彼の学問は形式的なものではなく、創造主の宇宙に対する深い畏敬と献身に結びついたものだったのです。

宇宙的な重要性を持つもう一つの例は、ラルフ・ワルド・エマーソンです。彼は1803年5月25日に生まれました。その時、太陽は牡牛座にありました。彼の受胎の時点では、太陽は獅子座の星座にありました。したがって、彼の「開かれた空間」は牡牛座、双子座、蟹座、そして獅子座の一部で構成されており、その中心に双子座が位置しています。

双子座にある地球は、自我の領域、すなわち最も内なる魂の生活の中で太陽霊の体験を追い求めることを示しています。そして実際に、私たちはこのことがエマーソンの探求の中で実現されているのを目にし、この個性に対して深い感嘆の念を抱かざるを得ません。30歳の時、イタリア、フランス、スコットランド、イングランドへの旅から帰国した彼は、次のように書きました。

「人間は、自らを統治するために必要なすべてのものを自らの内に含んでいる……人に降りかかるあらゆる真の善や悪は、自分自身に起因するものでなければならない……人間の魂と、世界に存在するあらゆるもの、より正確には、知られているすべてのものとの間には、照応関係が存在する。外部の事物を研究する代わりに、あらゆる事物の原理は、自分自身の内側から見通すことができる……人生の目的とは、人が自分自身を知ることにあるようだ……最高の啓示とは、神が万人の中にいるということである」

その後、彼はコンコードに定住し、一般に「超越主義」と呼ばれる思想を発展させました。しかし、彼の教えとして生み出されたすべてのものにおいて、彼は自らが独立独歩の達人であることを示しました。「私は、今日感じ、考えていることを語りたい。ただし、明日にはそれらすべてを否定してしまうかもしれないという条件付きで」。これこそが、人間の個性の内にある太陽霊、すなわち双子座にある地球の体験なのです（双子座については、第3書簡および第5書簡を参照）。

これは牡牛座にある地球によって支えられており、それによって創られた事物の多様性の中に神の現臨を体験することがもたらされました。このことは、歴史上の偉人に関する講義やエッセイ、そして歴史哲学の中に特に現れています。しかし、歴史や歴史上の偉人に対する彼の内なる態度は、太陽霊のまた別の体験を明かしていました。ナポレオン1世やスウェデンボルグらに関する彼のエッセイを読むと、彼が批評家や裁判官のように振る舞っているのではなく、それらの人々の行為、業績、そして失敗が流れ込んできた「聖杯」の担い手として行動していることに、私たちはすぐに気づくでしょう。彼は、地球上における人間の探求という杯を慎重にかつ献身的に携え、人類の中に働く神聖な精神へと聖変化させるためにそれを捧げた、真の司祭だったのです。これこそが、蟹座あるいは聖杯から働く太陽霊の探求にほかなりません。

伯爵レオ・トルストイは、1828年9月9日（グレゴリオ暦）に生まれました。この日、太陽は獅子座の星座にあり、獅子座から乙女座への移行点に極めて近い場所に位置していました。彼の受胎の時点では、太陽は蠍座にありました。したがって、彼の「開かれた空間」は乙女座、天秤座、そして蠍座の一部で構成されていますが、乙女座が支配的な星座となっています。

この乙女座は、私たちがトマス・モアと非常に強く結びついていることを見出した魚座の「反対側」に位置する星座です。それゆえ、地球における太陽霊の体験を求める探求は、トマス・モアとは全く異なる方法でトルストイの中に生きていました。しかしながら、それは社会秩序の中に太陽霊を追い求めたという意味

で、同じ次元にあったのです。トマス・モアは、完全に宗教によって導かれる完璧な国家というヴィジョンの中に、地球の神なるものを体験しました。個々の人間は、共同体内における自らの存在を秩序づけるこの客観的な宗教の影響下へと受け入れられるのです。

トルストイにとって、公正で調和のとれた共同体を求める探求は、トマス・モアとは正反対の課題を突きつけるものでした。彼は、人間を導き守る腕の中に受け入れてくれるような、客観的な宗教制度から出発することはできませんでした。事実、人生のある時期に、彼はロシア正教会と自分を結びつけていたすべての絆を断ち切ったのです。彼は自分自身の内なる存在から出発せねばなりませんでした。

彼にとっての問いとは、「どうすれば自分の中に永遠の『レリギオ（宗教・結びつき）』を見出せるか、どうすれば自分自身の不完全な存在を変容させられるか」というものでした。私たちは、この真の「ヒューマニズム」への探求を、『コサック』のような初期の作品に見出すことができます。こうして彼は、共同体の生活の中に、そして奇妙にも社会的混沌と隣り合わせにあるような人類の交わりの中に、神なるものの体験を見出すに至りました。彼のすべての小説がこれを示しており、特に『復活』という作品に顕著です。

トマス・モアはその『ユートピア』のヴィジョンにおいて、社会秩序の中に現れる神の顔を見つめました。一方、トルストイは、個人のカリカチュア（歪められた姿）の彼方に、人類の同胞愛の中に実現される神の輝かしいイメージを見出すために、人間性の測り知れない深淵へと降下しなければならなかったのです。このようにして彼は、地上の太陽霊、すなわち「乙女座にある地球」という、生の謎の「秘められた啓示」を見出しました。

彼には、この乙女座の体験をより高い完成へと導く、地上の神聖な精神のもう一つの啓示がありました。自らの運命を通じて、彼は「魂の均衡こそが、私たちが真に人間になるために必要な処方箋である」という確信に至ったのです。若い頃の彼は、この種の生活が自分の真の人間性にもたらす破滅的な影響に気づくまで、若いロシア貴族としての放縦で荒々しい生活を送っていました。その瞬間から、彼が均衡を求めて全力で闘う姿が見られるようになり、彼の小説の多くの登場人物の中に、素晴らしい描写で実現された生の均衡を見出すことができます。彼らは、出来事の動乱の中における「癒やしの中心地」なのです。これは、トルストイのホロスコープにおいて「天秤座にある地球」の位置に示されている、地上の神聖な精神への探求の実現にほかなりません。

それでもなお、彼は自らの魂の均衡のために激しく戦わねばなりませんでした。彼は幾度となく危機を通り抜けねばならず、そこでは彼がそれまでに達成したすべてのものが引き裂かれ、価値のないものになってしまったかのように思われました。しかし、彼は何度も立ち上がり、人間の完成というより高い段階へと歩みを進めたのです。これらの絶え間ない死の体験が、彼の凄まじい活動力と生産性の源となりました。これこそが、「蠍座にある地球」の体験です。「牡牛座にある地球」という反対側の星座が、創造物の多様性の中に神の啓示を求める探求を受け継いでいるように、蠍座にある地球は、死と破壊から立ち上がる不屈の創造的精神の中に太陽霊の顕現を追い求める衝動を燃え立たせるのです。

高名な天文学者ティコ・ブラーエは1546年12月14日に生まれました。その時、太陽は射手座の星座にありました。彼の受胎の時点では、太陽は魚座に入ったばかりでした。したがって、太陽は射手座、山羊座、水瓶座の星座には滞在しておらず、これらが「開かれた空間」、すなわちこの出生図における地球のアスペクトを形成しています。

ティコはデンマークの貴族の家に生まれました。父親は息子を政治家としてのキャリアに進ませたいと考え、家庭教師の指導のもと、法学を学ばせるために彼を大学へ送り出しました。しかし、家庭教師がいかに

厳しくとも、ティコが自らの道を歩むのを阻むことはできませんでした。家庭教師が眠っている間、ティコは家の屋根に登り、非常に原始的な器具を使って星を観察したのです。16歳になるまでに、彼は重要な発見をしていました。もはや、彼が数学者や天文学者になることを誰も阻止できませんでした。

多くの旅を経た後、デンマーク国王の援助を得て、彼はヴェイン島というデンマークの小さな島に定住しました。30歳の時に彼はそこに天文台を建設し、長く平穏な時間の中で、広範な天体観測を行うことができたのです。彼は他ならぬ、それまで気づかれていなかった約千個の星の正確な位置を収めた星表を作り上げました。彼がまだ肉眼だけで観測を行わねばならなかったことを考えるなら、これは驚くべき偉業でした。

この個性が若い頃から自らの道を突き進んだあの決断力は、彼が地上の太陽霊をどこに追い求めていたのか、その方向性を示しています。彼の上に広がる無数の星々について、自らの目が明かし得るものの中に精神を追い求める衝動で彼を満たしたのは、「山羊座にある地球」でした。

反対側の星座である蟹座において、私たちはエマーソンに関連して、歴史の過程の中で人間の行為、罪、そして希望が流れ込む「聖杯」の体験に出会いました。ティコ・ブラーエは、人間の魂が死の瞬間に赴き、また生まれるときにそこからやってくる「もう一つの聖杯」――地球がその中に埋め込まれている宇宙の聖杯――を観察し、その大司祭となったのです。自らの目の活動を通じて授けられた啓示の中で、彼は地上の神聖な精神を体験しました。

彼の上にある宇宙は、確かに単なる機械的な世界ではありませんでした。彼にとって宇宙とは、ともに宇宙空間を漂うことのできる「生きた存在」であり、その鼓動や言語を理解できるものだったのです。彼は今日私たちが天文学者と呼ぶような存在であっただけでなく、占星術師でもありました。もっとも、彼の時代における占星術は、今日のものとは異なる意味合いを持っていたと想像しなければなりませんが。彼はトルコの皇帝スレイマン（1世）の死を、それが実際に起こった日とほぼ狂いなく予言しました。彼はまた、彼の死後に実現することになる他の出来事をも予言していたのです。

星々とのこの内なる結びつきや、その言語の知覚の中に、私たちは「水瓶座にある地球」によって示される、地上の太陽霊のまた別の体験を認めます。しかし、これだけでもこの個性の宇宙的な特質を完全に理解したことにはなりません。さらにそれ以上のものがあったのです。小さなヴェイン島にある彼の天文台は、非常に奇妙な建物でした。天体観測が行われる屋根の上には器具が置かれ、星の位置の角度を測定するために使用されていました。しかし、その家の地下室には、錬金術の実験室のようなものがあり、そこでは地上の物質が煮沸され、星々との結びつきに関して検査されていたのです。

地上の物質が持つ宇宙的な性質の知識を求めるこの探求は、自らを地球と結びつけた太陽霊との、さらなる関係性を明かしています。それは、先述したようにティコのホロスコープにおいて実際に生じていた、「射手座にある地球」の位置に示されているのです。

これらは、宇宙の至高の高さから降下する魂が、私たちの宇宙の「太陽霊」といまや出会うことのできる唯一の場所として、いかに地球を体験しているかを示すほんの数例にすぎません。

魂が死と新しい誕生の間の人生において太陽の領域を通過するとき、魂は悲しい体験をします。キリストが地球と結びついたために、かつての指導霊（太陽霊キリスト）によって置き去りにされた太陽を見出すからです。それゆえ、魂は地上で太陽霊を体験するために地球へと戻りたいという切望で満たされるのです。地上の神聖な精神の啓示は多種多様であり、人間は過去の転生において獲得した「知覚」の条件に従って、

それらを受け取ることができます。これらの可能性の方向性は、ホロスコープの「開かれた空間」と、その中で起こる事柄に示されているのです。

もちろん、これはキリスト存在の12通りの啓示のほんの一部を構成しているにすぎません。それは運命の主（キリスト）によって私たちに与えられた「ムナ」（あるいは福音書のたとえ話にある「タラント」［※才能・資質の語源］）です。しかし、この授かりものを増やすことこそが私たちの課題であり、太陽霊の啓示をますます包括的に体験していくことが、キリスト教的理想とならなければなりません。

言うまでもなく、さまざまな星座における「地球と太陽の関係性」の性質について、明確な決まったルールを与えることは不可能です。それこそが、この第3の「太陽の神秘」を決定づける特徴なのです。すなわち、私たちが自分自身の魂の中で活動的かつ創造的になるときにのみ、私たちはこの神秘に近づくことができます。もし私たちがただ座り込んで、何かが自分のもとにやってくるのを待っているだけだとしたら、何も起こらないばかりか、私たちが受け取っていた「ムナ（タラント）」さえも取り上げられてしまうかもしれないのです。

もし私たちが、自分自身の霊的活動という観点から出生図、すなわちホロスコープを見つめることを学ぶなら、そしてその中に、人間としての私たちの存在の完成と成就への道標を見出すことができるなら、私たちは「ホロスコープ」に対する全く異なる認識に達することができます。そうなれば、ホロスコープはもはや、私たちの人生を支配する暗く、残酷でさえある支配者ではなく、真の、そしてキリスト教的な人間性への道を示してくれる「天にいる私たちの友」の導きの手となるのです。

〔天空の出来事〕

私たちはここ数ヶ月の間、すでに12年前に始まっていた歴史的ドラマの最終局面を目撃してきました。もし私たちが、1933年以降に中央ヨーロッパ（※ナチス政権下のドイツ）で起こっていた出来事を「真実を知る目」で見つめていたならば、それらの出来事がその内にすでに破滅の種を宿していたことに気づいたはずです。1944年と1945年の出来事は、かつてドイツが存在した場所に創り出されてしまった、あの巨大な虚空が露呈したにすぎません。私たちは非常にしばしば、「いかにしてこのような破壊が可能だったのか、そして何がこの退廃をもたらしたのか」と自問します。

星々の刻印は、私たちがこれらの問いへの答えを見出すのを助けてくれます。しかし、現在の空にある出来事の中にその答えを探してはなりません。真の原因は、はるかに過去に起こっていたのです。明確に言うならば、1933年に中央ヨーロッパで始まった傾向のほとんどは、16世紀初頭のメキシコ征服に関連する出来事に根ざしています。すべてではありませんが、その大半がそこを発祥としているのです。星々の刻印がこのことを明らかにしてくれます。

エルナンド・コルテスは、メキシコを征服するために1518年11月18日にキューバ島を出発しました。彼は1519年3月にメキシコの海岸に上陸し、ベラクルスという都市を建設しました。まさにその瞬間、土星は山羊座の星座に入ったのです。コルテスは、自分と小規模な軍隊が海を渡ってきた船を焼き払いました。前方に待ち受ける戦いから、誰も逃げ出すことができないようにするためです。やがてスペイン人たちは、湖の中央にある島に築かれ、皇帝モンテスマが居を構えていた美しいメキシコ市（テノチティトラン）の姿を視界に捉えました。いくつかのインディアン部族との多くの冒険や命がけの企てを経て、コルテスはメキシコ市そのものの帝国の蜂起に直面せざるを得なくなりました。彼は1520年7月7日にメキシコ人の大軍を破りました。彼が自由に動かせる軍隊はごくわずかでしたが、インディアンたちが全く慣れていなかった火器（鉄砲）という優位性を持っていました。この戦闘に続いてメキシコ市は包囲され、1521年8月13日に征服

されました。その後、インディアンに対する恐ろしい虐殺が行われたのです。この間ずっと、土星は山羊座の星座に滞在していました。

1932年の終わりから1933年の初めにかけても、土星は山羊座の星座に入りました。したがって、私たちはこれらの出来事の中に、16世紀初頭の歴史の反映を見ることができるのです。これとは別に、超感覚的・霊的な調査を行うならば、1933年のドラマにおける主要な演者たちの何人かのカルマの糸が、16世紀初頭のメキシコへと遡るということが示されるでしょう。

コルテスとその部下たちがメキシコ帝国を破壊し根絶やしにしたその残酷さに対しては、これまで多くの批判がなされてきました。彼らは、失うものは何もなく、金やメキシコ人の富に対する極限の強欲に駆られた、単なる冒険家や命知らずの集団と同じように行動しているように見えました。しかし私たちは、スペイン人たち（彼らの道徳的性質は概して低いものであったかもしれませんが）が直面した状況をも想像しなければなりません。メキシコの神殿では、ヨーロッパ人の精神からすれば人間の残酷さの極致としか映らないような、退廃した儀式の最後の残滓が実践されていたのです。それらの場所では人身御供（生贄）が行われていただけでなく、生きている身体（その多くは他部族の捕虜）の内臓が取り出され、インディアンの神々の像に捧げられていました。黒魔術の結社への門となってしまっていた、これらの退廃した儀式の起源を説明することは、ここでは広すぎるテーマとなります。

スペイン人たちは、自分たちのヨーロッパ文明の観点から、理解できるだけの嫌悪感を抱き、これらの儀式を破壊しました。しかし、彼らのキリスト教は、非常に古く測り知れないほど深い「血の神秘」に結びついていた、これら底知れぬ文化的衰退の兆候の「より深い原因」を根絶するには、まだあまりにも脆弱だったのです。スペイン人たちの行動は、キリスト教の観点から見れば失敗でした。そして、その結果はどうなったでしょうか。20世紀になって、古代の血の神秘のそれら暗黒の力が再び跳ね上がり、その残酷さを行使したのです。そしてそれらの力は、いまやキリスト教的人類の文明に対する極限の憎悪に満たされていました。

それゆえ、星々の刻印に関する知識は私たちを教え導き、地上の出来事に対する霊的な認識と理解への鍵となることができるのです。しかし同時に、それは厳格な警告ともなり得るものなのです……

第十六書簡 - 1945年7月
「惑星世界の性質：月」

●基本的な視点

上級惑星（土星・木星・火星・太陽）の記述を終え、
下級惑星（水星・金星・月）の世界へ移行する。
この世界は、人間の魂の領域が肉体的原理と異なるように、
上級惑星の活動とは本質的に異なる。
月は今日の魂の意識に「最も近い」存在であるため、月の解説から始める。

月の運動を単なる軌道線ではなく、
宇宙を肉体とする「大いなる存在」の生きた器官の境界として捉える。

太陽・地球のレムニスケート運動を「血流」に喩えるように、
月のレムニスケートを「呼吸活動」として理解し、
物質化と溶解・エーテル化のバランスを織りなす宇宙の「織り手」として位置づける。
天使階層の古代進化との結びつきを通じて、
月のリズムが自然界・人類・魂に及ぼす影響を解明する。

●要点

・月の軌道は太陽・地球のレムニスケートに沿った蛇行線として現れ、
　満ち欠けに伴いレムニスケート体が絶え間なく拡張・収縮する「呼吸活動」を示す。

・満月：
　物質化傾向（地球背後の領域と結びつく）。
　新月：
　溶解・エーテル化傾向（地球・太陽間の領域内）。
　月は宇宙の物質を地上へ織り込み、
　溶解した形態をエーテル的イマジネーションとして宇宙へ戻す「織り手」。

・科学的裏付け：
　満月で物質増加、新月で減少（ヘルゼーレ、ハウスシュカの実験）。
　聖杯象徴（満ちる三日月＝器、新月の暗い部分＝聖なるパン）と一致。

・植物成長、有機的リズム、胎児発達（27.3日周期×10＝約273日）に刻印。
　胎児期の各周期が人生の7年期に対応し、カルマを肉体に織り込む。

・地球のサイキック領域（潮汐・気象・水のエレメント）、
　人間の魂・意識（満月：拡張・活動的、新月：収縮・受容的）に影響。

・月の天球は天使（アンゲロイ）の住処。
　古土星（熱代謝）、古太陽（空気変容）、
　古月（水・二重性・睡眠覚醒的プロセス）における天使の活動が、現在の月の影響の起源。

●本文

上級惑星である土星、木星、火星、そして太陽の記述を終え、いまや私たちは下級惑星である水星、金星、および月の活動を探索していかなければなりません。私たちは、上級惑星とその活動の世界とはまったく異なる世界へと足を踏み入れることになります。それはちょうど、人間の魂の世界がその肉体的な諸原理の領域とは完全に異なっているのと同じです。月は、今日の私たちの魂の意識に「最も近い」存在です。それゆえ、私たちは月（の解説）から始めることにしましょう。

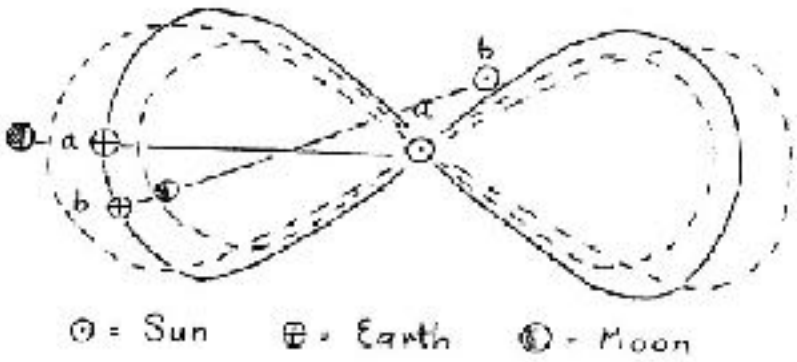
【月】

第11書簡および第13書簡において、私たちはすでに太陽と地球の双方の「レムニスケート運動（連珠形運動）」という思想について言及しました。この思想に従えば、月の軌道もまた、コペルニクス的（地動説的）な視点から与えられるものとはまったく異なって見えてきます。それは、太陽・地球のレムニスケートに沿った「蛇行する線」として現れるのです。しかし、月の運動や太陽・地球の運動を、宇宙空間の中の特定の「線」の上で起こっているものとして捉えるだけでは、宇宙に対するもう一つの抽象的な見方に至るだけにすぎません。

天体の軌道を、宇宙をその肉体とする「あの大いなる存在」の生きた器官の境界線（輪郭）として思い描くことを学ばない限り、私たちは星々からなる宇宙を、自然界のあらゆる領域で働く「一つの実体」として体験することはできません。例えば、太陽と地球のレムニスケート運動は、私たちの内に、このレムニスケートが人間の体内における「血液の循環システム」とある種の類似性を持っているという印象を呼び覚ますことができます。これは一つの現実です。私たちの太陽系という存在の霊的な「血流」が、太陽と地球をレムニスケートの形で運動させているのです。もちろん、人間の血液の循環は単純なレムニスケートを構成しているわけではない、という反論もあるでしょう。それはもっと複雑です。しかし、太陽・地球のレムニスケートもまた、一見して思われるほど単純なものではありません。例えば、それには複雑な運動が結びついており、その結果として、1年の間の太陽の行程が円（軌道）として見えるようになっているのです。

同様の方法で、私たちは月の運動を見つめなければなりません。下の図は、その本質的な特性を認識する助けとなるでしょう。実線で描かれたレムニスケートは、太陽と地球の軌道を表しています。点線のレムニスケートは、月と結びついているものです。

※図 1



太陽と地球が（a）の位置にあるとき、満月が起こると仮定します。この場合、月は、太陽から見て地球の背後に位置しています。このとき、点線で示された「外側のレムニスケート」は、目には見えないものの霊的に実在している、月の「レムニスケート体」の境界（輪郭）を示しています。

その2週間後には新月になります。これは、月が地球と太陽の間に位置する時期です。もちろん、その間に太陽と地球は（b）の位置へと移動しています。ここで図に見られるように、月のレムニスケートは、「内側の点線」によって示されている形へと縮小しています。次の満月に向けて、この月軌道のレムニスケートの形は再び拡張し、ゆっくりと太陽・地球のレムニスケートの大きさを超えて成長していきます。

このように、私たちは月の満ち欠け（相）に関連して、月のレムニスケート体が「絶え間ない拡張と収縮」を行っているのを目にすることができます。これは一種の「呼吸活動」であり、月を非常に特徴づけるものであって、自然界のさまざまな領域における月の本質的な傾向を照らし出しているのです。

私たちはここで、月のこの「呼吸活動」へと注意を向けなければなりません。

過去の書簡において、私たちは太陽と地球の相反する活動の概要を述べてきました。私たちは太陽を宇宙の「穴（ホール）」として描写しました。その活動は宇宙空間の遥か彼方へと及び、いわば黄道帯の縁から中心へと向かってアストラル物質を吸引しています。この黄道帯の星々の領域と、太陽の「穴」との間にあるのが上級惑星であり、とりわけ地球です。これらは、このアストラル物質が物質へと濃密化していくための段階となっています。この濃密化活動の頂点は地球上で起こります。そして今度は、下級惑星が存在する地球と太陽の間の空間において、物質の溶解とエーテル化が起こるのです。

したがって、太陽の吸引傾向は、アストラル物質の物質化をもたらす間接的な原因であり、最終的には、上級惑星と地球の性質が刻印された後の物質が溶解され、そのエーテル的な起源へと連れ戻されるための「穴」となっています。

月は、これら太陽と地球の活動のちょうど中間に位置しています。先ほどの図が示しているように、満月の時期、月とそのレムニスケート体は、地球の「背後」にある、物質化のプロセスに捧げられた宇宙空間の領域と強く結びついています。なぜなら、月のレムニスケート体は、地球と太陽の間で起こる溶解・エーテル化活動の領域を遥かに超えて引き伸ばされているからです。それゆえ、満月の時期の月は「物質を創造する傾向」を持つと推測できます。

一方、新月の時期には、月の天体とそのレムニスケートは地球と太陽の間のエーテル化の領域の内部にあり、より「溶解・エーテル化する活動」を担うことになります。その中間（大まかに言って上弦と下弦の時期）には、月は中和されるか、あるいは一方の活動からもう一方の活動へと切り替わる状態になります。したがって、私たちは月を、宇宙の物質を地上の存在へと織り込み、また溶解した地上の形態の「エーテル化された像」として再び宇宙へと取り出す、壮大なる宇宙の「織り手」として捉えることができるのです。

私たちは、この月の力による「リズムに満ちた織りの活動」を、自然界や人類のあらゆる場所に見出すことができます。その物質創造活動は、実験によって科学的にも突き止められてきました。すでに前世紀（19世紀）に、それ以来忘れ去られていたヘルゼーレ（Herzeele）という科学者が、物質の創造を証明していました。数年前、現代の科学者であるハウシュカ博士（Dr. Hauschka）が、この思想を忘却の彼方から救い出したのです。彼は、植物の種子の発芽に関連した精密な実験において、重量を測定できる物質の増加が起こることを証明しました。彼は、これが「満月」の時期に起こることを発見したのです。さらに彼は同じ方法で、「新月」に関連して物質の減少が現れることも発見しました。ここに、太陽と地球の活動の中に一種

の調和をもたらす要素として織り込まれているように見えた、あの変化する月のレムニスケートを見つめたときに私たちが達した結論の、確かな裏付けがあります。

いまや私たちは、なぜ上弦の月（満ちていく月）の三日月が、秘儀参入者たちによって「聖杯の絶えざる糧の器」の象徴として体験されてきたのか、そして新月の直後にその輪郭がおぼろげに認識できる月の顔の暗い部分（地球照）が、永遠の健康の源として降下してくる「聖なるパン（ホスト［※御受難のキリストの体、聖体］）」の象徴として体験されてきたのかを理解することができます。新月の時期に向けて器（三日月）はその中身を空にし、そして満ちていく月の時期に地球へと注ぎ出すことになる、聖なるパンの力を新たに受け取る準備を整えるのです。このように、万物を養う聖なる杯という聖杯の物語は、単なる美しいファンタジーではありません。それは一つの現実なのです。

月のリズムは、地球上のあらゆる有機的成長のリズムにその刻印を残します。私たちはそれを植物の成長のリズムの中に検出することができます。昔の農夫たちはこのことを知っていたため、月の満ち欠け（相）に従って、種まきや植え付けの時期を注意深く調整していました。この古い知恵は現代では忘れ去られてしまいました。しかし今日、現代の精神科学（人智学）の示唆に信頼を寄せる農夫や庭師たちは、再び惑星の運動、特に月の運動を考慮に入れています。彼らが自然界における月の力の働きに関する新しい知識を追い求めるにあたり、科学的な実験や、この問題への現代的なアプローチがその助けとなっています（リリー・コリスコ著『月と植物の成長』を参照）。

月の力によるリズムの影響は、植物世界の存在だけでなく、すべての有機物質の成長、例えば「胚（胎児）の発達プロセス」の中にも明確に現れます。そこでは月のリズムが非常に重要であり、特に受胎後の最初の4週間（これは、ある一つの月の満ち欠けの相から、再び同じ相へと戻る月の一周期に相当します）において顕著なのです。

人間の胚（胎児）の発達に関連して、私たちは月のリズムと、成長する肉体に埋め込まれる運命（カルマ）との間に、極めて重要な関係性を検出することができます。

非常に多くの歴史的個性を対象に行われた研究により、月のリズムは、これら個人の地上人生における「特定の期間」に対応していることが示されています。月が黄道帯を1周するのには27.3日かかります。つまり、27.3日前と同じ星座の場所に戻ってくるということです。人間の胎児の発達期間は、平均してこの月の周期の10回分、すなわち273日間におよびます。

そして、これら胎内での周期の各々が、人間のその後の人生における「7年間の期間」に対応しているのです。例えば、受胎から胎児期の第4週の終わりまでの時間は、出生後の人生における最初の7年間（0〜7歳）に関係しており、続く4週間は7歳から14歳までの時期に結びついている、という具合です。月は4週間ごとに、常に受胎時の黄道帯の場所へと戻ってきます。

もし、胎児期の「第4番目」の月周期の間に特定の宇宙的出来事が起こっていたとすれば、出生後の人生における「第4番目」の7年間の期間、すなわち21歳から28歳までの間の出来事の中に、それが反映されているのを見出すことができます。その後の人生に反映されるこのような宇宙的出来事とは、例えば2つの惑星の合（コンジャンクション）、対向（オポジション）、あるいはその他のアスペクト（天体の配置）であったり、あるいは一つの惑星がある星座から別の星座へと移行するような、重要な発達段階であったりします。

このようにして月はいわば、宇宙的出来事の収穫を自らの器へと集め、個々の運命に従って、物理的世界に入ろうとしている人間の肉体へとそれらを注ぎ込み、あるいは織り込んでいくのです。ここで月は、過去の地上人生の収穫から焼き上げられた「運命のパン」を提供する、偉大なる宇宙の「織り手」として自らを現しています。それは、この運命のパンが、人間のより高い道徳的活動のレベルへと高められ、霊化されるためなのです。

私たちはまた、地球の「サイキック（魂的）」な領域の中にも月の影響を発見することができます。私たちの惑星の地球を包む大気や気象の変化は、地球の魂の生活の表現として認識することができるのです。ある程度までは、潮汐の現象さえも、これらのサイキックなプロセスに含めることができます。潮汐は、先に述べた月の「リズムに満ちた呼吸活動」の、目に見える表現なのです。実際に、潮汐や気象現象は月の周期的な運動と結びついています。確かに「月が天気を変える」というような大雑把な主張は不十分であり、ディレッタント的でさえありますが、もし気象的事実の背後にあるサイキックな背景（超感覚的な背景）を研究するならば、私たちは明確に月の影響を検出することができます。これは主に、地球上の「水のエレメント」の期間に当てはまります。地球の「水」は、月の力が支配する主要な領域の一つなのです。この結びつきがどこに由来するのかは、後ほどの記述で見ていくことにしましょう。

月のリズムの影響は、人間の魂や意識の生活のリズムの中にも観察することができます。私たちの身の回りの人間環境や、私たち自身の心の状態を観察することは、比較的容易でさえあります。私たちは満月の時期になるといつでも――これがより強力な星の出来事によって妨げられない限り――人間の魂が他の時期よりも活発になることを見出します。魂はいわば、宇宙全体へと拡張しているのです。これらの時期、人間の思考やイマジネーションははるかに生き生きとしたものになり、冒険的で寛大な行為へと踏み出す準備がより整います。

しかし、新月の時期になると、私たちのサイキックな生活はより収縮し、受動的になり、周囲の世界から遠ざかります。その時、私たちのサイキックな生活は、より内的な受容性の状態にあることができるのです。この時の人間の魂は、先に描写した月の「収縮したレムニスケートの天球」と類似した状態にあります。この収縮を通じて、魂は自分自身の内部においてより目覚めていることができるのです。これに対して、反対の状態である満月は、宇宙的に「夢見心地な状態」をもたらすことがあります。これらのリズムは、特に芸術的な活動においてその姿を現します。

私たちはここで、なぜこれらの影響が月からもたらされるのかを突き止めたいと思います。これまでの描写から、惑星の天球が「霊的階層」の活動範囲をも示していることを私たちは知っています。月の天球は地球の天球よりも遠くまで及んでいるため、宇宙における「天使」の住まう場所となっています。月の天球は地球の天球を貫いているため、天使たちは地球の天球の内部でも活動していますが、彼らの影響は宇宙のさらに遠方へと広がっています。この「天使の階層」は、特に彼らの活動によって月とその天球を貫いてきました。それゆえ、もし私たちが彼ら自身の存在について少しでも理解するならば、地球の出来事や存在に対する月の影響をも理解することになるのです。

第4書簡において、私たちは「古土星紀の進化」における天使たちの活動の概要を簡単に述べました。当時、天使たちは「調和の霊（キュリオテテス）」の助けを借りて、ある種の「熱の代謝」を創り出していました。

この種の宇宙的な栄養摂取――熱が人類の祖先へと流れ込み、一種の消化を経て再び流れ出ていくというプロセス――を想像するなら、私たちは先述した現象の壮大なイマジネーションを得ることができます。それはすなわち、満月と新月との関係における「活動的な気分」と「受動的な気分」との間を行き来する、人

間の魂の生活の変化のことです。天使たちがこれらのリズムを創り出したため、彼らは今でもこの月の天球と結びついています。太古の時代からこの天球に刻み込まれているリズムによって、魂の熱が人類によって「吸入」されると、それは活動性や積極性として現れます。一方で、月の満ち欠けに従って魂の熱が吐き出されると、それは受動的な状態）として現れるのです。

現代において、私たちは、これまで「外部」から私たちを捉えて離さなかったこれらのリズムよりも「さらに高い精神的立脚点」に立つことができるような、魂の状態へと進化していかなければなりません。私たちはこのリズムを、感覚世界における活動と、内なるイマジネーションの世界における活動との間の、「意識的な均衡」へと変容させるべきなのです。

「古太陽進化」においては、天使たちは再びある種の代謝活動において活躍していましたが、この時はすべての条件が変化していました。私たちの人間の祖先の身体は、いわば熱の鞘と骨組みのようなもので構成されており、その中には「空気（気体）」も含まれていました。こうして天使たちは、やはり調和の霊の助けを借りて、内部から「空気」の変化と変容をもたらしたのです。私たちがこれらの出来事について瞑想するなら、今日の地球を包む大気の中で起こっている出来事を思い出させるような印象を受け取ります。それはまるで、動物の形態の極めて微細でまばゆいヴィジョンやイマジネーションが「空気」の中に刻印され、しばらくすると再び消え去っていくかのようです。天使たちのこの古代の活動もまた月の天球に書き込まれており、それが、先述した月のリズムや運動と、地球の大気・気象領域のサイキックな魂生活との結びつきとして現れているのです。

これに続く進化の周期であり、私たちが「古月紀進化」と呼ぶ段階において、天使たちは三度活動しました。彼らは存在のより高い段階へと進化しており、古月紀における全般的な条件は著しく変化していました。いまや人間の祖先の肉体は、熱と空気だけでなく、根源的な物質の一部が濃密化した「水（液体）」によっても構成されていたのです。これに伴い、この進化周期において一つの「分離」が起こりました。高次の霊存在たちは、この濃密化（物質化）に自らを結びつけることを望まなかったため、別の天体、あるいは別の領域へと退いたのです。これにより、その宇宙に存在するあらゆるものに「二重性（二面性）」が生じ、特に私たちの人間の祖先はこの極性の中へと引き込まれました。

彼らがより濃密化した身体の中に生き、その中でより明瞭な意識を持つ時期がありました。なぜなら彼らは今や「アストラル体」を授けられていたからです。しかしその後、この意識の力によって彼らの身体が衰退していく時期が訪れました。その時、アストラル体は高次の階層たちの領域へと引き上げられ、そこで自らの身体を再び蘇らせるための力を蓄えたのです。なお、残された方の身体はその間も溶解してしまうことはありませんでした。このプロセス全体は、死の体験というよりは、むしろ「睡眠に落ちることと目覚めること」、そして「誕生と覚醒」の間の状態に近いものでした。いわば種子や根茎のようなものが後に残され、人間の祖先のアストラル体が高次の領域での滞在から戻ってきたときに、それを再び蘇らせることができたのです。この祖先は当時まだ「自我」を獲得していなかったため、天使たちがその存在の変容を通じて彼らを導いていました。天使たちが「種子」を保存し、それらを「発芽」へと導いたのです。

このように、古月紀における私たちの人間の祖先は、その身体においてさえ二重の性質を持っていました。一部分は、より明瞭な意識をもたらす「頭部」のようなものでしたが、それは植物の根のように、この惑星のより濃密な「層」の中に突き刺さっていました。もう一つの部分は、月の宇宙の、熱と空気に満ちた高みとの結びつきを示していました。それは植物の葉や花のようなものでした。この開花と衰退のプロセスは天使たちによって導かれており、これらの存在のグループ全体が、彼らの「集合自我」である一連の天使の指導下にあったのです。

いまや私たちは、なぜ天使たちの住まう場所としての月とその天球が、植物の発芽プロセスや成長において働き、同様に、生きている存在のあらゆる有機的プロセスにおいて働くのかを理解することができます。したがって、それは胚（胎児）の発達とも強力に結びついているのです。

第十七書簡 - 1945年8月
「惑星世界の性質：月（続き）」

●基本的な視点

前書簡に続き、地球進化における月の力と天使階層の関係を深める。

天使は液体（水）の領域に活動の場を維持し、
月を媒介として水と結びついた固体物質の変容・代謝・創造を可能にする。

人間身体の大部分が水であり、
その均衡（特に脳脊髄液）が意識的な魂の生活の基盤となる。
天使は「意識魂」の火花を点火した。
意識魂は感覚世界と霊的世界の架け橋であり、
客観的知覚と精神の顕現認識を目指す。
これを「イマジネーション魂」へと変容させることが課題である。

出生図の月は肉体を「鏡」として授け、
現象を透明にして精神の光を浸透させ、
創造的イマジネーションを生むことを期待する。

各星座における月の力の二重の顔
（与える面と創造を要求する面）を、歴史的個性の例を通じて示す。

●要点

・地球進化で固体（鉱物界）が生じたが、天使は液体領域に留まり、
　水を介して固体物質の変容・消化・物質創造を可能にする
　（ヘルゼーレ実験の裏付け）。

・人間の水の均衡が意識魂の基盤。
　意識魂は感覚と霊の中間に立ち、客観的知覚と精神認識を目指す。
　イマジネーション魂への変容が必要。

・出生図の月は、感覚世界を歪みなく映す肉体を授け、
　創造的イマジネーションを要求する二重の顔を持つ。

・各星座の月のイマジネーションと変容：

　牡羊座（宇宙的記憶・脳の墓 vs. エーテル的角）
　牡牛座（遺伝力 vs. 宇宙的起源）
　双子座（二元論 vs. 第3の存在）
　蟹座（唯物論 vs. ひっくり返された聖杯）
　獅子座（業績 vs. 運命受容）
　乙女座（天上の母と宇宙の子）

天秤座（審判の天秤 vs. 癒やしの手）
蠍座（鷲→蠍→鳩）
射手座（矢 vs. 光への小道）
山羊座（アイベックス vs. 輝く城）
水瓶座（水撒き人 vs. 生命エーテルの海）、
魚座（二匹の魚・創造力の主）

・天空の出来事：

1945年7月6日、双子座で太陽・土星合。
1947年に蟹座で冥王星も加わる合へ進行。
1914年の類似合と第一次世界大戦、ニーチェ・ヒトラーとの結びつき。
人類の道徳的・精神的選択が結果を決定する時代の始まり。

●本文

地球進化（現在の地球期）において、物質の濃密化が再び起こりました。この時、以前の進化周期から受け継がれた物質の一部が「固体」へと濃密化し、鉱物界を形成したのです。しかし、天使たちは自らの活動の場を「液体」の領域に維持し続けました。彼らは物質の世界でも働くことができますが、それは物質が液体の状態と結びついている場合に限られます。

したがって、彼らの活動は月の媒介を通じて、固体の物質が水に溶解している場所、あるいは水と接触している場所ならどこにでも現れます。地球は水がなければ乾いた砂漠になってしまうでしょう。しかし、水を媒介とすることで、固体物質は植物界や動物界の多様な存在たちの助けを借りて変容することができるのです。私たちの消化も同様です。私たちは乾燥した食べ物をそのまま摂取することはできず、それは水によって満たされなければなりません。水の力が固体物質と結びつくとき、ヘルゼーレの実験が証明したように、そこでは物質の創造さえも可能になります。なぜなら、有機的に水で満たされた種子だけが発芽し、それによって物質を創造できるからです。乾燥した物質にそれはできません。月の満ち欠けの相として現れる月の力は、水を介して働くことができるのです。これは、古月進化における天使たちの経験という「霊的な遺産」にほかなりません。

人間の身体の大部分は水で構成されています。私たちの内なる水の均衡こそが、私たちの「意識的な魂の生活」の基盤なのです。もし脳が「脳脊髄液」の中に浮かんでいなければ、私たちは脳を使うことができないでしょう。この、排液による浮力の法則（アルキメデスの原理）と結びついた事実を通じて、脳の循環システムは正常に保たれ、私たちが脳を周囲の世界の知覚や概念形成のための器官として使用できるようになっているのです。地球進化の長い期間にわたり、人間の身体を意識的な魂の生活のための道具へと変容させたのは、まさに「水」でした。ここに、私たちは月の天球、すなわち天使たちの働きを認めることができます。彼らは、精神科学（人智学）が「意識魂」と呼ぶ魂の構成要素の火花を、私たちの内に点火したのです。

人間は、この意識魂を通じて月の力と直接的に結びついています。ルドルフ・シュタイナーは著書『神智学』の中で、意識魂について次のように述べています。

「人間の意識の核心、すなわち魂の中の魂を、ここでは意識魂と呼ぶ。このように、意識魂は魂の独立した一構成要素として、いまだ感覚や衝動、情熱などに絡み合っている『悟性魂』とは区別される。誰もが知っているように、人間は最初、自分の感情が好むものを真実として受け入れる。しかし、感情の同情や反感といったあらゆる個人的な色彩から解放された真理だけが、永続的なものとなる。真理は、たとえすべての個人的な感情がそれに反逆したとしても、真理なのである。この真理が生きる魂の部分を『意識魂』と呼ぶことにする」

意識魂は二重の性質を持っています。それは感覚の世界と霊的な世界との中間に立っています。脳が感覚世界を歪みのない映像として反映できるとき、意識魂はその世界の真理を実現します。このように、意識魂は絶対的に客観的な感覚知覚を目指して努力しますが、同時に、感覚世界の諸現象を「精神の顕現」として認識することをも目指しているのです。

もし意識魂の力が、一人の人間において、そして人類全体において真に発展させられるべきであるなら、これら2つの世界を結ぶこの「架け橋」が確立されなければなりません。客観的な感覚知覚を、精神の光が透き通って輝くほどに「透明」にすること――これこそが、私たちが「イマジネーション認識」と呼び得るものへの、意識魂の変容を意味するのです。

したがって、私たちは自分自身の出生図を通じても月と結びついています。月の力は私たちに、感覚世界を歪みなく映し出す「鏡」となるべき肉体を授けてくれるのです。この世界の諸現象を非常に透明なものにし、そこに精神の光を浸透させることこそが、地球上における私たちの課題です。私たちはイマジネーションを創造していかなければなりません。なぜならそれこそが、月の力が私たちに期待していることだからです。それゆえに、月には――実際にはすべての惑星がそうであるように――2つの顔（与える顔と受け取る顔）があります。私たちが月を黄道帯の特定の星座の中に見出すとき、そこには常にこれら2つの側面を発見することができます。すなわち、いかにして月の力から宇宙の糧が放たれているかを示す側面と、私たちに対して「創造的なイマジネーション」を要求している側面です。

例えば、私たちが牡羊座の星座にある月を見るなら、それが人間に凄まじい「宇宙的記憶」の力を授けているのを見出すことができます。それは、知覚の浄化に結びついた「思考の力」という衣をまとって現れるかもしれません。もし私たちが、内的な認識を通じてこの位置にある月についての知識を得ようとするなら、最初は、宇宙空間を貫き螺旋のように巻かれた、巨大な角以上のものは知覚できないかもしれません。それらは、宇宙に組み込まれたあらゆる知恵を受け取るための「知覚器官」のように見えるかもしれません。

しかし、これらの巨大な宇宙的・エーテル的器官が、頭蓋骨という「墓」の中に閉じ込められてしまったのを知覚することは可能です。かつて、それらは宇宙空間を自由に動くことができました。今やそれらは固定されています。そして、この固定と幽閉によって、人は迷宮の中であるかのようにその中に迷い込んでしまう危険に直面するのです。進化の過程において、このドラマは、今日私たちがこれほどまでに賛美している「人間の脳」に起こりました。

しかしながら、私たちは物理的な脳の単なる使用を超えて進化することもできます。高次の知識の獲得へと至る道によって、私たちは脳の機能だけに縛られないイマジネーションを発展させることができるのです。そうなれば、頭蓋骨の墓から宇宙空間へと伸びていくエーテル的な「角」を体験することができ、それによって、真のイマジネーションによって創り出された真の名をもって、事物や存在に「名を与える」方法を学ぶことができるようになります。これが超感覚的知覚のために私たちによって成し遂げられるとき、牡羊座の羊毛はまばゆい光を放ち始めるのです。

スウェーデンボルグとノヴァーリスは、それぞれの出生図において、月を通じて輝く牡羊座と結びついていました。私たちは次のような印象を抱きます。すなわち、生涯の前半においては卓越した科学者であり、後半においては霊的・宗教的な教師であったスウェーデンボルグは、自らの感覚世界の科学的知覚と、自らの魂の経験へと成長していった幻視的世界との間に、完全な架け橋を確立することはできなかったという印象です。これら2つの世界の間には、断絶が存在しています。それゆえ、彼の幻視の世界は、未だ脳の墓に埋もれたままの思考に「救済」をもたらすことができなかったのです。ノヴァーリスのケースは異なります。彼の著作から、私たちは彼が科学的思考の世界とイマジネーションによる認識の世界との間に架け橋を築いた、という印象を受け取ります。

もし私たちが牡牛座にある月を見るなら、おそらく最初は、強力な牡牛の生命化させる力が月の器へと流れ込んでいるのを知覚するだけかもしれません。これは、肉体的な両親を通じた遺伝の力に依存するあらゆるものの知覚と結びついています。しかし、もし私たちが自分自身の内なる力の進化を通じて、牡牛のこの根源的なイマジネーションを変容させることができるなら、そのとき私たちは、牡牛の頭と強力な角が「器（または三日月）」の形へと変容し、その中に黄金の太陽の輝かしい円盤が現れるのを知覚することになります。

そうなれば、遺伝的下降という一方的な側面は、物理的な遺伝と、人間の精神的本質が持つ宇宙的起源との間の「真の関係性」というイマジネーションへと変容させられます。この事実に対する意識は、中世の時代にはまだ生きていましたが、徐々に失われていきました。精神科学は、人間の霊的・精神的な本質を再び明らかにします。ダンテ、ミランドラ、ケプラー、ヘッケルといった個性たちは、月を通じて牡牛座と結びついており、私たちは彼らの生涯の中に、これらの牡牛の力の例証を見ることができるのです。

双子座にある月を通じて、私たちは、かつて遥か昔に、統合されていたコスモスを精神世界と物質世界へと分離させた、宇宙における強力な力を体験することができます。私たちはこれらの力から、例えば光と闇の原因や、世界におけるあらゆる極性の原因を学ぶことができます。これらこそが、現代の人類における宗教的・哲学的な生活の二元論の真の原因なのです。

もし私たちが、自分自身の魂の能力を通じてこのイマジネーションを再び変容させるなら、私たちは突然、ある「第3の姿」が、両者の間に割って入るのを知覚することができます。それは、宇宙の高みにおいてまばゆく輝きながらも闇を貫くことのできない「光」と、孤立や孤独の恐怖を創り出す「闇」との間に立つ姿です。私たちは、この第3の存在が、他の2つの力が衝突することによって人間の魂を圧倒してしまわないよう、それぞれの力を本来の場所へと留めているのを目にします。私たちは、この第3の存在がどのようにして真に私たちの内に生きることができるかを体験できるのです。

多くの人々の中でも、これはアルブレヒト・デューラーによる美しいイマジネーションの中に表現されています。彼は自らの出生図において、月の器を通じて双子座の力を受け取り、同様の性質を持つ他の多くの絵の中でも、かの有名な銅版画『騎士と死と悪魔』を創り出しました。これは、あの2つの強力な対抗者（死と悪魔）に対して主導権を握る、迷いのない魂の勇気という「第3の力」を表現した、最も美しいイマジネーションの表れなのです。

蟹座が月の器に集められている様子に目を向けるなら、私たちはまず、いわば正面から見た蟹の姿を目撃することになります。私たちは、その強力な一対のハサミと、甲羅の中に隠れている生物を目にするのです。双子座の力が物質世界と精神世界との間の分裂をもたらした後、進化をさらにもう一歩先へと進めた世界におけるそれらの力を、私たちはこのイマジネーションの中に知覚します。それは、感覚に縛られた思考

の鋭いハサミによって、2つの世界をまだ結びつけていた糸を切り離し、頭蓋骨という岩穴の中に引きこもってしまった「唯物論」の姿です。

しかし、もし私たちがこのイマジネーションを変容させるなら、それが「人間の道徳的探求の成果で満たされ、ひっくり返された器（聖杯）」の図へと変化するのを目にすることになります。地上の人生において一時的に精神世界から切り離されるという経験をするにもかかわらず、この器は、遥か遠い未来の時代において万物を維持する糧の担い手となることができるのです。エドワード・ジョージ・ブルワー＝リットン、ラルフ・ワルド・エマーソン、ジョン・ラスキンといった個性たちが、月を通じて蟹座の星座と結びついていました。

月が獅子座の星座にあるとき、私たちは、まるで私たちが透明であるかのように自らを通り抜け、私たちの遥か彼方を見つめているライオンの頭のイマジネーションを得ることができます。私たちはその中に、時代を通じて地球上で人間が成し遂げてきた業績や到達点の「霊的な蓄積」の姿を見るのです。それは勇気、進取の気性、そして誇りのイメージです。自らの魂の能力を進化させる者にとって、それは、利己的な資質が運命の試練を受け入れる心境へと変容させられるまで、運命の打撃によって「動物的本性が抑え込まれるイメージ」へと変化します。

この利己的な本性と、世界を導く運命の諸力との間の闘争の中で、私たちは、人類を霊的に導いている超人間的な計画や諸力についての超感覚的認識を発展させることができます。そうなれば、星空の運動の背後で働き、人間と世界の運命を形成している霊的な存在たちを認識できるようになるのです。これは、私たちの時代においては容易に達成できることではありません。非常に多くの場合、個人の魂の力はこの闘争の中で敗北してしまいます。ベンジャミン・ディズレーリは出生図において月を通じて獅子座と結びついており、レオ・トルストイも同様でした。元メキシコ皇后シャルロッテも、出生時に同じ位置に月を持っていました。彼女は、メキシコの反乱軍によって銃殺された不運なメキシコ皇帝マクシミリアンの妻であり、夫の死後に正気を失ってしまいました。

乙女座にある月は、創造の秘密を知る「あらゆる存在の天上の母」のイメージとして私たちの前に現れます。古くから人々は、この存在が熟成の象徴である「麦の穂」を手に入れている姿として体験してきました。キリスト教的秘教は、私たちが天上の乙女なる母だけでなく、放射する霊的太陽として宇宙の最も遠い空間へと成長していく「宇宙の児」をも目にする地点へと進化することができます。

この星座にある月へと向かう、個人の最も内なる魂から世界へと流れ込むイマジネーションの力は、歴史的に最も重要な出来事を創り出しますが、それらが地上の出来事の表面に出ることは決してありません。それらは、人類の進化の流れの背景に隠されたまま留まります。これらの行為が同時代の人々によって認識されることは滅多にありませんが、その影響力はそれだけに一層強力であり、これらの衝動の物理的な担い手、すなわち人類の「幼子のような萌芽的衝動」がもたらされた後、彼らがもはや生きていない時代になっても、遥か未来へと及びます。このグループには、ジャンヌ・ダルク、ティコ・ブラーエ、ルドルフ・シュタイナーのような個性を挙げることができます。

天秤座の星座にある月は、古くから人々が知覚してきたような「宇宙の審判の天秤」のイマジネーションへと導きます。出生時に天秤座に月を持っていた高名な占星術師ノストラダムスは、自らの時代を遥かに超えて及ぶ予言を書いたとき、この宇宙の審判を体験していました。それらはヨーロッパの諸民族の運命に関するベールに包まれたイマジネーションであり、彼の死後ずっと経ってから現実のものとなりました。

しかし、キリスト教的霊視は、このイマジネーションが別の印象へと変容するのを体験することができます。そのとき天秤は、世界の中で癒やしと均衡の力として、優しく目に見えずに働く「二つの手」となるのです。それらは、世界における精神の啓示のために道を平らにします。このイマジネーションは、ラファエロ・サンティの生涯において明白なものとなりました。彼の絵画の中で、私たちは今でもそれらの「癒やしの手」が持つ魔法のような力を体験することができるのです。

蠍座の星座は、その力が月の器に集められているとき、容易にその深奥へと分け入ることはできません。なぜなら、実際には3つの異なるイマジネーションがその内部に隠されているからです。

太古の時代、人々はこれらの力を、地球上の人間の住処から遠く離れた、大気の光と熱に満ちた高みへと突き進む「鷲」のイマジネーションとして知覚していました。人間の魂におけるこれらの鷲の力は強力で、支配的なものでした。それは人々に霊的な支配の偉大な能力を授けましたが、やがてこの精神は地球からますます疎遠になっていきました。それは高みから地球を統治することはできても、地球を救済することはできなかったのです。こうしてこれらの力は衰退し、長きにわたる時代の間、人々はそれを「致命的な毒針を持つ蠍」の姿としてしか見ることができなくなりました。

著名なドイツの哲学者ニーチェは、『ツァラトゥストラはこう語った』における栄光に満ちた思想の飛翔の後に、狂気の深淵への宿命的な転落が続いたとき、まさにこの悲劇を生きたのです。このようにして鷲のイマジネーションは蠍のイマジネーションへと変容しました。私たちは、人間の理想主義的でありながら幻想にすぎない思考が、破壊の深淵へと転落した刻印を帯びている例を、他にも多く示すことができます。

しかしながら、霊的な活動は、人間を内なる進化の地点へと導くことができます。そこでは、蠍のイマジネーションを「鳩（」のイマジネーション、すなわち人類の中で霊的な創造力の穏やかな威力として働く「聖霊の鳩」へと変容させることができるのです。これは、出生時に月に蠍座を持っていた哲学者フリードリヒ・ヴィルヘルム・シェリングにおいて明白でした。彼の『啓示の哲学』は、この新しいイマジネーションの実現にほかなりません。作曲家モーツァルトもまた、これらの力を授けられていました。彼の音楽は鳩の柔らかな魔法の力を呼吸しており、それは彼の明るい人格の中にも現れていました。

射手座の星座にある月は、引き絞られた弓の弦につがえられた「矢」のイマジネーションとして私たちの前に現れることがあります。私たちはその中に、特定の目標、ときには非人間的な目標へと駆り立てる力として、人間の魂の中で生き生きと働き得る強力な力の表現を見出すことができます。しかし、真のキリスト教的意識は、この矢のイメージ、いわば射出する力を「道徳的な自己完成」の力へと変容させなければなりません。

そうなれば矢は、山の斜面を登って光の領域へと至る「細く蛇行する小道」のイマジネーションへと変化するでしょう。このようにして、それは人間の魂における精神への探求となり得るのです。このことは、オベリン牧師（ジャン・フレデリック・オベリン）によって美しい完成度で実現されました。彼はヴォージュ山脈の貧しい山村であるアルザスのシュタインタールの牧師でした。オベリンのエネルギーによってこの村は目覚ましい繁栄を遂げましたが、その背後にはもう一つの事実がありました。牧師の妻は早くに亡くなり、オベリンは彼女の死後、彼女と強力に結びついていました。彼ら二人の魂の美しい接触を通じて、彼は彼女の死後の生活における経験に参加することができたのです。実際、シュタインタールの事実上全信徒が、牧師とともにこれらの経験の中に生きていました。なぜなら、彼が自らの魂の生活の秘密を教区民に伝えていたからです。この村における人間の探求には特定の目標があり、そこへと至る道は霊的世界へと上方に伸びていました。それは明らかにシュタインタールの信徒たちにとっての祝福となったのです。

山羊座の星座は、月の光を通じて「野生の山羊」のイメージとして現れます。太古の時代からこのように体験されてきましたが、後ろ足の代わりに「魚の尾」を持っていました（※磨羯宮の象徴）。これは、世界における最高のものを追い求める魂の姿勢の象徴です。その危険性は、地上の現実という地面の上にあまりしっかりと立っておらず、足場を完全に失ってしまう可能性があることにあります。

しかし、真の進化はこのイマジネーションをも、高い山の頂に立つ「輝く城」のようなものの図へと変容させることができます。これは地上の現実ではなく、霊的な現実として捉えられるものです。出生時に月が山羊座にあったリヒャルト・ワーグナーは、生涯の最後の作品として創り出した楽劇『パルジファル』の美しさの中に、このイマジネーションを実現しました。パルジファルは、長きにわたる無駄な探求の末に、モンサルヴァートの頂に放射状に立ち、その中で癒やしと絶えざる糧の器である聖杯が守られている「聖杯の城」へとたどり着きます。聖杯の城は霊的な現実であり、感覚の世界の中で見出されるものではありません。

水瓶座は、月のイメージにおいて、自らの水瓶の中身を宇宙空間へと注ぎ出す「偉大なる宇宙の水撒き人」として現れます。それは、一種の受動性や、バランスを欠いた利他主義の中に、容易に自分自身を見失ってしまうような魂の力のイマジネーションです。魂は、果てしない大海原にぽつんと取り残されたように自分自身を見出したり、あるいは、打ち砕くような激流に飲み込まれてしまうかのように感じたりするかもしれません。

もしこれが真のイマジネーションへと変容されるなら、そのとき水は、宇宙の天球から地上の領域へと流れ降り、生きている形態の奇跡をもたらす「生命を授けるエーテル力の海」として現れることになります。ゲーテはこの月の神秘を授けられており、自然界や人類の中で働くエーテル力の現実は、彼にとって内なる経験の事柄であったと言うことができます。私たちはこのことを、多様な方法で証明することができるでしょう。

魚座の星座にある月は、水瓶座の水の中を泳ぐ「二匹の魚」のイマジネーションを創り出します。これらの魚は、人間の個としての存在の上に築かれた、海の中の「島」のようなものです。

魚座は、自らの存在全体の高次の諸原理を発達させることを通じて、自己の内にある精神を実現した個人の姿を表しています。いまやそのような人々は、ある進化周期の終わりに立っている、あるいはむしろ、創造的なエーテル力の海の中を泳いでいるのです。そのような個人は、創造的なエーテル力の主となるための準備を整えており、それらの力を借りることで、現代の私たちが極めてかすかな概念しか持ち得ないような行為を成し遂げることができます。それゆえに、このイマジネーションの光のもとで実を結び得る行為の成果は、まだ「自我」の意識的なコントロール下にはない魂の領域においてもたらされるのです。私たちは、スウェーデン王グスタフ・アドルフ、イグナチオ・デ・ロヨラ、ホメオパシーの創始者ハーネマン、そしてトマス・モアといった個性たちの出生図の中に、この「魚座にある月」の位置を見出すことができます。

これらは、黄道帯の星座における月の力の活動と、意識魂の能力を通じたその変容の概略にすぎません。もちろん、実際の出生図においてこれらを一般化することはできません。そこでは、月と結びついている他の惑星たちのアスペクトや、その他多くの詳細な要素が考慮されなければならないからです。しかし、ここでの私たちの目的は、これらの力が理想的な状況下においてどのように働き、どのように発展させられ得るかを示すことにありました。

〔天空の出来事〕

7月6日、双子座の星座において、太陽と土星の合（コンジャンクション）が起こりました。これら2つの天体の合は1年に1度起こりますが、常に前年よりも半月ほど遅い時期に発生します。例えば1946年には7月21日に起こりますが、その時までに太陽と土星の双方がすでに蟹座の星座に入ってしまっていることになります。

このように、この毎年の出来事は黄道帯を前進していく運行を示しています。30年という期間の中で、私たちは黄道帯の12の星座において次々と起こる30回の合を見出すことができます。一つの星座につき、およそ2回から3回の合が起こるのです。今年とこれからの2年間に起こる合は、1930年に発見された惑星・冥王星へと徐々に近づいていくため、特に重要です（今のところ冥王星は、私たちの太陽系の中心から最も遠く離れた惑星です。その軌度は海王星の彼方にあり、軌道を完全に1周するのに約250年を必要とします）。

したがって、私たちは次のような事実に直面しています。1945年に太陽と土星の合は双子座で起こり、1946年には蟹座で起こり、そして1947年にも蟹座で起こりますが、その時は冥王星との合も組み合わされることになるのです。もし私たちがこの出来事を望遠鏡で観察できるとしたら、恒星天の背景に蟹座のかすかな星々が見え、その手前に太陽が見えるでしょう。太陽のわずか上方、宇宙の遥か彼方には惑星・土星が現れるはずです。さらにかなり高い位置ですが、太陽のほぼ直線上の上方に、私たちは惑星・冥王星を検出することになります。もちろん、これは現代の大型望遠鏡の一つを通してのみ見ることができるものです。

これらの組み合わされた合が起こる時期と場所は非常に重要であり、私たちの時代の文化的発展に対して強い霊的責任を感じている人々の注意を、これらの出来事に向けさせることが必要となるかもしれません。

土星と冥王星の一つの合から次の合までは、約33年が経過します。それゆえ、これら2つの惑星の「前回の合」は1914年に起こっていたはずです。1914年6月13日、太陽と土星の合が起こりました。冥王星は、当時太陽と土星が位置していた場所の、少なくとも極めて近くにありました。このように、ここには1947年に起こることになる出来事と類似した出来事がありますが、それは牡牛座の星座において起こったのです。1914年6月28日、サラエボでフェルディナント大公の暗殺事件が起こり、それが第一次世界大戦へとつながったことを私たちは思い出すでしょう。

1947年にこの組み合わされた合が起こる場所は、1888年に狂気に陥ったドイツの哲学者ニーチェの悲劇と強く結びついています。それはまた、ドイツをこの戦争（第二次世界大戦）へと強制的に巻き込み、彼女を破滅へと導いた人物（※アドルフ・ヒトラー）とも結びついています。土星が（1846年に発見された）惑星・海王星と合であったとき、大ゲルマン帝国という誇大妄想的な思想がこの人物を捉えました。これが起こったのは1917年、蟹座の星座においてでした。

1947年、土星はほぼ同じ位置で冥王星と合になります。しかし、冥王星との合は「エグザルテーション（高揚）」を意味することになります。なぜなら冥王星はさらに遠方にあり、すなわち、より「高い」天球に属しているからです。

この宇宙の出来事は、地上の出来事にどのように反映されるのでしょうか。そこに書き込まれた相を、私たちは知ることに耐えられるでしょうか。それは確実に、宇宙における悪の勢力との闘争、そして宇宙進化の力と結びつくことになります。それゆえ、その多くは人類自身の「手」に委ねられているのです。地上の人間による道徳的・精神的な業績の秤が、最終的にこれらの出来事の結果を決定することになります。

もし1914年、太陽・土星・冥王星の組み合わされた合が牡牛座で起こった時に、精神科学の建造物――ドルナッハのゲーテアヌム、すなわち「言葉の家」――が完成していれば、あの年の出来事は別の経過をた

どっていたかもしれません。これから迎える数年間の天体の出来事に結びついた事象は、私たちの時代が切望している、ある種の強力な道徳的・精神的衝動を一定数の人々が発展させ、遂行するならば、人類の善と進歩へと向けられる可能性があるのです。私たちは、これらの出来事の言語をどのように読み解き、理解すればよいのでしょうか。

これらの合の間に太陽から響いてくるのを私たちが聴くことのできる「言葉」は、ある種の衝動にとって「実現」の時が到来したこと、そして、ある事柄が実行されなければ、ある可能性が人類から消え去ってしまうであろうことを告げています。

土星は、多くの人々が「天の国は近づいた」という事実を認識すべき時が再び到来したこと、そして、人間の有機組織（体制）の高次の諸原理を認識することを通じて、これまでよりもはるかに多くの人々が「天の国」の体験へと分け入るべきであることを明らかにするでしょう。さもなければ、多くの人々が「高次の自我」に対抗する力によって一掃されてしまうことになります。

冥王星は、神秘のベールの背後に深く隠されています。それは、個々の人間や、単一の国家、あるいは単一の大陸だけでは到達できず、真にキリスト教的であり、地球全体を包み込む「一つの共同体」としての人類によってのみ到達できる力について、私たちに語りかけるでしょう。地球の諸民族は、聖霊において一つの身体となることができるのです。

これに対して立ちはだかるのが、完全な破壊、全滅、さらには人類そのものの根絶の勢力です。天空におけるこれらの出来事は、人類がこれら2つの勢力のどちらかを選択し、決定しなければならない「選択の時代」を開始することになるのです。

第十八書簡 - 1945年9月
「惑星世界の性質：金星」

●基本的な視点

金星と水星の天文学的本質は未解決の大きな問題を伴うが、
シュタイナーの示唆に沿い、
太陽・地球のレムニスケート運動に関連させた図式的イメージを提示する。

太陽の放射（穴を残す）と
地球の収縮（穴へ膨らむ）の極性からレムニスケートが生じ、
人間身体の頭部（収縮）と胴体（放射）の浸透にも類似する。

金星・水星はより小さなレムニスケート上を動き、
内合（ループ・逆行）と外合の違いを説明する。

金星領域は大天使の領域であり、
彼らの進化史が金星の運動に現れる。

大天使は感覚器官の創造・発達と、リズム・呼吸組織に結びつき、
悟性魂（心情魂）をインスピレーションの魂へと変容させる可能性を開く。

古太陽進化を中心に、黄道帯の分化と感覚の起源を詳述する。

●要点

・金星・水星は
　太陽・地球レムニスケートの交差点に固定された
　小さなレムニスケート上を動き、
　内合（太陽手前・逆行）と外合（太陽背後）を説明する。

・内合時：
　金星領域は地球の収縮空間に押し込まれ弱められる。
　外合時：
　太陽圏の放射環境で強められる。
　4年周期で内合の弱体化が外合により回復される。

・金星領域は大天使の領域。彼らの進化：

　古土星：動物的意識、セラフィムの協力で感覚器官のエーテル的芽生えを創造。
　古太陽：人間的意識、熱要素で感覚器官を進展。
　古月：イマジネーション認識、エーテル体・流体循環・成長で活動。
　地球：インスピレーション意識、空気・光の時代と結びつき、悟性魂で経験。

・大天使は感覚機能（知的能力）とリズム・呼吸組織に二重に結びつく。

悟性魂の深化でインスピレーション魂へ変容可能。

・古太陽進化の二重物質（遅れた熱＋空気）と大天使の媒介活動により、
12の感覚のエーテル的イメージが形成。
古土星の7段階と古太陽のサイクルが各感覚
（自我感覚、思考感覚、聴覚、熱感覚、視覚、味覚、触覚、
生命感覚、運動感覚、平衡感覚、嗅覚など）の起源となる。

●本文

〔金星という惑星の領域〕

金星と水星の天文学的な本質を研究することは、まだ解決されていない極めて大きな問題を伴います。以下では、太陽と地球のレムニスケート（連珠形）運動に関連させた、金星の動きの図式的なイメージを提示してみます。

強調しておかなければならないのは、これが最終的な解決策ではなく、ルドルフ・シュタイナーが示した示唆に沿って、これらの動きを思い描くための一つの可能な方法として捉えられるべきだということです。しかし、たとえこの示唆に疑いの余地があるとしても、私たちはいつの日か、惑星組織の新しい概念の全体像を、真実かつ包括的な方法で証明できるようになることを願っています。

太陽と地球の軌道が描くレムニスケートは、宇宙における二つの極性によって生じたと想像することができます。それは、中心に向かって「穴」を残そうとする太陽の放射活動と、その穴に向かって、いわば「膨らもう」とする地球の収縮活動です。いつの日か私たちは、これら二つの力の対立の中に、宇宙におけるレムニスケート形態の起源を見出すことができるようになるかもしれません。

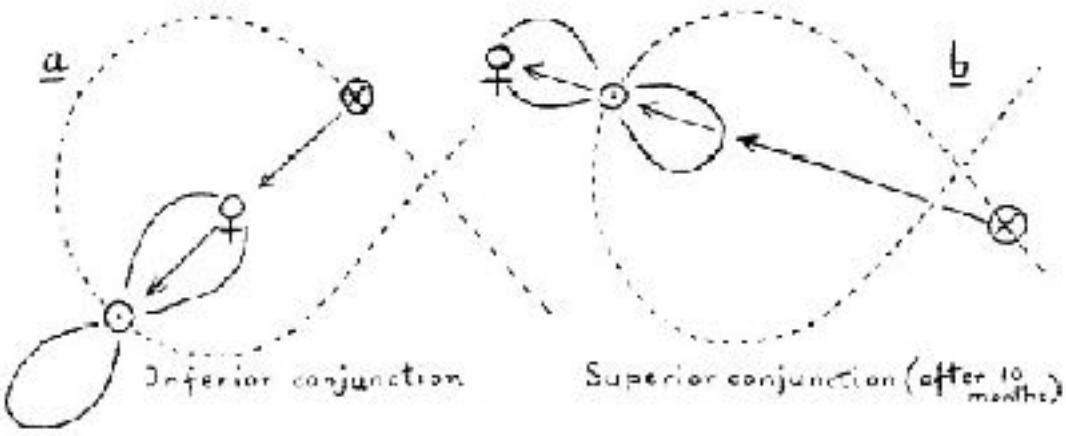
人間の身体において、これら二つの力は、頭部と身体（胴体）を形成する活動の極性として現れます。頭部は収縮し鉱物化する実体であり、身体は放射し拡散する力です。しかし、それぞれは互いに浸透し合っています。収縮する力は身体の中（胴体側）でも活動しており、同様に拡散する活動も頭部の中で働いています。ただし、それらの領域では、その働きがかなり妨げられています。その結果として生じるのが、人間の有機体組織の中に多様な形で刻み込まれているレムニスケートの形態なのです。

ここで私たちは、金星と水星が、より小さなレムニスケートの上を動いていると想像する必要があります。それらは、おそらく太陽・地球レムニスケート上の交差地点によって固定されていますが、太陽の右側から左側へ、またその逆方向へと移動する可能性を持っています。

こうして私たちは、次のような事実の理由を見出すことになります。すなわち、地球から見て金星が時に太陽の手前に位置し、太陽の運動方向とは逆向きに動く。つまり、逆行したりループを描いたりすることがあり、また別の時（約10ヶ月後）には太陽の背後、あるいは外合の位置（図の「b」の位置を参照）にくるという事実です。

※図１

金星と水星の二つの惑星は、太陽と非常に強い結びつきを持っています。これらは太陽の親密な側近であるため、太陽の持つ放射の傾向をも共有しているのです。ここで図の中の「a」と「b」の位置を見てみると、



内合（あるいはループ）の「a」の時期と、外合の「b」の時期とでは、金星の領域の状態に大きな違いがあるはずだということがすぐに分かります。

位置「a」においては、金星の放射する領域（私たちはこれを惑星の周囲にあり、地球にまで宇宙空間を貫いているものとして想像しなければなりません）は、多かれ少なかれ地球の収縮活動で満たされた空間へと押し込まれます。このとき、金星領域の力は、地球の力に対抗して自らの足場を維持するために、激しい苦闘を強いられていると想像することができます。その結果、放射する金星の活動は、人間の内部では頭部を組織する力として現れる宇宙の領域へと押し込められることになり、そのため、この位置にある金星の力は弱められてしまう可能性があるのです。

これとは反対の事象、つまり図の「b」の位置で示される外合においては、金星の力はより自らのエレメント（本来の領域）である太陽圏の放射する環境の中にあるように見えます。そのため、金星領域の力は、外合の時期には比較的強められることになります。

しかし、宇宙はこれに対する均衡を用意してくれています。第13書簡の「天空における出来事」という記事の中で、私たちはすでに次の点を指摘しました。すなわち、金星の各ループ（内合）の4年後には、黄道帯のまったく同じ位置で外合が起こるということです。このようにして、内合に関連する弱体化の影響は、同じ位置で起こる外合という強化の出来事によって、常に再び回復されるのです。これらの金星のリズム、特にこの「4年周期のリズム」は、将来、科学的研究（例えば、昆虫や甲虫の変態との関連や、その他の領域など）において極めて重要なものになる可能性があります。

私たちは今や、金星の領域から放射される力の精神的（霊的）な性質についての知識を構築しようとしなければなりません。

これまでの通信の中で、私たちは「月の領域は天使の領域である」というテーマを展開してきました。これに対し、金星という惑星にその「中心」を持つ領域は、大天使の領域です。それゆえ、大天使たちの霊的な「進化の歴史」は、今日でもこの金星領域の影響の中に現れており、その絶え間なく変化する状態は、金星の運動や身振りによって示されているのです。

古土星進化紀において、大天使たちは、今日の動物界のそれと比較できるような意識状態にありました。この状態において、彼らは高次なる「愛の霊（セラフィム）」の協力を受けました。愛の霊たちは、古土星期における出来事の壮大なビジョンを大天使たちに捧げたのです。こうして彼らは共に、私たちの人間の祖先における、感覚器官の最初の「エーテル的な芽生え」を創り出しました。

古太陽進化紀の間、大天使たちは、人間がこの地球進化にいたって初めて獲得したような意識状態へと進化しました。人間の先祖にあたる古太陽期の存在は、その身体が二つの部分に分かれていました。一つは「空気」の状態にまで凝縮された物質からなる発達した部分であり、もう一つの身体物質は、古土星という惑星上で到達した段階よりも先には進化していませんでした。それは熱からなっており、空気の部分を鞘のように包み込み、また骨組みのようにそこへと浸透していました。大天使たちは当時、この熱の要素の中で働き、人間の感覚器官の芽を、完成に向けてさらにもう一歩進めたのです。

古月進化紀がその開発のある段階に達したとき、大天使たちは「イマジネーショ認識」の能力を獲得していました。これにより、彼らは人間の祖先のエーテル体の中で活動できるようになりました。彼らは、人間の体内における流体の循環や、成長の現象として肉体的に表現される「内的な生命機能」の中で活動したのです。そこでは、栄養摂取と呼吸の中間に位置するような活動がもたらされました。その一方で、大天使たちは依然として人間の感覚器官の発達とも結びついており、その感覚器官を自分たちの知覚のための器官として使用していました。

地球進化紀において、大天使たちは精神科学（人智学）が「インスピレーション認識」と呼ぶ意識段階に達しました。彼らは特に、物質が再び空気や光へと凝縮された地球進化のあの時代と深く結びついていました。これは、古太陽進化の中での出来事の一種の「再現」でした。彼らは人間の身体の「空気の部分」の中にも自らを現し、人類は彼らを「魂の調律」として経験しました。人類は彼らを「悟性魂／心情魂」の中で認識したのです。この魂の領域は、将来的に「インスピレーションの魂」となるように準備されたものでした。

このようにして、私たちは大天使たちが二重の方法で人類と結びついていることを理解できます。彼らはかつて、人間の感覚器官の創造と発達の中に自らを現しました。それらの過渡的な進化の段階において、感覚器官は今日のものとは全く異なるものでした。それらははるかに繊細で、エーテル的なものだったのです。

やがて、それらの活動はいわば人類の魂の生活の中へ、特に「悟性魂（心情魂）」の中へとますます退いていきました。この悟性魂について、ルドルフ・シュタイナーは『神智学』の第1章で次のように述べています。

「人間は自分の感覚について思考を形成する。そうすることで、人間は外部世界について自らを啓発するのである。火傷をした子供はそれについてよく考え、『火は燃える（熱い）』という思考に達する。また、人間は自分の衝動、本能、情熱に盲目的に従うわけではない。それらについて思考することによって、それらを満足させるための機会がもたらされる。いわゆる物質文明と呼ばれるものは、完全にこの方向へと進んでいる……。これを『感情的思考魂（あるいは心情魂）』と呼ぶこともできるだろう。」

その一方で、大天使たちは人間のリズム組織（呼吸・循環系）における特定のプロセスとも結びついています。例えば、金星という惑星によって示される領域が、胚の発達における運動や身振りを通じて、人間の有機体における呼吸器官の状態を示していることを、いつの日か私たちは証明できるようになるかもしれません。しかし、私たちは金星の「領域」と、その惑星の「物質としての星そのもの」とを厳密に区別しなければならず、出生前の発達に対するその影響と、出生後の人間の生活に対するその効果とを混同してはなりません。これらの事実は、ここでは詳しく展開することはできません。これらは医学的研究の主題であり、本通信が意図する範囲を超えているからです。

このように、私たちは金星・大天使領域の活動の表現として、人間の中に二つの運動、あるいは二つの活動を見出すことになります。一方は、感覚の機能と結びついた「知的な能力」の獲得へとより向かうものであり、もう一方は、人間の日常の昼の意識の境域を超えたところにある「リズム組織および呼吸組織」の身体的機能の中に、いわば位置しているものです。

ここで、人間の意識の進化を想像してみましょう。もし意識が、悟性魂（心情魂）の内部にあるより深い能力を直視できるようになれば、悟性魂は「インスピレーションの魂」へと変容するでしょう。そうなれば、物事や霊的な存在たちの隠された言語を、いわば「吸い込む」こと、あるいは「食べる」ことさえできるようになります。それは進化した一種の「感覚知覚」であり、肉体的な感覚知覚はその影にすぎません。例えば、私たちが肉体世界における「聴覚」について語るのと同じように、霊的宇宙における「聴覚」の状態についても語ることができます。そこでは、霊的な存在たちが彼ら自身の「言語」で自らを顕現させており、これこそが神秘科学がインスピレーションと呼ぶ状態なのです。

12の星座（黄道帯）の分化によって貫かれている「金星という惑星の領域」の性質を理解するために、私たちは宇宙進化の第2の大きな段階、いわゆる「古太陽紀」の中での出来事に、もう少し集中する必要があります。大天使たちが、現代の人間の「自我意識」に相当する状態を獲得したのは、この進化の大きなサイクルの中でのことでした。したがって、大天使という存在たちとの結びつきにおいてこの時代を研究することは、極めて啓発的なことなのです。

すでに指摘したように、古太陽進化における人間の祖先の身体は、二つの異なる物質から構成されていました。そこには、古土星進化の「残余」である「遅れた」熱物質があり、それがもう一方の物質（熱の一部が凝縮してできた「空気」）の周囲に一種の「外套」を形成していました。人間の祖先の身体のほかに、これらの身体の周囲の環境の中にも、一種の「第2の、より低い自然界」として、遅れた熱が存在していました。大天使たちは、身体の「熱の部分」に組み込まれていた人間の「原初の感覚器官」の中で働き、それによって、その第2の低い自然界と、人間の自然界との間の結びつきの可能性を創り出したのです。この、大天使たちの「媒介する活動」は、彼らの最も際立った特徴の一つです。

ここで私たちは、古土星進化の出来事が「熱の部分」に刻印されていたと想像しなければなりません。それは言わば、私たちが第3書簡、第4書簡、第5書簡で概説した、あの惑星進化（古土星紀）の「七つの大きな文化期」の顔立ちを帯びていました。一方、「空気の部分」は、古太陽進化そのものの「七つの大きな周期」の刻印を示していました。これについてはこれまで詳しく述べていませんが、ルドルフ・シュタイナーの著書『神秘学概論』に記述されています。大天使たちによって創られた原初の感覚器官は、「熱の世界」と「空気の世界」という二つの世界の間の媒介者として働きました。こうして、12の感覚の輪郭、すなわちエーテル的なイメージが顕現し、その後の宇宙進化のサイクルの中でますます明確に現れるようになったのです。

私たちが古土星進化の七つの大きな周期を記述したとき、それらを今日私たちが空に観察する「黄道帯の12の星座」と結びつけることができました。古太陽進化に関しても、同じことを行うことができます。あの古土星という惑星の特徴の顔立ちが、遅れた熱物質の上に刻印され、この熱物質が感覚器官の基礎であったと言うならば、その器官を使用する「感覚」もまた、黄道帯の星座との関係を帯びているに違いないと推測することができるのです。

私たちは今や、これをさらに詳細に展開していくことにします。**古土星進化の七つの大きな段階は、次のようなものでした。

1）牡羊座：強力な「神の知恵の言葉」が古土星という惑星に向かって語られました。この状態ではまだ生命のなかった惑星自体は、これを保持することができませんでした。ただその反射（反映）だけが惑星の上にとどまり、これが「牡羊座」の原初のイメージとなりました。

2）牡牛座：宇宙の魂の力（その最高の表現は「神の思考」です）が惑星に浸透しようとしましたが、これもまた反射されるだけでした。これが「牡牛座」の起源となりました。

3）双子座：宇宙における「私はある（自我）」の担い手たちの力が反射したことで、一つに結合していた惑星物質が、多くの個別の身体へと分割されました。これが「双子座」の背後にある原初の力でした。

4）射手座：「人格」への映し鏡となった、個々の熱の身体。これは「射手座」の前兆でした。

5）山羊座：熱の身体の内部に、感覚器官の「エーテル的な芽生え」が創り出されました。これが「山羊座」の霊的な背景を形成しました。

6）水瓶座：身体の内部に、一種の「熱の代謝」が確立されました。これが「水瓶座」の表現でした。

7）魚座：ここで、神々の意図の絶対的な写し鏡であり、霊的な環境から来る衝動に正確に従って行動する「自動人形としての人類」が現れました。これは「魚座」の領域で起こりました。

こ　れらの異なる発達段階は、古太陽期において「遅れた熱物質」の上に再び刻印されました。そして、いつの日か世界を直視することになる「感覚器官」が完成に向けてもう一歩進められるにつれ、感覚器官はこれらの刻印を知覚できるように準備されていったのです。

　このようにして、感覚器官の内部で形成力として働く「感覚活動」は、古土星進化におけるそれらの出来事に由来しています。

　双子座（または双子座の背後に立つ力）：地球の進化段階において「自我」を直視する能力、すなわち「自我知覚のための感覚（自我感覚）」を発達させる力を与えました。

　牡牛座：思考を知覚する能力（思考感覚）がもたらされました。

　魚座：聴覚（聴覚／音響感覚）を通じて知覚する可能性が創り出されました。絶対的な受容性こそが、この感覚が機能するための根本的な条件です。

　水瓶座とその霊的な背景は、熱を知覚する可能性（熱感覚）を与えました。

　山羊座：視覚（視覚）が創り出されました（ただし、感覚器官全般の創造はこの領域と結びついています）。視覚の中には、古土星惑星において「愛の霊」たちが捧げた、彼らのビジョンの犠牲の遺産が息づいています。

　射手座：味覚（味覚）がもたらされます。これは、古土星進化の第4サイクルという視点から理解するのは非常に困難ですが、これについては後により広い理解の基礎を見出すことになるでしょう。

もちろん、これらの感覚が古太陽進化の時点で「すでにそこにあった」と言うことはできませんが、それらの宇宙的な雛形は当時すでに存在していたのです。

人類の祖先の「空気物質」の内部には、かつて熱物質の上に反射していた、古太陽進化のサイクルが刻印されました。これらのサイクルもまた黄道帯の星座と結びついて現れますが、今はこれについて詳しく展開することはできません。それらが感覚の形成に与えた影響についてのみ記述することができます。ただし、ここに挙げる順序は、その惑星進化（古太陽紀）における出来事の時系列とは一致していません。

双子座における出来事が反射し、一種の原初の繁殖（生殖）が進化しました。個々の存在は、単純な分離という行為を通じて「母親である存在」からその生存を受け継ぎました。ここから後に、自分と同じ存在である「兄弟の存在」を知覚するための感覚が進化しました。これは「自我を知覚するための感覚」のさらなる進化です。

蟹座は、その存在に、一種の皮膚の内部で一時的に固定された形態を授ける出来事と結びついています。これが、後の「触覚」の発達の基礎を築きました。

獅子座：宇宙の周辺（外周）における魂の運動や活動の反射を、その存在が自分自身の有機体の内部で経験したという、進化の段階のイメージです。これらの経験が、生命を知覚するための感覚（生命感覚）の起源となりました。

乙女座は、人間の本質に根本的な変化をもたらした、古太陽進化における出来事が刻印されている星座です。古土星惑星の内部では、熱の身体はまだ生命を持っていませんでしたが、この新しい惑星進化の初期段階において、身体にエーテル力が授けられました。これが、のちにその存在自身の中で、自分自身の動きを実感し知覚する運動感覚の基礎となったのです。

天秤座は、その存在が周囲の環境に対して完全に内的な均衡が取れた状態に達し、その経験を一種の「原始的な言語」で表現することさえできたという進化の状態を反映しています。これが、平衡感覚の原初の起源でした。

蠍座は、私たちが「脱物質化」のプロセスと呼ぶことができるような出来事のイマジネーションを保存しています。肉体的な形態が溶解することを通じて生命力が解放され、それによって、生命のつながりや宇宙の知恵を認識するための「芽のような器官」が肉体的な形態の中に組み込まれました。嗅覚は、この蠍座に結びついている本来の能力の、かすかで歪められたイメージにすぎません。

最後に、射手座は、この進化段階において、代謝や物質変容という巨大な宇宙のプロセスが、人間の組織の中に植え付けられた出来事を記憶しています。ここで私たちは、味覚が射手座と結びついているという事実に少し近づくことになります。ただし、その本来の能力は、今日私たちが味覚と呼ぶものとして現れるまでに、多くの変態を経たということを忘れてはなりません。

古太陽進化と地球進化の間には「古月進化紀」があり、それが感覚のさらなる発達をもたらしました。実のところ、これはすべての感覚について当てはまることです。

私たちは、感覚器官の原初の創造の中に、大天使たちの活動を見出すことができます。感覚器官とは「内なる感覚」が存在していることの表現であり、感覚そのものもまた、大天使たちの活動に関与していなければなりません。さらに、この結びつきは、このヒエラルキアの宇宙的な領域の中にも刻み込まれていなけれ

ばならず、その領域は、金星という惑星の運動の中に目に見える指標を持っています。そして実際に、私たちはそれを金星の運動の中に見出すことができるのです。

　このことは、いわゆる知的障害児（※当時の表現）の膨大な数の事例において検証されてきました。しかし、そのような事例についてここで語ることは不可能です。私たちは次の通信において、歴史的な実例と結びつけながら、これらの事実を展開していくことにします。

第十九書簡 - 1945年10月
「惑星世界の性質：水星」

●基本的な視点

水星を「点としての惑星」ではなく、
その運動が示す領域として見る。

金星と水星の領域は人類進化のある時点で入れ替わっており、
水星領域の本質は権天使（アルヒャイ／人格霊）の働きとして現れる。

そのリズムと身振りは、人間の意志・熱・腺活動・自我の独立に対応し、
同時に主知主義と情念への転落という二つの危険を示す。

惑星は運命の決定因ではなく、人間が内的に答えねばならない「宇宙的な問い」である。

●要点

・金星領域と水星領域の入れ替え：
　領域の性質と惑星そのものの性質は一致しない。

・水星の年周期：
　内合（ループ／逆行）3回＋外合3回。
　黄道上に二つの三角形＝六芒星を描き、それがゆっくり回転する。

・周期：
　約7年（能力・資質の開花）、約20〜21年（使命の自覚）。
　これは人間の意志のリズム。

・月＝頭部／思考、金星＝中間組織／感情、水星＝意志の深層。

・権天使は古土星で自我意識を獲得し、原初の意志物質を「熱」へ変容させた。
　その刻印が人間の血液の熱・手足の動き・自我経験の基礎となる。

・古太陽：エーテル体と腺・生殖の原型。
　古月：アストラル体に独立性を植え付ける。
　地球期：直観意識へ進む一方、孤立と情念の危険も刻印される。

・二つの三角形：
　地球向き＝主知主義の墓穴、天向き＝制御不能な情熱の深淵。

・出生図の水星は予言ではなく、隠れた霊的能力を問う指標。
　アストロソフィーはキリスト化された占星術へ向かうべき。

・1945年10月の天空：
乙女座での太陽・水星・木星・海王星の整列（ミカエル祭と結びつく）、
双子座での火星・土星合。
歳差を通じてゾロアスターとアッカド人の宇宙記憶を呼び覚ます。
現代人は死んだ星ではなく、
宇宙記憶としての星を意志によって再発見しなければならない。

●本文

〔水星とその領域〕

第18書簡での予告とは異なり、今回は金星に関する歴史的な出生図の分析は行わず、水星とその領域の活動についての記述を続けることにします。これらを終えた後に、太陽と月、そして5つの惑星の全体像に関連させた歴史的な実例の描写に着手することにいたします。単一の惑星の孤立した活動を考察するよりも、その方がはるかに満足のいくものになるからです。

読者の中には、第18書簡における金星の描写が、この惑星の本来の活動として私たちが期待するものとは異なっており、むしろ私たちが「水星」に結びつけている性質に非常に近くなっていることに気づかれた方もいるかもしれません。これには深い内的な理由があります。

私たちは金星という惑星の「領域」について語ってきました。なぜなら、出生図における金星の明確な位置のような「固定された位置」という観点からではなく、例えば胎児の発達期間中といった「運動」の側面から考察したからです。ある特定の時間内における惑星の運動を考慮するとき、私たちはすでに、その惑星の身振りによって示される「領域の動態」を見ていることになるのです。

したがって、私たちは、金星の身振りによって示される「領域」の性質が、その「惑星そのもの」の性質とは異なる本質を持っている、ということを経験することができます。同じことが水星にも当てはまります。

この背後には、「人類の進化のある時点で、これら二つの内惑星（金星と水星）の領域が入れ替えられた」という、神秘学において知られている事実が隠されているのです。金星の領域は本来「水星」の性質を帯びており、水星の領域は「金星」のダイナミクスを帯びています。

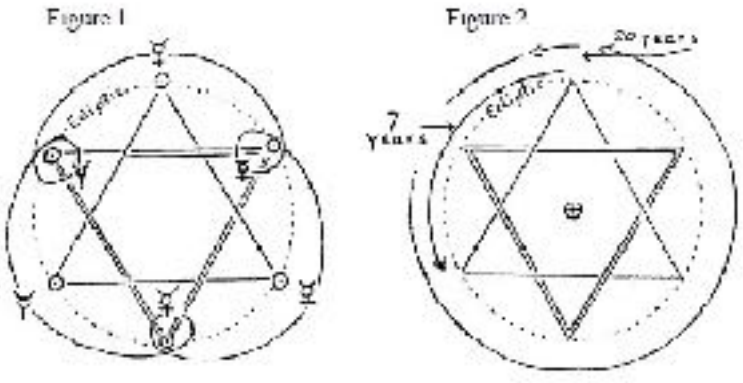
人類が領域に関する古い知識を徐々に失い、目に見える惑星だけを見るようになった時代、これらの神秘）の前にヴェールが引かれ始め、それは今日でさえ容易に剥ぎ取ることはできません。そのため、多くの謎がまだ未解決のままであり、これらの問題に少しずつ光を当てていくことが、将来の「霊的天文学」の課題となるでしょう。主にアストロソフィーを扱っている本書簡において、この主題に関連する多くの天文学的な問いを詳細に解説することは不可能です。

私たちはここで、水星領域の性質を見出すために、水星という惑星の根本的な法則と身振りを明らかにしていかなければなりません。天文学のどのハンドブックを調べても、この惑星が1年の間に3回のループ（逆行運動）を行い、また太陽との外合も3回行うことが分かります。

金星に関連する前回の記述から、内惑星がそのリズムの過程で、太陽と地球の間に立つときにループを形成する（このとき逆行する）ことを私たちは知っています。内惑星が太陽の背後に移動し、太陽と私たちの太陽系の外縁との間に立つとき、それらは外合の位置にあります。

このように、水星の身振りに関しては、「2回 × 3」の合計6つの出来事が互いに関連し合っています。さらに、他の惑星と同様に、水星が地球上の私たちには地球を中心として円を描き（多かれ少なかれ黄道帯の円の中で）動いているように見えると想像するなら、図1に示されるような図が浮かび上がってきます。

※図 1



前回の書簡で、内合（惑星が太陽の手前にあるとき）と外合（太陽の背後にあるとき）の時期における、惑星領域の性質について述べたことをここで思い出してみましょう。

惑星そのものは最も密度が高くなった一点にすぎず、その背後にある目に見えない「領域」は、ループ（逆行）の時期には押しつぶされ、地球をも包み込んでいるその活動を正しく展開することができません。これに対して外合の時期には、その領域は宇宙空間に美しく拡張されます。（水星の運動の正しいイメージを得るためには、第18書簡の図の中の金星を「水星」に置き換えるだけで十分です）。

したがって、1年の間に、私たちは黄道帯の円の中に、水星の「内合が描く三角形」と「外合が描くもう一つの三角形」を持つことになります。前者の三角形は惑星領域のより地球的で暗い気配を表し、後者の三角形は宇宙の光に満ちた顕現を表しています。

しかし、これは完全に正確というわけではありません。数年間にわたる入念な観察を行うと、水星のこれらの合（内合・外合）は、黄道帯の常にまったく同じ位置で起こるわけではないことが分かります。それらは「後退（逆行）」していくのです。

例えば、1945年の11月から12月にかけて、私たちは蠍座の星座の中に水星の内合（ループ）を見出すことになります。翌年のほぼ同じ時期にも、この星座の中で別のループが起こりますが、それは黄道帯の中で、天秤座の方向へと少し後ろにずれている（後退している）ことに気づくはずです。

その後の数年間のうちに、この三角形の1つの頂点（図2を参照）が黄道帯を通ってゆっくりと後退していき、三角形の他の頂点も同様に後ろへ移動していくことに気づくでしょう。金星の身振りがその領域の中に「五芒星（5つの頂点を持つ星）」を現したように（第13書簡を参照）、水星という惑星によって示される領域の「六芒星（6つの頂点を持つ星）」も、宇宙空間の中で回転しているのです。

※図２

約7年の期間をかけて、二つの三角形の1つの頂点は、その7年前に手前の頂点があった黄道帯の位置へと移動します。さらに、約20年の時間間隔が経つと、二つの三角形のそれぞれの頂点は、およそ20年前に占めていたのとほぼ同じ位置へと戻ってきます。

これらのリズム（周期）は、この領域の内的な性質と活動について、すでに多くのことを明らかにしています。私たちは、「7年というリズム」が人間の組織の中にいかに深く刻み込まれているかを知っています。それは、人間の能力や隠された資質の発達と結びついています。それは、自然な成長と開花の段階を経て、完成へと向かう人間の魂の中で目覚める衝動を運んでいるのです。

このことは、「20年または21年のリズム」において、さらに明確に表現されます。これは、人間が自分の「使命」を自覚し、実現へと向かう衝動が魂の中で発達していくリズムです。このように、この水星の領域は人間の「意志」の中にその表現を見出します。

私たちはこれまでに、頭部の力や思考の領域におけるさらなる発達の可能性が経験される限りにおいて、「月」が人間の頭部と結びついていることを見てきました。「金星」は、人間の組織の中間（リズム組織／呼吸・循環系）に現れ、感情の生活に反映される生命（生命活動）として見てきました。そして今、私たちは「水星」が人間の「意志の深層」において活動しているのを目にしているのです。

水星とその領域の霊的な性質を見出すために、私たちはもう一歩先へ進まなければなりません。私たちは月の領域に「天使」のヒエラルキーの活動を見出しました。金星という惑星の身振りによって示される領域には、「大天使」の働きの表現を見出しました。そして、水星という惑星が目に見える形で凝縮した一点となっているあの領域は、「権天使（アルヒャイ／時代霊／人格霊）」のヒエラルキーの領域なのです。したがって、私たちが権天使たちの「霊的な進化の歴史」を思い起こすなら、私たちの宇宙におけるこの惑星の存在の中に、彼らの活動の痕跡を見出すことができるでしょう。

私たちが「古土星」と呼ぶ宇宙進化のサイクルの内部において、権天使たちは、現在の地球進化における人間の発達にある意味で相当するような、彼ら自身の進化の段階を通過しました。彼らは、人間の「自我意識」に匹敵する意識を獲得したのです。

私たちは、彼らが古土星・サイクルの中で活動を始める時代までは、ただ原初の「意志物質」だけが存在していた、と想像しなければなりません。その意志物質は「能天使（エクスシアイ／形態霊）」の影響によって多くの個別の実体（人間の肉体の基礎、および自然界の他の領域の存在たちの基礎）へと分割されていました。

その後に続くこの宇宙進化の段階の間に、権天使たちが活動を開始しました。彼らは宇宙空間に向かって「人格」を放射しましたが、惑星の物質はその人格の経験の力を保持することができませんでした。それらの力は、惑星の霊的な環境へと反射して戻っていったのです。こうして権天使（人格霊）たちは自らの人格についての知識を獲得し、この出来事が原初の惑星物質の性質に変化をもたらしました。

物質は、その神聖なる起源からさらにもう一歩切り離され、「熱」となったのです。私たちはこれを、起源からの「最初の決定的な分離のステップ」として経験するかもしれません。「自我」の経験（それは権天使たちの進化のステップです）は、それ自体の中に、一つの独立した実体となる傾向、あるいは周囲の環境から明確に切り離され、独立した存在の中心になろうとする傾向を内包しています。この権天使たちの経験

の反射（先述の通り、惑星物質は「反射」しか保持できませんでした）が、原初の神聖なる意志物質から「熱への変容」として現れたのです。

したがって、熱物質は、権天使（アルヒャイ）のヒエラルキーが人格を経験するための「鏡」となったのです。これら霊的な存在たちのまさに最初の進化のあり方は、今日でも水星によって示される領域の中に根本的に刻印されています。それは、人間や自然界の諸領域の存在たちの創造との結びつきが確立される地球上のあらゆる場所において、自らを顕現させます。

このようにして、それは私たちの意志の領域に固有の、人間の「熱の性質」の中に目に見える形で現れます。出生前の発達期間中における水星とその運動を研究することは、人が意志の領域へと個別的に組み込まれていく様子を明らかにします。それは、いわば意志の生活の精神的な「温度」を明らかにするのです。

この温度こそが、人間が自分自身を一つの「自我」として経験するための基礎となります。例えば、私たちは血液の熱が自我や「私」の発達といかに結びついているかを知っていますが、人間が人生の中で活動し、実践的な課題に取り組む際の手足の動かし方の中に、個別的で特徴的な方法を見出すこともできます。この中に、私たちは権天使（人格霊）が水星に属する領域の中に刻印した、遺産の最後の痕跡を経験することができるのです。

私たちが「古太陽進化」と呼ぶ宇宙進化の次の段階において、権天使たちはより高い意識の平面、すなわち「イマジネーション認識」の能力へと進歩していました。そのため、彼らは古土星惑星のときのように、熱の身体からの反射を通じて自分自身の存在を経験し、知る必要はもはやなくなっていました。私たちの人間の祖先は、その間に、エーテル体を宿し、それに貫かれることができる段階へと進化していたのです。

この生命体（エーテル体）の中へと、権天使たちは今や働くことができました。彼らは、非常に高次なヒエラルキーの存在である「愛の霊（セラフィム）」の援助を受けました。権天使たちは、セラフィムから受け取ったイマジネーションによって、これらの生命体を貫いたのです。こうして、私たちの人間の祖先の内部に一種の「原初の繁殖」が創り出されました。この繁殖は、自分自身の物質の一部を分け与え、そこから新しい「娘である存在」を生じさせる力からなっていました。これと同時に、今日私たちが人間に観察する「腺器官」の最初の芽が創り出されたのです。

ここには、水星に属する領域の中の古い刻印のように見出され、胎児の発達中にその身体が創られる際に人間の内部でこの惑星の活動の中に顕現する、諸々の力の美しい指標があります。私たちはここでも、その原初の傾向の二つの異なる側面を瞬時に明らかにする、創造的活動という贈り物を感知することができます。

一方の側面として、私たちはここに、繁殖（生殖）との結びつきにおいてだけでなく、最も広い意味での腺の機能に関しても、人間の組織における「腺活動の秘密の世界」を見出します。これらの腺は、最終的に肉体の形成と成長のバランスを確立します。それらは、身体を人間の原型の、調和のとれた美しいイメージにするのです。また、それらは人間が、あらゆる種類の芸術的な生産活動において、宇宙の、はるか未来にまで及ぶ人類の原型のイメージへと自らを高めることを可能にします。将来の人類は、自然の力に自らを通じて肉体的・精神的な人間の原型を生み出させるだけでなく、宇宙空間において自らが創造者となれるようになるのです。

私たちは、個人の胎児の発達期間中におけるこの惑星の身振りを見るならば、水星の力とその領域の顕現を見出すこともできます。それらは出生後の地球上での生活において自らを現し、各人に彼または彼女自身の成就を求めるのです。

それに続く進化のサイクルである「古月紀」は、人格の霊（権天使）の活動にさらなる発達をもたらしました。彼らは当時、「インスピレーション」の意識を獲得していました。それまでは、宇宙における出来事を強力な内なるイメージとして知覚していましたが、いまや彼らは「言葉」、すなわちすべての創造物の中に動かす衝動として内在していた内なる言語の響きを聴くことができたのです。こうして彼らは、人間の祖先の魂の身体（アストラル体）の中へと働きかけ、その中に「独立性」への傾向を目覚めさせることができました。

これまでの記述から、私たちは古土星進化の間に私たちの肉体が創造され、古太陽進化の中でこの肉体がエーテル力によって貫かれたことを知っています。

私たちはこの古太陽宇宙を、軌道が計算できるような「目に見える星々のシステム」へとまだ凝縮されていないものとして想像しなければなりません。当時、そのような星の世界は何も存在していませんでした。しかし、今日では星の世界の一見固定された硬直性の中に凍りついているように見える「運動の法則」は、古太陽宇宙の内部において、あたかも神々の精神世界のように存在していたのです。

例えば、今日私たちが惑星のループ（逆行）として知覚できるものは、当時はある出来事の内的な知覚や、あるいは霊的な存在の決意を表現する「魂の運動」にすぎなかったのかもしれません。そこには、この存在がそれまで引き受けてこなかった存在形態へと、何かを変容させようとする衝動があったのかもしれません。古太陽紀における私たちの人間の祖先の中には、宇宙におけるこの「絶えず変容し続ける性質」の反射が存在しており、これが時間の経過とともに、彼ら自身の身体の中に変容のプロセスをもたらしました。こうして、祖先は生命を授けられたのです。

古月進化の内部において、この身体は第3の原理である「魂」、すなわちアストラル体によって貫かれました。内的な経験から世界の歩みを方向づける「内なる、動きゆく魂の世界」の一部が、この人間の祖先の中にも入り込んだのです。いまや人間の祖先は、自らの内部や周囲で起こることを意識できるようになりました。祖先の内部には、精神的な衝動、感情、そして省察（リフレクション）によって宇宙に運動をもたらしたもののイメージ（写し鏡）が存在していたのです。

この魂、すなわちアストラル体の中へと、人格の霊（権天使／アルヒャイ）たちは「独立性」の衝動と「人格」の性質を注ぎ込みました。こうして、この衝動は今日でも、水星という惑星に属するあのヒエラルキーの霊的存在たちの領域の中に刻み込まれているのです。

この惑星の運動や身振りの中に、私たちは、意図や感情、衝動の中に自らを顕現させる「私たち個人の魂の世界というミクロコスモス（小宇宙）」の中に生きているものの啓示を経験することができます。私たちは、自分自身の中にあるこの小さな内なる魂の宇宙の配置を知覚することができます。つまり、共感と反感が、まるで星の宇宙における出来事のように作用し、人間の魂の生活の調和、あるいは不協和音を創り出しているのです。

星々にリズムがあるように（星々は空における位置のために、ある時期には私たちの目に見えなくなったり、あるいは強い位置や弱い位置にあったりします）、人間の魂の生活にもまたリズムがあります。強い活動の期間と交互にやってくる、長い受動性の期間があるかもしれません。魂の関心や方向性の期間が薄れ、

新しい関心や流入に取って代わられることもあります。人間の精神的な関心の方向性が持つこれらすべての長い周期は、出生前のこの惑星の身振りの中に、ある方法で示されているのです。例えば、人間が人生の特定の時期に「唯物論的」あるいは「観念論的（イデア論的）」な世界観への傾倒を持つかどうかは、水星の運動の中に見出すことができます。

地球サイクルにおける人格の霊（権天使）の進化は、その活動に新しい側面をもたらしました。それは今日、水星という惑星の運動と、その領域と人間との関係の中に顕現しています。

古月進化の内部において、この霊的存在たちのヒエラルキーは、当時の人類の最高原理であった「魂（アストラル体）」の中に、独立性を発達させるための衝動を植え付けました。この衝動が必要だったのは、私たちが将来、神聖なるアストラル性の「自己意識的な担い手」となることを神々が意図されていたからです。しかし、この発達には、宇宙の魂の世界から完全に分離してしまうことによる「過度な孤立」や、自分自身の存在というミクロコスモス的な精神領域の中での「自己満足」という危険も含まれていました。

この危険が、水星という惑星の領域の中に刻み込まれているのです。例えば、出生図（ネイティビティ）における水星の刻印やその出生前の背景を通じて、私たちは、ある人の「魂の独立性」が過度に強調される可能性を見出すことができます。それは後に「主知主義」として現れ、現実の世界からの分離と、自分自身の魂の宇宙への幽閉をもたらします。

しかし、この領域における独立性は一つの「幻影」です。なぜなら、私たちは宇宙の魂・霊世界との絆を断ち切ることはできないからです。私たちはこの領域から生まれてきたのですから。したがって、私たちは主知主義の幻影がもたらす「もう一つの危険」をも目にすることになります。それは、潜在意識の奥深くに住まう「制御不能な情熱や感情の力」に対して、その人が無防備にさらされてしまうという危険なのです。

いまや私たちは、二つの交差する三角形としての水星の身振りの図（図1および図2を参照）が、内的な現実でもあることを見出すことができます。

三角形の一方は「地球」へと向けられており、地球の近くで起こる内合によって形成されています。これは、人間の持つ水星の能力が、脳に縛られた「主知主義」という墓穴へと転落してしまう危険性を象徴しています。もう一方の三角形は「天」へと向けられており、計算不可能で制御不能な情熱や感情の深淵へと転落してしまう危険性を示しています。

この惑星とその領域には、もう一つの側面もあります。この領域の霊的な導き手である人格の霊（権天使／アルヒャイ）たちは、地球進化の内部において「直観（イントゥイション）」の意識へと進歩しました。このこともまた、この惑星の領域の中に刻み込まれています。それゆえ、私たちは自分自身の存在の中に組み込まれているこれらの力を発達させることができるのです。

そして、私たちは孤立し分離した自分自身の魂の世界に幽閉される代わりに、自らの魂の力を内的に発展させることを通じて、私たちの内部にある「本物の霊的な存在たちの臨在」を経験することができます。彼らは私たちのアストラル体の中で生き、働いています。なぜなら、アストラル体はこれらの存在たちが故郷とする世界から受け取られたものだからです。しかし、もし私たちが彼らを認識せず、世界から疎外された抽象的な主知主義の領域の中だけで生きるなら、これらの存在たちは私たちの魂を制御不能な形で支配する主人となってしまうのです。

したがって、出生図（ネイティビティ）における水星の位置や身振りを見る際、それらを占星術的な予言の意味において、人間の運命の特異性を示す決定的な指標として捉えることは、通常は正しくありません。このことは水星だけでなく、すべての惑星について言えることです。

私たちは、惑星たちを「偉大なる宇宙的な問い」として捉えることを学ばなければなりません。その問いへの答えは、人間の内に隠された精神的・霊的な能力の進化の中にしか見出すことができないのです。そのとき初めて、アストロソフィーは再び地上へと降り立ち、新しくキリスト教化された占星術へと自らを統合させることができるようになるのです。

〔天空における出来事〕

10月中の星空は、極めて興味深いものです。私たちはそこに、二つの出来事のグループを見出すことができます。

まず10月1日に、太陽と木星の合が起こり、同じ日に水星と木星の合も起こります。このことは、地球から見て水星も太陽のすぐ近くに位置しているに違いないことを示唆していますが、実際に10月2日には、水星と太陽の外合が起こることが分かります。この場合、水星は太陽の背後、つまり太陽と木星の間に立つことになります。このようにして、太陽、水星、木星が互いの背後に一直線に並ぶという、稀な出来事が起こるのです。

この間ずっと、海王星もこれら三つの天体のすぐ近くに位置しています。言い換えるなら、地球から太陽、水星、木星を貫いてその背後の空間へと直線を延ばすとしたら、海王星の近傍に到達することになります。実のところ、太陽、水星、木星と、海王星との合は9月の最後の数日間に起きており、太陽と海王星の合は「ミカエル祭の日」である9月29日に起こりました。

私たちは、この一連の宇宙的出来事が、今年のミカエル祭の時期と強く結びついていることを見て取ることができます。これらはすべて、乙女座の星座の上部で起こります。この場所は、空の中では人間の姿をしていながら天使のような翼を持った形として識別できる領域です。しかし、太陽が非常に近くにあるため、その光によってこれらの星々はかき消され、私たちはこれらの出来事を目撃することはできません。

また、10月26日には、双子座の星座の中、ほぼ双子座と蟹座の境界線上において、火星と土星の合が起こります。これもまた非常に重要な出来事です。なぜなら、これを機に両方の惑星が逆行を始め、さらに2回の合を行うという長い期間が幕を開けるからです。その最後の合は、1946年3月20日に起こることになります。

したがって、私たちには二つの出来事のグループがあることになります。一方はおとめ座の領域にあり、もう一方はふたご座にあります。後者のグループ（火星と土星の合）については、10月26日頃の、真夜中から日の出までの早朝の時間帯に観察することさえ可能です。

これらの出来事を思い描こうとするとき、はるか過去の時代や文化的な状況の薄暗い記憶が、私たちの存在の奥底から、絶えず動き続ける海の鳴り響きのように聞こえてくるかもしれません。これらの記憶の断片はどこからやってきて、私たちに何を語りかけ、何を問いかけようとしているのでしょうか。

春分点が黄道帯の星座を移動していく運動である「歳差」の知識は、私たちを、偉大なるゾロアスターが紀元前6000年頃に古代ペルシャ文化を創始した、あの薄暗い過去へと連れ戻してくれるかもしれません。

宇宙の記憶の偉大なる守護者である「土星」が、世界史の宇宙的記録（アカシックレコード）のこのページを開いてくれるかもしれません。そして私たちは、このページに記されたゾロアスターの壮大な物語と、彼がいかにして星々の中、あるいは星々の背後において、地球という惑星へと働きかけているヒエラルキーの霊的な存在たちを経験することができたのかを、読み解くことを許されるかもしれないのです。

ゾロアスターが地上における出来事、季節の移り変わり、人間の生活や歴史の出来事、そして善と悪の戦いの中に、偉大なる宇宙のあの強力な出来事や星座の反射をいかに見ていたかについて、私たちはかすかなイマジネーションを得ることができるでしょう。宇宙の偉大なる霊的存在たちと共に生きていた彼は、当時の他の人々よりも地球とその状況、その必要性、そしてその未来の近くにいました。なぜなら彼は、かつて存在し、またこれから来たるべきすべてのものの「起源」と共に生き、それと結びつくことができたからです。

私たちが「この巨大な人類を導く知識は、一体どこからやってきたのだろうか？」と問いかけるとき、私たちは、乙女座の星座の中で起こっているあのもう一つの出来事（太陽・水星・木星・海王星の整列）へと目を向けることになるかもしれません。

もし私たちが再び、春分点の移動である「歳差」の導きに従うなら、私たちはさらに遠い、はるかな過去へと連れ戻されるかもしれません。それは、アトランティス大陸を滅ぼしたあの壮大なアトランティスの大洪水よりも、ずっと前の時代です。私たちは、今日私たちが想像できるあらゆるものを凌駕する、星の宇宙に関する知識を持っていた人々に到達するかもしれません。彼らは「アッカド人（※人智学におけるアトランティス時代の第4亜人種）」と呼ばれていました。

彼らは、地上における社会生活のあらゆる事柄を、星の宇宙の中、あるいはその背後に知覚した「偉大なる原型の秩序」に従って配置し、方向づけました。彼らは、無数の星々の中に、高次なる存在たちの天の軍勢が記した「文字（天の書板）」を経験したのです。そして、この文字を読み、それに従って行動することによって、彼らは自分たちの地上の諸事柄が最も望ましい方法で整えられているという、確実な実感を抱いていました。

これらこそが、私たちが先述した星々の出来事に内なる耳を傾けようとするときに聞こえてくる音（響き）なのです。私たちはさらに多くのことを聴くことになるかもしれませんが、それについては時が熟すまで沈黙していなければなりません。しかし、これらすべての響きの中に、私たちは一つの深く厳かな音を感知することになるでしょう。そして、それが私たちがこの時期にその祝祭（ミカエル祭）を祝っている、あの存在（大天使ミカエル）の精神的な声であることに気づくかもしれません。

ミカエルは、人類がかつて失い、そして今、全く新しい方法で取り戻さなければならない、あの遥かな過去のイマジネーションを通じて、私たちに思い出させようとしているのかもしれません。現代の私たちは、もはや地上の生活の案内人として星々を見上げることはできません。現代の私たちにとって星々は死んでいます。「光年」や「分光分析的な仮説」といった現代科学の概念が、星々を私たちから追放してしまったのです。

しかし、私たちは自らの麻痺した思考の中に「意志」を立ち上げることができ、新しい啓示の中に星々を見出すために出発することができます。私たちは星々の中に、世界の、そして人類の、まさに始まりからの全過去の進化に関する「壮大な記憶」を発見するかもしれません。この、すべての地球的で脳に縛られた知識を超越する「宇宙の記憶」から、私たちは、いまや真の人間としての歩みを始めるための叡智を獲得することができるのです。

すなわち、宇宙的知性のはかり知れない深みから、人類、地球、そして全宇宙の必要性と目標を知り、この知識に基づいて、私たちの宇宙の未来のために、そして未来へと向かって、自らの自由な意志で行動する存在――それこそが人間なのです。

これこそが、宇宙空間に鳴り響き、人間の耳に聴かれることを求めている、今年のミカエル祭のメッセージの一部なのかもしれません……。

私たちが記述しようとしたのは、これらの宇宙的出来事の一般的な表現にすぎません。将来、これらについてさらに多くのことを語らなければならなくなるでしょう。

第二十書簡 - 1945年11月
「星々との私たちの結びつき ― 実例：ティコ・ブラーエ」

※付：シュタイナー「ティコ・ブラーエ」について

●基本的な視点

惑星の本質に関する記述を終え、歴史的な出生図の具体的描写を開始する。

最初の例としてティコ・ブラーエがとりあげられる。
（1546年12月14日、ユリウス暦、午前10時、クヌーストルフ生まれ）

出生図を「出生前発達の締めくくり」として捉え、
天の母親（星々）からの分離の瞬間に固定された絵と位置づける。

地平線上下の空間対応（上＝頭部、下＝肢体・新陳代謝、中間＝リズム組織）を通じ、
胎児形態のイメージを構築。

太陽・月・惑星の位置と運動を重ね、
肉体的体質、意識魂、霊的出生図（哲学・世界観）との結びつきを解明する。

シュタイナーの示唆に基づき、
7つの哲学的傾向（惑星対応）と12の色調（星座対応）を導入する。

●要点

・ティコ・ブラーエの出生時天空：
　いて座が東の地平線から昇り、おとめ座がほぼ最高点。
　太陽はいて座地平線近く（南東、低く）、背後に外合の水星と土星。
　月はおとめ座。他惑星は地平線下（木星・金星やぎ座、火星うお座）。

・出生は肉体的母親と「天の母親」（星々）からの分離。
　出生図は出生前発達の固定された絵であり、
　正しい鍵となるのは自然な出生の場合。

・空間対応：
　地平線上（東→西の日周運動）＝頭部形成力、
　地平線下＝肢体・新陳代謝、地平線平面＝リズム組織。
　胎児全体のイメージを得る。

・太陽：
　いて座星座・山羊座サイン。膝と眼の関係から、
　全身を「一つの眼」のように用いた観測能力を示す（水星・土星との合）。
　開かれた空間に木星に照らされた地球→宇宙の聖杯探求、地球の木星未来への啓示。

・月：
おとめ座。創造の秘密・星世界を神性の啓示として捉える意識魂の力。
月のノードが月の位置を通過する時点が「霊的出生図」（哲学・世界観）を示す。

・7つの哲学的傾向（惑星対応）：
グノーシス主義（土星）、論理主義（木星）、意志主義（火星）、
経験主義（太陽）、神秘主義（金星）、超越主義（水星）、隠秘主義（月）。

・12の色調（星座対応）：
観念論（牡羊座）、合理主義（牡牛座）、数理主義（双子座）、
唯物論（蟹座）、感覚主義（獅子座）、現象論（乙女座）、
実在論（天秤座）、力動論（蠍座）、モナド論（射手座）、
スピリチュアリズム（山羊座）、霊気論（水瓶座）、心魂論 （魚座）。

●本文

惑星の本質に関する私たちの記述が一段落しましたので、ここからはいくつかの歴史的な出生図（主にティコ・ブラーエのもの）の描写を始めていくことにします。この目的のために、私たちは主に最初の19書簡までに構築してきた知識を使用しますが、この課題を遂行するためには、いくつかの新しい視点をも展開していかなければなりません。

私たちが取り上げたい出生図は、デンマークの高名な天文学者、ティコ・ブラーエのものです。彼はユリウス暦（旧暦）の1546年12月14日、現在のスウェーデン南部にあたるスコーネ県のクヌーストルフ（Knudstorp）にて、午前10時に生まれました。彼はスウェーデンに起源を持つ高貴な貴族の家系の出身でした。

私たちはここで、その出生の瞬間における、出生地と時間に紐づいた天空の配置を割り出す必要があります。これは、惑星のリズムなどに関する天文学的な知識を駆使して行われなければなりません。歴史的なデータを扱う場合、これは容易な作業ではありません。なぜなら、惑星のリズムというものは、私たちが期待するほど単純なものではないからです。多くの詳細な要素や、いわゆる天文学的な「摂動（乱れ）」を考慮に入れなければなりません。したがって、ここではこうした天文学的な計算の詳細に深く立ち入ることはいたしません。（現代のデータであれば、各日の惑星の位置やその他の必要な詳細が記載された「天体暦（エフェメリス）」のような天文表を使用することができます）。

ティコ・ブラーエが生まれたとき、射手座の星座が東の地平線から完全に昇りきっており、彼の出生後の時間帯には山羊座がそれに続いていました。このように、射手座、蠍座、天秤座、乙女座、獅子座、蟹座が地平線の上にありました。

地平線上の半球にあるこの黄道帯の弧の中で、ほぼ最高点に位置していたのは乙女座でした。出生地から見ると、それは南西の空にありました。蟹座は西の地平線に沈みつつあり、双子座はすでに沈んでいました。

この時間帯、太陽は南東の空にありました。出生が冬であり、かつ北半球の高緯度地域であったため、太陽は非常に低く、射手座の地平線のすぐ上に位置していました。その太陽の背後には、当時「外合」の位置にあった水星が控えており、さらにその両方の背後には土星が位置していました。

月は乙女座の星座に入ったばかりで、おそらく南西の空にまだうっすらと見えていたはずです。他のすべての惑星は、この瞬間、出生地の地平線の下にありました。それらは、1日のその時間帯には東の地平線の下にまだ隠されていた天空の領域に位置していたのです。木星と金星は山羊座の星座にあり、火星は魚座の星座に位置していました。

星の宇宙と人間との結びつきという複雑さの中で、この出生図の正しい位置づけを見出すために、私たちはここで、人間の存在全体における「出生」の意味について、しばし考察してみなければなりません。

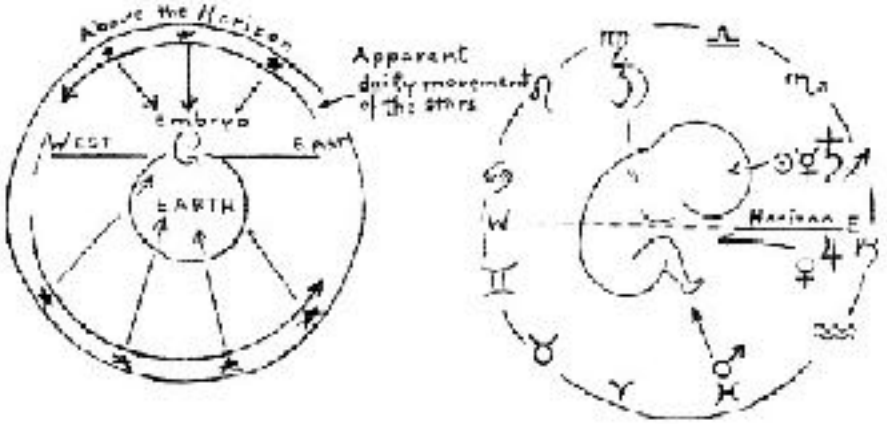
出生の瞬間、子供の有機体は母親の有機体から分離されます。子供は、この瞬間までに獲得した身体の特定の状態を伴って、いまや自分自身へと委ねられることになります。胎児の発達期間中に起こったあらゆる創造のプロセスは、この瞬間に終わりを告げます。出生後の時間にもなお発達と成長を観察することはできますが、それはある程度、出生の瞬間に「決定的な枠組み」として固定された形態に依存しているのです。

人間の生活におけるこの驚くべき瞬間が、子供の母親からの分離によってもたらされるのと全く同じように、人間が「天の母親」から分離される瞬間というものも存在します。私たちはその天の母親の外的な顔立ちを、目に見える星々の中に見て取っているのです。

出生前、人間の胎児は、肉体的な胚が肉体の母親の胎内によって包まれ保護されていたのと全く同じように、宇宙における星々の運動、特に月の運動の中に、すなわち天の母親の胎内の中に埋め込まれていました。出生の瞬間、この天の母親という存在は身を引き、出生前に自分が創り出したすべてのものを、最後の一枚の、しかし今や固定された絵として提示します。これが出生図なのです。

したがって、私たちは出生図を、「出生前の発達の締めくくり」を示すものとして捉えるべきです。そして、出生図を「出生前の出来事を紐解くための一種の鍵」として見なすとき、私たちはそれを正しい比重で捉えていることになります。しかし、それが正しい鍵となるのは、今日のかなり広範な慣行となっているような、エゴイスティックな要求に合わせて出生が人為的に誘導されていない場合に限られます。もちろん、母親や子供の命が危険にさらされており、医療的な援助が必要な場合は話が別です。

ここで、ティコ・ブラーエの出生図の図象を「空間における調整（上下の対応関係）」という観点から考察してみるなら、そこには赤ん坊のエーテル的、あるいは肉体的な特異性の真のイメージが映し出されています。



地平線より上の半球において、東から西へと向かう空の「日周運動」を思い描いてみてください（もちろん極地方では異なります）。そして地平線の下では、この日周運動は西から東へと向かいます。さらに、地球という球体の上に一人の人間の胎児が誕生する様子を想像してみましょう。

地平線の平面よりも上の球体、すなわち運動が東から西へと向かう領域は、人間の「頭蓋骨のドーム（頭部）」を私たちに連想させます。胎児の発達期間中、この地平線より上の領域からは、より頭部の形成に関わる諸力がやってくるのです。星々が東から昇り、西へと向かう日周運動の中で地球をいわば「なでる」ように動くのと同じように、頭部は胎児の圧倒的な中心部分であり、その頭部から身体や手足が下方へと成長していきます。

しかし、私たちは地平線の下にある星々を見ることはできません。もし私たちが優れた数学者であれば、ある瞬間におけるそれらの位置を計算し、それらが地球の下のどの方向にあるかを指し示すことができます。これは、私たちの手足が多かれ少なかれ地球の中心を指し示しているのと同じです。それゆえ、この地平線より下の領域は「肢体組織（手足・新陳代謝系）」の創造と結びついています。そして、これら二つの領域の中間、すなわち地平線の平面の方向において、私たちは「リズム組織（呼吸・循環系）」の創造の中に自らを顕現させる諸力を探さなければならないのです。

したがって、出生図の中にその表現を見出し、9ヶ月間の胎児の発達期間における身体形態の絶え間ない織り成しを固定されたイメージとして提示してくれる「地上と天上の空間の対応関係」を探求するならば、私たちは先述したような図象へと到達することになります。

ティコ・ブラーエの出生の瞬間、東の地平線からは山羊座の星座が昇りつつありました。私たちはこの中に、胎児の段階においてこの人間の「頭部」を形成した諸力の、固定されたイメージを見て取ることができます。そして、星々が西へと動き、地平線の下へと沈んでいく様子は、この頭部から、いかにしてリズム組織や新陳代謝組織が下方へと成長していったかを示しているのです。こうして、私たちは図にあるような、完全な胎児のイメージを得ることになります。

もし私たちが今、この図象に「胎児の発達期間中における惑星たちの運動」を付け加えるなら、ティコ・ブラーエと星の宇宙との結びつき、そして彼の運命がいかにそこに反映されていたかについての、極めて啓発的な証明を得ることができるでしょう。

私たちはこれから、この図象の内部における惑星たちの運動と身振りを考察していきます。まず最初に「太陽」を見てみましょう。

出生の数日前、太陽は射手座の星座（constellation）に入りましたが、太陽自身の軌道（黄道）上においては、まさにこの瞬間に山羊座のサインへと入っていました。

（不幸なことに、これらの黄道の区切り［サイン］は、不動星の黄道帯［星座］と同じ名称とシンボルを持っています。これらは全く異なる性質のものであるため、別のシンボルを持つべきであり、そうすれば多くの混乱を避けることができたでしょう。私たちはこの「サイン」と「星座（コンステレーション）」の区別について、第13書簡で述べようとしました）。

山羊座の「サイン（宮）」にある太陽は、ティコの身体的体質のイメージを私たちに与えてくれます。第13書簡ですでに指摘したように、山羊座のサインは「膝」の形成と結びついていますが、人間の身体において、膝と「眼」の間には非常に重大な関係性があります。

ここで、先述した人間の身体の図象における太陽の位置を見るならば、この山羊座の太陽が彼の「頭部」と強く結びついていることがすぐに分かります。したがって、このケースにおける体質は、頭部における「膝の力」の顕現へと、際立って組織化されていたに違いありません。そしてこの「膝の力」とは、ほかならぬ「眼」のことなのです。

ティコ・ブラーエが「望遠鏡がまだ発明されていない時代」の天文学者であったという事実、それにもかかわらず、彼が星々の位置や特異性に関して実質的に膨大な数の観測を行った最初の人であったという事実を考慮するとき、私たちは次のような結論に至らざるを得ません。すなわち、彼は本当に並外れた方法で、「自分自身の身体全体を一つの眼のように使用することができた」のだ、ということです。彼は自らの有機体の全体を、眼の活動へと従属させることができたに違いありません。

当時において、それは私たちの時代とは全く異なる姿勢と身体的規律を必要としました。例えば現代の私たちは、望遠鏡にカメラを取り付けることができ、カメラが私たちの代わりに観測作業を行ってくれます。（しかし当時は肉眼しかありませんでした）。ティコ・ブラーエにおけるこの驚異的な能力は、山羊座のサインにある太陽、そしてそれが水星や土星と合（コンジャンクション）を形成していることによって示されているのです。

この太陽の位置から考察できるもう一つの側面は、第15書簡で記述した「開かれた空間」の側面です。その際にもティコ・ブラーエについて言及しましたので、ここでそれを繰り返す必要はないでしょう。

しかし、ここでは次のことを付け加えることができます。すなわち、ティコの出生前の発達期間において、太陽が触れることのなかった黄道のあの部分、つまり「開かれた空間」の中に、木星の光に照らされた地球という惑星が現れていた、ということです。もし私たちが、ティコの出生前の発達期間中に宇宙空間から地球を見下ろすことができたなら、地球の背後の山羊座の星座の中に、木星という惑星を観察したはずです。

このことは、ティコのリズム組織の深層（心臓）の中に、「宇宙の聖杯」を追い求める探求心が深く宿っていたことを示しています。その聖杯の中には、宇宙の聖なる宿（ホスト）として、地球の霊的な物質が流れ込まなければなりません。それは彼の存在のあまりにも深いところに沈み込んでいたため、この壮大なイマジネーションは、彼の肉体の諸力によってもはや保持されなくなった「死後の生活」において初めて現実のものとなりました。

地球の背後に木星が立っているという事実の中に、私たちは、この地球が秘密裏に、私たちの惑星の遥かなる未来――私たちはそれを地球惑星の「木星未来（※地球の次の進化段階である古木星紀）」とさえ呼ぶことができるでしょう――に真に属しているという啓示を見出すのです。その未来において、地球は別の宇宙の聖杯における新しい「太陽の宿（サン・ホスト）」となるのです。この出生図における木星については、のちにより詳しく語らなければならなくなるでしょう。

ティコ・ブラーエの出生の瞬間、月は乙女座の星座に位置していました。私たちが太陽の位置の中に、人間の肉体的な枠組みを構築するあの普遍的なエーテル力の指標を見たように、私たちは月の中に、有機体の内部で働き、最終的にそれを意識の道具、さらには「意識魂」の道具へと準備させる、宇宙エーテルの「も

う一方の側面（写し鏡）」を見出すことができます。これについては第16書簡と第17書簡で詳しく述べました。

このケース（ティコの出生図）において、月は乙女座の上部に立っていました。ここには、ティコ・ブラーエが自らの意識の力によって「創造の秘密の領域」へと参入することができた、という指標があります。乙女座にあるこれらの星々は、古代において多くの方法で知覚されていました。一つの方法は、天の父と天の母が、一つの存在として統合されているのを知覚することでした。もう一つのイマジネーションは、高次なるヒエラルキアの強力な存在たちが、進化の様々なステップのための最初の衝動を与えた「巨大なアトリエ（仕事場）」または「実験室（ラボラトリー）」というものでした。しかし、このイマジネーションはこの星座の領域によって異なっていました。

この「乙女座の神秘」のイマジネーションは、星々の世界の霊的な本質を表現する、普遍的な「頭部の力（思考の力）」の側面から、ティコの存在の中に植え付けられました。私たちは、ヨハネの黙示録第12章に記述されている、あの「太陽をまとった女」が、その頭に12の星の冠を戴いていることを思い出す必要があります。それこそが、目に見える星々を通じたヒエラルキアの顕現の領域なのです。このようにして、私たちはティコ・ブラーエがいかに深く星の世界と結びついていたかを見て取ることができます。彼は13歳の時からすでに、星々の科学（天文学）を「神性の啓示」として捉えていたのです。

出生の瞬間における月は、さらに別の観点から見ると、意識魂の諸力への、あるいは私たちが「思考の領域」と呼ぶことができるものへの「門」でもあります。第14書簡において、私たちは「月のノード」とそのリズムについて記述しました（第14書簡の図を参照）。また同じ書簡の中で、出生の瞬間に太陽が立っている位置を、月のノードが出生の「前」または「後」のいずれかの時期に通過するという事実を展開しました。これは私たちに、死者の領域との結びつきを明らかにしました。

これと全く同じように、私たちは、月のノードが出生図において月が見出される黄道帯の位置を通過するという事実をも考察することができます。これもまた、出生の前または後のいずれかの時期に起こる可能性があり、必ずしも出生の瞬間と一致する必要はありません。

第14書簡ですでに指摘したように、これらの月のノードは、太陽から月の領域への「門（」です。ここで、これらの門を出生図の月へと結びつけるなら、私たちは、太陽領域のより高い諸力が、いかにして月の領域の中で、あるいはその人間における反映である「思考活動」の中で目覚めるかを示す図象を得ることになります。

言い換えるなら、私たちは、太陽の領域およびその彼方に住まう「神々の思考」が、いかにして人間の思考の中へと流入してくるかについての描写を得ているのです。神々の思考が、人々の内部に「彼ら自身の思考」として、すなわち各人の固有の「世界観」としてどのように現れるか。それは、それらの門――月のノード――が出生図において月が占めていた位置を通過するその時点における、黄道帯への惑星たちの個別的な配置の中に、見出すことができるのです。

私たちはこの発見を、ルドルフ・シュタイナーがその連続講義『人間の思考・宇宙の思考』〔訳註：GA151〕の中で示した、ある示唆（※彼はその中で、これらの哲学や色調を定義しています）の恩恵として受け取っています。

シュタイナーはその中で、実際の肉体的な出生図のほかに、人間の世界観を示すもう一つの「霊的な出生図」を見出すことができ、それは肉体的な出生図よりもさらに大きな重要性を持つ場合さえある、という事

実について語っています。歴史的な人物たちに関連する研究によって、この「霊的な出生図」とは、月のノードが出生図の「月」の位置を通過するときに現れるものである、という事実が確認されるに至りました。

問題は、この霊的な出生図における個人の世界観をどのように読み解くかということです。これについては、ルドルフ・シュタイナーによって明確に示されました。彼は、私たちが哲学的な「傾向」をどのように区別できるかを記述しています。それらは以下の通りです。

グノーシス主義（Gnosi）：
哲学的な概念の最高形態であり、超思考的な能力のように人間の魂へと輝き込むものです。星の宇宙における土星に対応します。

論理主義（Logism）：
論理的、哲学的な思考によって宇宙を包括的に理解しようとする傾向です。その宇宙的な対応物は木星です。

意志主義（Voluntarism）：
意志の力の活動の結果として宇宙を認識しようと努力する哲学的な傾向です。宇宙においては火星に関連しています。

経験主義（Empiricism）：
感覚的な経験や実験を通じて真理を学ぼうとする哲学的な傾向です。その宇宙的な起源は太陽です。

神秘主義（Mysticism）：
神秘的な瞑想（凝視）を通じて哲学的な真理に到達しようとする切望です。宇宙においては金星がこの哲学に対応します。

超越主義（Transcendentalism）：
感覚を超えた世界、一種の形而上学的な世界の存在を考慮に入れる世界概念です。水星に関連しています。

隠秘主義（Occultism）：
「隠された」世界こそが唯一の本物の世界であると認識します。月がその宇宙的なイメージ（象徴）です。

これら7つの哲学的傾向のそれぞれは、惑星が黄道帯の12の星座を通り抜けて動くのと同じように、12の異なる哲学的な「色調」を帯びて現れることができます。これら12の色調は以下の通りです。

観念論（Idealism）：
活動的で神聖な「理念」を背景として宇宙を経験します。これは牡羊座の星座に関連していることが分かります。

合理主義（Rationalism）：
宇宙における理念の存在を、活動的な実体としてではなく、はるか昔に既存の対象の中に組み込まれ、それ以上進化することのない「概念」として認識する色調です。その宇宙的な等価物は牡牛座に見出されます。

数理主義（Mathematism）：

まるで偉大な宇宙の数学者によって創られたかのように、偉大な数学的法則の表現として宇宙を経験する色調です。宇宙的な反映を双子座に見出します。

唯物論（Materialism）：
宇宙は、重さを量り、測定し、数えることができる「物質」のみから構成されているとみなします。宇宙においては蟹座がこの世界概念に関連しています。

感覚主義（Sensualism）：
感覚の範囲内にあるあの領域においてのみ、宇宙が存在していると認識します。黄道帯の獅子座に対応します。

現象論（Phenomenalism）：
哲学的な世界観の不可欠な基礎として、宇宙における「現象」を認めます。乙女座の星座がその宇宙的な対応物です。

実在論（Realism）：
現実を認識する色調を、あらゆる哲学的傾向の基礎にしようと努力します。その宇宙的起源は天秤座です。

力動論（Dynamism）：
まだ個別の霊的な存在にまでは至らないものの、「権能」や「力」という根本的な概念を、7つの哲学的傾向のいずれかへと運び込む哲学的な色調です。蠍座がその宇宙的な顕現です。

モナド論（Monadism）：
人間の境界を超えたところにある、個々の霊的な存在の基礎（モナド）からなる世界を認めます。しかし、これらのモナドは人間の知性では理解不可能なものであるため、このモナド的存在たちの世界はまだ抽象的な現実にすぎません。宇宙的な対応物として、射手座を見出すことができます。

スピリチュアリズム（Spiritualism）：
明確なヒエラルキアの秩序を持った、個々の霊的な存在たちの働きと顕現として宇宙を認識します。これらヒエラルキア存在たちの性質や態度は、はっきりと区別し認識することができます。その宇宙的な顕現は、山羊座です。

霊気論（Pneumatism）：
宇宙の基礎として「霊（スピリット）」を認識する哲学的な色調ですが、個々の具体的な霊的存在までは区別しません。この見解によれば、霊とは多かれ少なかれ、分割されることのない「一なるもの（合一）」です。これは水瓶座に対応します。

心魂論 （Psychism）：
宇宙の基礎として「霊」を認識するのではなく、その代わりに、宇宙的な存在の本質として「世界魂（アニマ・ムンディ）」のようなものを提示する色調です。魚座に関連しています。

●シュタイナー「ティコ・ブラーエ」について

※主な講義
・GA 126『オカルト的歴史』第4講
・GA 238『カルマ的諸関係 第4巻』第6講
・GA 323『天文学講座』第2講

シュタイナーは、特にカルマ（転生）の観点と、
天文学・宇宙観の観点から
ティコ・ブラーエについてとりあげ、
「近代科学の入り口に立ちながら、
宇宙の霊性を手放さなかった重要な個性」として位置づけている。

①カルマ（転生）的な位置づけについて

シュタイナーは、ティコ・ブラーエの個性を次のように捉えている。

・4世紀：ローマ皇帝ユリアヌス・アポスタタ（背教者ユリアヌス）
・中世：パルチファル伝説のヘルツェロイデ（パルチファルの母）
・16世紀：ティコ・ブラーエ

この個性がユリアヌスとして古代密儀の霊的宇宙観を吸収し、
ヘルツェロイデとして内面を深め、
16世紀にティコとして再び現れた、としている。

②ティコ・の宇宙観について

・ティコは「真の霊性と結びついた宇宙観」を持っていた。

シュタイナーは、コペルニクス的世界観が論理を突き詰めると
宇宙から霊性を排除する機械的な見方につながる、と指摘し、
ティコはその流れに完全には従わず、
コペルニクスの有用な部分は取り入れならがも、
地球の絶対的な運動を認めない独自の体系（ティコ体系）を保った、
としている。

・死後の働き

ティコの死後、この個性は霊界から
ケプラー、ゲーテ、シェリング、ヤーコプ・フローシャマーらに影響を与えた。
さらに20世紀の予言的な衝動に関しても、
この個性が霊界から助言を与えうる存在だとしている。

・その他の言及

以下の業績を単なる科学的業績としてではなく、
古代密儀の残響が近代的な観察精神と結びついたものとして捉えている。

・1572年の新星（ノヴァ）の観測
・約1000個の星のカタログ作成（後にケプラーが利用）
・占星術的な予言（スレイマン大帝の死をほぼ正確に予言したこと）
・ウラニボルグでの観測と錬金術的な活動

③GA 323『天文学講座』第2講での
　ティコ体系とコペルニクス体系の関係への言及

※mediopos4483（2026.8.19）でとりあげています。

この講義でシュタイナーは、歴史的な宇宙観の変遷を次のように整理している。

地球を静止させ、水星・金星が太陽の周りを回り、
太陽と残りの惑星が地球の周りを回る、という段階を経て、
さらに火星・木星・土星も太陽の周りを回るようにしたのが
ティコ・ブラーエの基本的な見方であり、
一方、同時代のコペルニクスは、太陽を静止させ、
地球を惑星の一つとして太陽の周りを回るものとした。

さらに次のように述べている。

・日食・月食などの計算は、
　カルデア、エジプト、ティコ、コペルニクスのいずれの体系でも可能である。

・数学的・力学的な予測という点では、どの体系も同等に使える。

・最も単純な思考像を与えるのはコペルニクス体系である。

・しかし実際の実用天文学（暦の計算など）では、
　コペルニクス体系ではなく ティコ・ブラーエの体系 が使われている。

第二十一書簡 - 1945年12月
「私たちと星々とのつながり - ティコの月と金星」

●基本的な視点

前回の哲学的宇宙言語を用い、
出生図の月の位置を月のノードが通過する期間の惑星配置を
「霊的出生図（太陽の出生図）」として読み解く。

月の出生図は遺伝・物質への体現を、
太陽の出生図は超遺伝的起源・神々の思考・自由への門を示す。

ティコ・ブラーエを例に、
両者の関係と、胎児期の太陰月リズムが人生の7年周期に対応する仕組みを解明。
さらに金星とその圏の活動を通じて、
感覚の宇宙史と彼の特殊な能力（星の内なる命の体験、予言）を明らかにする。

●要点

・霊的出生図：
　月のノードが出生図の月の位置を通過する時点の惑星配置を哲学的傾向に翻訳。
　ティコの場合、1541年6月（月乙女座）。

・配置：
　太陽・月・水星・金星・火星が双子座集中、木星獅子座、土星乙女座。
　→数学主義（経験主義的）、オカルティズム・超越主義・神秘主義、意志主義、
　感覚主義的ロゴス主義、現象主義的グノーシス。天文学・占星術・錬金術を説明。

・月の出生図 vs. 太陽の出生図：
　前者は物質・遺伝への降下、後者は神々の思考の反映・自由。
　両者は強く結びつき、遺伝的力と魂の力の闘いを示す。

・胎児期10太陰月（各27.3日）＝人生の7年周期。
　受胎（エポック）1546年3月末（月山羊座＝出生時アセンダント）。
　第3・4太陰月に太陽・内惑星が双子座へ→14〜28歳で天命具現化。

・金星：
　胎児期に魚座から水瓶座まで移動（開かれた空間は水瓶座方向＝温覚）。
　第2太陰月に牡牛座で太陽と外合→14歳頃の日食体験で予言感覚が覚醒。
　エーテル的熱の流れを感覚器官として用い、神々の思考を認識。

●本文

出生図における月の位置を、月のノード（昇交点・降交点）が通過する期間の、黄道帯における惑星の位置を取り上げ、それを前回の書簡で概説した哲学的な宇宙の言語に翻訳するなら、私たちは人間の「哲学」を見出すことができます。

もちろん、計算だけでは十分ではありません。なぜなら、どのような場合であっても、出生前の位置からと出生後の位置からの、少なくとも2つの可能性が存在するからです。

歴史的な出生図との関連においては、適切な事象を見出すことは難しくありません。なぜなら、それらの個人の伝記から、一般的な哲学的傾向を見出すことができるからです。これらの歴史的な研究は、計算だけでは解決できないこの問題への答えも提供してくれます。

ティコ・ブラーエの出生図を見ると、月は乙女座の星座に位置しています。ここは、高次の霊的物質世界から地球での存在へと至る門であり、出生後には、意識魂の力を目覚めさせることへとつながります。私たちはここで、2つの月のノード（昇交点・降交点）のどちらかがこの位置にあり、いわばこの門を開いた時期を見つけ出さなければなりません。それはティコの誕生より少し前、1541年6月に起こりました。その9年後である1550年10月には、もう一方の月のノードが乙女座のこの位置へと移動していましたが、さしあたりこの出来事は無視して、1541年のもう一方の出来事だけに集中することにしましょう。

その当時、黄道帯におけるきわめて示唆に富む惑星の配置を見出すことができます。太陽、月、水星、金星、火星といった惑星のほとんどが、双子座の星座に集中していました。木星は獅子座に、土星は乙女座にありました。双子座へのこの集中は、「数学主義」という哲学的気質への強い傾向を示唆していますが、このケースにおける数学主義はかなり複雑な部類のものです。ティコ・ブラーエは、天文学者になることでこれを表現しました。なぜなら、天文学、とりわけティコ・ブラーエの時代に近代科学の一分科として誕生しつつあった天文学は、数学に強く基づいていたからです。

しかし、このケースにおいては性質が分化していました。太陽が双子座にあったことは、この哲学的気質が「経験主義」の傾向として体験された数学主義であったことを示しています。つまり、感覚的な経験に照らした、数学的・天文学的な世界観です。ティコ・ブラーエは約1,000個の星の正確な位置を収めた星表（星のカタログ）によって有名になりました。ケプラーは、ティコによる火星の非常に正確な観測データに基づいて、自らの研究を組み立てたのです。

この「数学主義」には、さらに異なる側面もありました。私たちは、月、水星、金星が双子座にあったことを見出しました。これらはそれぞれ、「オカルティズム」、「超越主義」、「神秘主義」という哲学的傾向を表しています。これは数学主義の世界観とは矛盾するように思えるかもしれません。しかし、ティコという存在の「もう一つの側面」を想像してみるなら、これを理解することができます。

彼は、その能力が多くの人々に知られてはいなかったものの、当時の最も有能な占星術師の一人でした。1577年に彗星が現れたとき、彼はその研究から「北部（フィンランド）に、ドイツを荒廃させ、1632年に姿を消すことになる君主が生まれるだろう」と予言しました。このような予言は、単なる「まぐれ当たり」として片付けることはできません。それは、ティコ・ブラーエが星々から成る宇宙の数学的構造に対してより深い洞察を持っていたこと、そしてこの意味において、彼が真のオカルティスト（神秘学者）であったことを示しています。なぜなら、この予言は他の予言と同様、文字通り現実となったからです。ティコ・ブラー

エの死後ずっと経ってから、フィンランドで生まれたスウェーデン国王グスタフ・アドルフがドイツに現れ、1632年のリュッツェンの戦いで戦死したのです。

火星も双子座にありました。これは、ティコの宇宙観が、決して抽象的な数学主義ではなかったことを示しています。彼は、現代の科学者がしばしば考えるような、数学的法則に従って動く巨大な機械として世界を捉えていたのではなく、星空の運動をもたらす「意志の力」の集積として世界を捉えていたのです。彼の門下生であったケプラーも、同様の理解力をまだ備えており、彼が天体をまるで魂を持った存在が宿っているかのように体験していたことが、その著作から読み取れます。

獅子座の木星は、ティコの宇宙観のまた別の側面を明らかにしています。それは、「感覚主義」の気質における「ロゴス主義」の傾向です。ティコの時代においてさえ、あらかじめ設定された古い概念から出発して宇宙の姿を構築するのではなく、自らの感覚を信頼することが、いかに偉大で勇敢な行為であったかを私たちは想像しなければなりません。当時は近代科学が誕生する時代であり、ティコ・ブラーエは、感覚的な印象の言語、すなわち感覚主義に思考を導かせた最初の科学者の一人でした。現代の世界観やその実用的な応用の中には、私たちが一般に気づいている以上に、ティコの感覚主義が息づいているのです。

土星は乙女座の星座にありました。これは、「現象主義」の気質における「グノーシス」を表しています。このような哲学的見通しの現れは、ドキュメントとして残されているティコの生涯の記録からは、ほとんど辿ることができません。それは非常に深い背景に隠されており、当時のごく少数の人々にしか知られていませんでした。以前にも指摘したように、ティコは単なる天文学者ではなく、錬金術師でもありました。彼は、真理を見出すためには、探求者はその両方を組み合わせなければならないことを知っていたのです。それゆえ、彼は天文台の中で、天体観測と並行して地球上の物質を用いた実験を行っていました。そして彼の目的は、星空における出来事や条件が、地球上の物質に与える反応を発見することにありました。ティコは古い錬金術の伝統を鵜呑みにせず、その「現象」が真理を明らかにするように実験を行ったのです。この活動を通じて、彼は現象主義の気質におけるグノーシスという視点を開花させました。

これが、ティコ・ブラーエの「霊的出生図」です。これは非常に重要です。一般的に言って、霊的出生図は人間の高次の性質、つまり自然界の他の領域の存在とは対照的な「真の人間性」を形作るものを明らかにします。天文学的な事実がこれを示しています。私たちは、出生図における月の門を通って、宇宙空間へと出ていきました。事実、人間の魂が地球への肉体化へと降下していく段階に関するすべての事柄は、出生図における月の「道筋」というこの門に関係しています。胎児の発育段階は特に月と結びついていますが、最終的に物理的な出生へと至るこれらの出来事はすべて、いわば月の軌道に囲まれた「月の圏」の内部で起こります。

霊的出生図を見出すためには、私たちはさらに先へ進まなければなりません。しかし、「月の道筋」をたどっていくと、私たちは月の圏の境界に突き当たります。そこで私たちは、月の圏からさらに高次の圏へと門が開かれるのを待たなければならないのです。これは、月のノード（交点）のどちらかが、月の道筋の方向へとやって来た瞬間に起こります。月のノードは、月からの門を開いて「太陽の圏」へと通じる鍵なのです（第14書簡において、私たちはすでにこの事実について説明しました）。私たちはここで太陽の圏に入ることができ、それと同時に、霊的出生図の様相を手にすることになります。それゆえ、私たちはこれを「月の出生図」と対比して「太陽の出生図」と呼ぶこともできます。

月の出生図は、出生前のあらゆる獲得物や、人間の魂の存在として予定された輪郭が、どのように地球の物質へと引き降ろされ、最終的に遺伝の流れへと組み込まれるかを示しています。太陽の出生図は、まさにその真逆を示しています。それは、私たちの「超遺伝的」な存在、すなわち神々の世界における私たちの起

源を示しているのです。なぜなら、地球上で人間の哲学として実現される太陽の（あるいは霊的な）出生図は、魂が月の圏へと降下する前に、個人の魂が神々の贈り物として受け取る「神々の思考」の反映だからです。魂はこの贈り物を、自らの地球上の存在を支配させるために受け取るのではなく、それを発展させ、広げ、個人の霊的出生図に示されているものとは別の見解と組み合わせるために受け取るのです。これが魂の課題であり、これこそが思考する存在としての魂に神聖な尊厳を与えます。この太陽の出生図がこれほどまでに重要なのは、それが本当の意味での「人間の自由」への門をも開くからなのです。

私たちが月の出生図、および太陽の出生図として説明してきたこれら2つの出生図は、互いに強く結びついています。ティコ・ブラーエの出生図に関連してこの関係性を示すために、私たちは彼の月の出生図のさらにいくつかの詳細を読み解いていく必要があります。

第16書簡において、私たちは出生後の人生における、胎児期の成長リズムの重要性について指摘しました。これらのリズムはある限度において、地球上での人生のいわば「予言（預言）」となっています。

ここで再び、ティコ・ブラーエの出生図に目を向けてみましょう。彼は1546年12月14日に生まれました。さらに、彼の胎児としての発育期間は、4週間を1ヶ月とする太陰月で約10ヶ月続いたと仮定します。したがって、彼の受胎は1546年3月に起こったに違いありません。私たちは、個人の受胎の瞬間をより正確に定義するための天文学的な手段を持っています。これらの手段は、古代エジプトの宇宙論における「ヘルメス主義の法則」として知られているものに部分的に含まれる、きわめて古い知恵に由来していますが、実際にはさらに深いところに根ざしています。ここでこの問題に深く立ち入ることはできません。それ自体がひとつの独立した学問だからです。こうして、ティコの地上人生の出生前予言の始まりと見なさなければならない瞬間は、1546年3月の終わり頃、月が山羊座の星座にあった時期であったことが分かります。そしてこのポイントこそが、ティコが生まれたときに最終的に東の地平線から昇ってきた（アセンダントとなった）場所なのです。

1546年3月のこの瞬間（私たちはこれを「エポック（受胎期）」と呼ぶことができます）から、今度は出生に向かって時間を進めていくと、月が山羊座のそのポイントに9回戻ってきたことが分かります。27.3日周期であるこれらの太陰月のひとつひとつは、出生後のティコの地上人生における「7年ごとの各周期」で現実となった事象のイメージ（写し絵）を含んでいます。

例えば、最初の太陰月、つまり1546年3月末から4月末までの期間を取り上げ、この間に起こった星々の出来事を読み解くなら、それらはティコの幼少期の最初の7年間（0〜7歳）に起こった出来事のイメージであることが分かります。さらに進めると、第2の太陰月には、ティコの7歳から14歳までの生涯に起こった出来事の宇宙的なイメージを発見することができます。このように続いていくのです。

その根底にあるリズムは「月のリズム」です。月は27.3日以内に黄道帯の常に同じ位置に戻り、その間に黄道帯のすべての星座を通り抜けます。これが、人間の運命が持つ基本的なリズムの性質を説明しています。私たちはしばしば、7年前に経験したのと似たような問題や状況に直面することがあります。これは、出生前に同じ星座を何度も何度も通り抜けた「月のイメージ」の具現化なのです。

しかし、そこには変化も存在します。惑星、特に太陽と内惑星（水星・金星）は黄道帯を移動しています。ティコ・ブラーエの場合、受胎の時期に太陽は魚座の星座にありました。その後、太陽は牡羊座へと進み、第2の太陰月の間には牡羊座から牡牛座へと移動していくのが見られます。金星や水星、その他の惑星も絶えず移動していました。このようにして、絶えず繰り返される月のリズムの中に、変化と多様性の要素が導

入されます。これらの事実は、画一性と反復にとどまろうとする人生のリズムを、絶えず打ち破っていく「その後の人生における影響」のイメージなのです。

計算すると、ティコの胎児期の発育における第3および第4の月（太陰周期）の間に、太陽、水星、金星が双子座の星座に入ったことが分かります。それらの天体は、これらの出来事よりもはるか以前に、霊的出生図の期間中のいくつかの惑星の位置によってすでに刻印されていた黄道帯の領域へと入っていきました。先述のように、この霊的出生図が成立した1541年、太陽、月、水星、金星、火星は双子座にありました。

胎児期の発育中の星々の出来事のすべてを総称して「月の出生図」と呼ぶならば、その期間中に太陽と内惑星が（1541年と同じ）その位置へと移動したことになります。これが第3および第4の太陰周期の間に起こったため、これは当然、ティコ・ブラーエの第3および第4の7年周期、すなわち14歳から28歳までの期間の運命のイメージとなります。

この年齢の間、ティコ・ブラーエは、自分の魂の中に天命として生きていたものを「具現化」させました。それは彼の霊的出生図のイメージの中に読み取ることができるものです。この時期こそ、彼が先述したような、あの独特なタイプの天文学者であり占星術師になった時代でした。

彼の父親は早くに亡くなり、その後、ティコがまだ13歳だった1559年に、叔父は彼を哲学と修辞学を学ばせるためにコペンハーゲンへと送り出しました。のちに彼は法律を学ぶことになっていました。その目的のために、彼は家庭教師を伴ってライプツィヒへと送られました。本当の目的は、ティコに政治的なキャリアを積ませる準備をすることであり、それはいわば家族の伝統でした。ここでは遺伝の力が影響を及ぼしていました。

しかし、ティコがコペンハーゲンに送られた直後から、彼の中で「霊的起源」の力が噴出し始め、家族によって立てられた計画は次第に一掃されていきました。ティコは並外れた意志の力の持ち主であったため、彼の個人の魂の衝動は非常に際立った形で形づくられていきました。

例えば、1560年8月21日、彼は大規模な日食を観測し、天文学を何か神聖なものとして見なし始めました。のちにライプツィヒにいたとき、家庭教師は生徒がベッドで安全に眠っていると信じ込んでいましたが、ティコは一晩中、星を観察して過ごしていました。1563年、彼は土星と木星の歴史的な大接近（グレート・コンジャンクション）を観測し、当時存在していた天文表が数学的に全く正確ではないことを見抜きました。その後、彼はドイツの多くの場所を訪れ、1569年にはアウクスブルクで天文学や錬金術の研究に忙しく没頭している彼の姿が見られます。

そして、彼が受け継いだ遺伝的なものや家族からの衝動に対して、どのような立場をとっていたかを非常によく物語る出来事が起こりました。彼が25歳だった1571年、彼はデンマークに戻り、農民の娘と結婚したのです。その結果、彼と親族との間で激しい諍いが勃発し、デンマーク国王が仲裁に入らなければならないほど事態は深刻化しました。

このようにして私たちは、いかにして「月の出生図」の中に太陽の出生図からの力の流入が起こり得るのかを理解することができます。これらの力は、あらかじめ定められた人間の強固な運命のイメージすら覆してしまうことがありますが、少なくとも、人間の存在を単なる伝統や遺伝の圏域から引き上げてくれるのです。

月の出生図は、宇宙の霊的な質が人間の肉体へと具現化されることに関わっています。一方、太陽の出生図は、個人の魂の純粋に個別的な状態を表しています。ティコ・ブラーエのケースにみられるように、これら2つの出生図の関係性は、人間の肉体に先天的に備わっている遺伝的な力と、魂の力との間の闘いを示しています。この闘いは、単一の人間が進化するために必要であるばかりでなく、宇宙全体にとっても必要なことです。なぜなら、世界の過去の進化を救済し、それを未来へと導くためにこの闘いは存在しているからです。

ここで、ティコ・ブラーエの出生図における惑星「金星」とその圏について考えてみましょう。これについてはすでに第18書簡でお話ししました。出生前の胎児期の始まりにおいて金星は魚座に位置しており、そこからすべての星座を移動して、水瓶座に属する最初の星々のところまで到達しました。ティコ・ブラーエが生まれたのはまさにその時です。したがって、金星はこの期間中、水瓶座と魚座の星座の全幅を移動し尽くしたわけではありませんでした。その移動の途中で、金星は牡牛座において太陽と「外合（上合／太陽の向こう側で重なる配置）」になりました。

第18書簡および第19書簡において、私たちは金星や水星という惑星が、それぞれの圏の中で最も密度の高い点であることを指摘しました。この「圏」は見えはしないものの、きわめて重要なものです。ある意味で、これは目に見える惑星とは矛盾する性質を持っています。なぜなら、惑星が持つ固有の「収縮する力」とは反対に、圏は「拡張する力」を持っているだけでなく、その本質がどちらかといえば霊的な「水星的性質（※人智学ではオカルト的呼称として金星と水星の名称が入れ替わることがある）」に近いからです。それでも私たちは、金星という惑星の身振りから、その圏の動きを読み解くことができます。

私たちは、この金星の圏の活動の中に、感覚の「宇宙史」を見出したことを思い出す必要があります。これは単に過去の宇宙の進化における歴史だけでなく、未来に関することでもあります。それは、人間が物質世界へと肉体化していくプロセスにおける運命や、それらの感覚体験からの救済、そして新しい感覚能力への進化に関わっています。

それゆえ、ティコ・ブラーエの出生図において、金星によっていわば「開かれたまま」残されたスペース（移動しなかった領域）は、ティコの「感覚世界」が惑星の持つ収縮傾向によって最も制限されなかった方向を示しています。それは「水瓶座」の方向であり、水瓶座は「熱感覚」の宇宙的なイメージを表しています。

しかし、このケースでは、私たちはこれを非常に広大な宇宙的視点から考えなければなりません。それを理解するために、ひとつの比喩を用いましょう。人間の体内では、血液の循環を観察することができます。この血流は、皮膚のところまでしか流れることが許されていません。ここで、もし人間が皮膚で立ち止まることなく、宇宙空間へと出ていき、しばらくして再び自身のからだへと戻ってくるような、ある種のエーテル的な血流を持てると想像してみてください。これこそが、ティコ・ブラーエに特別な能力として備わっていたもののイメージです。彼はそれらのエーテル的な「熱の流れ」をまるで感覚器官のように使い、宇宙空間へと送り出し、再び自身のからだへと戻すことができたのです。

それゆえ、彼は星の世界の「内なる命」を体験することができました。これらはすべて、多かれ少なかれ無意識のうちに行われていましたが、星を見ることで地球上の未来の出来事を経験するという、彼のあの輝かしい能力の有機的な基礎となっていたのです。

この偉大でありながらも、漠然として眠っていた能力は、その後、もう一つの出来事によって、より強固な輪郭へと凝縮されました。それはティコの胎児期発育の第2太陰月の終わりに起こった、金星と太陽の外

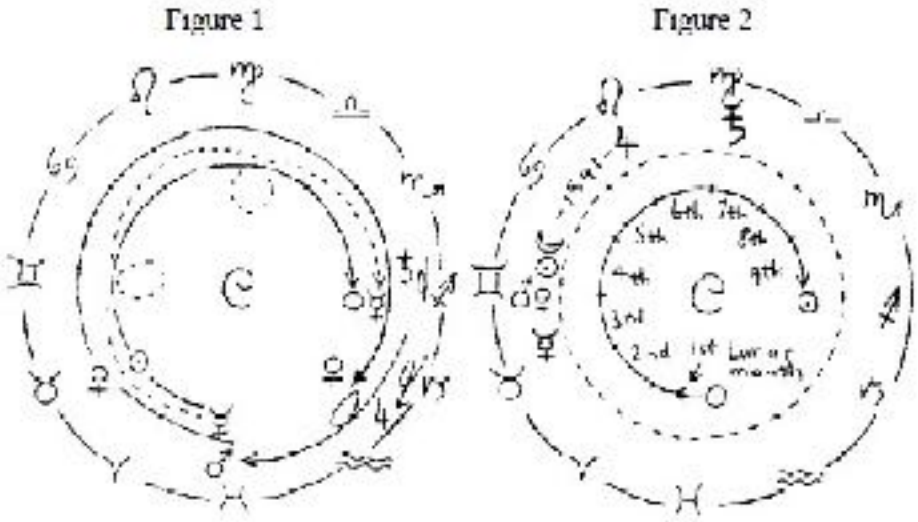
合に反映されています。これは、彼が14歳になった時期に対応しています。この時こそ、彼が初めて「日食」という宇宙の出来事に直面したまさにその瞬間でした。そしてこの瞬間、星の様相から未来の出来事を予言する感覚が、彼の中で初めて目覚めたのです。

金星の外合は「牡牛座」で起こりました。惑星の位置から、その圏はいわば牡牛座の領域へと拡張されていたと推測できます。牡牛座は「思考感覚」の宇宙的なイメージです。しかし、ティコは先述した先天的な水瓶座の能力の助けを借りて、人間の思考を認識する感覚を発達させただけでなく、「神々の思考」をも認識することができたのです。それゆえ、彼は伝統的な占星術の規則を単に操作するだけでなく、星々の運動の中に本当に「未来」を読み取ることができました。彼は、神々の思考を読み解くことを許されていたのです。

下の図1は、ティコ・ブラーエの胎児期の10太陰月における、諸惑星と太陽の動きを示しています。土星と木星はループ（逆行による軌道の輪）を描いていますが、それぞれの星座からは移動していないことが見て取れます。火星は射手座から始まり、山羊座と水瓶座を通過し、その後、水瓶座でループを描いてから魚座へと進んでいます。さらに、金星は魚座から始まり、黄道帯をまるごと一周して水瓶座まで移動しているのが分かります。太陽は魚座から射手座へと進み、水星もほぼ同じように移動します。この期間中、水星は図の中に示されているように2つのループを描いています。

図2は、外側の円にティコ・ブラーエの「霊的出生図」を示しています。内側の円には、太陰月の順序に従った位置を基準とした、胎児期の発育中における太陽の軌道が再び描かれています。

※図



第二十二書簡 - 1946年1月
「私たちと星々とのつながり - ティコの金星と水星」

●基本的な視点

ティコ・ブラーエの胎児期における金星と水星の運動をさらに詳細に追跡し、
人生の具体的な時期・出来事との対応を明らかにする。

金星圏（オカルト的水星的性格）を
感情生活・リズムシステム・「感覚のヨーガ」（意識的な感覚規律）と結びつけ、
ティコの特殊な知覚能力の発達とイニシエーション的段階を読み解く。

水星圏を意志・活動のリズムと結びつけ、
3つの大きなサイクルを通じて
彼の宇宙論的衝動の源泉・具現化・限界・死後の継続を示す。

全体として、出生前の惑星身振りが地上人生を超え、
死後の霊的進化や人類へのインスピレーションへとつながる様子を描く。

●要点

・金星：
外合後、双子座・蟹座・獅子座を通過。
第3太陰月（1565〜70年頃）で双子座入り
→遊学時代に「感覚のヨーガ」を発達（星を吸い込みメッセージを吐き出す）。
第5太陰月（1576年）で獅子座（霊的出生図の木星位置）
→ウラニエンブルク定礎、感覚主義的ロゴス主義で変容。
蠍座通過（晩年）で地球の「死」を嗅ぎ取り破局を経験。
死時に射手座で土星と合→死後、山羊座で木星と合し、神聖なる視覚を獲得。
シュタイナーによれば死後強力に進化し、20世紀の宇宙的助言者に。

・金星圏は感覚のヨーガ（古代インドの夢的ヨーガを超え、
意識的な感覚規律）を可能にし、現代の感覚オートマトン状態を克服する道を開く。

・水星：
胎児期に約2回半のサイクル（各約4ヶ月＝人生28〜30年）。
意志の領域と結びつき、外合＝宇宙深みからの衝動の最高潮、
内合＝地球・頭部意識への引き降ろし。

・第1サイクル（〜28歳）：
牡牛座外合（〜9歳）から双子座ループ
→数学主義・宇宙論衝動（運動の霊デュナミス由来）。
意識的に天文学へ。

・第2サイクル：
獅子座外合（フェン島建設的年月、精神的教師の可能性）
→天秤座ループ（晩年）で世俗的困難に巻き込まれ、時代に早すぎたため未達成。

・第3サイクル：
死後、射手座外合で「進化のソフィア」と結びついたコスモソフィーを霊的世界で発展。
インスピレーションを与える存在に。

●本文

金星が太陽と外合（合）になったのち、この惑星は太陽の近くに位置しながら、双子座、蟹座、獅子座の星座を通過していったのを私たちは見ました。胎児期の第3太陰月の終わり頃、金星は双子座に入りました。これは、ティコ・ブラーエの人生における1565年〜1570年頃の出来事に反映されています。それは彼がドイツの多くの場所（ヴィッテンベルク、ロストック、アウクスブルク）を訪れていた時期であり、その中で、私たちがすでに説明したような天文学者であり錬金術師としての性質が、彼の中でゆっくりと発達し始めた時代でした。

金星とその圏（スフィア）（これには水星的な性格があります）は、人類の感情生活や、その肉体的基礎である「リズムシステム（呼吸・循環器系）」と結びついています。また、この圏は感覚の領域にリズムの性質をもたらすため、感覚の機能にも確実に深く関連しています。私たちは、これが「感覚のヨーガ」の発達を可能にしている、と言ってもよいほどです。

私たちは、古代インドのヨーガ体系が、もはや現代の西洋人の肉体には適していないことを知っています。それは、人類が今日とはまったく異なる方法で世界を認識していた時代との、最後の名残なのです。当時、吸気と呼気をコントロールすることへと導く実践は、呼吸を超感覚的（霊的）な認識のための感覚器官にするという目的を果たしていました。この認知は、より夢のような状態のものでした。したがって、それは西洋人の肉体には適していません。なぜなら、これらの肉体は、昼の意識（覚醒意識）による物理的な感覚知覚のために組織化されているからです。

さらに人類は、純粋に物理的な感覚知覚をも克服していく時代へと向かっています。それは昔のような夢のような超感覚的認識によってではなく、感覚知覚の「意識的なトレーニング」によって克服されるのです。かつてヨーガのメソッドを学ぶ人々が自発的な行為によって呼吸をコントロールすることを学んだように、未来の人類は感覚の活動を扱うことを学ばなければなりません。今日の感覚印象は、ほとんど何ら識別されることも、内立的に「消化」されることもなく、人間の肉体へと流れ込んでいます。肉体は、感覚の印象に対してオートマトン（自動人形）のように反応してしまいます。これこそが、現代における建設的な思考の壊滅的な欠如の理由の一つです。感覚の印象が、人間によって非常に意識的かつ自発的にコントロールされるようになって初めて、将来、人間の知性の文化的・精神的な行き詰まりを克服することができるのです。

このような感覚知覚のコントロールは、「感覚のヨーガ」と呼ぶことができます。古代インドのヨーガ（かつての夢のような状態）と、この新しいヨーガのどちらも、私たちが「オカルト的水星」と呼ぶこともある惑星「金星」の圏に関連しています。

このことは、ティコ・ブラーエのケースに明確に示されています。胎児期の第3太陰月に金星が双子座に入ったことに反映されている彼の人生の時期（1565〜70年）に、彼はこの種の「ヨーガ」を発達させました。現代の平均的な人が星空を見上げる場合、通常は地球から想像もつかないほど離れた場所にある無数の光の点を見るだけです。魂の中に生み出されるのは、多かれ少なかれ、なす術のない畏敬の念だけです。それなら、星に対して盲目であり、それらを全く見ないのと変わらないかもしれません。なぜなら、内なる魂の世界においては何も変化しないからです。

ティコにとっては違っていました。彼は星の姿をいわば本当に「吸い込み）」、星空の調和の中にあるその星の特別なメッセージという知識を「吐き出す」ことができたのです。それは、金星（あるいはオカルト的水星）の双子座における運動に反映されていた、彼のあの遊学時代に彼が発達させた「知覚のトレーニング（規律）」でした。

金星は蟹座を通過したあと獅子座に入り、第5太陰月の初めに、1541年の霊的出生図の時点で木星が位置していたのと同じ獅子座のポジションへとやって来ました（第21書簡の図2を参照）。第5太陰月の間に起こったこの出来事は、ティコの人生におけるまさに「1576年」に対応しています。この年は、フェン島（フヴェン島）にあるティコの天文台「ウラニエンブルク（天空の城）」の定礎石が据えられた年です。フェン島は、ティコ・ブラーエが自由に天文学の研究を進められるようにと、1575年にデンマーク国王フレデリック2世から彼に授けられたものでした。

ここで、第21書簡の「霊的出生図における獅子座の木星」について述べたことを読み返してみるなら、金星が獅子座のこの位置にあることに反映されたこの出来事の重要性を、実によく把握することができます。この瞬間、金星の上には「感覚主義の気質におけるロゴス主義」が輝いており、ティコ・ブラーエの「感覚のヨーガ」を再び変容させました。建てられた天文台は、いわばこの「ヨーガ」の感覚器官でした。私たちは前回の書簡（第21書簡）において、建物の上の階にある天体観測所と、下の部分にある錬金術の実習室からなる、この独特な「呼吸器官」のような天文台についてすでに説明しました。

私たちは、黄道帯の様々な星座を通過する金星の運動の中に、ティコにおける一種の「イニシエーション」の段階を、ほとんど見て取ることができます。星々の言語を認識する感覚は、彼に先天的に備わっていました。それは、彼が過去の転生から受け継いだものだったのかもしれません。この「感覚能力」は、金星が魚座から始まって獅子座、乙女座などへと星座を通過していったように、地球上の物質の領域へとますます深く導かれていきました。ティコは自らの霊的進化において、中世の「薔薇十字錬金術」にきわめて近いものを身をもって示しました。彼の生涯における他のいくつかの出来事は、彼が私たちが知っている以上に、このエソテリック（秘教的）なキリスト教の潮流と深く結びついていたに違いないことを明らかにしています。彼はまた、薔薇十字主義に触発されていたイングランド国王ジェームズ1世（当時はまだスコットランド国王ジェームズ6世）の訪問も受けていました。

ティコ・ブラーエのこの感覚能力は、地球存在の領域へと非常に深く導かれたため、彼は地球の真の本質、すなわち外面的には「死」であるものを経験することさえできました。出生前の胎児期における第7太陰月の終わりから第8太陰月の間にかけて、金星は「蠍座」を通過しました。これは、ティコの人生における「最後の7年間」に対応しています。この時、金星は（かつて太陽と外合になり、宇宙的思考を認識するティコの美しい感覚のイメージが見られた）牡牛座の「オポジション」に位置していました。

いまや金星は反対側に位置し、人生の最後の数年間において、ティコは地球に対する一種の「嗅覚（蠍座が象徴する感覚）」を本当に発達させなければなりませんでした。彼は文字通り、地球の本質としての「死を嗅ぎ取った」のです。ティコの人生の晩年は、一連の破局をもたらしました。1588年、彼の庇護者であっ

たデンマーク国王フレデリック2世が亡くなり、その筆頭後継者はティコに対してほとんど愛情を示しませんでした。最終的に1597年、彼はすべての観測器具を携えてフェン島を去らねばならなくなり、しばらくの間各地を放浪したのち、1599年に皇帝ルドルフ2世によってプラハでの亡命を認められました。それから2年後の1601年10月24日、彼は尿閉（膀胱の病）によって亡くなりました。

出生前の第8太陰周期の終わり頃、金星は蠍座から「射手座」へと移行し、同時に「土星」と重なり合いました（コンジャンクション）。この出来事は、ティコの「死の瞬間」と正確に関連しています。金星が蠍座にあった間、彼は最も深い谷を通り抜けたのでした。彼にとって、この経験を通過することは必要なことでした。金星が射手座へ入ることで示されるその後の上昇（アセンション）は、彼が地球上にいる間には起こりませんでした。そこには、世界の自己、すなわち世界運命の中に織り込まれている人類の高次の自己のイメージであり、「境域の守護者」でもある土星が佇んでいたのです。ティコが歩んできた個人のイニシエーションの道は、いまや宇宙の事象となりました。それはもはや、彼個人の個人的な関心事にとどまらなくなったのです。このことは、金星と土星のコンジャンクション（合）によって示されています。地球存在の深く暗い谷を通り抜けた「宇宙的思考への感覚能力」は、地球存在の知恵と現実で満たされ、大いに豊かにされ強化されて、いまや徐々にその起源へと戻っていきました。

確かに、死によって地球上におけるこの感覚能力の発達は終わりを告げました。しかし、星々によって物理的な肉体へと書き込まれたものは何一つ失われ得ないということを考慮に入れ、その上で土星とのコンジャンクションの後の金星の動きを見るならば、この感覚能力が「死後においてさえ」さらに発展させられたことはきわめて明白です。ティコの人生における1601年に対応する出来事のあと、金星は射手座を通過し、最終的に「山羊座」に入りました。そこで金星は、ティコの出生の直前に「木星」とコンジャンクションを起こしたのです。

山羊座における金星は、「視覚」の発達を意味します。しかし、これらの最後の金星能力が地球上で開花したのではなく、死の境域を越えた先へと持ち去られたティコのケースにおいては、私たちはそれを、木星の知恵によって照らされた、ほとんど「神聖なる視覚」と楽しまざるを得ません。地上人生において、ティコは自らの星の知恵の高さから地球の物質を経験しました。それはイニシエーションのようなものであり、時には非常に困難で苦痛に満ちたものでした。彼の上には悲劇の気配すら漂っています。彼は地球の物質に関する「認識の果実」を閾の向こう側へと携えていき、やがて地球の運命に関する宇宙の賢者となりました。いまや彼は、その星の眼を用いて、地球の歴史の秘密をかつてないほど深く見通すことができるようになったのです。彼は地球惑星の「未来」への参入者（イニシエイト）となりました。

特定の個人の死後の生活に関するこのような思想が、決して空虚な文句ではないということは、ルドルフ・シュタイナーによるティコ・ブラーエに関する指摘によって強調されるかもしれません。シュタイナーは、ティコ・ブラーエの魂は死後に非常に強い進化を遂げたため、地球上の特定の偉大な歴史的人流にインスピレーションを与えることができた、と語りました。さらにシュタイナーは、この魂が「今世紀（20世紀）」の間に非常に活発に働いており、20世紀の予言に関わるすべての事柄において「宇宙的な助言者」と見なすことができる、と指摘したのです。このようにして私たちは、金星の力がどのようにして「インスピレーション魂」の力へと変容させられ得るのかを目撃することができるのです（第18信を参照）。

第21書簡の図1において、私たちは惑星「水星」がティコ・ブラーエの出生前の胎児期の間に、約2回半のサイクル（周期）を描いたのを見ることができます。初期において、水星は魚座でのループ（逆行）からちょうど抜け出たところであり、そののち牡羊座から牡牛座の領域で太陽と外合（合）になり、双子座で次のループを描き、続いて獅子座で外合となりました。第8太陰月の間には天秤座で別のループがあり、最終的にティコの出生の瞬間に、水星は太陽と外合の位置にありました。

一つの長いループから次のループへと至るこのようなリズムは、「サイクル（周期）」と呼ぶことができます。それはおよそ4ヶ月の時間を包括しているため、人間の生涯における「28年から30年」の間隔（インターバル）に関連しています（出生前発育における1太陰月は、人間の人生における7年間の反映だからです）。

水星、およびその圏のこれらのサイクルは、人間の人生における「活動のリズム」に関わっています。第19書簡において、私たちはこの宇宙的な圏が人間の「意志」と結びついていることを指摘しました。このようにして私たちは、水星の身振りによって、個人の魂の活動的な人生がどの領域へと向けられているのかを目撃することができるのです。

ここで私たちは、ティコの人生における「3つの大きな活動サイクル」を区別しなければならないことに気づきます。最初のサイクルは、第4太陰月の頃に終わりを迎えます。

このループからループへの水星の移動は、この惑星（これには金星的な性格があります）の圏が、宇宙の深淵へと降下または上昇していくように現れる、と私たちは想像しなければなりません。それは、魂が通常は睡眠中にのみ通過する領域への遍歴のようなものです。外合の時期は、あらゆる人間の活動のための衝動が精神的宇宙の深みから汲み取られるという、そのような発達の「最高潮」を印づけています。

その後、惑星が地球に近づき、内合（またはループ）に向かうにつれて、宇宙の深みで集められたすべてのものが、いまや地球の領域へと完全に進入する惑星の圏とともに、地球へと引き降ろされます。水星の諸特質は、いわば意志や四肢という、より霊的でありながらも無意識的な領域から、頭部の明晰な意識へと上昇していくのです。

最初の水星サイクルは第4太陰月の間に終わりを迎えますが、これはティコ・ブラーエが「きわめて意識的に天文学へと向かった時期（28歳頃）」に対応しています。ループ（逆行）は、それ以前に宇宙の霊的空間から人間の意志という地上の領域へと、何かが引き降ろされていたことを示しています。それが地球上の人間における「頭部意識（目覚めた意識）」となったのです。さらに、このループは双子座で起こっており、そこはティコ・ブラーエが「数学主義」あるいは双子座の気質に関連する自らの霊的出生図の側面を具現化させたのと、まさに同じ瞬間に太陽が位置していた場所でもありました。

したがって、ティコの数学主義において具体化したあの衝動は、双子座における出生前の最初のループに先立つ、宇宙空間への水星（あるいはオカルト的金星）の圏の拡張に関連した体験に由来している、と私たちは想定しなければなりません。私たちは実際にこの源泉を見出すことができます。それは、ティコ・ブラーエの最初の水星サイクルの間に起こった、水星と太陽の「外合」です。それは「牡牛座」で起こりました。私たちは、惑星が太陽の背後に佇み、そのオカルト的な圏が牡牛座の領域へと広がっている様子を想像しなければなりません。これはティコの胎児期発育の「第2太陰月」の間に起こったことであり、彼のその後の人生における「およそ9歳」の年齢に対応していました。

月のノード（交点）のリズムに結びついている、9年、19年、28年といったリズムは、人間の人生においてきわめて重大な意味を持っています。これらは、無意識の深みから、まるで別世界からのメッセージのような奇妙な魂の体験が湧き上がってくる時期なのです。それらは時に、人間の夢の世界にだけ進入することもあります。人生のいわば「夜の側面」を経験するこの年齢において、ティコ・ブラーエは自らの魂の深みで、水星の圏の気質における「牡牛座の衝動」を受け取ったのです。この衝動とは何でしょうか？ それこそがまさに、「宇宙論（コスモロジー）」あるいは「コスモソフィー」の衝動なのです。

水星（あるいはオカルト的金星）の圏は、「アルヒャイ（時代霊）」または「人格の霊」の領域です。以前の説明から、私たちはこれらの霊が、すでに「古き土星進化」の内部において、人類の創造と特に結びついていたことを覚えています。彼らの活動を通じて、人間は自らの肉体の「熱・意志の組織」を通じて、自分自身をひとつの個性として体験できる、ということが確立されたのでした。

このようにして私たちは、「土星」と「水星（あるいはオカルト的金星）」を、対極にあるものとして想像します。土星に存在しているのは、人類を創造した「神々の犠牲」であったものです。それは、霊的なヒエラルキーのコーラスの中における人類の起源の「元型的な記憶」であり、いわば人間の頭部の周囲にあるオーラから肉体へと向かって働いています。これに対して、水星の力は、人間が自分自身を独立した存在として体験することを可能にします。土星が最も遠い過去の、なおも創造的な記憶を表しているのに対し、水星（オカルト的金星）は、大宇宙における［人類の霊的なゴールの］最終的な現れ、すなわち神秘学において「霊」として知られているものの「芽生え」を象徴しているのです。水星は、人間の頭部へと向かって、人間の「意志と未来」の計り知れない深みから働きかけているのです。

黄道帯を通過する土星の運動の中に、私たちは、星座の霊的な前身（元型）である門を通じて、霊的ヒエラルキーが「古き土星進化」へと進入していった宇宙的記憶を体験することができます。

例えば、私たちは「叡智の霊（キュリオテテス）」が牡羊座から、「運動の霊（デュナミス）」が牡牛座から、「形態の霊（エクスシアイ）」と「時代霊（アルヒャイ）」が双子座から、「大天使（アルヒアンゲロイ）」が蟹座から、そして「天使（アンゲロイ）」が獅子座から進入するのを見ました。

これに対し、水星（オカルト的金星）の力は、黄道帯の星座を通過する中で、宇宙進化の全時代を通じて、純　真な人間の意志の中にこれらの諸階級の活動がもたらした「結果（作用）」を、人間に持ち帰ってくれるのです。

ティコ・ブラーエのケースにおいて、私たちは先述のように、水星（オカルト的金星）の圏を媒介として、ティコの魂の中に「牡牛座の現れとしての衝動」が進入したことについて話しました。したがって、私たちはこの出来事の中に、もともと「運動の霊（デュナメイス）」に由来する衝動の源泉を見出すことができます。ただし、それは古き土星宇宙へ進入したときのような形ではなく、人間の「意志」の領域において具現化されたものとしてです。

運動の霊たちは、星々の運動のための「原初の衝動」を与えました。霊的な存在たちの「魂の体験」こそが、それらの運動の根源的な動機なのです。もし人間が、水星によっていわばトランスポーズ（翻訳・転調）されたこのような流入を具現化できるなら、彼らは「宇宙論（コスモロジー）」あるいは「コスモソフィー（宇宙の知恵）」を創造することができます。これこそが、ティコ・ブラーエが行ったことでした。

私たちはこれらの事実を、いかなる決定論や宿命論の光のもとでも捉えることはできません。このような衝動を受け入れて形づくっていくか、あるいはそれらを無視するかは、私たち一人ひとりの自発的な「意志」に委ねられています。そして当然のことながら、どちらの場合であってもカルマ（業）の影響が生み出されることになります。

このようにして私たちは、水星（オカルト的金星）の圏が、牡羊座からは真の「宗教」、双子座からは「哲学」、蟹座からは一種の「社会ソフィー」、獅子座からは「教育学のソフィア（知恵）」といった衝動を、人間の意志へと引き降ろすことができるのを見出します。これらの衝動のための概念を見つけることは困難

です。なぜなら、それらは本当に純真（処女のよう）だからです。言葉では、人類と水星（オカルト的金星）の圏、すなわち「ソフィア（神聖なる知恵）の圏」との、これらの真に崇高な結びつきを十分に描写することはできません。

第2の偉大な水星サイクルは、獅子座において外合（合）を迎えました。これはティコがフェン島（フヴェン島）で過ごした、最初の建設的でポジティブな年月に関連していました。そして、このサイクルは天秤座（および乙女座の境界）でのループ（逆行）において終わりました。このループは、出生前の太陰周期に従えば、ティコの人生における「最後の7年間」に対応していました。

獅子座における外合から考えるなら、ティコは「人類の精神的な教師」になるはずであった、と推測することができます。彼は実際に、フェン島において彼の周囲に若い人々のグループを集めていました。

しかし、なぜ彼はその時、突き抜けることができなかったのでしょうか？ なぜ彼は比較的無名になり、今日では単なる専門家として、すなわち「有名なデンマークの天文学者」としてのみ分類されているのでしょうか？

私たちが天秤座における水星の次のループ（逆行）に目を向けるなら、その答えを見出すことができます。このループは、本来であれば獅子座の衝動の「具現化」を意味するはずのものでした。しかし、私たちは何を目撃しているでしょうか。私たちは、ティコ・ブラーエが、自分自身を中心とする、ほとんど世俗的と言ってよい人間的な困難に巻き込まれているのを見るのです。

彼が最初の水星サイクルの間に、哲学的な数学主義の気質の中へと引き降ろし、第2の水星サイクルの間に教育的な質へと高められていたはずのあの「宇宙論（コスモロジー）」は、目に見える現象と現実を土台として、すべての存在の中に「霊的なヒエラルキーが能動的に存在していること」を教える教義となるべきものでした。

彼は様々な理由から、これを達成することができませんでした。彼の生きた時代全体が、それに反していたのです。彼の周囲では、特に科学と知識に関して、次第に感覚の世界（物質世界）だけを認め、精神的階級に関するすべての知識を完全に否定するような文明が育ちつつありました。ティコ・ブラーエがもたらさなければならなかったものは、地球上にとっては「早すぎた」のです。それはいつの日か具現化されるでしょうが、当時はまだその時が来ていませんでした。ティコは、彼の出生前発育におけるあの水星のループが反映されたまさにその時期に亡くなったのです。

ここでも再び、この衝動は失われなかったと言うことができます。ティコはその本質を死の境域の向こう側へと携えていきました。彼は、自らの魂に先天的に備わっていた「水星の第3のサイクル」を、霊的な世界において発展させたのです。

彼の出生図を見ると、水星が天秤座のループ（逆行）から、射手座における次の「外合（合）」へと移動していくのが分かります。地球上で具現化されることのなかったあの衝動は、再び宇宙空間へと連れ出され、もうひとつの変容を受けました。

射手座におけるこの外合の中に、私たちは、人間の魂の中に「人類の進化と宇宙の進化、そして実のところその両者の相互作用に対する能動的な認識」を生み出そうとする力の流入を見出すことができます。ティコ・ブラーエを通じて現れようとしていた衝動とは、「進化のソフィア」と結びついた「コスモソフィー」

であった、と言うことができるでしょう。ただ、それは地球上では達成されず、ティコの魂を通じて霊的な世界において達成されたのです。

こうして私たちは、ティコの金星（あるいはオカルト的水星の圏）の身振りや体験に目を向けたときと、同様の結論へと到達します。ただ、今回は異なる角度から同じ結論に至ったのです。死後、この魂は「宇宙の知恵の探求者（コスモソフィスト）」となりました。彼は、霊的な世界進化のプロセスに関する自らの知識によって、地球上に生きる人々にインスピレーションを与え、助言を与えることができる存在となったのです。

第二十三書簡 - 1946年2月
「私たちと星々とのつながり - ティコの土星と木星」

●基本的な視点

内惑星と太陽の記述を終え、外惑星（土星・木星・火星）にアプローチする。

内惑星は人間の「魂の世界」
（未来に向かって成長し、将来の転生の肉体的基盤を創る）と結びつくのに対し、
外惑星は「過去」とのつながり
（過去の転生、死と再生の間の霊界経験、誕生への下降過程）を示す。

土星を死と誕生の境域の守護者、高次存在（霊我）の守護者として捉え、
木星を過去と未来を結ぶ世界エーテルとの結びつき、
創造的思考による物質のエーテル化・未来の木星期準備として位置づける。

ティコ・ブラーエの出生図と出生前出来事を通じて、
これらの性質が彼の個性・過去世・未来への影響として現れる様子を解明する。

●要点

・外惑星は過去（転生・霊界経験）を、内惑星は魂の世界（未来）を示す。

・土星：
　死神のイマジネーション（骨格・歯と結びつき）、
　境域の守護者（メメント・モリ）。
　同時に誕生の境域の守護者で、地上に入らない高次存在（霊我）を見守り、
　過去・未来の転生をつなぐ糸を保持。

・ティコの土星：
　蠍座〜射手座でループ、
　出生時に太陽と合（ユリウス暦補正で実質クリスマス・イブ）。
　宇宙のクリスマスのイメージ。
　過去世でキリスト誕生の理解に葛藤。
　蠍座（鷲→蠍→鳩、イシス・ソフィアの星のマント）から
　射手座（人間原型・自我の矢）へ。
　古い宇宙知恵の参入者だが、人間原型の地球上での独立を受け入れるのに困難。

・シュタイナーの示唆：
　過去世は背教者ユリアヌス
　（4世紀、キリスト教離反、古い神秘復興を試みゾロアスター的太陽参入者）。
　その後パルジファルの母ヘルツェロイデ（9世紀）。
　谷を通り抜ける者とのつながり。
　太陽・水星の外合が歴史的クリスマスを想起。

・木星：
過去と未来の結びつき。
思考による物質の溶解・エーテル化。死後の現実となり、
未来の木星期（新エルサレム）の芽。
ティコの木星は山羊座に留まる（蟹座の反対＝物質凝縮の逆、溶解・霊化の衝動）。
能力が時代に先んじ、未来転生の「資金」に。
死後シェリングやフローシャマーにインスピレーションを与えた。

●本文

前回の3つの書簡では、ティコ・ブラーエの出生天宮図（ホロスコープ）における内惑星と太陽について説明しました。今回は、彼の出生時における外惑星（土星、木星、火星）にどのようにアプローチできるかを示すことが私たちの課題となります。

すでにお気づきかもしれませんが、内惑星は人間の「魂の世界」と結びついています。魂の世界は、人間の身体組織という子宮の中で休んでいる子供のようなものです。それは未来に向かって成長し、将来の地上への転生において、肉体的な基盤や能力を創り出すことになる運命の結び目（カルマ）を縛り合わせます。

一方で、外惑星の性質はそれとは異なります。外惑星が示しているのは、その人の「過去」とのつながりです。すなわち、過去の転生、死と再生の間における霊界での経験、そして地上への誕生に向けて下降していく過程での経験を表しているのです。

まず土星について考えてみましょう。これまでの説明の中で、私たちは様々な視点から土星へとアプローチしてきました。なぜなら、惑星は人間の内部において多様な方法でその姿を現すということを、私たちは認識しておく必要があるからです。

土星の本質を理解し、体験するへと導いてくれる古い象徴的ヴィジョンがあります。中世やそれ以前の絵画的描写において、土星はしばしば「死神」として、つまり命の糸を断ち切る大鎌を持った骸骨の姿で表現されています。これは真実のイマジネーションです。すでに以前の書簡でも指摘したように、この惑星は人間の身体における骨格系と強い結びつきを持っています。それゆえに土星は、人間の組織の中で最も深く物質界の領域へと下降した部分と関連しているのです。

骨格系全体の中で、歯はこの下降が凝縮されたイメージであり、人間の骸骨、すなわち死神の歯が、人間の究極の地上の運命を示すこのイメージにおいて最も印象的な特徴であることを私たちは覚えています。したがって、土星は境域に立つ者であり、その警告と厳格な「メメント・モリ（死を想え）」によって、感覚世界の誘惑に落ちないよう絶えず人間に思い出させる存在なのです。これらの警告は、人々の魂の世界の中で行われるだけでなく、人間の失敗、失望、そして破局という力強い言語で語りかけてきます。

しかし、これは土星の性質の片面にすぎません。私たちの感覚では捉えることのできない土星の内的な本質は、この不気味とも言えるイメージとは正反対のものです。土星はたしかに「死の境域の守護者」ですが、それと同時に「誕生の境域の守護者」でもあります。土星が人間の生活の中に大いなる「メメント・モリ」として現れるとき、それは私たちの「高次の存在」を思い出させるためにそうしているのです。

人間の高次の存在（人智学ではこれを「霊我」と呼びます）は、実際には私たちの地上の転生の中には入ってきません。それは霊界に留め置かれており、土星がその守護者となっています。転生から転生へと人間を導き、地上での経験の果実を集め、大いなる進化の目的のためにそれらを形作り、再構築していくのは、まさにこの霊我なのです。

人間の現在の進化の段階において、私たちは通常、自分の霊我を忘れてしまっています。なぜなら、誕生の門を通ってこの世界に入るとき、過去の転生や、死と新しい誕生の間の生活に関する認識の前にベールが引かれるからです。土星は私たちの高次の存在を見守り、私たちが自らの神聖で永遠なる本質を完全に忘れてしまわないように防いでくれています。土星は一般的に、苦痛に満ちた経験をもたらすことなしに、このことを達成することはできません。

私たちは土星を、私たちの過去、さらには未来の転生とを「つなぐ糸」を一つにまとめ持っている存在として見ることができます。土星は、個々の人間それぞれの偉大なる霊的イメージの守護者であり、そのイメージは、私たちが地球上の絶え間なく変化する条件を通り抜けるにつれて進化し、変容していくのです。

ティコ・ブラーエの出生天宮図、および天空における出生前の出来事の図において、土星は「さそり座」と「いて座」の間の空間で逆行によるループを描いていました。そして最終的に、出生の時には太陽が移動して土星と合（コンジャンクション）になりました。これは、大いなる祭りの言語によって、私たちがこの個性の霊的な「住処」をどこに探すべきかを明かしてくれるため、非常に重要です。私たちはその中に、過去の転生の状況を示す手がかりさえ見出すことができます。

ティコの誕生は1546年12月14日でした。私たちが忘れてはならないのは、1546年当時はまだ、いわゆる「ユリウス暦」が施行されており、これは天文学的な計算にとってはあまり正確な記録ではなかったということです。一年の長さの計算の誤りにより、16世紀までには、暦年は天空における太陽の位置に対して10日間遅れてしまっていました。この誤りは、その後の1582年に「グレゴリオ暦」が導入されたことで修正されました。したがって、1546年12月14日は、冬至における太陽の位置という観点から見れば、本質的には「12月24日」、すなわちクリスマス・イブだったのです。

もし私たちが今、このクリスマスの太陽の後ろに土星が立っているのを思い描くなら、ティコ・ブラーエの永遠の存在についての非常に啓発的なイメージを得ることができます。なぜなら、1546年のこの一度きりのクリスマスのイマジネーションは、いわば土星の言語へと高められているからです。それは「宇宙のクリスマス」のイメージであり、したがって、過去の転生を経てきたティコ・ブラーエの高次の存在は、世界的な出来事としてのクリスマスに深く関わっていたと言うことができます。私たちはこの星の出来事の中に、過去世において地上へのキリストの誕生を理解しようと葛藤していた一つの個性のイメージを認めるのです。

さらに、黄道帯における土星の位置も考慮しなければなりません。土星は「さそり座」の星座を離れ、「いて座」に入ろうとしていました。以前の書簡で、私たちは進化の時代を通じてさそり座のイメージがどのように変化してきたかを説明しました。非常に古い時代、それは人間の認識を予言的なヴィジョンの領域へと高める、力強い翼を持った「鷲」のイメージとして霊視されていました。その後、鷲の力が死に絶えると、この星座は、死と破壊の後に訪れるカオスから生じる「生殖」と「死への下降」を象徴する「蠍（さそり）」として認識されるようになりました。

しかし、これらの力が再び高められる時が来るでしょう。秘儀参入者は、蠍が「鳩」のイメージへと変容しているのをすでに見ることができます。その白く柔らかい翼で、人間の魂を聖霊の体験へと運んでいく鳩

です。真実として、聖霊はさそり座の門の後ろに立っています。もう一つの現れは、新しいイシスである「イシス・ソフィア」です。かつて非常に古い時代に、イシスは地球から去っていきました。それは鷲が蠍になった時代であり、伝説が伝えるところの、イシスの夫であるオシリスが殺された時でした。そのときイシスは、私たちの頭上に広がる青い空のドームを象徴する青いマントをまといました。そのマントの裏側には、私たちが夜空に見る無数の星々が散りばめられていました。

象徴的な言語を使うなら、ティコ・ブラーエ、あるいはむしろ彼の後ろに現れる高次の自我は、古い時代にこの「イシスのマント」を所有していたのです。言い換えれば、私たちが今日さそり座と呼んでいる星座からやってきた土星の中に、私たちは、古い時代にイシスのマントの秘密、すなわち星の世界の秘密へと参入した個性のイメージを感知するのです。彼は、その星のマントのひだの後ろに、地球上における人間の存在の大いなる「母なる存在」をいまだ認識することのできた参入者の一人でした。彼は、人間が星々の霊的な領域から地球へと下降してくることを知っていたのです。

その後、土星はさそり座を離れ、まもなくいて座に入ろうとしていました。これは私たちの魂の中に、もう一つのイメージを創り出します。いて座、特にその中心的な星々の中に、私たちは、霊的ヒエラルキーの聖歌隊の中で高次の「自我」を見出すことを課題とする、人間の「原型」を見ることができます。これは射手の矢のイメージに現れています。それこそが「自我」の真のイメージなのです。

このようにして私たちは、過去の転生を経て、最終的にティコ・ブラーエとして地球に下降した個性を目にすることになります。彼は、地上の両親からではなく、星をまとった天の母から生まれたものとして人間をいまだ見つめることのできた、古い時代の素晴らしい宇宙の知恵、すなわち霊的宇宙論の影のような反映を授かっていました。これが過去から彼の魂の中に生きていたのであり、だからこそ、彼がティコ・ブラーエとして肉体を持ったとき、なぜあれほど深く星の世界と結びついていたのかを理解する助けとなるのです。

彼が未来に向かって進むにつれ、彼にとって一つの大きな問題が現れました。それを私たちは、いて座、すなわち「人間の大いなる原型」のイメージの中に感知します。その問題とは、「大いなる宇宙の母なる存在の子はどうなるのか？」ということでした。古い時代からの遺産によって、ティコはその子がまだ天の母の子宮の中にいるのを見る傾向がどちらかといえば強かったのです。現代の言葉で言えば、彼は人間が星によって決定づけられていると見ていました。

ティコの出生天宮図における土星、水星、そして太陽の合（コンジャンクション）は、彼の存在の中に大きな複雑さがあったことを私たちに明かしています。過去の転生において、彼は「人間の原型が実際に地球上に誕生し、天の母から離れて独立した存在になった」という事実にまで突き進むことができなかったのです。一つまたはそれ以上の過去世において、人間の原型がもはや星々の子宮の中にはおらず、星々の「影響」から自由な独立した存在として地球に入り込んだのだ、という確信へと進化することは、彼にとって非常に困難であったに違いありません。この個性にとって、クリスマスの出来事の真実を把握することは非常に難しかったはずです。

このことは、別の言葉で表現することもできます。天空の太陽は、肉体的・物質的な現実の象徴でありイメージです。土星は、人間の魂が死後に通過し、すべての魂の存在の原型を経験する、精神的宇宙におけるその領域の目に見える表現です。ティコの出生天宮図で土星と太陽が合になっているのを見ると、それらがお互いの完全な現れを妨げ合う可能性があることが理解できます。

したがって、イシスの神秘に参入していたこの個性は、イシスが「ホルス」を出産することを知ってはいたものの、この出来事を魂の世界の中だけの事実として期待していた、と言うことができます（現代の抽象的な言葉で言えば、彼はそれを物質的な現実に結びついたものではなく、象徴的に体験していたのです）。彼は、魂の世界におけるこの予言が、地上で目に見える出来事として、「ホルス（キリスト）」の肉体的な形での誕生として実現するという事実を受け入れることができなかったか、あるいは少なくとも、それを受け入れることに最大の困難を抱えていたのです。

ルドルフ・シュタイナーは、ティコ・ブラーエの過去の転生について霊学的な探究を行っており、その啓示は、私たちが上で述べたようにこの個性について語る勇気を与えてくれます。シュタイナーが明かしたところによると、この個性は西暦4世紀にローマ皇帝「背教者ユリアヌス」として転生していました。私たちは、この皇帝が若い頃にキリスト教の教育を受けたにもかかわらず、後半生においてキリスト教を軽蔑し、そこから離反したために「背教者」と呼ばれたことを知っています。彼の前任者たちはあらゆる異教を廃止し、神殿を閉鎖し、その司祭や賢者たちを追い出していました。

ユリアヌスは古い神秘を復興させようと試みました。彼は秘儀参入のセンターの最後の名残を捜し求め、キリスト教徒によって暗殺されることになる最後のペルシャ遠征においては、古代アジアの神秘を復活させるために出発したのです。もし人間がそのような衝動を発展させることができるとすれば、その人は確実に、過去世から東洋の秘儀参入の機関と深い結びつきを持っています。ユリアヌスは、星の宇宙の秘密について深い知識を持っていたペルシャ文化の古代の創設者ゾロアスターにまで遡る、ペルシャの神秘と関連していたのかもしれません。これこそが、ユリアヌスがインスピレーションを汲み出した源泉でした。

彼は宇宙論的な秘儀参入者であり、「太陽の参入者」だったのです。彼は、今も現存する『三重の太陽について』と呼ばれる論文を執筆したほどでした。彼は、ゾロアスターが太陽の大いなるオーラである「アフラ・マズダ」を指し示して語った、太陽の霊についての深い知識を持っていました。しかしティコ（の前世であるユリアヌス）は、太陽の霊がイエスの肉体に入ったという確信へと進むことができませんでした。彼はキリスト教以後のギリシャ哲学者になりすぎていたため、霊的な事実が物質の領域において明白になり、目に見える形になり得るということを信じられなかった、と言えるかもしれません。

古い秘儀の復活を阻止しようとする力によって、ユリアヌスは殺害されました。「人間の原型」であった存在の宇宙的な性質に対して、人類がしばらくの間目をつぶることは、当時の人類の運命（カルマ）だったのです。人類は、パレスチナでの出来事の間に地球上で起こったことだけに目を向けるしかありませんでした。

しかし、ユリアヌスの魂は、それらの物理的な「世界クリスマスの出来事」を認識することなく境域を越えて死んでしまったため、運命は彼に、以前の失敗を償うための別の機会を与えました。彼はパルジファルの母「ヘルツェロイデ」として生まれ変わったのです。

パルジファルは西暦9世紀に生まれた歴史的人物理でした。彼は、人間の原型の反映が極めて特別な方法でとどまっていた個性でした。「パルジファル」という名前は、本質的に、全くの孤独と苦しみ、そして霊界から切り離された「谷を通り抜ける」者を意味しています。彼の父親は彼が生まれる前に亡くなりました。彼は幼少期、人里離れた森の中で母ヘルツェロイデの庇護と世話のもとで暮らしていました。ある日、彼は連れ出され、アーサー王の円卓の騎士になるために世界へと旅立ちました。彼は聖杯に直面したものの、それを認識することに失敗し、神への信仰さえ失うほどの長くて孤独な彷徨の末に、ようやく聖杯の城へと戻り、絶えず癒しをもたらす聖体を納めた聖なる器の担い手となったのです。

歴史的人物理としてのパルジファルは、霊的な暗黒が人類に広がっていた時代に生きました。彼はおそらく、人間は肉体と魂だけで構成されており、霊の担い手であることを否定する決議がなされた「コンスタンティノープル公会議（西暦869年）」の時期に生まれたと考えられます。しかしパルジファルは、人間が物質的存在という暗く孤独な谷を勇敢に通り抜けることによって、自らの魂の隠された力を進化させるならば、最終的にキリストの「器（聖杯）」になり得るという可能性を、いわば提示したのです。

ヘルツェロイデは、パルジファルがアーサー王の宮廷を探しに彼女のもとを去った後に亡くなりました。それによって、彼女は霊界から地球を振り返り、自らの息子の運命の中に「太陽の霊が物質世界に入り込んだ」という事実を認識することができました。なぜなら、人間が自らの低次の存在（低次の自我）と葛藤する中で、高みからの霊的な光へと心を拓くならば、キリストが人間の心を満たすのを目撃したからです。

この「谷を通り抜けた」者とのつながりは、土星、水星、そして太陽の合（コンジャンクション）の中にも隠されています。太陽と水星の外合（※天文学的には地球から見て太陽の向こう側に水星が位置する状態）は、紀元前1年12月25日の歴史的なクリスマスの夜を強く思い起こさせます。なぜなら、その夜にもこれと全く同じ合が起こっていたからです。それは、ルカによる福音書に描写されているような、極めて困難な状況下での「誕生」という出来事のイメージです。

しかし、さそり座といて座の間という土星の位置は、これが「谷を通り抜け」なければならなかった者の誕生であったことを明かしています。なぜなら、その位置は黄道帯における「最も低い」部分にあたるからです。そこは冬至の点であり、一年の行程の中で太陽がこの点に達するとき、地平線上の最も低い位置にくることになります。黄道帯のこの部分は、まさに暗く孤独な谷なのです。

土星が、過去の転生を歩んできた高次自我とのつながりという「人間の過去との結びつき」を明かすのに対して、木星は「過去と未来との間の結びつき」を創り出します。土星は現在の転生の基礎となっている高次のカルマを示し、木星はその人の運命の神秘的で奇妙な道のりの「内的な理由」を現すのです。

以前の書簡で、私たちは木星を、人間と「世界エーテル」との結びつきのイメージとして語りました。私たちは肉体を持って地球を経験していく中で、望むと望まざるとにかかわらず、「思考」のプロセスを通じて地球の物質を溶解させています。思考の能力とは、強固な物質のベールを突き抜ける活動に基づいているものです。私たちが世界とその対象の真の本質を見出そうとするとき、特に哲学的な思考において、私たちは自らの周囲にある客観的で自我のない世界をエーテル化し、意識的な透明性の状態へと高めています。

このエーテル化された思考の世界こそが、私たちが死の境域を通り抜けた後に振り返って見る「現実」となります。その時、これが私たちにとっての「地球」となり、私たちはもはや物質的な地球を見ることはできません。言ってみれば、この「エーテル地球」は、これまでのところほんのわずかしか達成されていない、地球進化全体の意味と未来を私たちに示してくれるのです。しかしそれは、現在の地球が溶解した後に訪れる、宇宙の新しい惑星段階の「芽（胚）」としてすでに存在しています。オカルティズム（霊学）では、この未来の宇宙の段階を「木星紀」と呼んでいます。宇宙エーテルの領域であり源泉である現在の惑星としての木星には、この未来の進化を準備する極めて高次の存在たちが住まうのです。

したがって、出生天宮図における木星の位置を見ることは、個々の人間の過去と「宇宙の未来」を結びつけているものを見つめることにほかなりません。その最高の現れは、創造的・哲学的な思考の領域に現れます。このようにして、個人の創造的な思考は、未来の宇宙の「本質的な」物質となるのです。

ティコの出生前の発生期間全体を通じて、木星は「やぎ座」の星座に位置していました。やぎ座は「かに座」の反対側にあります。木星の光に照らされたかに座は、地球が「鉱物物質」の状態へと凝縮していくプロセスを明かすことができます。精神的な出生天宮図との関連において、私たちがかに座を唯物論という哲学的気質の宇宙的な表現として捉えたことを覚えているでしょう。木星の光を通して、私たちはかに座を、地球を物質へと凝固・硬化させることへと導いたあらゆる衝動の源泉として体験することができます。霊学的な探究から、地球がこの強固な物質の状態に達したのは、ごく段階的なことであったと私たちは知っています。

しかし、その反対側にあるやぎ座に位置する木星は、この凝縮とは「逆の傾向」、すなわち人間の「溶解させる思考活動」を示しています。それは、はるか遠い未来の宇宙プロセスにおいてのみ達成されることになる、強固な物質の「霊化」と「エーテル化」の衝動です。物質への凝縮は、地球進化の本質です。このプロセスがあって初めて、人類を自由へと導き、「自我」を獲得させることが可能となりました。

これに続く宇宙の進化は、この凝縮のプロセスを「救済」しなければなりません。木星進化において、地球はエーテル体として現れることになりますが、それは、今この瞬間にも地球の健全な溶解に貢献している、個人の創造的な思考によって構成されているのです。ヨハネの黙示録の言語において、このエーテル化され変容した地球は「新エルサレム」と呼ばれています。

今や私たちは、この個性が「神性が物質の中に受肉する」ことを理解するにあたって、なぜあのような困難を抱えていたのかを理解することができます。それは、彼の創造的な天賦の才が未来に向かって遥かに先んじていたためであり、あまりに先んじていたがゆえに、当時の世界史の時代のニーズにうまく適合しなかったからなのです。

私たちは次のようにも言えるかもしれません。世界の完全なエーテル化という未来のプロセスは、そのプロセスの媒体である人間が、まず「物質の中に組み込まれた霊」を経験するという苦痛を通り抜けておかない限り、決して達成されることはないのだ、と。上で指摘したように、この個性は最終的にこの経験を通り抜けました。私たちは、この木星の位置からなお一層、ティコ・ブラーエの真の時代は未来にあるのだと確信することができます。彼はティコとしての転生の間には、これらの能力をほんのわずかしか展開させることができませんでした。

それらの能力は、いわば未来の転生のための蓄えとなったのです。彼の死後、後世に転生した特定の人物たちが彼から受け取ったインスピレーションを考慮するとき、私たちはこれらの能力が将来どのようなものになり得るのか、その一端を垣間見ることができます。ルドルフ・シュタイナーは2人の人物を挙げています。哲学者のシェリングと、ヤーコプ・フローシャマーです。

※訳註〔ヤーコプ・フローシャマー（Jakob Frohschammer, 1821年1月6日 - 1893年6月14日）19世紀のドイツの神学者・哲学者。ミュンヘン大学で長年哲学教授を務めた。カトリックの司祭でありながら、教会の絶対的な権威や当時の主流だったトマス主義（スコラ学）に強く反対したことで知られている。〕

シェリングの哲学活動は、彼がベルリン大学で行った講義において頂点に達しました。それらは『神話の哲学』および『啓示の哲学』というタイトルで編集されています。またフロアシハマーは、木星がやぎ座に近づいていた、あるいは実際にやぎ座に位置していた時期に、『世界プロセスの原理としてのイマジネーション（世界霊の創造的原理としての想像力）』や『モナドと世界イマジネーション』といった著作を執筆しました。

残念ながら、今はこれらの人物の哲学思想について詳細な説明をすることはできませんが、作品のタイトルだけでも、ティコ・ブラーエからインスピレーションを受けたこれらの思想がいかに崇高なものであるか、読者に微かなイマジネーションを伝えてくれるはずです。世界プロセスの原理としての「イマジネーション」という思想は、もはや物質は存在せず、むしろ「創造的で生きた思考の海」が広がっているような世界のイメージを創り出すのです。

第二十四書簡 - 1946年3月
「私たちと星々とのつながり - ティコの火星」

●基本的な視点

ティコ・ブラーエの出生天宮図を完成させるため、
出生前の火星の動きを考察する。

火星は「力」の惑星として、
魂が特定の地上人生の条件のもとに肉体化する理由や、
過去・未来の転生の連続性の中で今回の転生が果たす「仲介的課題」を示す。

個体化の新しい段階が
エンテレケイア（永遠の創造的霊的本質）にどのように配置されるかを説明する。

ティコの火星の位置と運動を通じて、
外なる星の宇宙と内なる魂の宇宙を結合させようとする衝動、
その実現の困難、犠牲、死後の復活とインスピレーションを読み解く。

●要点

・火星の動き：
　受胎時に山羊座入り、直後に木星と合。
　その後水瓶座で長い留（ループ）、出生時に魚座へ。

・山羊座の火星＋木星合：
　感覚世界の外観の中に霊を見出そうとする衝動。
　崇高な霊的宇宙イメージの顕現に最大の困難（人生最初の約14年）。

・水瓶座の火星（約30歳〜死まで）：
　切り離されたものを結合させる衝動。
　前世（ヘルツェロイデ）で内なる魂の宇宙（聖杯）を認識したため、
　今生で外なる星の宇宙と結合し、イシスを復活させようと決意。
　天文学者＋錬金術師として星と運命を結びつけ、
　コペルニクスを拒絶（機械論を予見）、独自の体系を考案。

・魚座の火星（56歳＝死の時期）：
　結合の衝動を「知恵の宇宙」として実現する能力を提供するが、犠牲に。
　体系に数学的基礎を与えられず、ケプラーを説得できず、機械論が優位に。

・衝動は死後霊界で復活し、未来の転生へ働きかける。
　魚座からインスピレーションを与え続け（シェリング、フロアシハマーなど）、
　自然と精神の真の結合（霊的一元論）を触発。
　現在さらに進み、文化の断片化を結合する熱意を目覚めさせる。
　「黄金の三角形」の弟子・教師として、

三位一体・三元性（社会三層化など）の思想をインスパイア。

●本文

ティコ・ブラーエの出生天宮図（ホロスコープ）のイメージを完成させるために、私たちはまだ、出生前の発生期間における火星の動きについて説明しなければなりません。

第21書簡の図1（※以前のテキストに登場した図）は、この火星の動きの印象を伝えています。火星は、ティコの受胎の瞬間にちょうど「山羊座」に入ったところで、その直後に木星と合（コンジャンクション）になりました。その後、火星は「水瓶座」へと進み、そこでその後の胚発生期間の大部分を費やすことになる留（ループ）を描きました。そして最終的に、出生の時に位置していた「魚座」へと入ったのです。

Figure 1

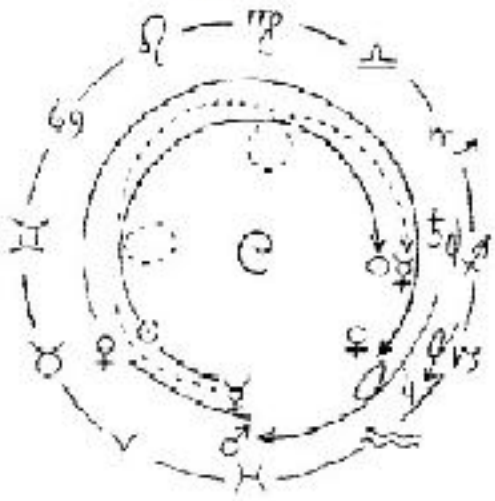
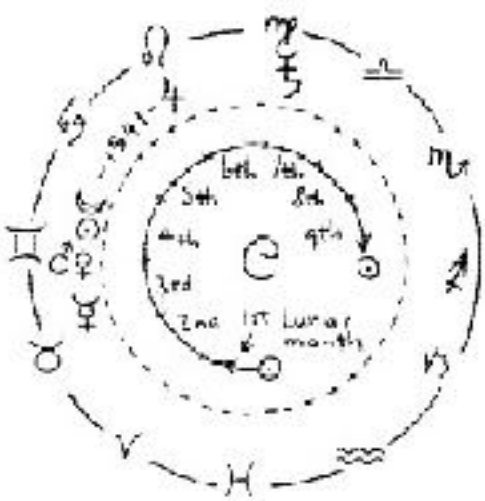


Figure 2



「力」の惑星としての火星は、次のような問いに答えてくれます。すなわち、「人間の魂は、なぜ特定の地上の人生という特別な条件のもとに肉体化するのか？」という問いです。さらに火星は、地球上における過去の人生と未来の人生の連続性の中で、今回の転生が果たすべき「仲介的な課題」を示してくれます。時に、連続する2つの転生の間に矛盾が存在するように思えることがありますが、火星は、個体化のそれぞれの新しい段階が、最終的にどのように人間の「エンテレケイ（人間の永遠にして常に創造的な霊的本質）」の中に配置されるのかを説明してくれるのです。

やぎ座の火星が明かしているのは、ティコ・ブラーエが地上の環境へと肉体化していく当初から、感覚世界の外観の中に霊を見出そうとする衝動が、彼の内部で活動していたということです。このことは、火星と木星の合に特に表現されています。木星は、両者の合という出来事において、自らの本質を火星に浸透させようとします。

前回の書簡で、私たちはやぎ座における木星の本質的な性質について説明しようと試みました。そして、この位置において、現代の平均的な人間の概念からはある意味でまだ遥かにかけ離れた、崇高で霊的な宇宙の美しいイメージがどのように現れるかを描写しました。ティコの存在の奥深くに隠されていたこれらすべての事柄は、彼の人生の中で自らを現すにあたって、最大の困難を抱えていたのです。

これはティコの人生の、およそ最初の14年間に含まれていました。その後、火星は水瓶座に入りました。これは、ティコ・ブラーエが30歳になり、ヴェン島に居を構えた時期に反映されており、その時に火星は留（ループ）を描き始めました（以前の書簡で指摘したように、出生前の出来事はその後の人生に反映されます）。この留は、彼の死を反映する時期まで続きました。

水瓶座の火星は、ある存在の領域において「切り離されてしまったもの」を結合させようとする、魂の衝動を反映することがあります。そのような衝動は、極めて並外れた方法で現れることがあります。例えば、スコットランド女王メアリー・スチュアートは、自身の出生天宮図の水瓶座に火星を持っていました。彼女はあまりに早く亡くなったため、地上の人生の中でこの火星の（衝動の）実現を真に達成することはできませんでした。しかし、この魂が霊界に入った後、彼女の息子であるジェームズ1世がイングランドとスコットランドを一つの王国に統合したことを思い描くなら、私たちはそのような「統合・結合の衝動」の一例を得ることができます。

ティコ・ブラーエの場合、私たちは彼がなぜ、自身の前の転生からはあまりにかけ離れているように思える職業（天文学者）を選んだのか、という問いへの答えを見出すことができます。前回の書簡で、私たちは彼がパルジファルの母である「ヘルツェロイデ」として転生していたことを指摘しました。この魂が霊界から見守ることのできた息子の運命の中で、彼女は、パルジファルが聖杯の担い手となる能力に向けて劇的な進化を遂げていく姿を感知することができました。パルジファルは、自らの魂の力をどれほど苦痛に満ちていようとも発展させることを通じて、キリスト存在を自らの全組織の中に受け入れることのできた人物だったのです。

さまざまな物語の中で描写されている「聖杯の城」の輝かしさは、聖なる杯の担い手となる者の内部における、この「魂の宇宙」の秘密の啓示にほかなりません。キリスト教以前の時代において、自然や宇宙の顕現の中に霊を感知していたそれらすべての聖なる神秘は、今や人類の魂の内部へと引きこもっていたのです。ティコ・ブラーエの個性は、ヘルツェロイデとしての転生において、この変化を認識する機会を得ていたのでした。

したがって、彼がティコとしての転生において、それとは正反対の「外なる宇宙」へと向かったことは奇妙に思えるかもしれません。しかし、「水瓶座の火星」の言語で語るならば、星々という外なる宇宙と、魂という内なる宇宙との間に「結合」を創り出すことこそが、まさに彼の衝動だったのです。

より絵画的な言語を使うなら、彼は次のことを知っていました。伝説によればオシリスがテュポンによって殺されたように、イシスはルシファーによって殺され、そのイシスの亡骸が目に見える星々になったのだということを。ティコは、魂の内なる宇宙を創り出す「癒やしと蘇生の力」をも知っていたため、内なる宇宙と外なる宇宙を結合させることによって、イシスを再び復活させたいと願ったのです。

言い換えれば、ティコ・ブラーエはすでに誕生前の霊界において、いわばイシスの残骸と見なさざるを得ないもの（＝物質的な星々）の中へと分け入り、それらを霊化し、人間の魂における創造的な現実として彼が知っていたものと結合させることを決意していたのです。彼は、星々が自然の最も雄弁な顕現であり、魂における目に見えない宇宙とは矛盾するように思える「目に見える宇宙」の、最も極端な対極の端にあるものであると認識していました。それゆえに彼は、星々の賢者となるだけでなく、物質の「錬金術」の賢者となることも決意していたのです。

これこそが、彼が占星術の系譜に沿って、星の宇宙と人間の運命との結びつきを確立しようと尽力した理由です。彼は、人類の意識がすでにそのような知識から遥かに遠ざかっていた時代にこれを行いました。そ

れでありながら、彼は現代の科学研究と全く同等の方法で、その軌道における星々を研究することができたのです。そしてこれこそが、彼がコペルニクスの地動説を認めることを拒んだ理由でもあります。

コペルニクスは、定位置に固定された中央の太陽の周りを、地球が他の惑星とともに移動するという思想を導入しました。それは、地球が太陽系の中心に固定され、太陽と惑星が地球の周りを回っていると想像されていた、古いプトレマイオス主義の天動説に取って代わるものでした。ティコ・ブラーエがコペルニクスの思想を拒絶したのは、地球が太陽の周りを回る従属的な家臣として「一粒の塵」へと格下げされることを想像するのが、彼にとって不可能な思考だったからです。

彼は正しくも、コペルニクス・システムの導入が、星の宇宙を「命のないメカニズム」や「時計仕掛け」として捉える宇宙観を生み出すことになるだろうと予期していました。ここにもまた、彼の深い「統合・結合への衝動」がありました。彼は、人間の内部にある生き生きとした魂の宇宙と同質であるような、宇宙の捉え方を捜し求めていたのです。彼は、地球を除く惑星が太陽の周りを回り、しかしその太陽が、中心に固定された地球の周りに軌道を描くという、独自の太陽宇宙システムを考案しました。

それでもなお、彼はこの結合の衝動を完全に実現することはできませんでした。彼はその衝動を持ってはいましたが、彼が「世界の二つの半分」とみなしていたもの――星々へと手を伸ばす自然界と、人間の魂の世界――が一つであるような宇宙を、思想的・科学的に創り出すことができなかったのです。

この困難の理由は何だったのでしょうか？

火星が「魚座」に入るという出生前の出来事の反映は、ティコの56歳の人生に落ちました。これは、まさに彼が亡くなった時期にあたります。したがって、私たちは彼の出生の時に魚座に火星を見てはいるものの、彼はこの星座における火星のアスペクトを、地上で真に展開させることはなかったのです。もし彼が地上で生き長らえていたなら、そのような「結合の宇宙」を精緻に作り上げる強さを持っていたでしょう。「山羊座」と「水瓶座」の火星は、世界の中で分裂しているものを霊的に結合させる衝動を与え、「魚座」はその衝動を「知恵の宇宙」として実現する能力を提供するからです。

しかし運命は、ティコ・ブラーエに対して異なる決定を下しました。彼は、魚座の火星におけるこの最後の側面を「犠牲」にしたのです。このことは、彼が自身の宇宙システムに対して健全な数学的基礎を創り出すことができず、彼の死後にそのシステムが忘れ去られてしまったという事実に現れました。また、彼は自身の弟子であり協力者であった有名なケプラーに、コペルニクス・システムの誤りを確信させることもできませんでした。こうして、コペルニクス・システムに基づく宇宙の機械論的な側面が前面に躍り出て、科学をますます支配し始めることになったのです。

魚座の火星は犠牲になりましたが、ティコの衝動が実現されるべき時はまだ来ていませんでした。それは彼の死後、霊界において「復活」し、この魂が再び肉体を持って転生し、過去に拒まれたことを実現できるようになる未来へと、段階的に働きかけています。前回の書簡ですでに指摘したように、彼は彼の後に生きた人々へインスピレーションを与えてきましたし、今もなお与え続けています。

星の言語で語るならば、彼のインスピレーションは、まさに彼が地球上で肉体化することを許されなかった、あの「魚座」の星座からやってきているのです。前回の書簡で語られた2人の人物（フロアシハマーとシェリング）のうち、一方は魚座における土星と木星の「合（コンジャンクション）」の時期に生まれ（フロアシハマー）、もう一方はこれら2つの惑星がそれぞれ「魚座」と「乙女座」で「衝（オポジション）」になる時期に生まれました（シェリング）。そして、今日においてティコの真の弟子である人々もまた、魚

座、あるいはその反対側の星座において、土星と木星の合または衝を持っているという事実が、その証明となっているのです。

ティコは、自然と精神との間の「真の結合」を目指す思想や衝動を触発しています。人は彼を、ある意味で「霊的一元論者」と呼ぶことができるかもしれません。

前回の書簡で、私たちはティコ・ブラーエからインスピレーションを受けた人物として、シェリングとフロアシハマーの名を挙げました。シェリングは、フィヒテとヘーゲルという2人の高名な哲学者の時代に生きました。一時期、彼は彼らの哲学の系統に従っていましたが、やがて独自の道を歩むようになります。フィヒテの概念から身を離したシェリングは、「哲学は、自然の法則が精神の領域における法則と同じであり、またその逆も然りであることを証明できなければならない」と宣言しました。

これら両方向への探求が出発すべき地点は、無限なるものの中、すなわち「観念的なもの」と「現実的なもの」、あるいは「自然」と「精神」の、絶対的な同一性の領域以外のどこにもあり得ないというのです。それゆえ、彼が後半生において精緻に作り上げた哲学は、「同一哲学」と呼ばれました。

ここには、極めて明確な「統合」のインスピレーションが見て取れます。また、フロアシハマーの哲学の中にも、私たちはこの傾向を感知することができます。彼は「イマジネーション」の原理を、精神の領域だけでなく、自然界における「客観的な創造の力」として捉えたのです。

現代における出来事（あまりに繊細なため、ここでは描写できませんが）は、ティコ・ブラーエが現在、彼のインスピレーションにおいてさらに先へと進んでおり、普遍的な統合という強力な衝動を準備していることを示しています。彼は単に哲学的な意味での統合をインスパイアしているだけでなく、人間の文化の中で、無意味で危険な断片へと細分化される危機に瀕しているものを、実質的かつ霊的に結合・調整しようとする熱意を目覚めさせられるあらゆる場所において、働きかけているのです。

ティコ・ブラーエは、「黄金の三角形」の弟子であり、その教師になったと言うことができます。人類の文化世界において、矛盾や対立する力、あるいは傾向が存在する場所ならどこであれ、彼は「三位一体」の思想をインスパイアする存在の一人です。なぜなら、それらがどのような肉体存在の衣服をまとっていようとも、「極性と矛盾としての二者」は、人間の世界において常に破壊と混乱の源泉となるからです。相反する力の間に「第三の原理」が介入して初めて、抵抗し合う力たちの調和と調整を確立することができるのです。

このようにして、私たちが語っているこの個性の魂は、「三元性（社会三分節、あるいは知識の三元性など）」の触発者となっています。なぜなら、それが人類の社会的な側面であれ、知識の側面であれ、三元性こそが「真の結合」をもたらすものだからです。

月刊天文学書簡の読者の皆様へ
〔キリストの時代における星々の出来事〕

●基本的な視点

シュタイナー的霊学に基づくアストロソフィーの実践として、
キリスト事件を宇宙的プロセスとして再構成しようとする試み。

伝統的占星術から脱却した
「新しい星の知恵（アストロソフィー）」の立場を明確にし、
それをキリストの地上生涯に適用して読み解くことを主題としている。

現代は「自由の時代」であり、
自我の発達が進んだ人類は、星による支配や予言を望まない。
古代では星々は「神々の衣服」として体験され、神秘の中で用いられたが、
自由の進展に伴い神々は高次へ退き、星は沈黙した。
その代わりに星は
人間の霊的本質（特に霊我・霊人）を映す巨大な「鏡」となった。
新しい宇宙論の課題は、この鏡を通じて
人間が自らの高次の霊的イメージを読み解き、
将来的に新しい宇宙を創造していくことにある。

キリストの生涯は、この新しい見方の中心的実例である。
キリストは人間イエスとは区別され（神にはホロスコープは存在しない）、
太陽の霊として地球に臨在し、
黄道帯を巡る太陽の運行と完全に調和しながら、
各星座の霊的力を地球へと刻印した。
これにより、古月紀以来の宇宙的「堕落」（世の罪）を取り除き、
地球が将来「新しい太陽」となる準備が進められた。
福音書の記述は、この宇宙的プロセスの地上的反映として理解される。

●要点

・書簡の終了と新しい知恵の必要性

2年間の『月刊天文学書簡』を終了。
継続には性質の根本的変更が必要で、支持基盤がまだ小さい。
新しい星の知恵は文化を豊かにし、社会的困難の多くを回避しうる。
未来の種は今蒔かれるべき。
伝統的占星術（予言中心・エゴイズムを満たすもの）の前提を
持ち込むことは不可能。

・星と人間の関係の変化

星はもはや人間に「影響」を与えない。

出生時に運命と星の運行の調和が整えられたのは、
霊的存在たちの働きによる。
人間は星の世界に自らの霊的本質を刻印し、
新しい宇宙を創造する課題を現代から開始する。

・キリストとイエスの区別、年代設定

イエスは人間で出生天宮図を持つが、
キリストは神であり特定の時刻に縛られない。
洗礼を西暦31年1月6日（公現祭）、磔刑を西暦33年4月3日と想定。
洗礼から死まで約2年3ヶ月。星の出来事がこの年代を裏付ける。

・洗礼時（31年1月6日）の惑星配置

土星（双子座で留）、木星・火星（牡羊座）、
太陽・水星（山羊座）、金星（水瓶座）、月（天秤座〜蠍座）。
伝統的アスペクトとして目立たないが、進化の知識から深く読み解く。

・太陽の運行とキリストの顕現（主な対応）

太陽は外惑星と内惑星のバランスを取る調和の力。
キリストはその力を地上に体現し、
3回の過越（太陽が牡羊座へ3回移動）が道標となる。

牡羊座：
「世の罪を取り除く神の小羊」（知恵の霊・最高原理）。
ヨハネの証言、初期の弟子・カナの婚礼・ニコデモなど。
ロゴスとしての創造的思考の救済。

牡牛座：
癒やしのロゴス。
朝に霊的太陽の力を集め、夕方に癒やしとして費やす行為。

双子座：
自我の神秘の守護者。
12使徒の選定・任命。
血縁の古い秩序を拒み、宇宙的同胞愛を確立。

蟹座（土星合の近く）：
インボリューションからエボリューションへの架け橋。
頭部（過去の種・死）から意志・行為への成長。
寓話（種と刈り入れ）。

獅子座：
血液・自我の深みの「獅子」（破壊的衝動）の克服。

ガリラヤ湖の嵐、ガダラの汚れた霊。
ヤイロの娘・患う女の癒やし。地球への門。

乙女座以降（暗い部分）：
魂の世界での錬金術的変容・カルマの統御。
12使徒の派遣（新しい太陽の光線）。
ヨハネの斬首の変容。
仮庵の祭り（天秤座）、神殿奉献（山羊座）、
ラザロの蘇生（魚座：肉体への入り）。

・黄道帯の象徴的ヴィジョン

下半分（暗い部分）を人類の高次構成要素の器
（三日月の器：魚座＝肉体、水瓶座＝エーテル体、
山羊座＝アストラル体、射手座＝自我など）として捉え、
上半分をキリストの7元性の顕現として見る。
両者が一体化して「円」（聖杯・新しい太陽）となる。

●本文

本号をもちまして、2年間にわたる『月刊天文学書簡』の発行は幕を閉じることとなります。しばらくの間、これらの書簡をさらに次の期間も継続すべきかどうかという問題がありました。私たちは、もし継続を決意するならば、この出版物の性質を完全に変更しなければならないだろうという確信に至りました。その一方で、この書簡の読者や支持者の基盤は、より大きな規模で立ち上げるにはいまだ小さすぎるようにも思われます。ある程度の準備期間を経ればそれも可能になるかもしれませんが、現在のところ、私たちはこの書簡を一度終了することを決定いたしました。

新しい星の知恵の応用という問題について、もう一言お伝えしておきます。この知恵を応用できる人生や知識の領域は数多く存在します。一般的に言えば、もし星の世界の諸相がもっと考慮されるようになるなら、それは文化的な生活を計り知れないほど豊かにすることを意味するでしょう。私たちが生きているこの惑星上の事実や出来事の整理と判断は、霊的な確信と尊厳の領域へと高められるはずです。もし私たちの文化が、星の世界の出来事の中に現れている壮大な霊的事実に基づいて導かれるなら、人類が現在直面している社会的困難や破局の多くは回避できるに違いありません。私たちはすでに第一書簡において、人類の未来の霊的文化は、新しい星の知恵をますます必要とするようになるだろうと指摘しました。たとえ、この衝動を大規模に実現するための時代がまだ十分に熟していないとしても、未来の種は「今」蒔かれなければならないのです。

私たちは、一つの問いについて絶対に明確にしておかなければなりません。それは、伝統的な占星術の諸相や前提を、このような新しい見方の中に持ち込むことは不可能であるということです。このことは、これまでの書簡の過程を通じても明らかになっているはずです。伝統的な占星術の目的は、主として「予言（予測）」にあります。それは多くの場合、不確実な未来に対する人々の好奇心やエゴイズムを満たすだけにすぎません。不幸なことに、これこそが、この占星術が極めて頻繁に、ほとんどビジネスのような基盤の上で機能せざるを得ず、それゆえにビジネス界における惹きつけや販売拡大という主観主義的な心理学に巻き込まれてしまう理由でもあるのです。

本書簡において、私たちは宇宙論が古代の神秘にその根源を持っていることを示そうと努めてきました。神殿の聖域において、それは秘教的な教えの弟子たちを自らの課題の成就へと導くために使用されていたのです。その時代以来、これまで密閉されて守られてきたこの星々の偉大なる知恵は、あらゆる種類のルートを通じて外部の世界へと分散してしまいました。それは、もはやそれを完全には理解できない人々の手に渡り、真の意味や精神がずっと以前に消え去ってしまった、規則という名の「空っぽの殻」へと劣化してしまったのです。

現代という時代は、星々の真の知恵を再び見出し始めなければなりません。ルドルフ・シュタイナーを通じて、新しい宇宙論の獲得への門は広く開かれました。しかし何よりもまず、私たちは人間の進化における一つの重要な事実、すなわち「自我の発達」を認識しなければなりません。

例えば、古代エジプトにおける社会生活と、私たちの現代の条件とを比較してみるなら、それらの過去の時代からどれほど巨大な変化が起こったかに気づくことができるでしょう。古代エジプトにおいて、社会有機体は階層的に構築されていました。神官や王たちは、民衆の認められた絶対的な指導者だったのです。彼らは臣下に対して無制限の権力を持っており、いわば神々の地上における代表者として行動していました。

しかし私たちの時代においては、民主主義的な原則こそが社会有機体の理想であると考えられています。現代の人類は「自我意識」を持つようになり、人々は他人に指導されることを望みません。彼らは自分自身の問題に対処することができ、また同胞である人間との調和と合意のもとで、社会的な必要性を整えることができると考えています。それゆえ、私たちの時代に古い星の知恵の応用を再導入することは不可能です。現代の人々は星によって支配されることを望んでいませんが、それは正当なことです。私たちは、特に個人の運命という繊細な事柄において、自分自身の主人になることを学ばなければなりません。すべては「自由の時代」の要求に従って整えられなければならないのです。

その一方で、私たちは、人間と星の宇宙との関係が、過去2000年の間に著しく変化したということも認識しなければなりません。人類における自由の発達という事実は、単に人間の視点からだけ考慮することはできません。それは、神々の相応する行為なしには不可能だったはずです。

私たちはこれまでの書簡の中で、古い時代において星々は「神々の衣服」として体験されていたと度々指摘してきました。古代の神秘における霊視者は、それらの衣服という媒介を通じて神々を視ることができたのです。しかし、自由の時代において、神々はさらに高次の領域へと退かれました。これが――別の言葉で表現されただけの――「人間の自由」という事実の本質なのです。神々は「衣服」を後に残していきました。星々は、時計がその製作者の本来の意図に従って動くかもしれないのと同じように、神聖な存在たちによって刻印された性質をいまだに帯びています。

したがって、現代の霊視は、星が人間に対して与える「影響」について、もはや語ることはできないという事実を認めています。星々は「沈黙」したのです。それでもなお、現代の霊視はもう一つの重要な事実をも認めています。それは、人間が個人の出生時間との関連において、自らの運命と星々の運行との間に調和が確立されるような方法で、この物理的な世界に入ってくるということです。

現代の精神にとっては奇妙に聞こえるかもしれませんが、人類の霊的進化と強く結びついている強力な霊的存在たちが、星の存在たちのために、この結びつきを整えてくれたのです。それを通じて、人類の最も深遠で崇高な課題の一つが確立されました。それは、極めて遥かな未来にのみ完全に実現されるものです。

人間は、自らの霊的な本質を星々の世界へとますます刻印していくようになり、そうして来るべき遥かな時代において、新しい宇宙をさえ創り出すことになるのです。しかし、人間はこの進化を、現代という時代から始めなければなりません。

星々は、人間の精神の巨大な「鏡」となったのです。

その鏡を覗き込むことで、私たちは自分自身の存在の背後に立ち、その成就を待っている大いなる霊的なイメージを感知することができます。この「霊人」、あるいは「霊我」の容貌を、星々の文字の中から読み解くことこそが、新しい宇宙論であり、新しい占星術の課題なのです。この衝動は単に正当化されるだけでなく、未来における文化的な必然性となるでしょう。

〔キリストの時代における星々の出来事〕

残されたわずかな歴史的資料から、キリストの生涯の正確な日付を突き止めることは極めて困難です。伝統的なイエスの誕生の日は「紀元前1年12月25日」とされています。しかし、現代の歴史研究はこの日付の信憑性を疑問視しています。今日では多くの人が、イエスは紀元前4年かそれ以前に生まれたと考えていますが、この想定は完全に年代学的な仮説に基づいています。すべては「ローマ建国の年」を何年とするかにかかっており、なぜならこれこそが、福音書に記録されている同時代の歴史的出来事の日付を特定するローマ年代学の出発点だからです。通常、ローマ建国の年は紀元前753年とされていますが、他の有力な資料は紀元前747年を示唆しています。したがって、単なる歴史研究だけで真実の時間を突き止めることは非常に困難なのです。

磔刑の年も容易には確定できず、意見はかなり分かれていますが、一つの古い伝統は「西暦33年4月3日」を伝えており、ルドルフ・シュタイナーもこれこそが歴史的な日付であることを確認しています。

もう一つの問題は、パレスチナにおけるキリストの活動の始まりを告げる「ヨルダン川での洗礼」から、「ゴルゴダの丘での死」までに経過した時間です。福音書によれば、洗礼はイエスが30歳の時に行われ、それは最も古いキリスト教の祝祭の一つである「公現祭（エピファニー）」、すなわち「顕現」の日に起こりました。

これまでの研究結果（可能な限りこれらの書簡の過程で示していきます）から、洗礼は西暦31年1月6日に行われたと想定することができます。もし私たちが、イエスの誕生の伝統的な日付を「紀元前1年のクリスマス」として受け入れるなら、イエスは西暦30年のクリスマスの時に実際に30歳になっており、その数日後、西暦31年の公現祭（1月6日）に洗礼が行われたことになります。そうなると、洗礼からゴルゴダでの死までの期間は「2年と4分の1（2年3ヶ月）」にすぎないことになりますが、これはいくつかの観点から見て、極めて蓋然性が高いものです。

これらは最初、非常に疑わしく聞こえるかもしれませんが、私たちの説明の過程を通じて、星の世界における出来事が、この著作の基礎となっている年代学的な仮定の多くを裏付けていることを理解することになるでしょう。キリストの誕生より何千年も前、この出来事は古代ペルシャの古い「星の知恵」の参入者たちによって予言されていました。今日、私たちは振り返り、新しく創り出された星の知恵（アストロソフィー）を用いてキリストの生涯に関する事実を見出すことができ、また福音書の記録に対する理解を築くこともできるのです。

私たちはまずは、イエスの誕生についての詳細には立ち入りません。可能であれば後ほどそうするつもりです。人物の生涯を描写するにあたって出生（天宮図）から始めるのが通例ですから、これは奇妙に思えるかもしれません。しかし、このケースにおいては全く事情が異なります。私たちは「イエス」と「キリスト」を区別しなければならないのです。イエスは肉体を持って生まれた「人間」でしたが、キリストにおいて私たちが関わっているのは、人間を遥かに超越した「霊」であり、自らを「天なる父の御子」であると真に語ることのできる存在でした。

イエスは人間であり、肉体の担い手でした。彼については、出生天宮図（ホロスコープ）を計算することができます。しかし、キリストはヨルダン川での洗礼の瞬間にイエスの肉体に入り、この肉体の中に約3年間留まった「神」であり、神にはホロスコープは存在しません。神は、特定の固定された一時間に縛られることはないのです。

神々は星々の生命とリズムを支配しているのであり、全宇宙がいかに威厳をもってキリストの中に、そしてキリストの行為の中に現れていたかを私たちは見ていくことになるでしょう。したがって、私たちはキリストの言葉や行為の「霊的な意味」を見出すために、天空で同時に起こっていた出来事（星の文字）を読み解かない限り、過去の星の出来事（例えばイエスの出生天宮図など）に目を向けることはできません。それゆえ、私たちは洗礼の時期であると考えている「西暦31年1月6日」の時点における惑星の位置の描写から始め、その後の数年間における惑星たちの身振りや動きを追っていくことにします。

西暦31年の公現祭（エピファニー）において、惑星は以下の位置にありました。

土星：「双子座（の領域）」にあり、この時期にそこで留（ループ）を描いていた。
木星：「牡羊座」に位置していた。
火星：「牡羊座」に入ったばかりであった。
太陽：「山羊座」にあった。
水星：同じく「山羊座」に入っていた。
金星：「水瓶座」に位置していた。
月：「天秤座」と「蠍座」の星座の間にあった。

これは伝統的な占星術の意味においては、それほど目を見張るようなアスペクトではありません。しかし、黄道帯と惑星に関連して世界の進化を学んできたこれまでの知識の助けを借りることで、私たちはこの配置からさらに深く読み解くことができるということを、これから見ていくことになるでしょう。

私たちがヨルダン川での洗礼の日付とする西暦31年1月6日、太陽は山羊座に位置していました。そこから太陽は水瓶座と魚座を通過し、西暦31年の過越の祭りの時期に牡羊座へと入りました。これこそが、ヨハネによる福音書第1章、第2章、第3章で私たちが目にする記述の時期であったに違いありません。そこには、洗礼者ヨハネの証言、最初の5人の弟子の選定、カナの婚礼、エルサレムの神殿におけるイエス、そしてニコデモとの対話が含まれています。これに続いて、キリストはガリラヤへと向かい、今や私たちは、他の3つの共観福音書で読むことができる「5千人の給食（五千人のパンの奇跡）」の時期に至るまでのすべての奇跡を行い、言葉を語られたのだと想像することができます。

ヨハネによる福音書第6章によれば、この「5千人の給食」の奇跡は、西暦32年の過越の祭りの時期に起こったに違いありません。この後、西暦33年の過越（その直前に十字架刑が行われました）に至るまで、さらに出来事に満ちたもう一年が経過しました。

このように、キリストの生涯には3回の過越の祭りがあり、当然のことながら、太陽は3回にわたって牡羊座の星座へと移動したことになります。これら3つの出来事は、イエスの肉体におけるキリストの顕現に向けた、3つの決定的な道標となっているのです。

古くから太陽は、私たちの太陽宇宙において、いわゆる外惑星（土星、木星、火星）と内惑星（金星、水星）との間のバランスを創り出す「調和（均衡）の力」と見なされてきました。キリストの生涯との関連において太陽を見るならば、キリストは太陽の運行と完全に調和しながら、地上での行為や業（わざ）の中に、この調和の力をもたらした、あるいはそれを体現したということが分かります。したがって、この調和をもたらす活動は、黄道帯における太陽の位置に応じて、常に人生の異なる領域において自らを現したのです。

西暦31年の過越の時、太陽は牡羊座にありました。それゆえに私たちは、天空におけるこの出来事に霊的に対応する領域の内部に、キリストの調和の力の顕現を見出すことができるはずです。そして実際に、それを見出すことができます。ヨハネによる福音書第1章の中で、私たちは洗礼者ヨハネが「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と言うのを耳にします。これは過越の直前、すなわち太陽が牡羊座にあったキリスト教のイースター（復活祭）の時期に対応して起こりました。そのとき洗礼者ヨハネは、イエスがヨルダン川の岸辺を歩まれる際、彼を貫いていた霊的存在の顕現を霊視したのです。彼はイエスの背後に、古くから秘教の参入者たちに知られていた霊的存在、すなわち「神の小羊」を視ました。この「小羊」とは、太陽が牡羊座にあるときにイエスの中に臨在していた、目に見える牡羊座の星座の背後に隠された霊的現実にほかなりません。

「神の小羊」とは誰なのでしょうか？

私たちが感覚で人間を捉えるとき、私たちはその地球的な肉体だけを見ていますが、それが人間のすべてではないことを私たちは知っています。この肉体という形態の内部で、感覚には見えないとしても、他の力――私たちはそれらを「体」と呼ぶことができるでしょう――が活動していることを私たちは知っています。霊視者は、超感覚的な器官によってそれらを見ることができます。肉体は「生命活動」によって貫かれています。人間は一人ひとりが、その生まれ持った運命に従って身体を構築する、個人の生命力を持っています。このように、私たち一人ひとりが個人の「生命有機体」、あるいは秘教において「エーテル体」と呼ぶものを持っています。

また、人間の有機体は、個別化された「意識の力」によっても貫かれています。霊視者はこれらの力を「アストラル体」として目撃します。さらに、人間は、私たち一人ひとりが他者から切り離された個の存在として自分自身を認識することを可能にする力によっても貫かれています。これが「自我」です。しかし、人間は内部にあるこれらの超感覚的な力の単なる集積ではありません。そこには目的があります。自我の認識は、私たちが地球上での生活を通じて、そして転生から転生を重ねる中で、自らの構成要素（アストラル体、エーテル体、肉体）を進化させることを可能にするのです。

そのとき、低次の構成要素から変容せしめられた「本質」は、低次の構成要素自体の存在とは別に、異なる高次の現実を構成し、これらは超感覚的な「体」として霊視されるようになります。このようにして、人間は変容されたアストラル体（秘教の言語における「霊我」または「マナス」）、変容されたエーテル体（「生命霊」または「ブッディ」）、そして変容された肉体（「霊人」または「アートマン」）を持つことになります。したがって、人間は次の7つの「構成要素」から成り立っています。

肉体

エーテル体
アストラル体
自我
霊我（変容されたアストラル体）
生命霊（変容されたエーテル体）
霊人（変容された肉体）

しかし、7つの構成要素から成り立っているのは人間だけではありません。すべての存在、そして霊的ヒエラルキーの存在たちもまた、7つの高次の構成要素を持っています。キリスト存在もまた7つの構成要素からなる存在ですが、その「高次の構成要素」は人類のものよりも遥かに崇高です。キリストの最高の原理は、古代から「神の小羊」と呼ばれており、キリストがヨルダン川の岸辺を歩まれる間に洗礼者ヨハネが目撃したのは、まさにこの原理だったのです。その宇宙的な表現が、牡羊座の星座にほかなりません。

「神の小羊は世の罪を取り除く。」では、「世の罪」とは何でしょうか？

それは、私たちが第十一書簡と第十二書簡において「古月紀」の進化の進展に関連して描写した、大いなる宇宙的な「堕落」のことです。旧約聖書に描写されている「楽園の喪失」は、地球進化の内部において起こった、この宇宙的堕落の反映でした。これこそが、「神の小羊が取り除く」ところの「世の罪」なのです。

したがって、私たちは今、イエスの肉体に宿りながら太陽の力を体現した、地上におけるキリストの力強い顕現を目撃しなければなりません。太陽は宇宙において調和（均衡）をもたらす力を持っています。キリストは、この調和の力を苦しみの中にある地球へと引き降ろしました。この調和をもたらす活動こそが、「世の罪を取り除くこと」なのです。洗礼者ヨハネがそのヴィジョンを得た瞬間、太陽は牡羊座にありました。地球上において、宇宙の調和の力が「神の小羊」として明かされたのです。

私たちは今、黄道12星座における火星（第十二書簡）に関連して描写した「世の罪」、すなわち大いなる堕落のイメージを携え、それを「太陽」の視点から見つめることができます。12星座における火星は、堕落のイメージと、その救済への宇宙的な希望を表しています。もし私たちが12星座における太陽を見るならば、私たちは人生のあらゆる領域において、キリストの救済し調和をもたらす力を発見することになります。牡羊座の太陽――すなわち「世の罪を取り除く神の小羊」の顕現――は、私たちの時代の始まりにパレスチナで起こったそれらの出来事における、キリストの調和に満ちた「太陽活動」の力強い序曲なのです。

自らの犠牲を通じて到来し、世界を罪から救うであろう神の小羊の予言は、ヘブライの人々がその民族組織を形成した初期の時代から、彼らの内部に生きていました。それは、毎年行われる「過越の小羊」の儀式の中に生きていたのです。これに加えて、エルサレムの神殿で神官たちによって執り行われていた、もう一つの儀式がありました。毎年、一頭の雄羊に民衆の罪が象徴的に背負わされ、深い谷の岩だらけの深淵へと投げ落とされていたのです。

しかし時が満ちたとき、ヨルダン川の岸辺に立つ存在の中に、世界を罪から救うために今や本当に世に到来した「神の小羊」を最初に霊視したのは、洗礼者ヨハネでした。これはもはや象徴ではなく、今や「現実」だったのです。そして彼は、自身が見たこの決定的な出来事を人々もまた目撃できるようにと、水の中で人々に洗礼を授けたのでした。

これは西暦31年の過越の時期、太陽が牡羊座の星座にあったときに起こりました。私たちは今、太陽が黄道帯のそれに続く星座を通過していくにつれて、人間の、そして地上の存在の様々な領域において、キリストの顕現が起こっていったのだと想像しなければなりません。

キリスト存在は太陽から到来し、その天体に住まう霊的ヒエラルキーたちの指導者でした。そこでキリストは、知恵の霊（キリストの最高の原理である「神の小羊」）の指導者として太陽を通じて働き、この階層の輝かしい「宇宙の知恵」こそが、最終的に目に見える太陽の光として現れたのです。このようにして、キリスト存在は古代から霊視者たちによって感知されていました。

古代ペルシャ文化の大いなる創設者であるゾロアスターは、目に見える太陽の彼方にこの存在を視て、それを太陽の大いなるオーラを意味する「アフラ・マズダ」と呼びました。それらの古代の参入者たちは、その臨在によって地上の太陽の人間（※霊化された人間）が太陽の光を感知することのできる、その「存在」を目撃していたのです。彼らは、目に見える太陽が黄道12星座を通過するのとちょうど同じように、この臨在の霊的な顕現を「12の壮大なイマジネーション」として体験しました。したがって、彼らが太陽を見上げるとき、彼らは太陽の光の後ろで大いなる「太陽の霊」が働いており、目に見える太陽の光線の衣服をまとって、地球へと贈り物を降ろしてくれているのだということを知っていたのです。

彼らはまた、この存在が段階的に地球へと下降し、時が満ちたとき、地球の圏域へと入り、その存在の「12なる霊的な光」を地球へと刻印していく姿をも視ていました。その時以来、天空の太陽は、かつて「世界の光」の直接的な活動であったものを、単なる「作業」として継続しているにすぎません。

西暦31年のイースター（復活祭）から西暦33年のイースターまでの期間、太陽が黄道帯を「2回」通過する間に、この太陽の霊の活動が地球へと刻印されました。太陽の霊は、太陽が12の星座を通過するその経路に従って「12の放射」として地球への受肉を果たし、地球へと「命」を吹き込んだのです。

このように、パレスチナでの出来事の前と後とでは、太陽の活動に大きな違いがあります。ゴルゴダにおける死の後、地球には太陽霊の12の光線が授けられました。それは、はるか遠い未来において、地球自身が宇宙における「新しい太陽」となるという自らの課題に向けて、地球を準備させるためでした。

だからこそ、私たちは前回の書簡において、ティコの出生天宮図における「開かれた空間（星が配置されていない空間）」の重要性について語ることができたのです。ゴルゴダの出来事以前であれば、このようなことは不可能だったでしょう。当時はまだ、太陽そのものが直接的に活動していたからです。またそれこそが、ゴルゴダ以前の3年間における太陽霊の12なる放射を、黄道帯を通過する目に見える太陽の運行という「鏡」の中に、私たちがいまなお体験できる理由でもあります。私たちはただ、キリストが特定の「出生天宮図」に縛られてはいなかったという事実を認識していなければなりません。なぜなら、太陽の霊は、その連続的なあらゆ経路において直接的に留まることで臨在していたからです。

私たちが今、太陽の内部を見つめ、私たちの時代の始まりにパレスチナで何が起こったのかを、鏡の中のようにそこから読み解こうとするなら、私たちは太陽を通じて、出来事の全背景の一部分、あるいは一つの側面にすぎないものを経験しているのだという事実もまた認識しなければなりません。なぜなら、黄道帯は太陽と月だけでなく、他の5つの惑星の中にも自身を反映しているからです。しかし、他の惑星たちの活動を自らの活動の中に集約させることができるのは、特に太陽にほかなりません。太陽に関連する出来事の中には、私たちは常に、いわば他の惑星たちの影響の「響き」を見出すことができるのです。

第十三書簡で指摘したように、太陽は「形態の霊（エクスシアイ）」の活動と結びついています。地球上の出来事や対象を「現実」のものにしているのは、宇宙における太陽の臨在です。目に見える太陽の光が、空間において自然界の対象を私たちの目にとって存在するものにしているように（暗闇の時間帯には、人工的な光だけがそれらを可視化します）、太陽の霊的な活動は物理的な「現実」を創り出しているのです。太陽の活動は、宇宙における地球の極性的な影響を間接的に通じてではありますが、「経験的現実主義」をもたらします。

私たちはすでに、牡羊座、すなわち「小羊」における太陽の位置について語りました。さらにそれは、私たちの内部に現れるような思考と私たちが呼ぶものだけでなく、神々の中に生きている「思考」そのものが起源をもつ「高み」に住まう光としての、キリストの顕現でもあります。私たちは今、太陽が牡羊座において提示している鏡の中に、西暦31年の過越の時期が、キリストの顕現において「宇宙的および人間的な思考の神秘」へと参入する期間であり、そこにおいて思考の真の本質が明白にされた時代であったのだと、いわば想像し、読み解くことができます。その思考とは、進化全体における「太古の創造的な力」としての思考です。

キリストの時代、人類は進化の潮流へと緩やかに、しかし確実に突入しつつあり、その結果として、最終的には創造的な霊的実体としての「思考」や「イデア」の体験を失うことになりました。私たちはその転換点を、すでに「プラトン的思考からアリストテレス的思考への移行」の中に見て取ることができます。もし、この発展に対して霊界が対抗作用を置いていなかったなら、人類は自らの未来を失っていたことでしょう。キリストはこの衰退に対する「守護者」であり、私たちは福音書の中に、生き生きとした世界創造の実体としての思考の認識の「救済者」としてのキリストの行為を、わずかに明かしている特定の一節を見出すことができます。それはまるで、カーテンの後ろから時折差し込む一筋の光が貫く暗い部屋の中に座っている人が、この顕現を目撃するかのようです。

ず、それはヨハネによる福音書の導入の言葉にある、いわゆるヨハネの「証言」の中に現れています。

「初めにロゴス（言葉）があった。ロゴスは神とともにあった。ロゴスは神であった。このロゴスは、初めに神とともにあった。万物は神によって成った。成ったもので、神によらずに成ったものは何一つなかった。」

これこそが、肉となったあらゆるものを創造した、神々の思考（イデア）の栄光であり、それゆえに「キリストを受け入れた者たちには、神の子となる力を与えられた」のです。

さらに、私たちはヨハネによる福音書第3章に記録されている、ニコデモとの夜の対話の中に、世界のロゴス（言葉）としてのキリストのこの顕現の一端を見出すことができます。ニコデモは、自らの民族の秘教的な教えに参入していた数少ない人物の一人でした。彼は哲学的な思考の能力によってこの教えを把握していましたが、彼の思考にはもはや力がありませんでした。思考の霊的現実の体験が、彼から消え去ってしまっていたのです。彼は夜の孤独の中で、この喪失を実感していました。

そのとき突然、キリストが彼の前に立ち、彼の魂の中に、あらゆる人間の内部に「人の子」として生きることのできる「神の子」の現実が目覚めました。彼は、世界のロゴスであるキリストがその中に生きるならば、思考が持つ「創造的な力」を実感したのです。キリストを通じて、思考は人類の魂の内部で生命へと至ります。人類はキリストが生きた時代に思考を発展させ、それによって「人の子」と結びつく可能性を得ましたが、同時に、この力を地球的な現実を反映するためだけにしか使用しないという危険に陥る可能性をも持っていました。思考は人類の魂の中で死に絶える危険に瀕していましたが、世界のロゴスであるキリスト

の魂の体験を通じて、それは新しい霊的宇宙の創造的な基礎となることができたのであり、今もそうなのです。

このようにして、人間は高次の世界の領域の中で「新しく生まれる」ことができ、永遠の命に与ることができるようになります。ニコデモは、初めに世界を創造したロゴスが、絶えず創造し続ける神聖な思考の力として、すべての人間の心の中に目覚めさせられ得るのだということを実感したのです。

次に、太陽は「牡牛座」の星座に入りました。太陽がこの位置にあったとき、太陽の霊が「宇宙のロゴス（言葉）」としての顕現から、「癒やしのロゴス（言葉）」としての現れへと下降するプロセスが起こりました。初めに、ロゴス（言葉）はすべての存在する生命を創造しました。そして「癒やしの言葉」は、それらの存在を維持し続け、進化の後半の段階で悲嘆に暮れることになったすべてのものを癒やすのです。

太陽が牡牛座の星座にあった瞬間に、太陽の霊は地上の圏域へと入り、その力を私たちの惑星・地球へと刻印しました。私たちは、福音書の記録の中に、この力強い顕現の反映を見出すことができます。例えば、マルコによる福音書第1章32〜35節には、大勢の病人がキリストのもとに連れてこられ、キリストが彼らを皆癒やされたと書かれています。さらに、彼らが連れてこられたのは「夕方、日が沈んだとき」であったと告げられています。ここには、太陽と地球の関係を含む宇宙の星位がキリストを通じて働き、キリストが癒やしの行為を行う間にキリストの内に臨在していたという、明確な示唆があります。

キリストは朝のうちに太陽の宇宙的な力を集めていました。同じ章の35節にはこうあります。「朝早く、まだ暗いうちに、キリストは起きて人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。」そして夕方になると、キリストは朝に霊的な太陽から集めておいたものを、癒やしの力として費やされたのです。全宇宙の朝の力と夕方の力を調和させて用いることこそが、この癒やしの能力の源泉です。それらの力は当時の出来事において地球へと刻印され、私たちが自らの心をそれらに開く意志を持つならば、それ以来ずっと地球に臨在し続けているのです。

さらに、マタイによる福音書第4章23節は、ロゴス（言葉）の顕現と癒やしの行為が「一つの活動」であったことを極めて明確に示しています。

「イエスはガリラヤの全土を巡り、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民のありとあらゆる病気や患いを癒やされた。」これこそが、まさに太陽に凝縮され、当時に地球へと刻印され、それ以来、地球の中に常に臨在している「牡牛座」の霊的な力なのです。

その後、太陽は「双子座」の星座に入りました。私たちはこの宇宙的な出来事の中に、世界のはじまりから進化の中で働いてきた「自我」の神秘の守護者としてキリストが顕現し、それが地上の存在へと刻印されるまでに成熟した、その行為の反映を体験することができます。

神々の意思は世界のはじまりにおいて、それまで一つの統合された全体で　あったものを、多くの個々の存在へと分割することを決定しました。こうして、人類の進化において、多数の個々の存在が「個性」の媒体となったのです。しかし時間の経過とともに、地上の個々の個性が、孤独の中に、そして自らの起源や他の存在からの分離の中に自らを見失ってしまうという危険が生じました。この危険は、キリストの時代において特に深刻でした。太陽が双子座にあったとき、キリストは人間が自らの存在を同胞である人間や、自らの霊的な起源と再び調和させることができるような方法で、地球に力を授けたのです。またこの時期に、さまざまな人種、民族、そして無数の個人へと散らばり分化していた人類が、人類の霊的な代表者（原像）としてのキリストにおいて「再び統合される」という神秘が地球上に確立されました。

私たちは再び、これらの出来事の反映を福音書の中に見出すことができます。例えば、12人の使徒の選定と任命がそれにあたります。この行為によってキリストは、人類が人間全体の、さらにはすべての創造された存在の「一元性と全体性」を再び体験することのできる「新しい秩序」を、地球上に、そして全人類の目に見える形で顕現させました。

使徒たちの秩序（配置）は、宇宙の根本法則に従って形成されました。黄道12星座が、すべての存在の分化の根本的なイメージでありながらも「一つ」であり、太陽が時間の経過とともに12のサイン（星座）を通過していくのとちょうど同じように、12人の使徒はその中心にいる「キリスト」の周囲に立ち、キリストが彼らの内部に住まうことで「一つの身体」となったのです。

個々の人間が、精神的宇宙の大いなる法則やイメージに従って自らの生活を整えるとき、同胞である人間や自らの霊的起源と結びつくことができるという事実は、古代の神秘や神殿の聖域においては常に知られていたことでした。しかし、それは古代の神秘の場所で参入した、人類の極めてわずかな選ばれた人々にしか知られていませんでした。それが今や、形態の霊（エクスシアイ）の階層の霊的指導者としてのキリストの顕現、その行為によって、これらの「自我の神秘」が目に見える形で顕現し、全人類がそれらを認識できるようになったのです。

これ以降、一握りの選ばれた者たちだけでなく、全人類が、その内部に調和と平和が宿るような形で人間社会の共同生活を形成することが可能となりました。12人の使徒の任命を通じて与えられたものの中には、人類が社会生活や経済生活の複雑な問題を解決するために必要な「すべて」が納められています。もし私たち一人ひとりが、キリストの時代におけるこれらの出来事を自分自身の魂の内部で活き活きと蘇らせることができるなら、それはすべての人間社会の共同生活にとって、計り知れない利益をもたらすことになるでしょう。

このようにして、人間の真の同胞愛の、新しく真に本質的な要素が地球へと刻印され、それ以来、それらは人類の中に活き活きと生き続けています。キリスト教以前の時代において、人類は血縁関係の法則、すなわち人種、民族、そして家族に従って生きていました。キリストが「自我の神秘」の守護者として地球の存在と結びついたとき、これには終止符が打たれました。キリストは、それまで人類の社会生活を守ってきた古い絆（血縁の紐帯）を強く拒絶さえしたのです。

マルコによる福音書第3章13〜35節において、12人の使徒の任命とともに、キリストはこれら血縁の友人たちの狭い見解に対抗し、また人類の同胞愛という宇宙的秩序の知識を大衆から遠ざけようとしていた律法学者たちの冒涜や罵詈雑言に対して立ち上がられたのを私たちは目にします。そして最終的に、キリストはそこにやって来た母マリアや兄弟たちの血縁の絆さえも拒絶したことが書かれています。キリストは周囲に座っていた人々を指し示して、こう言われました。「神の御心を行う人こそ、私の兄弟、姉妹、また母親なのだ。」

キリストは人類の古い秩序といかなる結びつきを持つことも拒まれました。太陽が双子座にあったあの日に、この行為が地球へと刻み込まれ、人間の内部で働き続けているがゆえに、人間は人種、民族、さらには家族の絆を拒んで、人類の宇宙的同胞愛を実現しようとするのです。もし現代の人々がこのことを認識するなら、私たちの時代に人類に降りかかった社会的な大惨事を理解し、将来的にそれを回避することさえできるでしょう。

これらの出来事の後、太陽は「蟹座」の星座に入りました。この少し前に、太陽は土星と合（コンジャンクション）になっていました。キリストの顕現に関連して、これが決定的な出来事に満ちていたに違いないと私たちは想像することができます。なぜなら土星は、世界の運命にとって最高に重要な行為が達成されたことを示唆しているからです。

例えばエジプトの時代、人々は今日私たちが「蟹座」という名を提示している星座を見上げたとき、蟹のイメージではなく、そこに「スカラベ」のイメージを見ていました。それは「復活した太陽」の印でもあり、死者には「新しく生まれた太陽」として霊界へと上昇する力を与えるために、スカラベの小さな像が添えられていました。

蟹座のもう一つのイメージは、今日私たちがこの星座に使用しているシンボル、すなわち2つの渦巻き（螺旋）です。一方は外部から中心に向かい、もう一方は中心から始まって周辺へと広がっています（♋）。このシンボルに表現されている2つの傾向を、私たちは「インボリューション（内観・下降進化／巻き込み）」と「エボリューション（外観・上昇進化／展開）」と呼ぶことができるでしょう。これまで本書簡の中で私たちが多くを語ってきた、宇宙の「過去の創造プロセス全体」が内向する渦巻き（インボリューション）によって表されているのに対し、外向する渦巻き（エボリューション）は、その過去を変容させ、私たちの宇宙の「未来」へと向かっていくものを表しています。これら2つの原理の間には、深い深淵が存在しているのです。

天空の太陽が蟹座に入ったとき、地上におけるキリストは、この星座に表現されている霊的な力の「大いなる宇宙のマスター（導師）」として顕現しました。そのときキリストは、人類がインボリューションからエボリューションへと、その深淵を渡ることができる「架け橋」を本当に架けられたのです。それは、人間の肉体における「物理的な現実」としてさえ確立されました。

当時の人類に目を向けるなら、私たちがここでインボリューション（内観・下降進化）と呼んだものの最も純粋な表現は、人間の「頭部」に見出すことができます。人間の頭部は、その外的な形態においてさえ、それを取り巻く周辺宇宙（全宇宙の球体）の完全な複写です。しかし、宇宙における創造（インボリューション）のプロセスが終焉を迎えたように、人間の頭部もまた、これ以上進化することはできません。それはただ、深淵への転落、すなわち「死」を認識し、現すことしかできないのです。

キリストが現れたとき、人類はこの深淵の縁に立ち、未来への架け橋を築くことができない状態にありました。キリストは、死と復活を通り抜けることによって、その架け橋を築かれたのです。これらの出来事は、蟹座と極めて強く結びついています。これについては、後ほど語らなければならないでしょう。

宇宙の創造のイメージは、人間の頭部の中に集約されています。この頭部は、発芽して健康な植物へと発育することのできない「種子」が死んでしまうかもしれないのと同じように、死ななければならない運命にありました。人間の頭部は、過去が蓄積された種のようなものです。この種の中にある生まれ持った力を目覚めさせ、それをその牢獄から引き上げるためには、「霊的な太陽」の力が顕現しなければなりません。

植物が種子から太陽の光に向かって上方へと成長していくように、人間は自らの頭部から身体へと、すなわち自らの「感情の生活」や「意志の生活」の領域へと成長していかなければなりません。人間は、ゴルゴダにおける死の時以来、自らが踏みしめている地球の球体そのものとなった「霊的な太陽」に向かって成長しなければならないのです。

キリストの時代、特にヘブライの人々の間において、宇宙の過去の知的蓄積としての頭部の形成は、その最高の完成度に達していました。しかし、この頭部は、意志の領域において人間を体現するために、四肢へと向かって下方へと成長していく力をますます失ってしまっていたのです。新しい衝動がなければ、人類は肉体が縮み、人間が自らの存在全体を展開する能力をますます失っていくような状態へと向かっていたことでしょう。人間の頭部は、自らの周囲に死を撒き散らす、恒久的な崩壊の器官になっていたはずです。

しかし、愛の衝動をもたらし、地球と結びついたキリストは、それを「新しい太陽の芽」へと変容させ、人類を頭部における死から救い出しました。キリストは、蟹座の普遍的な力を地球へと組み込むことによってこれを行い、こうしてインボリューションからエボリューションへの架け橋を築かれたのです。

私たちは、マルコによる福音書第4章にある様々な「寓話」を通じて、これらの神秘が最も美しい形で開示されているのを見出すことができます。そこには、植物の生命のイメージ、すなわち太陽によって呼び出されながらも悪の力によって脅かされている「創造の言葉（ロゴス）」を内包した種子のイメージがあります。それが完全に成長した植物となり、穂に実が満ちたとき、刈り入れをする者がやってきて、その鎌で植物を刈り取ります。

これらは、未来の進化における人間の課題を描いた巨大な象徴的ヴィジョンなのです。創造の言葉が閉じ込められている「頭部という種子」から、個人の地球に対する奉仕である「行為という植物」が育たなければなりません。刈り入れをする者が鎌を持ってやってくる瞬間、すなわち「死の瞬間」に、この奉仕の果実は刈り取られます。なぜなら、それらの果実は宇宙全体の「糧」であり、意志の領域で成熟せしめられた人間の地球経験の成果がなければ、宇宙は滅び去ってしまうに違いないからです。

これらのたとえ話は、キリストがこの顕現の段階で行われた行為の、外的な現れにすぎません。このことは、ルカによる福音書第4章に明確に表現されています。これらの行為を通じて、キリストは人間の頭部の中に自らの座を占めることにより、人類と地球を死から救い出されたのです。これこそが、太陽の放射を通じた、蟹座の隠された力のキリスト教的な開示にほかなりません。

蟹座の本質と結びついた太陽の霊的な力が、キリストによって地球へと刻印された後、出来事はより「内的な進化」へと向かっていきました。それはまるで、キリストの衝動が今や、人間の「意志の有機体」の深みへと本当に下降していったかのようです。その領域とは、植物が根から太陽に向かって成長していくのとは逆に、人間の頭部から地球の球体（大地）に向かって発達していく領域です。そのため、非常に重要な秘教的な出来事のイメージとして星々から読み解くことができる事柄を、福音書の記録の中から裏付けとして見出すことが、時には困難に思えることさえあります。

キリストは今、人類の意志を「宇宙の未来に向かう進化の媒体」とするための準備を整えられたため、人間の意志組織の深みに住まう「敵対勢力」との対峙がただちに起こりました。

その間、太陽は「獅子座」の星座に入っていました。古い時代において、獅子座は「王たる尊厳」を表す星座として体験されていました。人間の身体における血液は、末梢（周辺）へと向かい、再び心臓へと戻ってきます。そうして個人の「個性の生命」の媒体となっているのです。これと同様のことが、宇宙におけるしし座の本質としても体験されました。獅子座は「自我」の力への門を表していたため、エゴ（利己心）の発達の過程において宇宙に生じた、それら「破壊的な力」のイメージでもあったのです。これこそが、狂暴な獅子でした。

キリストが寓話（マルコによる福音書第4章）と秘教的な教えにおいて、インボリューション（内観進化）とエボリューション（外観進化）を隔てる深淵を渡る架け橋を確立された後、人間の意志の深みと血液の中に眠っていた、あの咆哮する獅子の力が、世界の深淵や渓谷から応え返してきました。

これらの力は、キリストの内にある「世界の大いなる自我（I AM）」の威力によって、キリストと結びついたすべての人々のために克服されることが可能となりました。私たちは、これがマルコによる福音書第4章の終わりに与えられている、美しいイマジネーションの中に描写されているのを見出すことができます。太陽と蟹座の力を地球へと着床させるという秘教的な教えの後、キリストと使徒たちは実際に深淵を渡りました。それは「ガリラヤ湖の横断」として描写されています。

キリストは舟の中で眠っておられ、12人の使徒たちは、自分たちが「私はある（I AM）」の助けがあって初めてこの深淵を渡ることができるのだという事実に気づいていませんでした。そのとき、深淵の敵対勢力が立ち上がり、嵐と波が小さな舟を打ち叩いたため、使徒たちは大きな危険を感じました。そこで彼らは自らの魂の内部にあるキリストの力を呼び覚まし、この助けによって嵐と波は静められたのです。この湖という深淵を渡った直後、彼らは人間の意志の深みにある「獅子の力（狂暴な衝動）」と、ただちに対峙することになりました。

当時の人類は、過去の創造の知恵を「頭部の知性」として蓄積していましたが、未来の種子である「意志」をいまだ克服してはいませんでした。それゆえに、この意志の領域には、獰猛で破壊的な悪霊たちが住み着いていたのです。彼らは、ガダラ人の地方で出会った「汚れた霊」に取りつかれた男の姿（マルコによる福音書第5章）によって描写されています。

この男の中の「汚れた霊」でさえも、キリストを神の子として認識しました。このことは、この獅子座の領域の力が破壊的であるのは、ひとえにそれらが「世界の大いなる自我（I AM）」によってマスターされず、宇宙的活動のしかるべき場所へと置かれていないからにすぎない、ということを示しています。悪霊たち自身もその男の中に閉じ込められていると感じており、最終的には解放されることを望んでいました。

この汚れた霊の「レギオン（軍勢）」が豚の群れの内に住処を見出し、海の深淵へと溺れ死んでいったという事実は、私たちの心臓と血液の深みにあるこれらの力が、最終的には「未来の宇宙進化の目的」のために奉仕しなければならないということを示しています。だからこそ、キリストは悪霊たちがこの最後の破壊行為に及ぶのを許されたように見えるのであり、これは神秘の言語（象徴）によって深遠な宇宙の秘密を覆い隠しているのです。

こうして心臓の深みにある破壊的な獅子の力がマスターされたことで、キリストは宇宙の真なる「太陽ー獅子座」の衝動を地球へと刻印することができました。これより以前の、福音書に描写されている出来事の経過においては、私たちは獅子座の星座を、こちらを向いて私たちの目をまっすぐに見つめているライオンの頭として感知していたかもしれません。しかし、キリストが使徒たちとともにガダラ人の地方から戻られた後、そのライオンの頭のイメージは、一つの「門」のイメージへと変化したかのように見えます。それはまだ閉じられていました。なぜなら、人間が気づかずにこれらの深みへと侵入すべきではないからです。人間は最大限の注意を払い、「私はある（I AM）」の助けを借りてのみそこへ入るべきであり、さもなければ悪霊たちによって破滅させられてしまうかもしれないからです。

この門は、精神世界（霊界）へと至る「境域」となりました。それは人間の意志を通り抜け、ゴルゴダの秘儀を通じてキリストが一体となった地球とその物質へと向かっていく、その境域なのです。その時以来、

キリストの宇宙的な住処となった地球のこの門を通過することなしには、いかなる人間も精神世界へと入ることはできません。

私たちは、太陽が獅子座にあった当時、この門がほんの一瞬だけ広く投げ放たれるのを見ることができます。その門を通じて、私たちはキリストが地球の霊的な背景において働き、癒やしをもたらしているのを視ることができるのです。この瞬間、私たちは、人類が地球との関係性を表現する場所である「血液の神秘」の中における、キリストの顕現を目撃することができます。

それゆえに、私たちはマルコによる福音書第5章21節以降において、「ヤイロの娘」と「患う女」の物語を読むことができるのです。私たちは、人類のこの獅子座の領域から汚れた霊を清めた後、キリストによって調和（均衡）がもたらされる血液の神秘の深みを、ほんの一瞬だけ覗き見ることが許されています。

さらに、私たちはこの領域の暗闇を照らす光が、宇宙的な起源を持つものであることを知ることができます。ヤイロの娘は「12歳」であり、その女は「12年間」病を患っていました。このことは、血液のそれらの神秘が、その署名（サイン）として「12」という数を持つ大宇宙の刻印を帯びていることを明かしています。そして、ヤイロの娘を癒やす行為が、「7」の臨在の中で成就されたことをも明かしています。すなわち、3人の使徒（ルカによる福音書第8章51節）、その子供の父親と母親、子供、そしてキリストです。これもまた、大宇宙の根本法則への言及でした。

ここで私たちは、自らを通じて大宇宙の刻印を帯びている世界を覗き見ることができます。そしてこの事実は、人間の本性のそれらの深みにおいて、古いコスモスの果実であり、はるか遠い未来において死にゆくコスモスに取って代わり、それを救済する運命にある「新しい宇宙」が、自らを告げ知らせているのだという結末へと、私たちを導いてくれるのです。

太陽の獅子座の通過は、私たちが上で描写したようなキリストの行為、すなわちガダラ地方における癒やしの行為や、患う女およびヤイロの娘の癒やしを伴っていました。その後、太陽は「乙女座」の星座に入りました。これは西暦31年の8月末頃のことでした。

太陽が獅子座にあった時期の出来事を、私たちは「境域」の体験として描写しました。キリストは、かつて太陽の霊がそうであったように、今や地球を新しい宇宙の新しい太陽へと変容させる目的のために自らが地球と一体化しようとしていることを、たとえ話や癒やしの行為によって明かされました。これまでは、太陽の霊的な力が人間の頭部を照らし、人間の身体を形成していましたが、将来的には、これらの霊的な力が地球から宇宙空間へ、そして人間の「意志」の内部へと向かって輝くことになるのです。太陽が獅子座にあったとき、この地球という惑星の霊的な未来の深みへと至る門が開かれました。四肢の中で深く眠っている人間の意志こそが、地球の秘密へと至る門なのです。

そして、太陽がお乙女座に入った後、この地球の秘密がさらに多く明かされることになりました。人間の血液から生じる閾の危険は、キリストが地球に宇宙的なしし座の力を吹き込むことによって癒やされました。今や私たちは閾を通過し、新しい宇宙を準備する出来事を目撃することが許されているのです。

私たちは、いわば宇宙的な規模を持つ巨大な広間へと入りますが、それは魂の世界の領域においてです。そこは、崇高な存在たちがこの宇宙の物質的な諸力を変容させる「実験室」のように見えます。分析と統合の行為のように見える、複雑で崇高な行為や儀式によって、彼らは世界の運命、特にこれまでに地球の経験を経てきた個々の人間の運命（カルマ）の中に、新しい位置づけと局面をもたらすのです。

それはまた、無数の霊的な存在たちが宇宙の未来について評議し、賢明な決定を通じて、人間の運命の神秘を介して外なる宇宙の完全な変容をもたらす一種の「評議会」のようにも見えるかもしれません。人間の理解力からすれば、これらの決定の実行は時に非常に悲劇的で、破滅的なものにさえ見えることがあります。さらに、この霊的な集会の決定とそれに応じた行動は、しばしば既存の物理的宇宙の一部分の完全な溶解と消滅へと、最終的に導いているように見えることすらあるでしょう。

しかし、それらはすべて、キリストが地球を新しい宇宙の新しい太陽とするために地球と一体化したことに伴い、未来に向かって起こるであろう大いなる宇宙的変容との、正しい結びつきの中にあり、その結果として生じているのです。この「魂のコスモス」の領域は、人間による食物の「消化」プロセスにさえ例えることができるでしょう。消化は、物理的な物質の完全な溶解と破壊という結果をもたらします。しかし、このプロセスによって、物質が本来持っているエーテル的（生命的）な性質が解放されるのです。

このようにして、これまでこれら「太陽ー乙女座」の力を導く存在であったキリストが、今や地球の領域内において、この運命（カルマ）の力に対する統御権を確立しようとしている姿が、使徒たちに明かされたのだと想像することができます。さらにキリストは、この瞬間に弟子であった人々を、未来のために（人間の視点からは破滅的に見える手段によってさえ）物質的存在のエーテル化を確立しなければならないという、人間と世界の運命の「新しい錬金術」へと参入させたのかもしれません。しかし同時にキリストは、人類がこの宇宙的錬金術の課題に参画することの必要性の秘密へと、彼らを参入させたはずです。

天空の太陽が黄道12星座から宇宙空間へと12の放射で輝いているように、地球の内部で誕生しようとしていた新しい太陽は、魂の世界へと12元性を放射し始めました。このことは、マルコによる福音書第6章7節以降に示されています。12人の使徒たちが送り出され、

「……彼らは出て行って、悔い改めよと宣べ伝えた。また、多くの悪霊を追い出し、多くの病人に油を塗って癒やした。」

こうして、12人からなる原初のキリスト者共同体は、地球の中に新しく生まれた太陽の「光線」となったのです。

地球の運命の大いなるタブローにおける、このような宇宙的な「本質変容（聖体変化）」の行為の一つが、福音書の中に明かされています。ヨハネによる福音書を除くすべての福音書において、キリストによる使徒たちの派遣に関する記述の直後に、「洗礼者ヨハネの斬首」の物語が登場します。それは独特な方法で関連づけられています。

ヨハネの斬首に直接関わったヘロデ王は、キリストの使徒たちの行為を耳にしてこう言いました。

「これは私が首をはねたヨハネだ。彼が死人の中からよみがえったのだ。」彼は、洗礼者ヨハネの首をはねるという悪行を通じて、自分自身が最終的には運命（カルマ）の霊的な力たちの目的のために働いてしまっていたという事実に気づいたのです。ヨハネの霊は、12人の使徒たちを通じて働き、自らを顕現させていました。彼は彼らの共同体の「指導霊」であり、彼らが四方八方に散らばっていたにもかかわらず、彼らの行為を中央の太陽からの癒やしの光線であるかのように、彼らの真ん中で活き活きと機能させていたのです。

地球的な視点から見れば、ヘロデとその仲間たちの行為は、世界における前進的な霊の力を麻痺させる打撃となることを意図した、暗黒の悪行でした。しかし、キリストが地球の領域へと組み込まれたそれら「乙

女座の存在たち」の連盟の内部において、その行為は、霊的に人々を癒やし、育むための力へと変容せしめられていたのです。

キリスト教の暦（典礼暦）は、8月29日を「洗礼者ヨハネの斬首」の記憶に捧げています。もしこの日付が歴史的に正しいものであるならば、その斬首は西暦31年に起こったに違いありません。それは、私たちが先ほど言及したように、太陽が「乙女座」に入ったばかりの時期でした。この瞬間における星空の全般的な星位から、一部の歴史家はそれを疑わしいと見なしているものの、私たちは斬首が実際にこの時期に行われたという結論に至るのです。

キリストの出来事に関連して乙女座の太陽について述べた事柄を説明してくれるこの出来事の後、私たちは12人の使徒たちの派遣について耳にすることになります。彼らが戻ってきた直後、「5千人の給食（五千人のパンの奇跡）」が行われ、ヨハネによる福音書第6章によれば、これは西暦32年の過越の祭りの少し前に起こったに違いありません。

私たちは、太陽が乙女座、天秤座、蠍座、射手座、山羊座、水瓶座、そして魚座を通過した「西暦31年9月から西暦32年3月までの期間」については、福音書の中からあまり多くのことを耳にしません。そこで、太陽が再びこれらの星座を通過した「西暦32年から33年にかけての年」の福音書の記録が、キリストによるこれら太陽の性質の地球への刻印について、何かを明かしてくれるのではないかという問いが生じます。

しかしここでも、福音書の記述から実際に時期を特定できる出来事は、ほんのわずかしか見出せません。それらは、西暦32年10月の「仮庵の祭り」の期間にエルサレムで起こった出来事（ヨハネによる福音書第7章および第8章）、および「神殿奉献の記念祭」（ヨハネによる福音書第10章）、そして西暦33年の過越の祭りの数週間前に起こった「ラザロの蘇生」（ヨハネによる福音書第11章）です。

なぜ、太陽が黄道帯の「下半分」を形成し、かつ太陽が（一年の行程の中で）最も低い位置に達する時期に属するこれらの星座を通過するとき、福音書にはこれほどわずかな示唆しか記されていないのでしょうか？

この事実には深い謎（が結びついています。そして、黄道帯における「明るい」星座（牡羊座、牡牛座、双子座、蟹座、獅子座、乙女座、天秤座）と、「暗い」部分（蠍座、射手座、山羊座、水瓶座、魚座）との極性を考慮するならば、私たちはそれをある程度理解することができます。

「暗い」部分は、人間の存在の高次の構成要素から見た、人類の姿の青写真です。

残念ながら、これまでの書簡で描写してきたような、世界進化のプロセスにおけるこれら高次の構成要素の起源の要約から、ここでその詳細を展開する十分なスペースはありません。しかし、私たちは以下の対応関係を見出すことができます。

魚座：人類の「肉体」のイメージ
水瓶座：「生命体（エーテル体）」に対応
山羊座：「魂体（アストラル体）」に対応
射手座：「自我」の完璧なイメージ

そして、蠍座、天秤座、乙女座の星座の中に、私たちは人類の最高の構成要素のイメージを見出します。すなわち、「霊我」、「生命霊」、そして「霊人」です。私たちはこれらの星座の中に、魚座から始まって

黄道帯の暗い部分を通り、天秤座から始まる明るい部分へと向かって成長していく、人類の「全存在」を感知するのです。

これは、最高に啓発的なイ象徴的ヴィジョンへの門を開いてくれます。私たちは黄道帯の下半分（暗い部分）の中に、まるで「三日月のような形をした器」としての人類のイメージを感知します。

この器の中へと、キリストの太陽が入ってくるのです。キリストは、牡羊座から天秤座までの星座を通じて、宇宙的に「7元性の存在」として自らを顕現させます。私たちはすでに以前の書簡において、太陽が牡羊座にあったとき、キリストが「神の小羊」、あるいは知恵の霊（キリストの最高の原理）の宇宙的指導者としてどのように顕現したかを描写しました。これはキリストの最高の構成要素（霊人）の顕現であり、私たちが太陽の他の星座への移動を追っていくにつれて、私たちはその中に、この崇高な存在の他の高次構成要素を通じたキリストの顕現を感知したのです。そのときキリストは、乙女座と天秤座という2つの「重なり合う」星座によって表される最高の構成要素、すなわち「霊人」と「生命霊」を通じて、人間の存在（器）の中へと入っていかれました。

上方へと手を伸ばしている「人類の黄道帯（下半分）」が、下方へと下降してくる「キリストの黄道帯（上半分）」と一体化するとき、私たちは「円」の印、すなわち新しく上昇していく霊的な太陽の印を目にすることになります。

それこそがまた、「聖杯」の印であり、「月の器（三日月の器）の中に収められた聖体」の印でもあるのです。

今や私たちは、太陽が黄道帯の「暗い部分（下半分）」を移動していた時期における、キリストの生涯の特定の事実を理解することができます。

太陽が「乙女座」から「魚座」までの星座に位置していた時期（西暦31～32年）に起こった使徒たちの派遣は、まさに12人によって象徴される人類が、その全存在の内部へとキリストを受け入れるための「準備」を整えていく姿そのものなのです。そして、この大いなる準備が、キリストの「先駆者」である洗礼者ヨハネの霊の助けを借りて達成されたということも、私たちは理解することができます。

さらに私たちは、仮庵の祭りの期間（ヨハネによる福音書第8章）、太陽が「天秤座」にあったときに、キリストが人類の高次存在そのものの内部における「新しい審判者（裁判官）」として顕現されたことも理解できます。その記述（姦通の女の物語など）から私たちが汲み取れるのは、キリストが実際に審判者として行動したのではなく、人類の高次存在の内部へと審判を委ねられたということです（ヨハネによる福音書第8章9～10節）。これについても、必要なスペースさえあればさらに多くを語ることのできる、壮大な象徴的ヴィジョンです。

そのうえ、太陽が「山羊座」に入っていた神殿奉献の記念祭のとき、キリストが「射手座」と「山羊座」によって表される「人間の自我」および「魂体（アストラル体）」の内部にある神聖な本性を呼び覚まされているのを、私たちは耳にします（ヨハネによる福音書第10章33～38節）。このときキリストは、人類のこれら高次の存在の領域へと入っていかれたのだと言うことができるでしょう。

そして最終的に、太陽が「魚座」の星座に入ったとき、私たちは「ラザロの蘇生」が行われるのを目撃します（ヨハネによる福音書第11章）。残念ながら、この出来事に対する私たちの論評は、ラザロが墓から一

歩踏み出した瞬間に、キリストが人類の「肉体」の中へと入っていかれたという単なる事実に限定しなければなりません。これこそが、魚座における太陽の霊的な力にほかなりません。

これらの書簡が継続されないことに伴い、キリストの時代における星々の出来事に関するこれらの論考も、ここで終わりを告げなければなりません。星々の鏡の中に自らを明かしているキリストの生涯という壮大なイメージの、ほんのわずかな断片しかここでは精緻に描き出すことができませんでした。太陽以外の、他の惑星たちが描く星の文字にはいまだ触れてもいません。

しかしながら、これらを求める意志を持つ人々の知識に向けて、星の世界のこれらの秘密をより相応しく、かつ包括的な形でもたらすことのできる機会が、将来的に提供されることを願ってやみません。

※図1・2

Figure 1



Figure 2

